

口槇ヶ谷遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ
(東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ)



2008.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

口槇ヶ谷遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ
(東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ)

2008.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

夜須町は高知県中央部、2006年の四国地方整備局による水質調査では四国首位の清流となった物部川の左岸に所在する香南市の東端に位置しています。夜須町は古くから開かれた土地であり、3基の古墳など多くの遺跡が存在しています。また、野中兼山によって改修された日本最古の掘り込み港である手結内港など文化的遺産が数多くみられます。

本書は平成16・17年度に発掘調査を実施した高規格道路南国安芸道路関連の口槇ヶ谷遺跡の報告書です。夜須町内で本格的に実施された発掘調査は本遺跡が初めてであり、本遺跡からは弥生時代・古代・中世・近世の各時代に互る遺構・遺物が確認されております。これら発掘調査によって確認された資料は夜須町の歴史を考えるうえで大変貴重なものであり、夜須町の歴史を紐解く資料になればと考えております。

また、これらの資料は夜須町や高知県東部の歴史を解明していくうえで貴重なものであるとともに、地域の方々に埋蔵文化財の重要性をご理解していただく資料になると思われ、ぜひ多くの方々に活用して頂きたいと願っております。

最後に、調査にあたり多大なご理解とご協力を頂いた国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、地元関係者の方々、発掘作業・整理作業に従事して下さった作業員の皆様には心より御礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 汲田幸一

例言

1. 本書は南国安芸道路の建設に伴い、平成16・17年度に実施した口槇ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 口槇ヶ谷遺跡は高知県香南市夜須町(旧香美郡夜須町)に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、古代の官衙関連とみられる遺構や中世・近世の屋敷跡に関連する遺構が確認されている。発掘調査は道路建設工事の工程上6回に分けて実施し、発掘調査延べ面積は8,995㎡であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

平成16年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総務：同次長兼総務課長 久川清利, 同主任 池野かおり, 同主幹 長谷川明生

調査総括：同調査課長 横山耿一

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 中山真司, 同調査員 下村裕, 技術補助員 宮地啓介, 測量補助員 畝川雅行

臨時職員：濱田博子・福留雅子

平成17年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総務：同次長兼総務課長 湯浅文彦, 同主任 池野かおり, 同主幹 長谷川明生

調査総括：同調査課長 森田尚宏

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 井上昌紀, 同調査員 下村裕, 技術補助員 宮地啓介, 測量補助員 畝川雅行

臨時職員：福留雅子・濱田可奈

平成19年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 汲田幸一

総務：同次長 森田尚宏, 同総務課長 戸梶友昭, 同主任 谷真理子

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第四班長 藤方正治, 同専門調査員 安岡猛・井上昌紀・武森清幸・小川博敏, 同主任調査員 小野由香, 技術補助員 宮地啓介, 測量補助員 畝川雅行・都築愛

臨時職員：友永可奈・松吉佐和

5. 本書の執筆と編集は第I章1と2の(1)は廣田, それ以外を下村が行い, 調整は横山が補助した。現場写真は中山・井上・下村が撮影し, 遺物写真は下村が撮影した。また, 遺物観察表については整理作業員の方に指定した設定で変換作成して頂いた。
6. 遺構についてはSB(建物跡), SA(塀・柵列跡), SK(土坑), SD(溝跡), SU(畝状遺構), SX(性格不明遺構), P(柱穴)で表記した。建物跡と塀・柵列跡については模式図(S=1/200)を掲載している。

また、掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは世界測地系のGNである。

7. 遺物については原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表記している。また、遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。
8. 現地調査及び報告書作成をするにあたって、下記の方々のご指導及び貴重なご教示、ご助言を賜りご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。

故那須孝悌(大阪市立自然史博物館元館長)、趙哲済(大阪市文化財協会)、辻本裕也・辻康男(パリノ・サーヴェイ株式会社)、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏

9. 遺構・遺物の測量及び写真撮影は各調査員、技術補助員、測量補助員が行い、測量には新たに設置した3級基準点を使用した。
10. 発掘調査及び遺物整理、報告書作成については、下記の方々のご協力を頂いた。

発掘調査

安達修一、植田秀夫、上田豊、小笠原実葵恵、加治正一、加治宣子、加治正敏、上屋福美、川野孝典、川村正廣、川村美佐子、川村力男、遠藤昌、小松清一、小松弼、小松悠悦、島村雄二、高木祥、武井和美、竹崎芳子、田村明、田村美賛子、畠中浩子、畑山緑、浜田稔、溝渕進一郎

上記の方々には酷暑・酷暑のなか、労を厭わず作業に協力して頂いた。記して感謝の意を表したい。

整理作業

西内広美、岩貞泰代、横山めぐみ、黒岩佳子、中西純子、内村富貴、元木恵利子、小林貴美、松田美香、田島歩、岡宗真紀、川添明美、山形和江、中山とも子、村永理恵、小松経子、山本裕美子、高橋由香、福原僚子、宮島美幸

上記の方々には整理作業を担当して頂いた。記して感謝の意を表したい。

11. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力を頂いた。また、出口総代をはじめ地元住民の方々に、遺跡に対するご理解とご協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。
12. 出土遺物は、平成16年度が「04 - 1YK」、平成17年度が「05 - 1YK」と註記し、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 序章

1. はじめに.....	1
2. 調査の契機と経過.....	2
(1) 契機と経過.....	2
(2) 確認調査.....	4
(3) 調査の方法.....	4
3. 遺跡の地理的・歴史的環境.....	6
(1) 地理的環境.....	6
(2) 歴史的環境.....	8

第II章 調査の概要

1. 調査の経過.....	9
(1) 調査の経過.....	9
(2) 調査日誌抄.....	9
2. 調査の概要.....	13
(1) 層序.....	14
(2) 堆積層出土遺物.....	17
3. 遺構と遺物.....	32
(1) 弥生時代.....	32
溜池状遺構.....	32
(2) 古代.....	33
掘立柱建物跡.....	33
土坑.....	34
溝跡.....	35
(3) 中世.....	35
掘立柱建物跡.....	35
塀・柵列跡.....	39
土坑.....	39
溝跡.....	44
柱穴.....	50
(4) 近世.....	58
掘立柱建物跡.....	58
塀・柵列跡.....	60
土坑.....	60
溝跡.....	68

畝状遺構.....	73
性格不明遺構.....	74
柱穴.....	76
第Ⅲ章 自然科学分析	
1. はじめに.....	79
(1) 分析目的.....	79
(2) 試料.....	79
2. 口槇ヶ谷遺跡の古環境変遷.....	79
(1) はじめに.....	79
(2) 分析方法.....	81
(3) 結果.....	83
(4) 考察.....	93
3. 口槇ヶ谷遺跡から出土した土器の胎土分析.....	109
(1) はじめに.....	109
(2) 分析方法.....	109
(3) 分析結果.....	110
(4) 考察.....	111
第Ⅳ章 考察	
1. 弥生時代.....	115
2. 古代.....	115
3. 中世.....	116
4. 近世.....	117
5. まとめ.....	118

挿図目次

図1-1 口槇ヶ谷遺跡位置図.....	1
図1-2 試掘トレンチ配置図(S=1/2,000).....	3
図1-3 調査区全体図(S=1/1,000).....	5
図1-4 周辺の遺跡分布図(S=1/50,000).....	7
図2-1 調査区セクション図1.....	15
図2-2 調査区セクション図2.....	16
図2-3 第Ⅰ層出土遺物実測図1(須恵器・土師質土器・備前焼ほか).....	18
図2-4 第Ⅰ層出土遺物実測図2(土製品・石製品).....	19
図2-5 第Ⅰ層出土遺物実測図3(石製品).....	20
図2-6 第Ⅱ層出土遺物実測図(近世陶器・石製品).....	21

図2-7	第Ⅲ層出土遺物実測図(須恵器・瓦質土器・東播系須恵器ほか)	22
図2-8	第Ⅳ層出土遺物実測図1(弥生土器・土師器・須恵器ほか)	23
図2-9	第Ⅳ層出土遺物実測図2(土製品・石製品)	24
図2-10	第Ⅴ層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器ほか)	25
図2-11	第Ⅵ層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器)	27
図2-12	第Ⅶ層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・瓦器ほか)	28
図2-13	第Ⅷ層出土遺物実測図(弥生土器ほか)	29
図2-14	第Ⅸ層出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器ほか)	30
図2-15	第Ⅹ層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器・青磁ほか)	31
図2-16	SX-1	32
図2-17	SX-1出土遺物実測図	33
図2-18	SB-1	33
図2-19	SB-2	33
図2-20	SB-3	34
図2-21	SB-1~3出土遺物実測図	34
図2-22	SB-4	35
図2-23	SB-5	36
図2-24	SB-6	36
図2-25	SB-7	36
図2-26	SB-7・9出土遺物実測図	36
図2-27	SB-8	36
図2-28	SB-9	37
図2-29	SB-10	37
図2-30	SB-11	37
図2-31	SB-12	37
図2-32	SB-11・12・14出土遺物実測図	38
図2-33	SB-13	38
図2-34	SB-14	38
図2-35	SB-15	38
図2-36	SB-16	38
図2-37	SB-17	38
図2-38	SB-18	39
図2-39	SA-1	39
図2-40	SA-1出土遺物実測図	39
図2-41	SA-2	39
図2-42	SA-3	39

図2-43	SK-8	40
図2-44	SK-9	40
図2-45	SK-13出土遺物実測図	41
図2-46	SK-15	41
図2-47	SK-16出土遺物実測図	42
図2-48	SK-19出土遺物実測図	42
図2-49	SK-20	43
図2-50	SK-21	43
図2-51	SD-8・12出土遺物実測図	45
図2-52	SD-17	46
図2-53	SD-19	46
図2-54	SD-20出土遺物実測図	47
図2-55	SD-21出土遺物実測図1	47
図2-56	SD-21出土遺物実測図2	48
図2-57	SD-22	49
図2-58	SD-22出土遺物実測図	49
図2-59	P-1~4出土遺物実測図	51
図2-60	P-5~8出土遺物実測図	52
図2-61	P-9~14出土遺物実測図	53
図2-62	P-15出土遺物実測図	54
図2-63	P-16~18出土遺物実測図	55
図2-64	P-19~22出土遺物実測図	57
図2-65	P-23・24出土遺物実測図	57
図2-66	P-25~27出土遺物実測図	58
図2-67	SB-19	58
図2-68	SB-20	58
図2-69	SB-21	58
図2-70	SB-22	59
図2-71	SB-23	59
図2-72	SB-24	59
図2-73	SB-25	59
図2-74	SA-4	59
図2-75	SB-24・25出土遺物実測図	60
図2-76	SK-26	61
図2-77	SK-26出土遺物実測図	61
図2-78	SK-35出土遺物実測図	62

図2-79	SK-39出土遺物実測図	63
図2-80	SK-41	64
図2-81	SK-41・50出土遺物実測図	66
図2-82	SK-55・61出土遺物実測図	67
図2-83	SD-25	68
図2-84	SD-25出土遺物実測図	68
図2-85	SD-29	69
図2-86	SX-2出土遺物実測図1	75
図2-87	SX-2出土遺物実測図2	76
図2-88	P-28～32出土遺物実測図	77
図3-1	試料採取地点の層序	80
図3-2	D地区試料採取地点西壁断面図	81
図3-3	分析試料の主要珪藻化石群集の層位分布	86
図3-4	分析試料の花粉化石群集の層位分布	86
図3-5	分析試料の植物珪酸体含量	89
図3-6	粒度分析結果(1)	90
図3-7	粒度分析結果(2)	92
図3-8	粒度分析結果(3)	92
図3-9	粒度分析結果三角ダイアグラム	94
図3-10	B地区3地点下部の軟X線写真	95
図3-11	重鉍物組成および火山ガラス比	96
図3-12	火山ガラスの屈折率測定結果	97
図3-13	調査地点位置図	98
図3-14	口槇ヶ谷遺跡周辺の地形分類図	98
図3-15	調査区位置図	99
図3-16	調査区地形断面図	99
図3-17	各粒度階における鉍物・岩石出現頻度	104
図3-18	胎土中の砂の粒径組成	105
図3-19	胎土の砂粒・基質・孔隙の割合	105
図3-20	口槇ヶ谷遺跡出土試料のSiO ₂ -Al ₂ O ₃ 散布図	106
図3-21	口槇ヶ谷遺跡出土試料の長石類主要元素の散布図	107
図3-22	口槇ヶ谷遺跡出土試料の有色鉍物主要元素の散布図	107
図3-23	口槇ヶ谷遺跡出土試料のRb-Sr散布図	107
図3-24	口槇ヶ谷遺跡出土試料のZr-Ba散布図	108

表目次

表1-1	周辺の遺跡地名表	7
表3-1	放射性炭素年代測定結果	84
表3-2	暦年較正結果	84
表3-3	珪藻分析結果	85
表3-4	花粉分析結果	87
表3-5	植物珪酸体含量	88
表3-6	樹種同定結果	89
表3-7	粒度分析結果	91
表3-8	粒度組成解析結果	93
表3-9	重鉍物・火山ガラス比分析結果	96
表3-10	胎土分析試料一覧	100
表3-11	薄片観察結果(1)	101
表3-12	薄片観察結果(2)	102
表3-13	土器胎土の蛍光X線分析結果	103

遺物観察表目次

遺物観察表 1	121
遺物観察表 2	122
遺物観察表 3	123
遺物観察表 4	124
遺物観察表 5	125
遺物観察表 6	126
遺物観察表 7	127
遺物観察表 8	128
遺物観察表 9	129
遺物観察表 10	130
遺物観察表 11	131
遺物観察表 12	132
遺物観察表 13	133

図版目次

- 図版 1 調査前風景(南より)
調査前風景(北より)
- 図版 2 調査地区西壁セクション(東より)
調査地区南壁セクション(北東より)
- 図版 3 D区遺構検出状態(南より)
D区遺構検出状態(西より)
- 図版 4 D区遺構完掘状態(東より)
D区遺構完掘状態(西より)
- 図版 5 A区遺構検出状態(南より)
SB-22検出状態(南より)
- 図版 6 A区遺構完掘状態(南より)
SB-22完掘状態(南より)
- 図版 7 A区遺構完掘状態(真上上空より)
B区遺構検出状態(北より)
- 図版 8 B区遺構完掘状態(南より)
B区遺構完掘状態(真上上空より)
- 図版 9 E区遺構検出状態(東より)
E区遺構完掘状態(東より)
- 図版 10 E区遺構完掘状態(真上上空より)
F区(北側)遺構検出状態(北より)
- 図版 11 F区(北側)遺構検出状態(東より)
F区(北側)遺構完掘状態(北より)
- 図版 12 F区(北側)遺構完掘状態(東より)
F区(南側)遺構検出状態(南より)
- 図版 13 SB-2検出状態(西より)
F区(南側)遺構完掘状態(南より)
- 図版 14 SB-2完掘状態(西より)
F区(南側)遺構完掘状態(真上上空より)
- 図版 15 第I層土製品(24)出土状態(北東より),
第IV層土製品(74)出土状態(南より),
SX-1(北より), SX-1バンクセクショ
ン(北西より), SB-1(北より), SB-
2土師器(166)出土状態(東より), SB-
9土師質土器(171)出土状態(南西より),
SK-5バンクセクション(北東より)
- 図版 16 SK-16バンクセクション(南東より),
SK-16瓦質土器(179)出土状態(西よ
り), SK-17バンクセクション(南東
より), SD-13バンクセクション(南
東より), SD-16バンクセクション(南
東より), SD-21遺物出土状態(南東
より), SD-21土師質土器(191)出土
状態(東より), SD-22(南より)
- 図版 17 SD-22バンクセクション(南東より),
SD-22土師質土器(214)出土状態(南
西より), SD-22土師質土器(215)出
土状態(北西より), SD-22瓦器(217)
出土状態(南東より), P-5土師質土
器(224)出土状態(西より), P-14石
製品(234)出土状態(北西より), P-15
土製品出土状態(北より), P-21土師
質土器(279)出土状態(南東より)
- 図版 18 P-22東播系須恵器(280)出土状態(北
より), P-26土師質土器(285)出土状
態(西より), SB-24(南より), SK-
39瓦質土器(299)出土状態(北より),
SX-2石製品(309)出土状態(西より),
P-28近世陶器(312)出土状態(南よ
り), P-30石製品(314)出土状態(南
東より), P-31近世陶器(315)出土状
態(西より)
- 図版 19 石製品(石臼)
- 図版 20 東播系須恵器(捏鉢), 須恵器(高杯), 土
師質土器(鍋), 土製品(羽口・土錘), 瓦
質土器(鍋)
- 図版 21 瓦質土器(鍋), 石製品(砥石), 土師器
(甕), 白磁(碗), 木製品(柱根)
- 図版 22 近世磁器(碗), 瓦質土器(鉢), 備前焼(播

- 鉢), 石製品(石臼)
- 図版 23 青磁(碗), 瓦質土器(鍋), 石製品(叩石),
木製品(柱根), 東播系須恵器(捏鉢)
- 図版 24 土製品(土錘), 石製品(石鏃), 土師質土
器(碗・杯), 近世磁器(皿), 須恵器(杯),
弥生土器(甕)
- 図版 25 土師質土器(杯), 土製品(土錘), 弥生土
器(高杯), 須恵器(杯), 瓦器(碗), 須恵
器(杯蓋・杯身)
- 図版 26 須恵器(杯身・瓶), 土師質土器(杯・碗),
弥生土器(甕), 土師器(皿), 土製品(土
錘), 石製品(石鏃)
- 図版 27 須恵器(杯), 白磁(碗), 土師質土器(杯),
瓦器(碗)
- 図版 28 瓦器(碗), 土師質土器(杯・小皿), 土製
品(土錘)
- 図版 29 土製品(土錘), 土師質土器(杯・小皿),
近世陶器(皿), 近世磁器(皿)
- 図版 30 土師質土器(小皿), 青磁(皿), 近世磁器
(皿), 石製品(石臼)
- 図版 31 軟X線写真
- 図版 32 重鉍物・火山ガラス
- 図版 33 植物珪酸体
- 図版 34 花粉化石
- 図版 35 胎土薄片1
- 図版 36 胎土薄片2
- 図版 37 木材
- 図版 38 炭化材

付図目次

- 付図1 口槇ヶ谷遺跡弥生時代・古代遺構平面図(S = 1/200)
- 付図2 口槇ヶ谷遺跡中世遺構平面図(S = 1/200)
- 付図3 口槇ヶ谷遺跡近世遺構平面図(S = 1/200)
- 付図4 口槇ヶ谷遺跡遺構平面図(S = 1/200)

第I章 序 章

1. はじめに

本書は、財団法人文化財団埋蔵文化財センターが平成15年度に国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から業務委託を受け実施した高知東部自動車道埋蔵文化財試掘調査及びその結果を受けて高知県教育委員会が平成16年度と平成17年度に国土交通省四国地方整備局から業務委託を受けた高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した口檜ヶ谷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省(四国地方整備局土佐国道事務所)が計画し、実施している一般国道55号線南国安芸道路建設工事に伴い工事によって影響を受ける遺跡(埋蔵文化財)について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

口檜ヶ谷遺跡は平成15年度に実施した事前の試掘調査によって新たに確認された遺跡で、本書で報告するのは平成16年度と平成17年度に行った口檜ヶ谷遺跡の発掘調査の報告である。

口檜ヶ谷遺跡の立地については当初夜須川左岸の低位河岸段丘上に立地するものと考えていたが、発掘調査の結果、遺跡は、夜須川が形成した河谷内に位置し、山地斜面に形成された開析谷の谷口部の山地斜面麓部に立地することが判明した。さらに、谷口滞筋付近では開析谷からの堆積が確認され、この堆積土に含まれる腐植土の放射性炭素年代測定の結果から2400～2500年前頃に形成された可能性が考えられている。検出された遺構は弥生時代から断続的ではあるが近世まで確認されており、弥生時代の遺構には前述の埋没する過程の河谷を利用したものもある。そして、古代頃までには埋没し、古代以降の生活空間となったことが窺える。

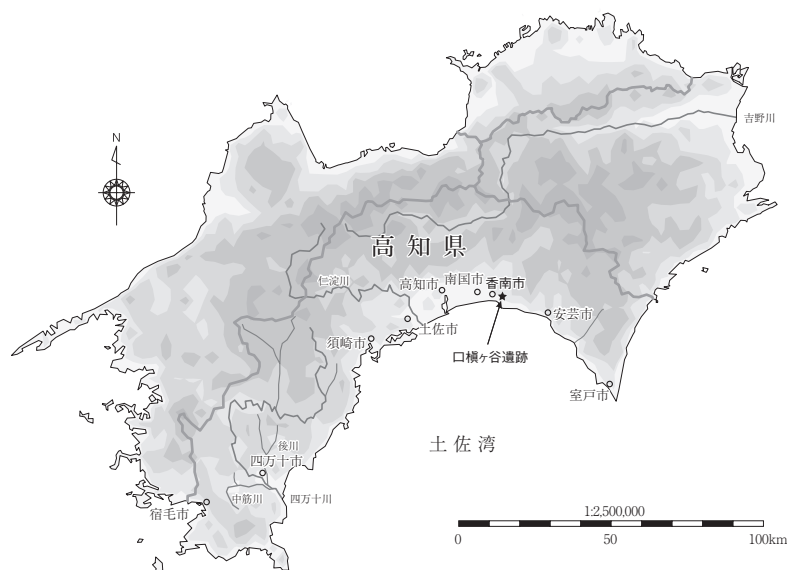


図1-1 口檜ヶ谷遺跡位置図

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

南国安芸道路は、高知市～安芸市間 36 kmを結ぶ一般国道 55 号線の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか、高知南国道路、四国横断自動車道と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和 62 年、国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。東部自動車道は延長 36 kmと長く、かつ、県内最大の遺跡である田村遺跡群など遺跡の集中する高知平野を横断する路線であることから大規模で長期的な発掘調査が予想された。ただ、平成 15 年度段階で路線内で確認されている周知の遺跡は茶田遺跡⁽¹⁾、関町田遺跡、高田遺跡、東野土居遺跡などに限られていた。この内、南国安芸道路関係では、高田遺跡⁽²⁾と東野土居遺跡⁽³⁾があるものの、当面の工事予定区域が香宗川以東であり、先の遺跡が所在する香宗川以西については平成 20 年度以降の予定となっている。

埋蔵文化財について埋蔵文化財センターを交え具体的な調整を開始したのは平成 15 年度からであり、まず、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて高知県教育委員会を交え調整を行った。その結果、当面の工事予定区域について周知の遺跡もあるものこれまで発掘調査が実施されておらず遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所を試掘調査を行うこととなった。試掘調査を年度途中で行うこととなったため県での予算化が難しく、遺構が確認されてもルート変更が困難であるため国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが直接業務委託を締結することとなった。

平成 15 年度の南国安芸道路関係では、夜須川左岸の夜須東地区が対象となり高知南国道路の試掘調査に引き続き実施した。その結果、山麓部からは古代から近世にかけての遺構・遺物が確認され、当該箇所が本発掘調査を要する箇所となった。この試掘調査で初めて確認された遺跡であり、地名をとって「口槇ヶ谷遺跡」と命名された。

この結果を受け、平成 16 年度と土地の引き渡し完了した平成 17 年度に発掘調査を実施することとなり、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが国土交通省四国地方整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け発掘調査を実施した。平成 16・17 年度に発掘調査を実施し、平成 18 年度に報告書を刊行する予定であったが、平成 17 年度に行った香我美町徳王子地区と夜須川右岸の夜須西地区試掘調査の結果、新たに花宴遺跡と坪井遺跡が確認され、口槇ヶ谷遺跡の調査終了後引き続き花宴遺跡の本発掘調査、平成 18 年度に残りの花宴遺跡と坪井遺跡の本発掘調査を実施することとなったため、報告書の刊行は平成 19 年度に行う方向で整理作業を実施した。

以後も試掘調査を継続的に行い新たに香南市香我美町徳王子地区から徳王子広本遺跡(平成 19 年度本発掘調査)、徳王子大崎遺跡(平成 20 年度以降に本発掘調査)、徳王子前島遺跡(平成 20 年度以降に本発掘調査)が発見され、順次本発掘調査を実施している。

註

- (1) 平成 15 年度に実施した試掘調査によって遺跡の範囲が大きく拡がり、地元の要望もあり西野々遺跡と改名した。
- (2) 物部川の左岸に形成された低位河岸段丘に立地する弥生時代から古代にかけての複合遺跡で、これまでに



図1-2 試掘トレンチ配置図(S=1/2,000)

2. 調査の契機と経過

発掘調査は実施されていないが、集落跡の可能性が考えられる。

- (3) 物部川の左岸に形成された低位河岸段丘の東末端部、香宗川左岸に立地する古墳時代から古代にかけての複合遺跡で、以前水路工事の際多量の須恵器等が出土しており、重要な遺跡に位置付けられる。

(2) 確認調査

① 調査区の状況

確認調査は夜須川左岸の沖積平野部及び低位河岸段丘上に30箇所の特レンチ(5×5m)を任意に設定し、平成15年10月1日から10月29日まで行った。掘削作業は機械力(ユンボ)と人力、遺構検出作業については人力で行った。また、遺構については検出に留めた。

この確認調査では低位河岸段丘上に設定した特レンチにおいて、全ての特レンチで遺物包含層を確認し、遺物包含層からは土師器・須恵器・土師質土器など、古代から近世にかけての遺物が出土しており、当該期と考えられる土坑・溝跡・ピットが検出されている。この確認調査によって新たな遺跡として口槇ヶ谷遺跡が新設され、低位河岸段丘上を中心に古代から近世にかけての遺構が残存していることが判明した。また、沖積平野部に設定した特レンチでは、流れ込みと考えられる遺物が出土するのみで、遺構は検出されなかった。

② 遺跡の概要

口槇ヶ谷遺跡は平成15年度に行われた事前の試掘調査で確認された新たな遺跡で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認される複合遺跡となり、小字から遺跡名が付けられた。

本遺跡は夜須川左岸の低位河岸段丘上に立地し、谷部に向かう緩斜面からも遺構が確認され、周辺部で同じ地形を呈する部分には同様な遺構が残存する可能性が考えられる。弥生時代では調査区中央部に谷水が流れ込む形になった溜池状遺構が検出されている。古代～近世の遺物包含層からは当該期の遺物が出土しており、集落が存在した可能性が考えられるが、後世の削平によって遺構は消滅したとみられる。

古代では隅丸方形の掘方を持つ柱穴で構成される掘立柱建物跡が確認されている。この掘立柱建物跡は計3棟確認されており、官衙に関連する建物跡と考えられる。また、当該期の遺構は尾根状の高まり部分から南西方向に下る緩斜面上で多く確認されているが、弥生時代と同様後世の削平を受けており、遺存状態はあまり良くなかった。

中世・近世では調査区全体で柱穴、土坑、溝状遺構などが検出されている。中世における集落の中心は調査区東側に所在する尾根状の高まり部分とみられ、この箇所を中心に当該期の遺構が多く確認されている。また、近世では調査区全体で遺構が検出されており、比較的広範囲に集落が展開していたものと考えられる。

(3) 調査の方法

試掘調査の結果を受けて、調査対象区域周辺に世界測地系の3級基準点及び3級水準点を設置したうえで調査対象区域周辺の航空写真測量を行い1,000分の1の地形図を作成した。なお、調査区周辺に設置した基準点には方位標も設定し、発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(IV系)の基準点を使用し、X=59,500m、Y=24,300m(北緯33° 32' 11"、東経133° 45' 42"、真北方向角-0° 08' 40")を原点とし、A～E(100mグリッド:大グリッド)を組み、北から順にアルファベットを配した。100mグリッドの中にはそれぞれのアルファベットを冠する20mグリッド(中グリッド:1～25)を設定し、調査で使用する4mグリッド(小グリッド:1～25)にはA1

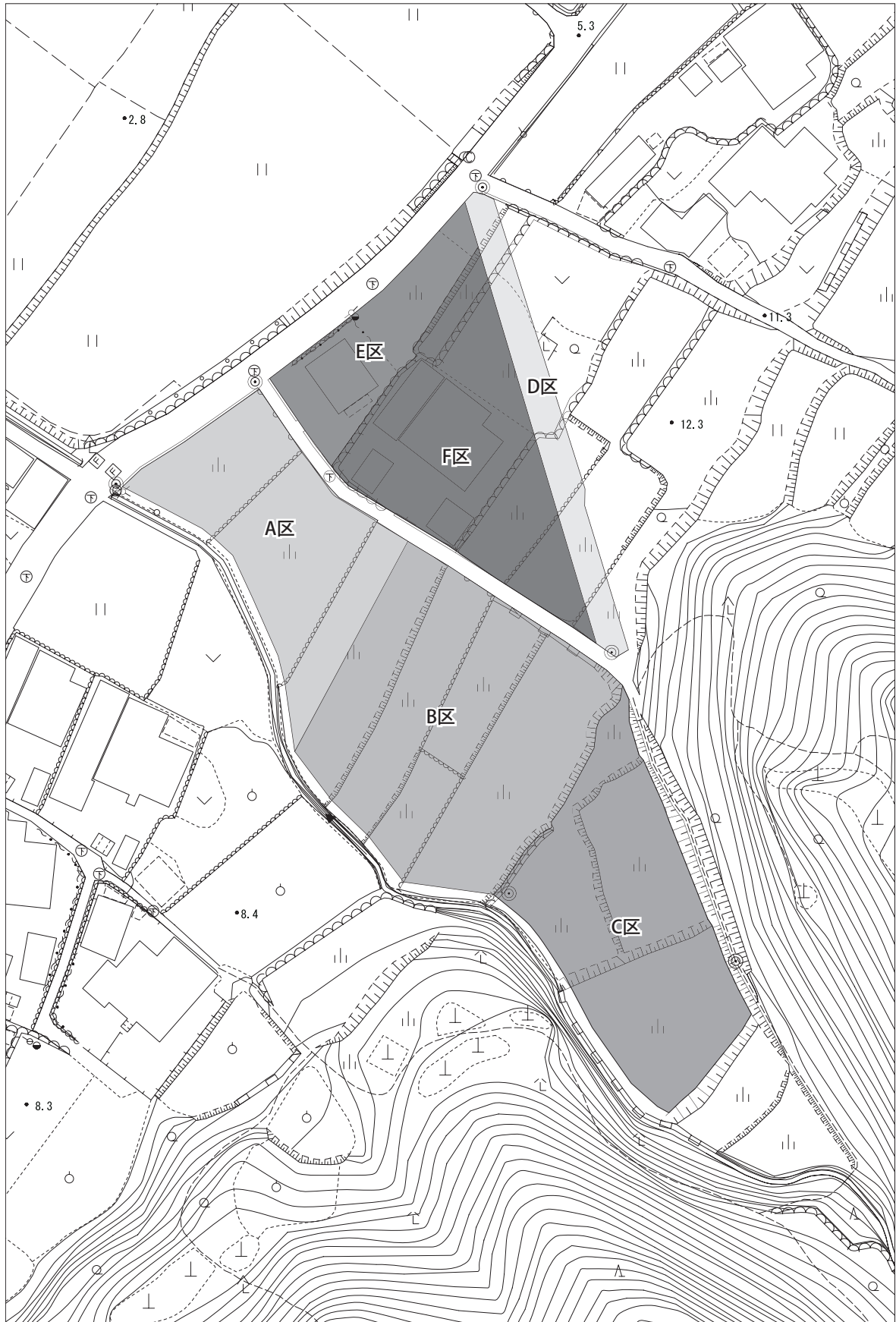


图1-3 調査区全体図(S=1/1,000)

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

－1と枝番を付した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を標記している。

調査は道路建設工事に合わせて実施した。まず、仮設側道部分をD区として調査を開始し、その後、A・B区の調査を行った。C区に関しては平成15年度に試掘調査を行っていなかったため、A区調査時に試掘調査を実施し、中世～近世の遺構・遺物が確認されたため、B区と併せて調査を行った。E区は当初平成17年度に調査を行う予定であったが、個人住宅の移転が早まったため急遽平成16年度に行い、平成17年度には残りの箇所について調査を実施した。

堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上まで機械力を導入し、遺物包含層以下は人力掘削を実施した。なお、遺物包含層でも遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮し機械力で遺構検出を行った。また、遺跡の成り立ち等を明らかにするために地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、古環境の復元にも重点を置いた。平成16年度には大阪市自然史博物館の故那須孝悌元館長に現地指導を受け、平成17年度には大阪市文化財協会の趙哲済氏に指導を受けた。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

口槇ヶ谷遺跡の所在する高知県香南市は平成18年3月1日に、香南5町村(赤岡町、香我美町、野市町、夜須町、吉川村)が合併して誕生した新しい市で、北緯33度33分52秒、東経133度42分2秒(香南市役所所在地)、高知県中央部の東端に位置し、東西約20km、南北約15km、面積126.49km²、人口34,131人(平成19年7月現在)である。東は安芸市・安芸郡芸西村、西は南国市、北は香美市に接しており、剣山系白髪山に源を發し高知県の中央部を南西方向に流れて土佐湾に注ぐ延長約71km、総流域面積468km²の一級河川である物部川の左岸に位置している。地理的にみると北側にある四国山脈から派生した標高約300～600mの山地と南側の土佐湾に挟まれて南北幅約2.3km、東西幅約2.8kmの平野部があり、旧夜須町には夜須川沿いに小規模な氾濫源性低湿地が存在している。北側の四国山脈から派生した山地は東にいくにしたがって標高が増し、香美市・安芸市との境では標高約700～800mを測る。北側の山地と南側の土佐湾に挟まれた平野部は物部川左岸の香南台地と香宗川の氾濫によって生じた低湿地で形成されており、香宗川や支流である山北川の上流部にも小規模な氾濫源性低湿地が存在している。この平野部で最も広い面積を有するのが香南台地で、標高15m前後を測り、香南市で確認されている遺跡の多くはこの台地上に存在している。

口槇ヶ谷遺跡が所在する夜須町の地形は北部の山地と南部の丘陵及び低地に分けられる。北部の山地は長者が森を主峰にした600～700mの山地で構成されており、西に向かって物部川、香宗川の支流が流れ、東には安芸川の支流である尾川川が流れ出している。南部の丘陵及び低地はほぼ並行した東西の山地とその間の平野部から構成されている。北部の山地で600～700mを測る山地は徐々に標高が下がり、末端部は海に接する。平野部は東西山地の間にみられ、最大東西幅約1.5km、南北約5kmである。本遺跡は夜須川沿いに存在する低位河岸段丘上に立地しており、細かくみると北西方向に開けた小規模な谷の末端部分に位置している。夜須町内で確認されている多くの遺跡はこの低位河岸段丘上に立地しているが、氾濫源性の低湿地部分に存在する微高地でも平成17年度に実施された試掘調査で遺跡の存在が確認されている。



図1-4 周辺の遺跡分布図(S=1/50,000)

表1-1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	口横ヶ谷遺跡	弥生～近世	15	伝大野城跡	中世	29	国吉城跡	中世
2	手結遺跡	旧石器	16	光国城跡	〃	30	十万遺跡	弥生～中世
3	奥谷遺跡	中世・近世	17	北屋敷遺跡	縄文～古墳	31	十万城跡	中世
4	加治ヶ山古墳	古墳	18	姫倉城跡	中世	32	東十万城跡	〃
5	坪井遺跡	古代・中世	19	クノ丸遺跡	〃	33	拝原遺跡	弥生～中世
6	下夜須城跡	中世	20	徳善城跡	近世	34	岡城跡	中世
7	檜ノ城跡	〃	21	徳王子前島遺跡	中世	35	拝原城跡	〃
8	西峯城跡	〃	22	徳王子広本遺跡	弥生～中世	36	岩神城跡	弥生
9	中村遺跡	中世・近世	23	徳王子大崎遺跡	弥生・中世	37	江見遺跡	古墳
10	土居山古墳	古墳	24	花宴遺跡	弥生	38	御所の前遺跡	弥生～中世
11	ノツゴ古墳	〃	25	徳善古窯跡群	平安	39	大東遺跡	古墳～平安
12	ツリガネガ森城跡	中世	26	徳善天皇古墳	古墳	40	ハザマ遺跡	弥生～中世
13	尼ヶ森城跡	〃	27	蛭野古墳	〃	41	香宗遺跡	中世
14	宗円城跡	〃	28	刈谷城跡	中世	42	香宗城跡	〃

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

(2) 歴史的環境

夜須町内で確認されている遺跡は40箇所であるが、最古の遺物が出土している遺跡は手結遺跡である。ここからは昭和34年に地元の中学生在が旧石器時代とみられる古銅輝石安山岩製の有舌尖頭器を発見しているが、残念なことに現在のところこの有舌尖頭器は所在不明である。その後、縄文時代の遺跡は夜須町内で確認されておらず、次に人間の営みが確認されるのは弥生時代後期末になってからである。この寺尾遺跡からは弥生土器の他に大型蛤刃石斧や扁平片刃石斧、有茎石鏃などが出土している。大型の竪穴住居跡も検出されており、現在のところ夜須町内で確認される唯一の集落跡である。

古墳時代にはいと夜須町内にも古墳が築かれるようになる。加治ヶ山古墳1基、土居山古墳1基、ノツゴ古墳1基と計3基の古墳が確認されており、いずれも古墳時代後期とみられる横穴式石室古墳である。現在これらの古墳はいずれも後世の土地改変によって残存していない。これらの古墳の存在は当該期の集落が周辺に存在していたことを物語るが、いまだ未発見である。

古代になると夜須町平野部一帯に条里制が施行されたと推定されているが、確証はない。夜須町は承和年中(937)に編集された「倭名類聚抄」にみえる香我美郡7郷(大忍・宗部・深淵・山田・岩村・田村・安須)のうち安須郷があてはまり、郷域は地形からみて現在の町域とあまり変わらなかったと考えられている(夜須町史1987)。口檜ヶ谷遺跡や平成18年度に本発掘調査を実施した坪井遺跡では当該期の掘立柱建物跡が検出されており、安須郷に関連する建物跡の可能性も考えられる。その後、律令制のもとで安須郷とよばれた当地域は11世紀ごろに岩清水八幡宮の所有する荘園となり、夜須庄と呼ばれるようになる。また、後一条天皇の寛仁年中(1020)には岩清水八幡宮から支院である宝塔院に寄進され、以後は宝塔院領として存続していくこととなる。この夜須庄は現在の夜須町の南部約3分の1を占める荘園であり、残りの北部3分の2は大忍庄であった。この夜須庄の在地領主であった夜須七郎行宗の名は「吾妻鏡」に記されている。吾妻鏡によれば、建久元年(1190)に源頼朝の弟である源希義を殺害した蓮池権守家綱と平田太郎俊遠を討伐した功をもって夜須庄の地頭に任ぜられており、土佐でも有力な地頭クラスの御家人となっている。夜須七郎行宗の居城跡は下夜須城跡とされているが、確証はない。夜須庄の構造及び解体過程については不明であるが、時代の流れの中で、少しずつ解体していったと考えられる。中世後期に夜須庄は香我美郡を領有した長宗我部氏の支配下に入り、安芸郡を領有した安芸氏と対峙する重要地域として多くの城が築かれている。夜須町内で確認されている城跡は8箇所であるが、特筆される城跡は長宗我部氏の重臣であった吉田備後守重俊の居城尼ヶ森城跡で、当地域で最大の城跡である。詰や切岸などの遺構が良く残存しており、当時を偲ばせる。

近世には野中兼山によって手結港の大改修が行われた。小倉弥右衛門(三省)を責任者として慶安3年(1650)築港に着手し、明歴3年(1657)に竣工した手結港はわが国初の本格的な掘り込み港として完成している。明治4年の戸籍法公布に伴う区制の施行によって3区に編成され、明治22年(1889)の町村制施行によって夜須村として成立している。昭和29年(1954)には夜須町と香美郡東川村大字細川・羽尾・沢谷・仲木屋が合併して新しい夜須町が生まれ、平成18年には香美郡5町村(夜須町・赤岡町・香我美町・野市町・吉川村)が合併し、香南市として現在に至っている。

参考文献

『夜須町史』上・下巻 夜須町史編纂委員会 1987年

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

口檜ヶ谷遺跡は、平成15年度に実施された高知東部自動車道南国安芸道路建設工事に伴う事前の試掘調査によって新たに確認された遺跡である。平成15年度の試掘調査結果を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所との間で本発掘調査について協議を行い、2ヵ年で本発掘調査を実施することとなった。調査は国土交通省四国地方整備局と高知県教育委員会の業務委託を受け、平成16年4月1日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を開始した。

本調査は道路建設工事の工程に合わせて、平成16年度にA～E区、平成17年度にはF区の調査を行った。報告書については、一連の遺跡であることから平成16・17年度の調査結果を合わせて本報告書で報告することとする。

(2) 調査日誌抄

① 平成16年度

D区

- 5.12 D区の調査を開始する。安全柵を設置し、重機による表土掘削を行う。
- 5.13 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.14 重機による表土掘削を行う。
- 5.17 重機による表土掘削を行う。
- 5.18 重機による表土掘削を行う。
- 5.19 午前は遺構検出作業を行い、午後は雨天のため現場作業を中止する。
- 5.20 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.21 重機による表土掘削を行う。
- 5.24 重機による表土掘削を行う。
- 5.25 遺構検出作業を行う。
- 5.26 遺構検出作業と並行して清掃作業を行う。
- 5.27 遺構検出状態(中世・近世)の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
- 5.28 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 5.31 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.1 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 6.2 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 6.3 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 6.4 平面測量、レベル実測並びにA区の草刈りを

行う。

- 6.7 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.8 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.9 清掃作業並びに遺構完掘状態(中世・近世)の写真撮影を行う。
- 6.10 遺構検出作業並びに遺構検出状態(中世)の写真撮影を行う。
- 6.11 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.14 遺構調査(中世)を行う。
- 6.15 遺構調査(中世)並びに遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 6.16 埋め戻し作業を行う。
- 6.17 埋め戻しが完了し、D区の調査が終了する。

A区

- 6.16 A・B区的安全柵を設置する。
- 6.17 A区の調査を開始する。重機による表土掘削を行う。
- 6.18 重機による表土掘削を行う。
- 6.21 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.22 水抜きのため現場作業を中止する。
- 6.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.24 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業

1. 調査の経過

- を行う。
6. 25 雨天のため現場作業を中止する。
6. 28 雨天のため現場作業を中止する。
6. 29 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
6. 30 雨天のため現場作業を中止する。
7. 1 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
7. 2 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
7. 5 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
7. 6 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
7. 7 雨天のため現場作業を中止する。
7. 8 午前は遺構検出作業を行い、午後は雨天のため現場作業を中止する。
7. 9 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
7. 12 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
7. 13 遺構検出作業と並行して清掃作業を行う。
7. 14 清掃作業並びに遺構検出状態(中世・近世)の写真撮影を行う。
7. 15 遺構調査(中世・近世)を開始する。
7. 16 遺構調査(中世・近世)を行う。
7. 20 遺構調査(中世・近世)を行う。
7. 21 遺構調査(中世・近世)を行う。
7. 22 遺構調査(中世・近世)を行う。
7. 23 職員研修のため現場作業を中止する。
7. 26 遺構調査(中世・近世)を行う。
7. 27 遺構調査(中世・近世)と並行して清掃作業を行う。
7. 28 清掃作業並びに遺構完掘状態(中世・近世)の写真撮影を行う。
7. 29 遺構完掘状態(中世・近世)の写真撮影を行う。
7. 30 航空写真測量及び写真撮影を行う。
8. 2 午前中、重機による掘削を行い、午後は雨天のため現場作業を中止する。
8. 3 水抜きのため現場作業を中止する。
8. 4 雨天のため現場作業を中止する。
8. 5 水抜きを行う。
8. 6 雨天のため現場作業を中止する。
8. 9 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 10 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 11 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 13 夜須小・中学校夏休み子供考古学体験学習を行う。
8. 17 雨天のため現場作業を中止する。
8. 18 雨天のため現場作業を中止する。
8. 19 雨天のため現場作業を中止する。
8. 20 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 23 雨天のため現場作業を中止する。
8. 24 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 25 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 26 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 27 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
8. 30 雨天のため現場作業を中止する。
8. 31 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
9. 1 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
9. 2 雨天のため現場作業を中止する。
9. 3 遺物包含層(古代)の人力掘削と並行して遺構検出作業を行う。
9. 6 遺物包含層(古代)の人力掘削と並行して遺構検出作業を行う。
9. 7 雨天のため現場作業を中止する。
9. 8 遺構検出作業並びに清掃作業を行う。
9. 9 清掃作業並びに遺構検出状態(弥生時代・古代)の写真撮影を行う。
9. 10 遺構調査(弥生時代・古代)を行う。
9. 13 遺構調査(弥生時代・古代)を行う。
9. 14 遺構調査(弥生時代・古代)を行う。
9. 15 遺構調査(弥生時代・古代)を行う。
9. 16 雨天のため現場作業を中止する。
9. 17 遺構調査(弥生時代・古代)を行う。
9. 20 遺構調査(弥生時代・古代)を行う。
9. 21 遺構調査(弥生時代・古代)を行う。
9. 22 午前中、遺構調査を行い、午後は雨天のため現

- 場作業を中止する。
- 9.24 清掃作業を行う。
- 9.25 清掃作業並びに遺構完掘状態(古代)の写真撮影, 航空写真測量等を行う。
- 9.27 職員定例会のため現場作業を中止する。
- 9.28 下層確認トレンチの調査を行い, 埋め戻し作業を開始する。
- 9.29 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.30 埋め戻し作業を行う。
- 10.1 埋め戻し作業を行う。
- 10.2 埋め戻しが完了し, A区の調査が終了する。
- B・C区**
- 10.4 B・C区の調査を開始する。重機による表土掘削を行う。
- 10.5 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.6 重機による表土掘削を行う。
- 10.7 重機による表土掘削を行う。
- 10.8 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.12 重機による表土掘削を行う。
- 10.13 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.14 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.15 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.18 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.19 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.20 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.21 台風による被害のため現場作業を中止する。
- 10.22 重機掘削と並行して遺構検出作業並びに夜須小学校発掘体験学習を行う。
- 10.25 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.27 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.28 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 10.29 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 11.1 遺構検出作業並びに清掃作業を行う。
- 11.2 遺構検出作業並びに清掃作業を行う。
- 11.3 遺構検出作業並びに清掃作業を行う。
- 11.4 清掃作業並びに遺構検出状態(中世・近世)の写真撮影を行う。
- 11.5 遺構調査(中世・近世)を開始する。
- 11.8 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 11.9 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 11.10 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 11.11 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.12 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 11.15 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.16 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 11.17 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 11.18 午前中は遺構調査を行い, 午後は雨天のため現場作業を中止する。
- 11.19 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.22 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 11.23 遺構調査(中世・近世)と並行して清掃作業を行う。
- 11.24 清掃作業を行う。
- 11.25 清掃作業を行う。
- 11.26 清掃作業並びに遺構完掘状態(中世・近世)の写真撮影を行う。
- 11.27 航空写真測量及び写真撮影を行う。
- 11.29 重機による掘削と並行して遺構検出作業(古代)を行う。
- 11.30 重機による掘削と並行して遺構検出作業(古代)を行う。
- 12.1 重機による掘削と並行して遺構検出作業(古代)を行う。
- 12.2 重機による掘削と並行して遺構検出作業(古代)を行う。
- 12.3 夜須中学校発掘体験学習並びに遺構検出状態(古代)の写真撮影を行う。
- 12.6 遺構調査(古代)を行う。
- 12.7 遺構調査(古代)を行う。

1. 調査の経過

- 12. 8 遺構調査(古代)と並行して清掃作業を行う。
- 12. 9 清掃作業を行う。
- 12.10 清掃作業並びに遺構完掘状態(古代)の写真撮影を行う。
- 12.11 航空写真測量及び写真撮影を行う。
- 12.13 下層確認トレンチの調査並びに埋め戻し作業を開始する。
- 12.14 埋め戻し作業を行う。
- 12.15 埋め戻し作業を行う。
- 12.16 埋め戻し作業を行う。
- 12.17 埋め戻し作業を行う。
- 12.20 埋め戻し作業を行う。
- 12.21 埋め戻しが完了し、B・C区の調査が終了する。

E区

- 12.22 安全柵を設置する。
- 12.24 コンクリート片等を搬出する。
- 1. 4 E区の調査を開始する。重機による表土掘削を行う。
- 1. 5 重機による表土掘削を行う。
- 1. 6 遺構検出作業を行う。
- 1. 7 清掃作業を行い、遺構検出状態(中世・近世)の写真撮影を行う。

② 平成17年度

F区

- 4. 25 調査前風景の写真撮影を行う。
- 5. 9 F区の調査を開始する。基礎等をブレイカーで破碎し、調査区の設定を行う。
- 5. 10 表土掘削を開始する。一部遺構検出面を確認し、ピット等を検出する。
- 5. 11 重機による表土掘削を開始し、並行して遺構検出作業を行う。
- 5. 12 重機による表土掘削と並行して遺構検出作業を行う。
- 5. 13 重機による表土掘削を行う。
- 5. 16 遺構検出作業並びに清掃作業を行う。
- 5. 17 遺構検出並びに清掃作業を行う。
- 5. 18 雨天のため現場作業を中止する。
- 5. 19 調査区南西部の平坦面に存在する遺構群の調査を行う。

- 1. 11 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 1. 12 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 1. 13 遺構調査(中世・近世)を行う。
- 1. 14 清掃作業並びに遺構完掘状態(中世・近世)の写真撮影を行う。
- 1. 17 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
- 1. 18 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
- 1. 19 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
- 1. 20 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
- 1. 21 遺物包含層(古代)の人力掘削を行う。
- 1. 24 清掃作業並びに遺構検出状態(古代)の写真撮影を行う。
- 1. 25 遺構調査(古代)を行う。
- 1. 26 遺構調査(古代)と並行して清掃作業を行う。
- 1. 27 遺構完掘状態(古代)の写真撮影並びに航空写真測量・写真撮影を行う。
- 1. 28 下層確認トレンチの調査を行い、埋め戻し作業を開始する。
- 1. 29 埋め戻し作業を行う。
- 1. 31 埋め戻しが完了し、E区の調査が終了する。

- 5. 20 遺構調査を行う。
- 5. 23 遺構調査の続きを行い、午前中にはほぼ終了する。
- 5. 24 清掃作業を行い、第1次遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 5. 25 古代の遺物包含層の人力掘削を行う。
- 5. 26 古代の遺物包含層掘削を行う。
- 5. 27 古代の遺物包含層掘削並びに遺構調査を行う。
- 5. 30 中世の遺構調査を行い、並行して清掃作業を行う。
- 5. 31 弥生時代の遺物包含層掘削を行う。
- 6. 1 弥生時代と考えられる遺物包含層の掘削を行う。
- 6. 2 雨天のため現場作業を中止する。
- 6. 3 弥生時代と考えられる遺物包含層の掘削を行う。
- 6. 6 弥生時代と考えられる遺物包含層掘削を行

- い、その後清掃作業を行う。
6. 7 東壁セクションの分層並びに土層断面図を作成する。
 6. 8 コンタ図の作成を行う。
 6. 9 航空測量を行う。
 6. 10 現場作業を中止する。
 6. 13 下層確認を行う。
 6. 14 F-1区の埋め戻し作業を行う。
 6. 15 埋め戻し作業を行う。
 6. 16 F-2区の表土掘削並びに遺構検出作業を行う。
 6. 17 表土掘削並びに遺構検出作業を行う。
 6. 20 表土掘削並びに遺構検出作業を行う。
 6. 21 遺構検出作業並びに清掃作業を行う。
 6. 22 清掃作業並びに第1次遺構検出面検出状態の写真撮影を行う。
 6. 23 遺構調査を行うが、午後は雨天のため現場作業を中止する。
 6. 24 第1次遺構検出面の遺構調査を行う。
 6. 25 中世の遺構調査を行う。
 6. 27 遺構調査を行う。
 6. 28 遺構調査を行う。
 6. 29 遺構調査並びにバンクの掘削を行う。
 6. 30 第1次遺構検出面完掘状態の写真撮影を行う。
 7. 1 中世の遺物包含層掘削を行う。
 7. 4 雨天のため現場作業を中止する。
 7. 5 遺物包含層掘削を行う。
 7. 6 雨天のため現場作業を中止する。
 7. 7 遺物包含層の掘削を行う。
 7. 8 職員専門研修のため、現場作業を中止する。
 7. 11 遺物包含層掘削を行う。
 7. 12 現場作業を中止する。
 7. 13 午前中、清掃作業を行い、第2次遺構検出状態の写真撮影を行う。
 7. 14 一部中世の遺構を含む遺構調査を行う。
 7. 15 遺構調査を行う。
 7. 16 遺構調査を行う。
 7. 19 遺構調査並びに清掃作業を行う。
 7. 20 弥生時代と考えられる遺物包含層の掘削を行う。
 7. 21 弥生時代と考えられる遺物包含層の掘削を行う。
 7. 22 第3次遺構完掘写真を撮影する。
 7. 25 航空写真測量を行う。
 7. 26 午前中、下層確認を行う。
 7. 27 埋め戻し作業を行う。
 7. 28 埋め戻し作業が全て終了する。
 7. 29 後片づけを行い、全ての作業が終了する。

2. 調査の概要

本遺跡は夜須川左岸の低位河岸段丘上に立地する遺跡で、細かくみれば本遺跡の東側に存在する山地から派生した尾根の間に挟まれた谷部に所在している。確認された遺構は弥生時代、古代(奈良～平安時代)、中世(鎌倉～室町時代)、近世(江戸時代)を中心としており、遺構の分布状況が時期によって異なっている。

弥生時代の遺構は谷部の底で確認されており、他の箇所では検出されていない。古代から近世の遺物包含層から当該期の遺物が出土していることから本遺跡に集落等が存在していた可能性が考えられるが、古代以降の地形改変によって削平されたとみられる。古代については調査区東側に所在する尾根状の高まり部分で遺構の多くが確認されている。しかし、これらも近世以降の地形改変によって削平されており、遺存状態は良くない。

次の中世・近世が本遺跡の最盛期であり、当該期の遺構は調査区全体で検出されている。特に古代と同様尾根状の高まり部分で掘立柱建物跡などが復元されており、この部分を中心に集落が展開していたと考えられる。細かくみると中世の掘立柱建物跡は尾根状の高まり部分を中心に展開している

2. 調査の概要

が、近世になると谷部の奥でも掘立柱建物跡が検出されており、集落の範囲が拡大したことを窺わせる。また、中世段階で確認された掘立柱建物跡には大規模な地形改変が伴わないが、近世以降では屋敷地を拡大するために緩斜面を削り、平坦面を造り出している。その後、近現代に屋敷地や水田や畑として利用されていたこともあり、本調査区は段状に削平され多くの遺構が消滅したと考えられる。

なお、下層確認調査も含めた調査総面積は 8,995 m²であり、出土遺物の総点数は約 20,100 点を数える。

(1) 層序

前述したとおり、本調査区は段状に削平されていたこともあり、堆積層からは各時期の遺物が混在して出土している。これは、近現代の地形改変によって水田や畑を造成するときに、削り出した土を斜面の下方に盛り、平坦面を造り出しているためである。このため、尾根状の高まり部分に立地している本遺跡では、標高の高い部分ほど後世の削平を受け遺物包含層の遺存状態は良くない。

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト層

第Ⅱ層 灰黄褐色(10YR5/2)極細粒～細粒砂質シルト層

第Ⅱ'層 鉄分の沈着がみられる暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極細粒砂質シルト層

第Ⅲ層 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y6/1)極細粒砂質シルト層

第Ⅳ層 鉄分の沈着がみられる暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂層

第Ⅴ層 マンガン粒を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト層

第Ⅵ層 鉄分の沈着がみられる黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルト層

第Ⅶ層 鉄分の沈着がみられる暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト層

第Ⅶ'層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト層

第Ⅷ層 マンガン粒を含む褐灰色(10YR5/1)極細粒砂質シルト層

第Ⅸ層 小礫を含むマンガン粒混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルト層

第Ⅹ層 中礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト層

第Ⅺ層 小礫を含む浅黄色(2.5Y7/4)中粒～粗粒砂質シルト層

層位中、遺物包含層は第Ⅹ層(古代～中世)であり、弥生時代・近世の遺物包含層は残存していない。このため、遺構の検出は第Ⅺ層上面で行っている。

第Ⅰ層は現代の耕作土であり、厚さ13～24cmを測る。調査前は水田または畑等であった。

第Ⅱ～Ⅴ層は旧耕作土で、弥生時代から近世の遺物を含み、厚さ15～30cmを測る。近世以降の耕作土と考えられる。

第Ⅵ～Ⅸ層は近世以前の地形改変によって堆積した堆積層と考えられ、弥生時代から中世の遺物を含む。厚さ5～32cmを測る。

第Ⅹ層は古代から中世にかけての遺物包含層であるが、削平の影響で全く残存していない部分もあった。平均的な層厚は11cm程度であった。

第Ⅺ層は自然堆積層で、厚さ32cm以上を測る。

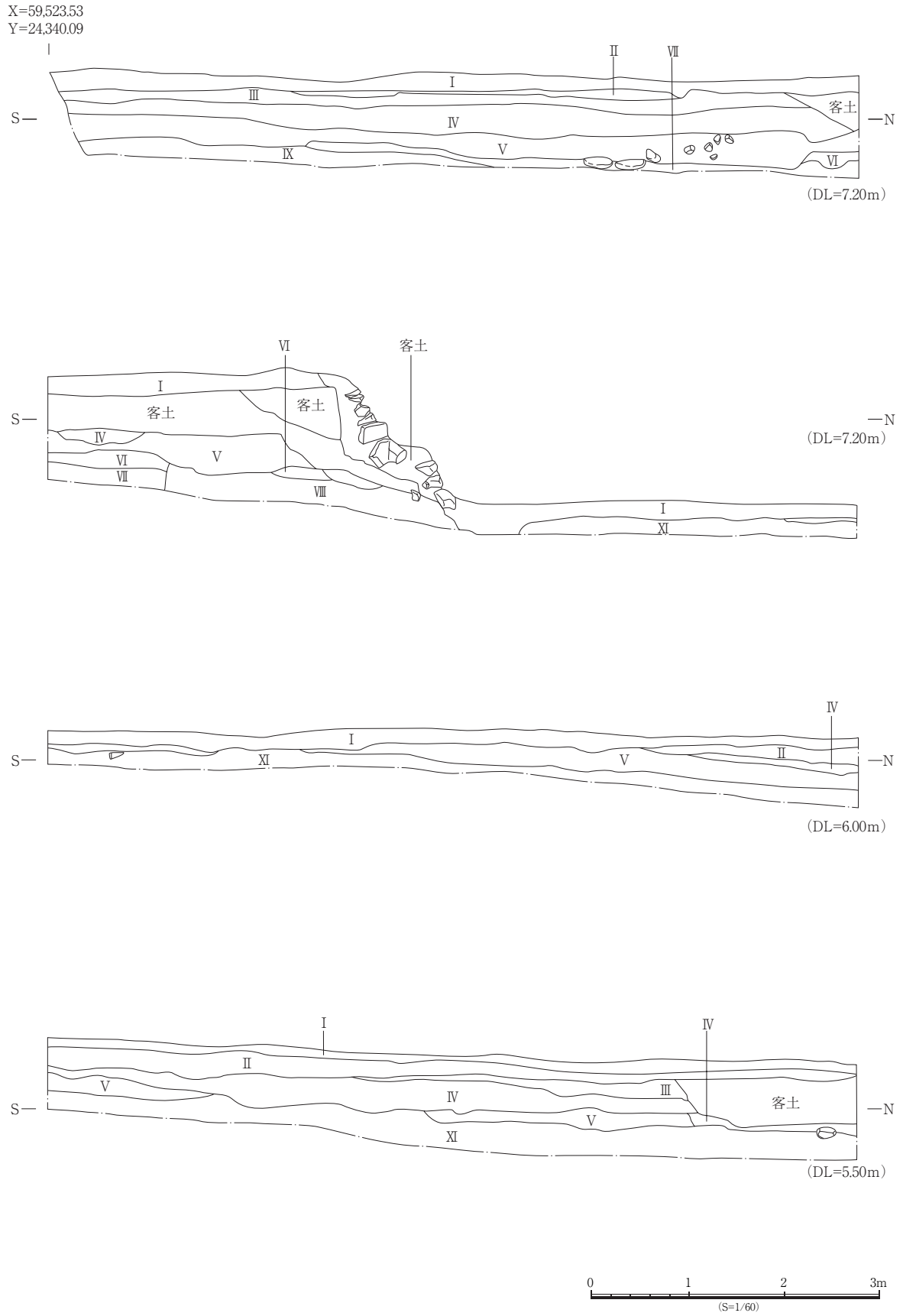
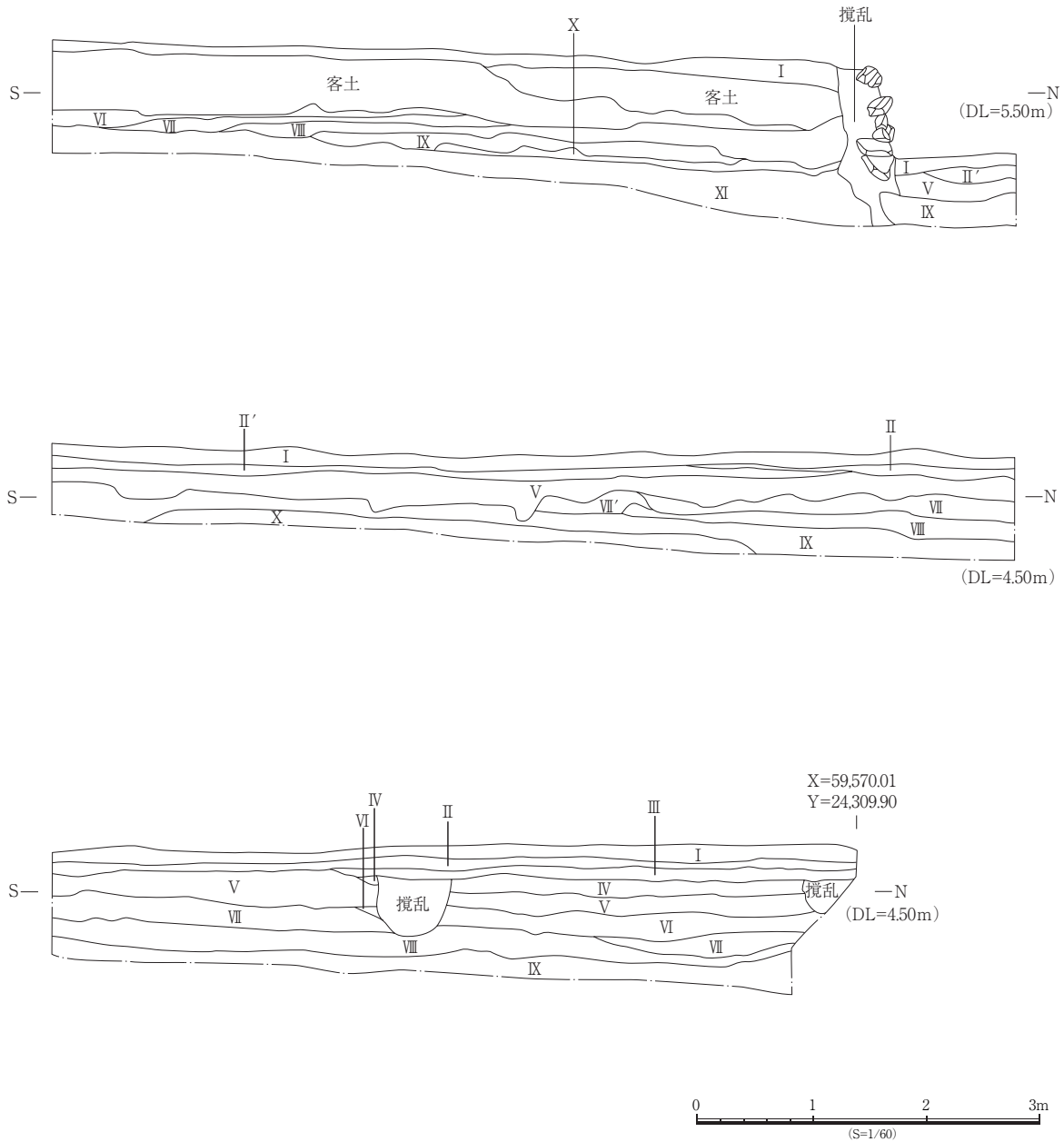


図2-1 調査区セクション図1

2. 調査の概要



層位

- 第I層 黄褐色(25Y5/3)細粒砂質シルト層
- 第II層 灰黄褐色(10YR5/2)極細粒～細粒砂質シルト層
- 第III層 鉄分の沈着がみられる暗オリーブ灰色(25GY4/1)極細粒砂質シルト層
- 第IV層 鉄分の沈着がみられる暗黄褐色(25Y5/2)細粒～中粒砂層
- 第V層 マンガン粒を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト層
- 第VI層 鉄分の沈着がみられる黄灰色(25Y5/1)極細粒砂質シルト層
- 第VII層 鉄分の沈着がみられる暗黄褐色(25Y5/2)中粒砂質シルト層
- 第VIII層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト層
- 第IX層 マンガン粒を含む褐灰色(10YR5/1)極細粒砂質シルト層
- 第X層 小礫を含むマンガン粒混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルト層
- 第XI層 中礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト層
- 第XII層 小礫を含む浅黄褐色(25Y7/4)中粒～粗粒砂質シルト層

図2-2 調査区セクション図2

(2) 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

須恵器(図2-3 1~4)

1・2は杯蓋である。1は天井部破片で、つまみは欠損する。外面に回転ナデ調整が残り、天井部と口縁部の境に1条の沈線を施す。胎土には細粒～粗粒砂を含む。2は口縁部破片で、内外面とも回転ナデ調整を施す。外面には焼成時に付いたとみられる粘土塊が認められ、胎土には中粒～粗粒砂を含む。

3は杯で、口縁部内外面に回転ナデ、底部内外面にナデを施す。高台内に爪形状圧痕がみられ、胎土には粗粒砂を含む。

4は高杯の脚部破片である。器面には回転ナデ調整がみられ、脚部内面にはしぼり目が認められる。部分的に自然釉がかかり、胎土には中粒砂を含む。

土師質土器(図2-3 5・6)

いずれも杯である。5・6とも磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。

備前焼(図2-3 7・8)

いずれも挿鉢である。7は器面に回転ナデを施し、胎土には中粒～小礫を含む。8も内外面とも回転ナデ調整で、内面には8条単位の条痕を施す。胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

近世陶磁器(図2-3 9~16)

9~14は碗の底部破片で、胎土は精良である。9は削り出し高台で、見込みには五弁花文状の文様を線描きし、高台内以外には灰オリーブ色の釉を施す。10は口縁部が内湾して立ち上がり、内面には薄い緑色を呈する釉を施す。11は見込みと畳付には砂目積みの痕跡が残り、畳付以外には灰オリーブ色の釉を施す。12は畳付に砂目積みの痕跡が残り、器面にはにぶい黄色の釉を施す。13も畳付に砂目積みの痕跡が残り、器面にはにぶい黄褐色の釉を施す。14は削り出し高台で、畳付以外にはにぶい黄色の釉を施す。

15は蓋で、見込みに2条の圏線と草花文、外面には草花文を施し、つまみ内には銘を配する。

16は皿で、胎土は精良である。見込みに圏線2条、口縁部内面に四方嚢を簡略した文様を施す。

近代磁器(図2-3 17)

皿で、高台内には蛇ノ目釉剥ぎがみられる。口縁部内面には1条の圏線、見込みには蝶・草花文などを施す。胎土は精良である。

土製品(図2-4 18~24)

いずれも土錘で、紡錘形を呈する。器面には指頭圧痕が残り、胎土には極細粒～細粒砂を含む。18~20は一部が欠損し、21~24はほぼ完存するものである。

石製品(図2-4 25)

25は鏝で、先端部が欠損する。石材はサヌカイトである。

石製品(図2-5 26~30)

26~30は石臼で、石材は砂岩である。26~29は上臼で、いずれも一部が欠損する。3~10本単位の斜行する播り目を施す。30は下臼で、5本単位の斜行する播り目を施すが、使用により磨耗する。

2. 調査の概要

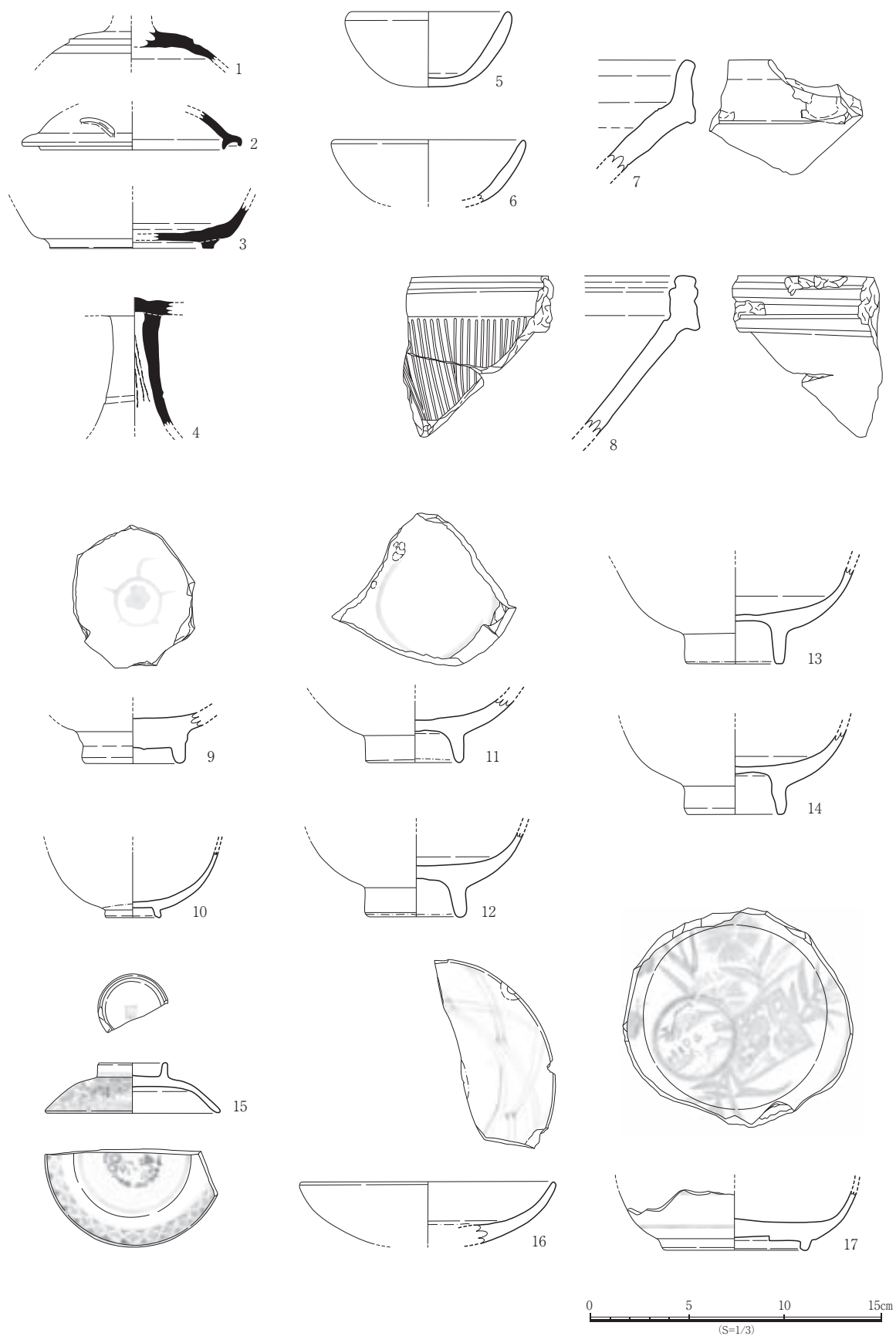


図2-3 第I層出土遺物実測図1(須恵器・土師質土器・備前焼ほか)

第II層出土遺物

近世陶器(図2-6 31)

碗である。畳付は露胎で、胎土には黒色を呈する斑文がみられる。

石製品(図2-6 32~34)

32は五輪塔である。火輪で、下部の四隅が欠損し、石材は砂岩である。

33・34は石臼で、石材は砂岩である。33は下臼で、斜行する4本単位の播り目がみられる。34は上臼で、斜行する2~4本単位の播り目がみられる。

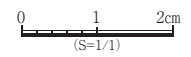
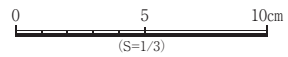
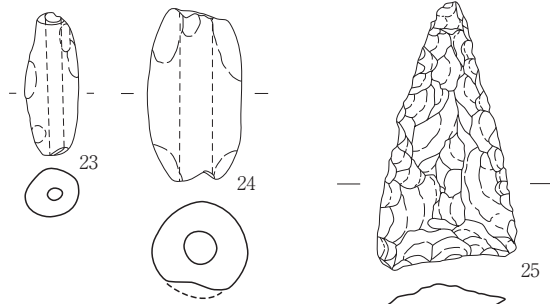
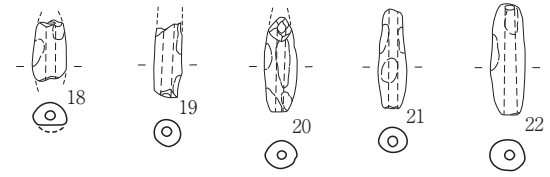


図2-4 第I層出土遺物実測図2(土製品・石製品)

第III層出土遺物

須恵器(図2-7 35・36)

いずれも杯である。35は底部内面には回転ナデ、外面にはナデを施し、胎土には細粒~粗粒砂を含む。36は口縁部内外面及び底部内面には回転ナデ、底部外面にはナデを施し、胎土には粗粒砂を含む。

瓦質土器(図2-7 37・38)

いずれも鍋である。37は口縁端部内外面にヨコナデ、口縁部内面にナデを施し、胎土には細粒~粗粒砂を含む。38は三足鍋の脚部破片で、磨耗が著しく調整は不明である。胎土には粗粒砂を含む。

東播系須恵器(図2-7 39・40)

いずれも捏鉢で、口縁端部内外面と口縁部外面には回転ナデ、口縁部内面にはナデを施し、胎土には細粒~極粗粒砂を含む。

備前焼(図2-7 41)

擂鉢で、口縁端部及び口縁部内面に回転ナデ、口縁部外面に不定方向のヘラ削りとナデを施す。胎土には中粒~粗粒砂を含む。

土製品(図2-7 42・43)

いずれも土錘で、紡錘形を呈し、一部を欠損する。表面には指頭圧痕が残り、胎土には細粒~粗粒砂を含む。

石製品(図2-7 44)

石臼である。上臼で、4本単位の播り目を施し、石材は砂岩である。

第IV層出土遺物

弥生土器(図2-8 45)

甕の底部破片とみられるものである。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、内面にはヘラ状原体によるナデもしくは削りが認められる。胎土には細粒~粗粒砂を含む。

土師器(図2-8 46)

甕で、磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面には回転ナデ調整の痕跡が残る。胎土には粗粒~

2. 調査の概要

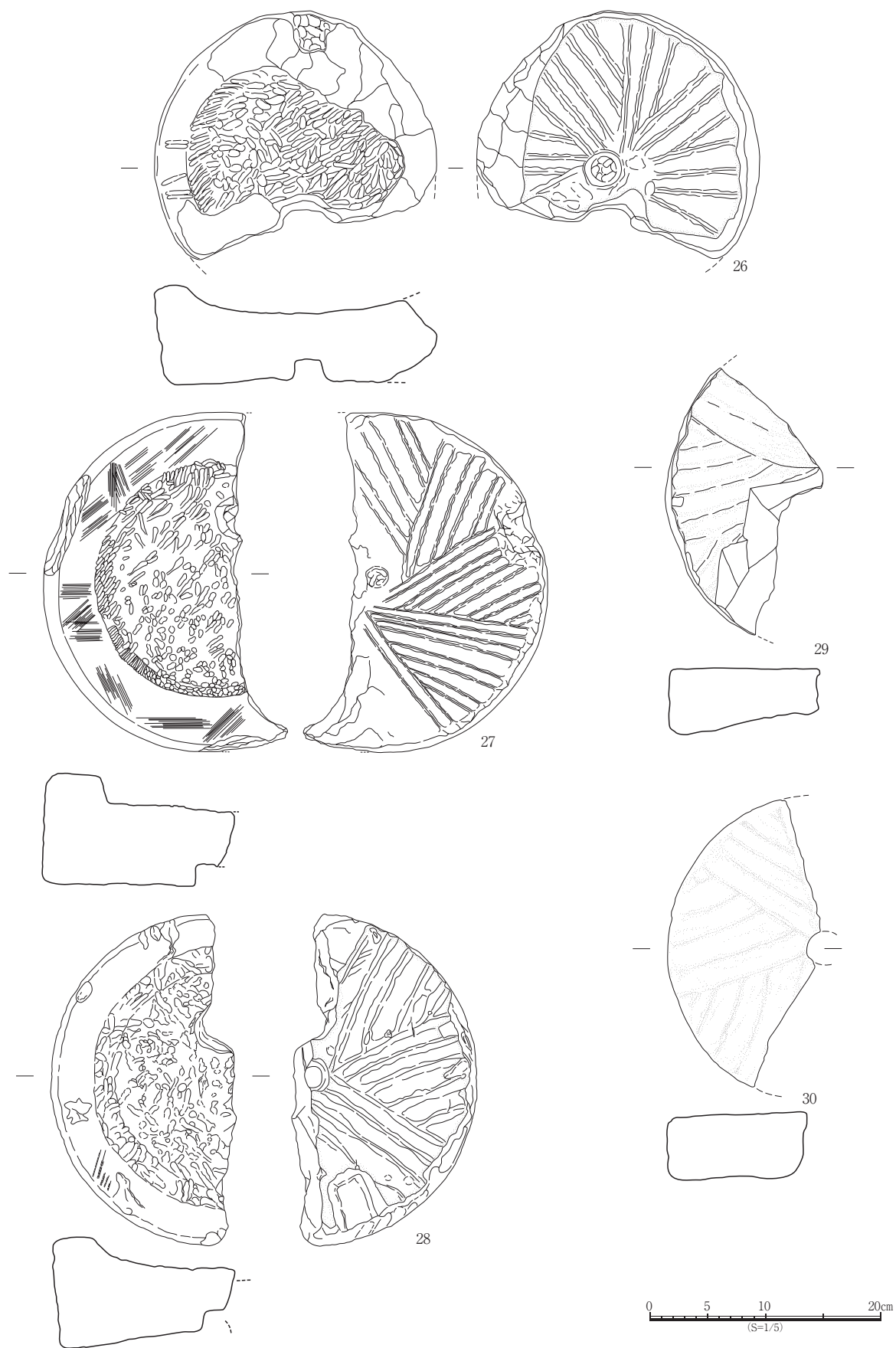


図2-5 第I層出土遺物実測図3(石製品)

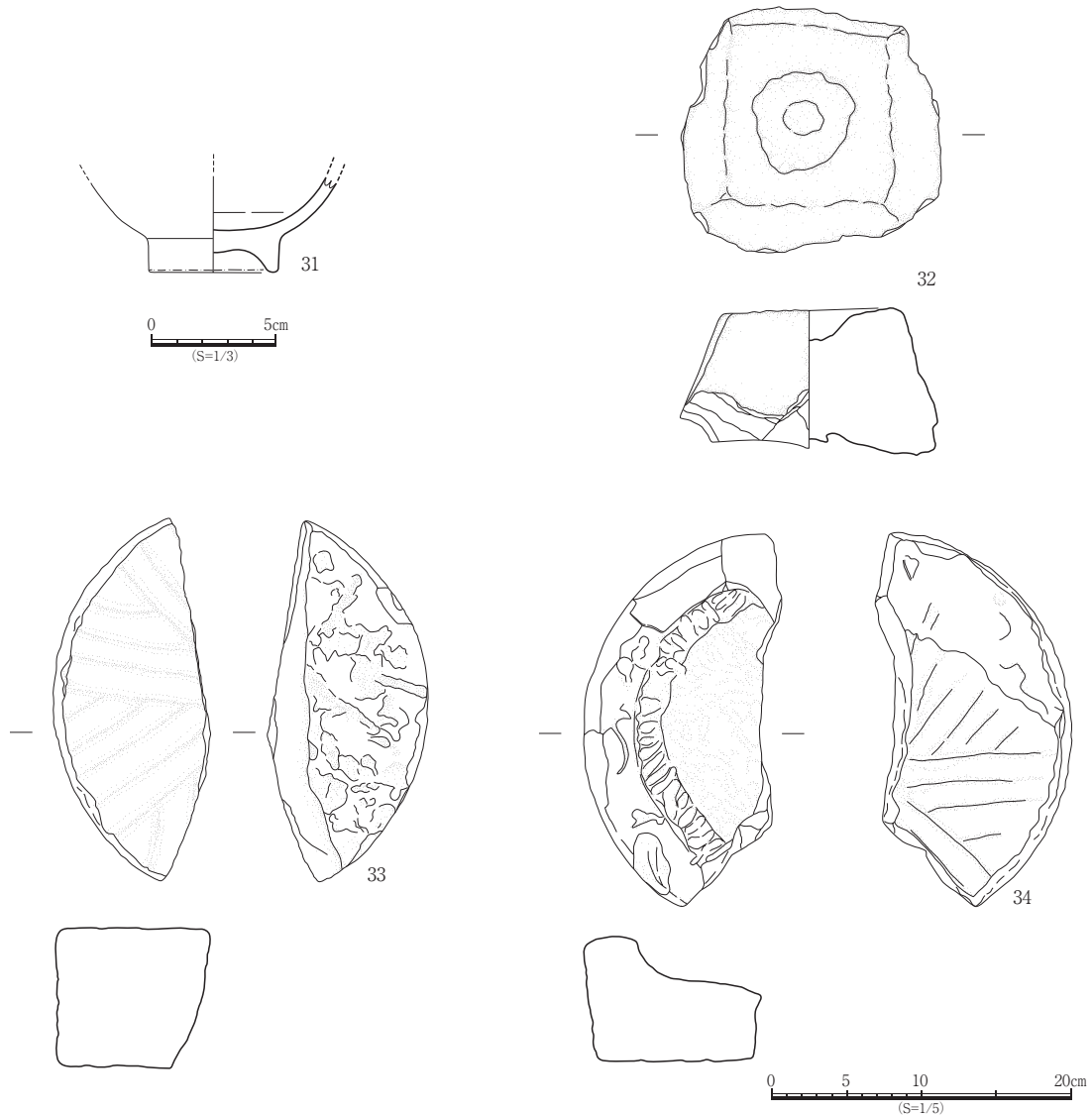


図2-6 第II層出土遺物実測図(近世陶器・石製品)

極粗粒砂を含む。

須恵器(図2-8 47~51)

47・48は蓋である。47は擬宝珠形つまみ部分のみ残存する。外面に回転ナデ、内面にナデを施し、胎土には中粒～粗粒砂を含む。48は口縁部破片である。口縁端部内外面には回転ナデ、天井部内外面にはナデを施し、胎土には中粒砂を含む。

49は杯の底部破片で、底部内面にはヘラ記号がみられ、胎土には細粒～粗粒砂を含む。

50は高杯の杯部破片で、口縁端部内外面と口縁部内面には回転ナデ、口縁部外面には回転ヘラ削りを施し、胎土には極細粒砂を含む。

51は甕で、磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、器面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残る。胎土には極細粒砂を含む。

土師質土器(図2-8 52~61)

52～58は杯である。52は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。調整は

2. 調査の概要

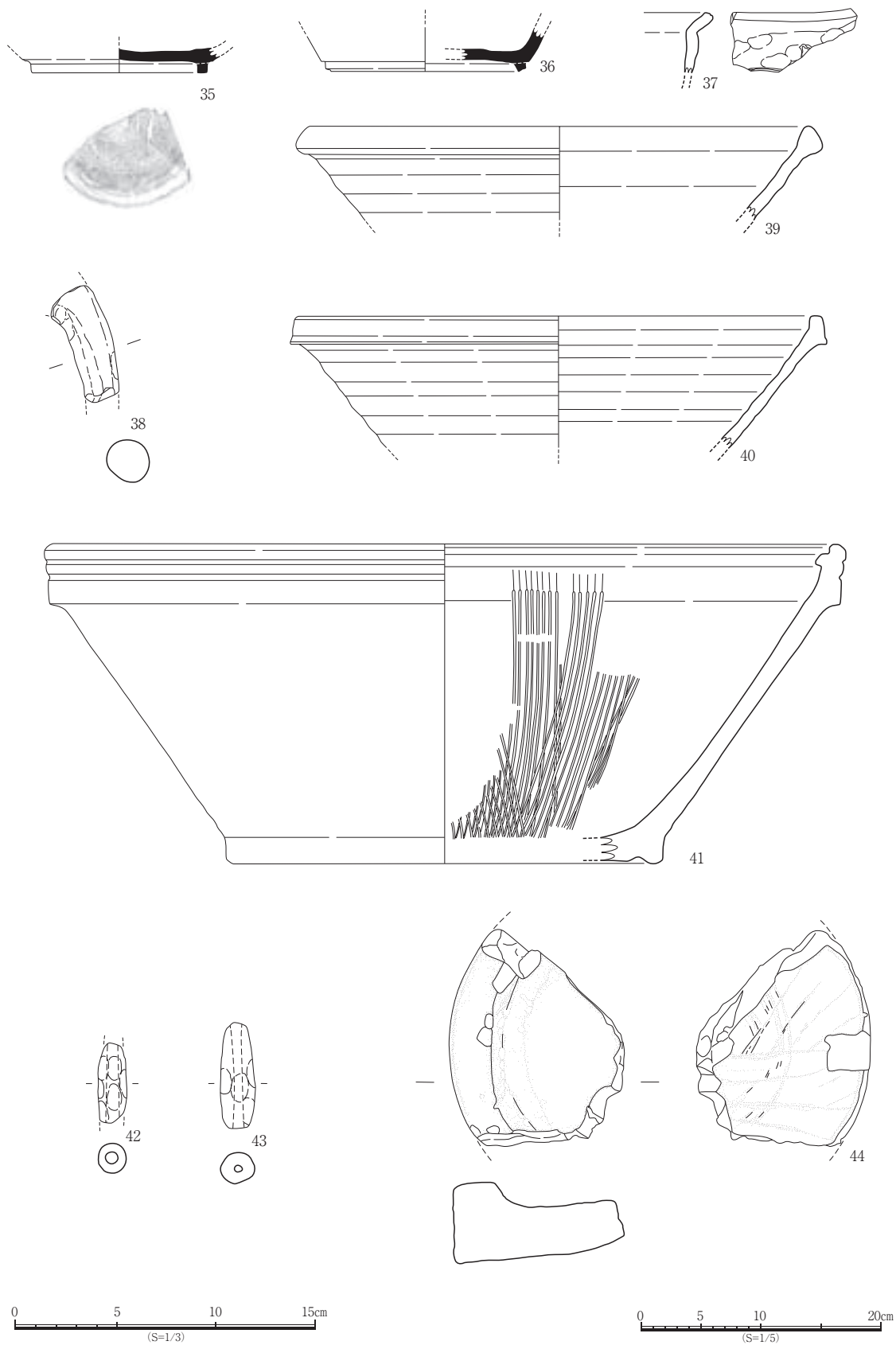


図2-7 第三層出土遺物実測図(須恵器・瓦質土器・東播系須恵器ほか)

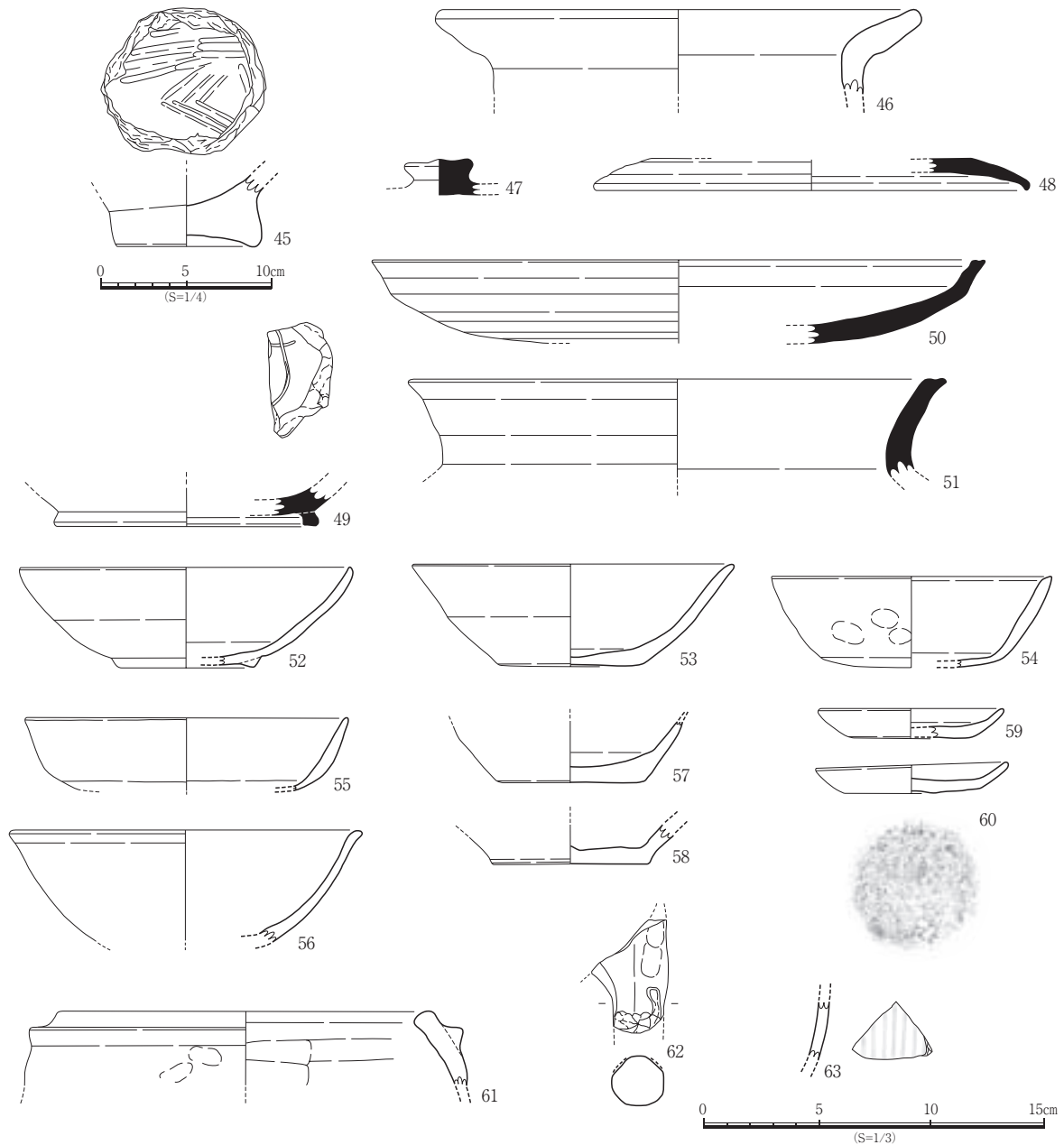


図2-8 第IV層出土遺物実測図1(弥生土器・土師器・須恵器ほか)

磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒砂を含む。53は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒砂を含む。54は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。口縁部内外面と体部内面には回転ナデ、体部外面にはナデを施し、胎土には極細粒砂を含む。55は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒砂を含む。56は杯と考えられる口縁部破片で、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒砂を含む。57・58は底部破片で、いずれも磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。

59・60は小皿である。いずれも磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。60のみ底部外面に回転糸切りの痕跡が認められる。

2. 調査の概要

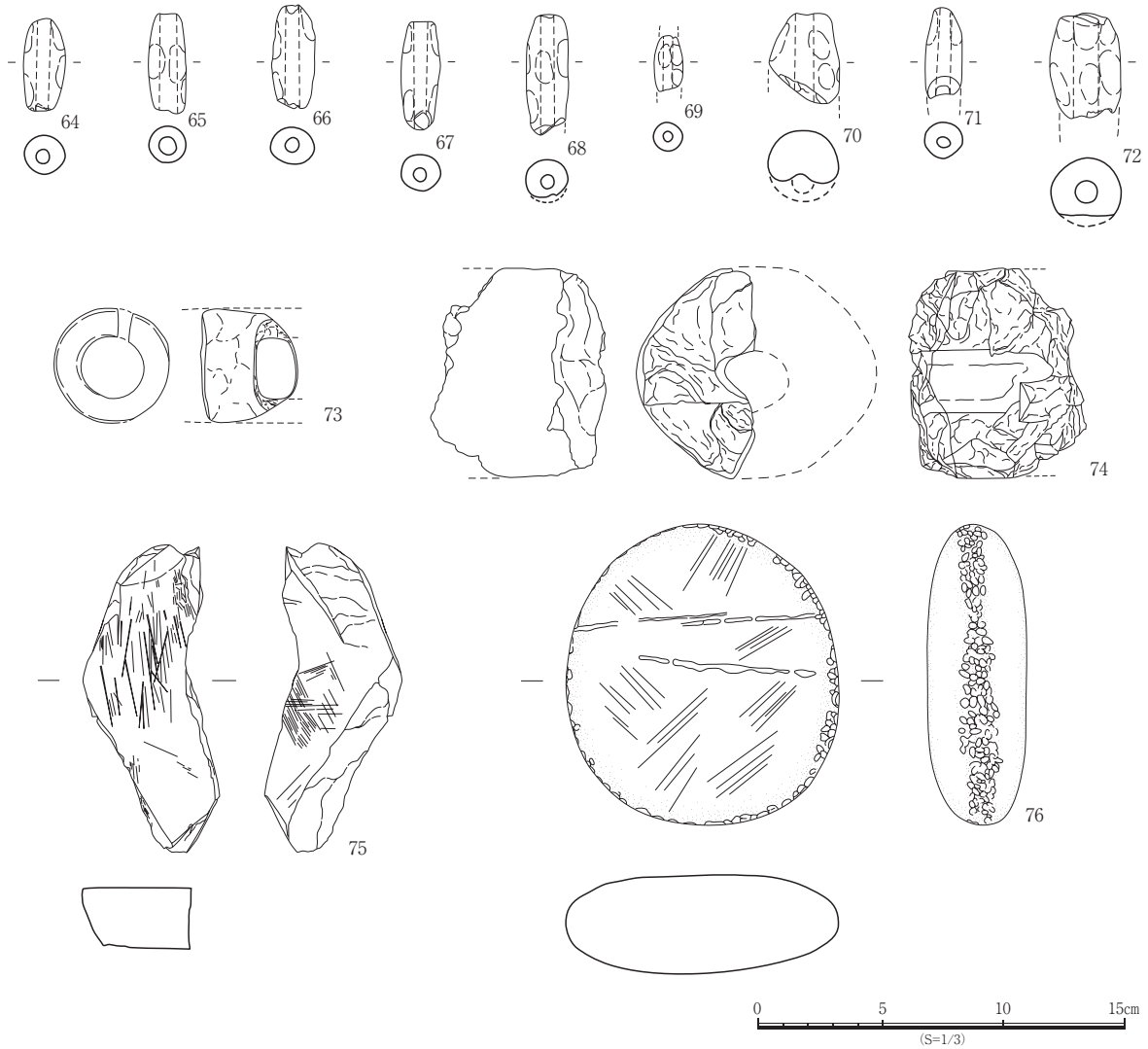


図2-9 第IV層出土遺物実測図2(土製品・石製品)

61は鍋で、口縁端部内外面に回転ナデ、体部内外面にナデを施す。外面は煤が付着し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

瓦質土器(図2-8 62)

三足鍋の脚部破片で、器面には指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂を含む。

青磁(図2-8 63)

細蓮弁文の碗で、体部の一部が残存する。器面にはオリーブ黄色の釉を施し、胎土には黒色を呈する斑文がみられる。

土製品(図2-8 64～74)

64～72は土錘で、66はほぼ完存するが、他は一部を欠損する。形状は紡錘形または楕円形を呈し、胎土には細粒～中粒砂を含む。

73は羽口とみられる破片で、磨耗が著しく調整は不明である。胎土には極細粒～細粒砂を含む。74は羽口の破片である。先端部は融解しており、黒く焼け爛れる。胎土には粗粒～小礫を含む。

石製品(図2-9 75・76)

75は砥石で、一部が欠損する。両面に使用痕が残り、石材は泥岩と考えられる。

76は叩石で、側面に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

第V層出土遺物

土師器(図2-10 77・78)

77は杯とみられる口縁部破片で、口縁端部内面に1条の沈線を配し、内外面にはヘラ磨きを密に施す。胎土には極細粒砂を含む。

78は甕の口縁部破片で、磨耗が著しく調整は不明である。胎土には中粒～粗粒砂を含む。

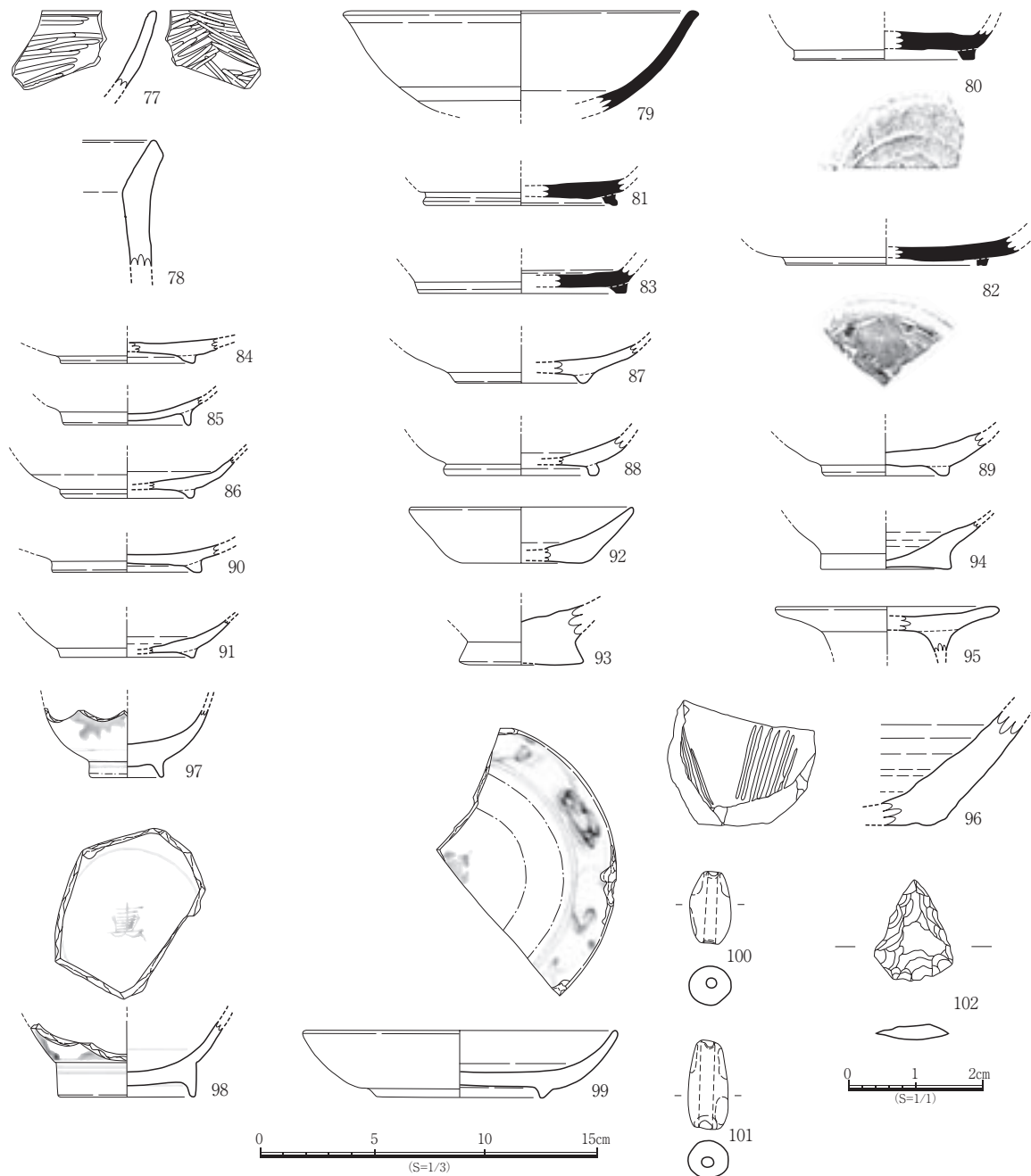


図2-10 第V層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器ほか)

2. 調査の概要

須恵器(図2-10 79~83)

いずれも杯である。79は口縁部破片で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を外反させる。内面及び口縁部外面には回転ナデ調整の後、不定方向のナデを施し、体部外面下端には回転ヘラ削りが認められる。胎土には細粒砂を含む。80~83は底部破片で、内面にナデを施す。底部切り離しは回転ヘラ切りと考えられるが、81・83はナデ消されている。82の底部外面には爪形状圧痕が認められ、胎土には極細粒砂を含む。

土師質土器(図2-10 84~95)

84~91は碗の底部破片である。いずれも断面三角形の高台が付き、磨耗が著しく調整は不明で、胎土には細粒~中粒砂を含む。

92~94は杯である。92は体部が直線的に立ち上がり、磨耗が著しく調整は不明である。胎土には極細粒砂を含む。93は柱状高台の高台部のみ残存し、磨耗が著しく調整は不明である。底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土には細粒砂を含む。94も磨耗が著しく調整は不明で、底部切り離しは回転糸切りである。胎土には極細粒砂を含む。

95は高台付きの小皿で、皿部のみ残存する。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒砂を含む。

備前焼(図2-10 96)

播鉢の底部破片で、内面は回転ナデ、外面にはナデを施し、7条単位の播り目を配する。胎土には細粒~極粗粒砂を含む。

近世陶磁器(図2-10 97)

碗で、体部が内湾して立ち上がり、畳付には砂目積みの痕跡が残る。胎土は精良であるが、赤褐色を呈する斑文がみられる。

近世磁器(図2-10 98・99)

98は碗で、口縁部内面下部に1条の圏線、見込み中央部に帆架け舟とみられる文様を配する。胎土は精良であるが、黒色を呈する斑文がみられる。

99は皿で、見込み中央部に五弁花文、口縁部内面に草花文を描く。見込みには蛇ノ目釉剥ぎがみられ、胎土は精良である。

土製品(図2-10 100・101)

いずれも土錘で、紡錘形を呈する。表面には指頭圧痕が認められ、胎土には極細粒砂を含む。

石製品(図2-10 102)

鏃で、基部を欠損する。石材は結晶片岩とみられる。

第VI層出土遺物

須恵器(図2-11 103~106)

103~105は杯である。103は口縁部破片で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや外反する。内外面とも回転ナデを施し、外面のみナデ調整を加える。内外面に火襷が認められ、胎土には極細粒砂を含む。104・105は底部破片である。104は磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、底部内面の一部に不定方向のナデ調整が残る。胎土には極細粒砂を含む。105は体部内外面に回転ナデ調整、

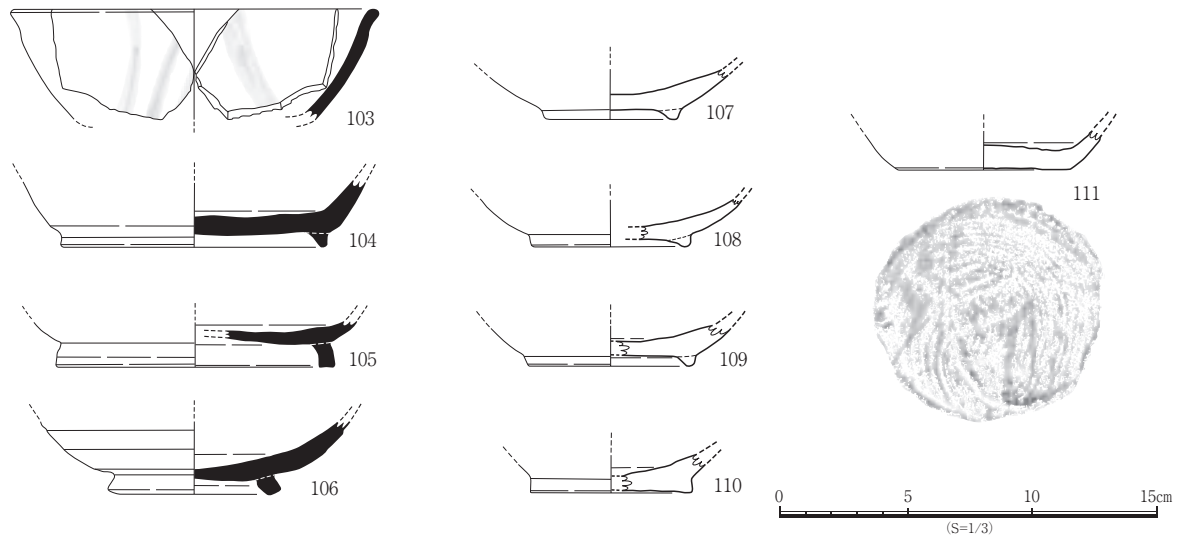


図2-11 第VI層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器)

底部内外面にナデを施し、胎土には極細粒砂を含む。

106は壺の底部破片と考えられるもので、磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、体部下端に回転ヘラ削りの痕跡が残る。胎土には極細粒砂を含む。

土師質土器(図2-11 107~111)

107~109は碗である。いずれも断面三角形の高台が付き、調整は磨耗が著しく不明である。胎土には極細粒砂を含む。

110・111は杯の底部破片である。いずれも磨耗が著しく調整は不明であるが、111は底部外面に回転糸切り痕が残る。胎土にはいずれも極細粒砂を含む。

第VII層出土遺物

弥生土器(図2-12 112)

鉢と考えられるものである。口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデを施し、体部外面には叩目が認められる。外面全体に煤が付着し、胎土には極粗粒砂~小礫を含む。

須恵器(図2-12 113~115)

113は杯身とみられる底部破片で、体部内外面及び底部内面には回転ナデを施す。底部切り離しはヘラ切りと考えられ、胎土には極細粒砂を含む。

114は高杯の脚部とみられるもので、内外面とも回転ナデを施す。胎土には極細粒砂を含む。

115は杯で、体部が内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁部内外面には回転ナデ、底部内面にはナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離し後切り離し痕をナデ消す。胎土には極細粒砂を含む。

瓦器(図2-12 116・117)

いずれも碗である。116は在地の模倣瓦器碗と考えられるもので、体部が内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にはヘラ磨きを施し、体部外面下端には指頭圧痕が残る。胎土には極細粒砂を含む。117は口縁部破片で、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面には指頭圧痕が残り、胎土には極細粒砂

2. 調査の概要

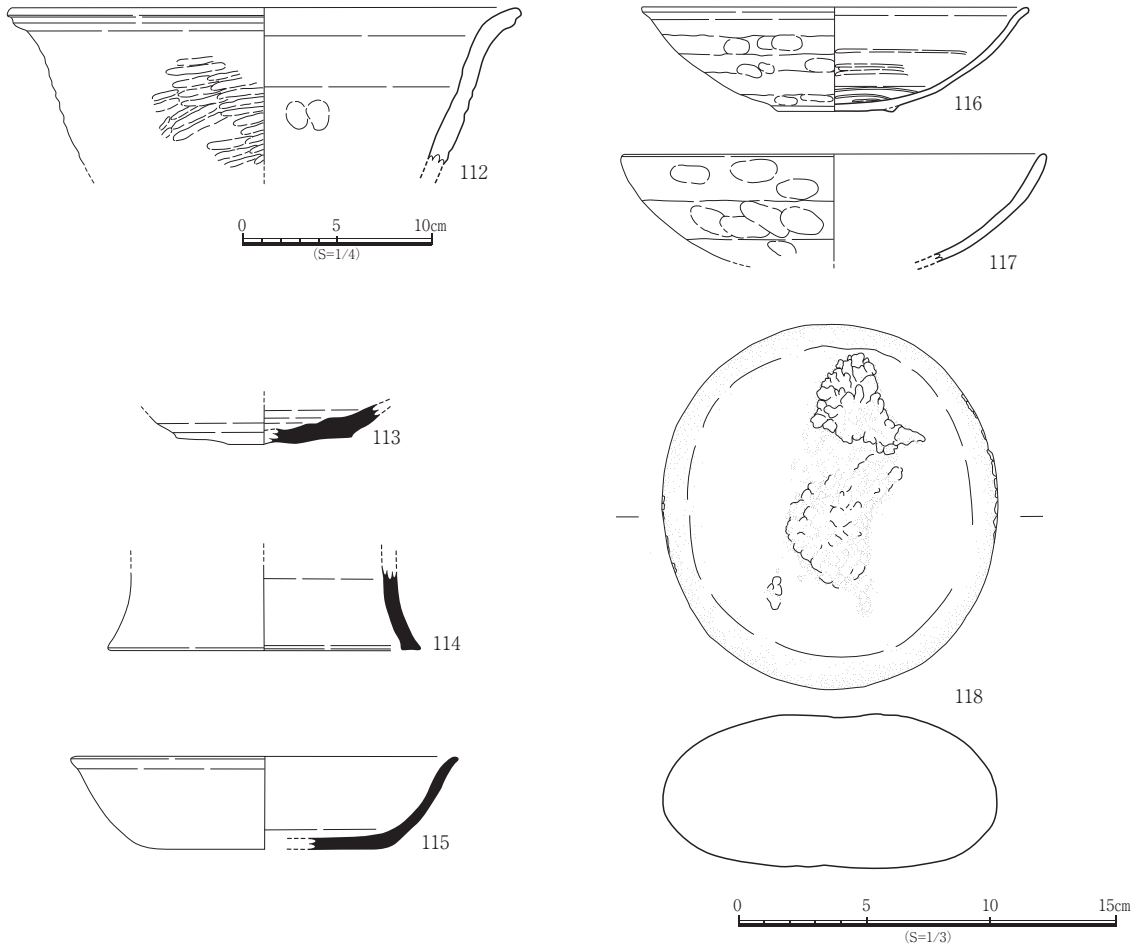


図2-12 第Ⅶ層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・瓦器ほか)

を含む。

石製品(図2-12 118)

叩石で、両面及び側面の一部に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

第Ⅷ層出土遺物

弥生土器(図2-13 119)

甕とみられる底部破片である。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面には指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

土師質土器(図2-13 120・121)

いずれも杯で、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。磨耗が著しく調整は不明で、120の内面にはタールが付着する。胎土には極細粒～細粒砂を含む。

東播系須恵器(図2-13 122)

捏鉢の口縁部破片で、内外面とも回転ナデを施す。口縁端部は肥厚し、上下に拡張される。胎土には極細粒砂を含む。

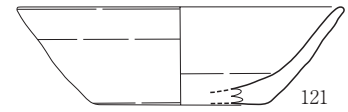
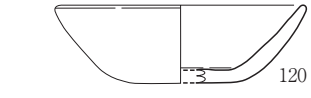
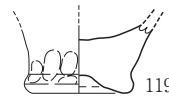
土製品(図2-13 123)

土錘で、ほぼ完存する。紡錘形を呈し、表面には指頭圧痕が残る。胎土には極細粒砂を含む。

第Ⅸ層出土遺物

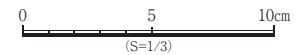
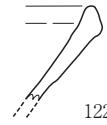
弥生土器(図2-14 124)

高杯の脚部破片で、杯部と脚端部が欠損する。磨耗が著しく調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を含む。



土師器(図2-14 125)

甕の口縁部破片で、磨耗が著しく調整は不明である。外面の一部に煤が付着し、胎土には細粒～極粗粒砂を含む。



須恵器(図2-14 126)

杯で、口縁部内外面に回転ナデ調整、底部内面には 図2-13 第VIII層出土遺物実測図(弥生土器ほか) ナデを施し、底部切り離しは回転ヘラ切りである。高台内には爪形状圧痕が残り、胎土には極細粒砂を含む。

土師質土器(図2-14 127～130)

いずれも杯である。127は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。128～130は底部破片で、128は柱状高台である。いずれも磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。

瓦器(図2-14 131～133)

131・132は碗である。131は在地の模倣瓦器碗とみられるもので、体部は内湾して立ち上がる。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面の一部にナデ調整と指頭圧痕が残る。胎土には極細粒砂を含む。132は口縁部破片である。口縁端部内面に1条の沈線を巡らし、内面にはヘラ磨きを密に施す。胎土には極細粒砂を含む。

133は小皿で、口縁端部にヨコナデを施す。底部内面に緻密なヘラ磨きを施し、胎土には極細粒砂を含む。

白磁(図2-14 134)

碗である。口縁端部は玉縁状を呈し、胎土には黒色を呈する斑文がみられる。

瓦質土器(図2-14 135～140)

いずれも鍋である。135は磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、口縁端部外面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残る。外面には煤が付着しており、胎土には粗粒砂～小礫を含む。136は外面及び口縁端部内面に回転ナデ、胴部内面にナデを施し、胎土には極細粒砂を含む。137は磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残る。外面には被熱痕がみられ、胎土には極細粒砂を含む。138は胴部破片で、磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面の一部にヨコナデ調整が残る。外面には煤が付着し、胎土には極細粒砂を含む。139・140は三足鍋の脚部破片である。いずれも外面に煤が付着し、胎土には極細粒砂を含む。

東播系須恵器(図2-14 141)

片口鉢とみられるもので、口縁端部を上下に拡張する。内外面に回転ナデを施し、外面に3条の沈線を巡らす。胎土には極細粒砂を含む。

2. 調査の概要

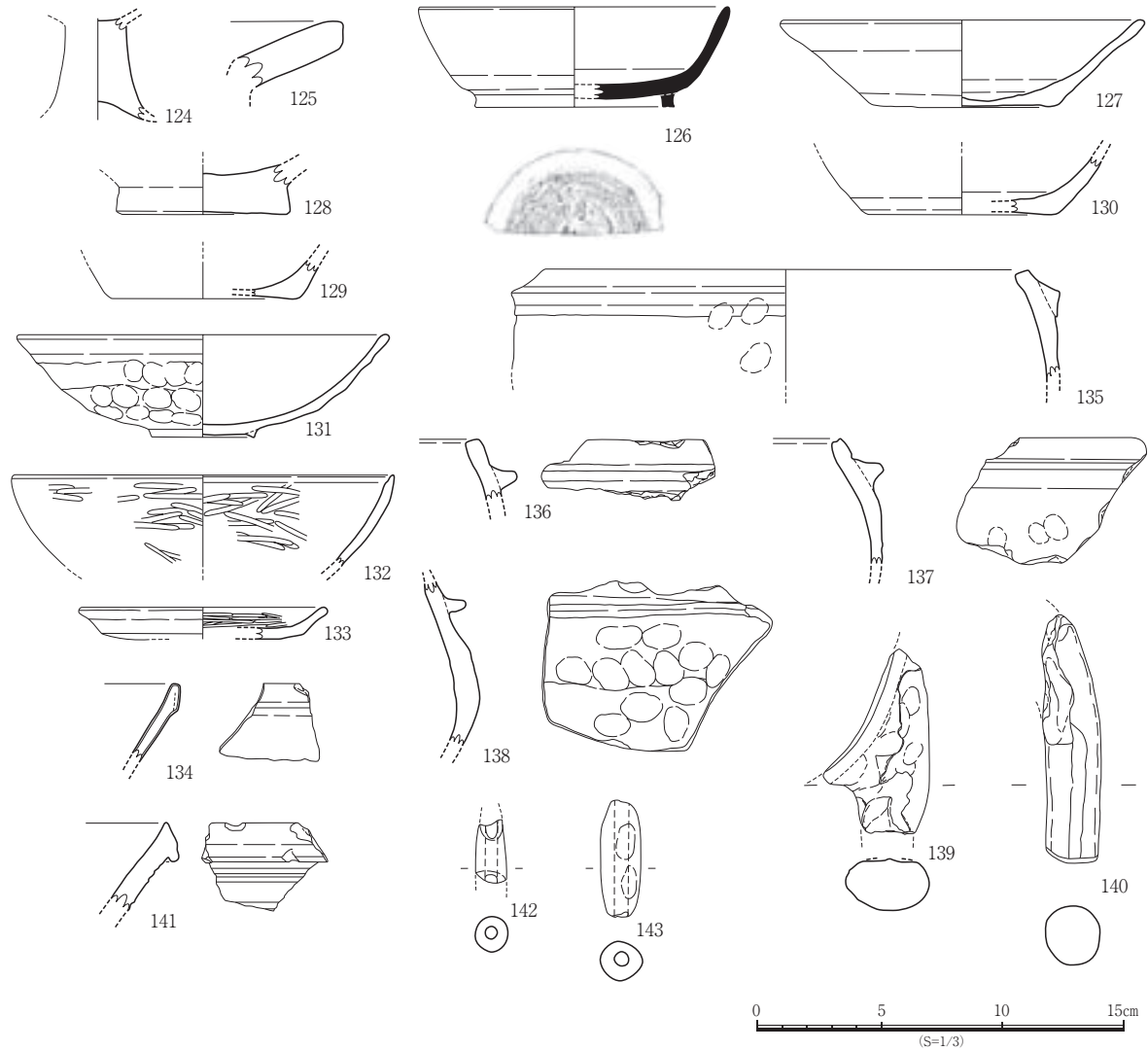


図2-14 第Ⅸ層出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器ほか)

土製品(図2-14 142・143)

いずれも土錘である。142は両端を欠損し、143はほぼ完存する。表面には指頭圧痕が残り、胎土には極細粒砂を含む。

第Ⅹ層出土遺物

須恵器(図2-15 144～152)

144は杯蓋で、内面及び口縁部外面には回転ナデを施し、切り離しは回転ヘラ切りである。胎土には極細粒砂を含む。

145～147は杯身である。145・146は内面及び体部外面に回転ナデを施し、体部下端にはヘラ削りが認められる。切り離しは回転ヘラ切りであるが、146はヘラ切り痕をナデ消す。いずれも胎土には極細粒砂を含む。147は底部破片で、内外面とも回転ナデを施し、切り離しはヘラ切りである。胎土には極細粒砂を含む。

148は蓋の口縁部破片で、口縁部内外面に回転ナデ、天井部外面に回転ヘラ削りを施す。天井部内面にはナデ調整とヘラ磨きがみられる。胎土には極細粒砂を含む。

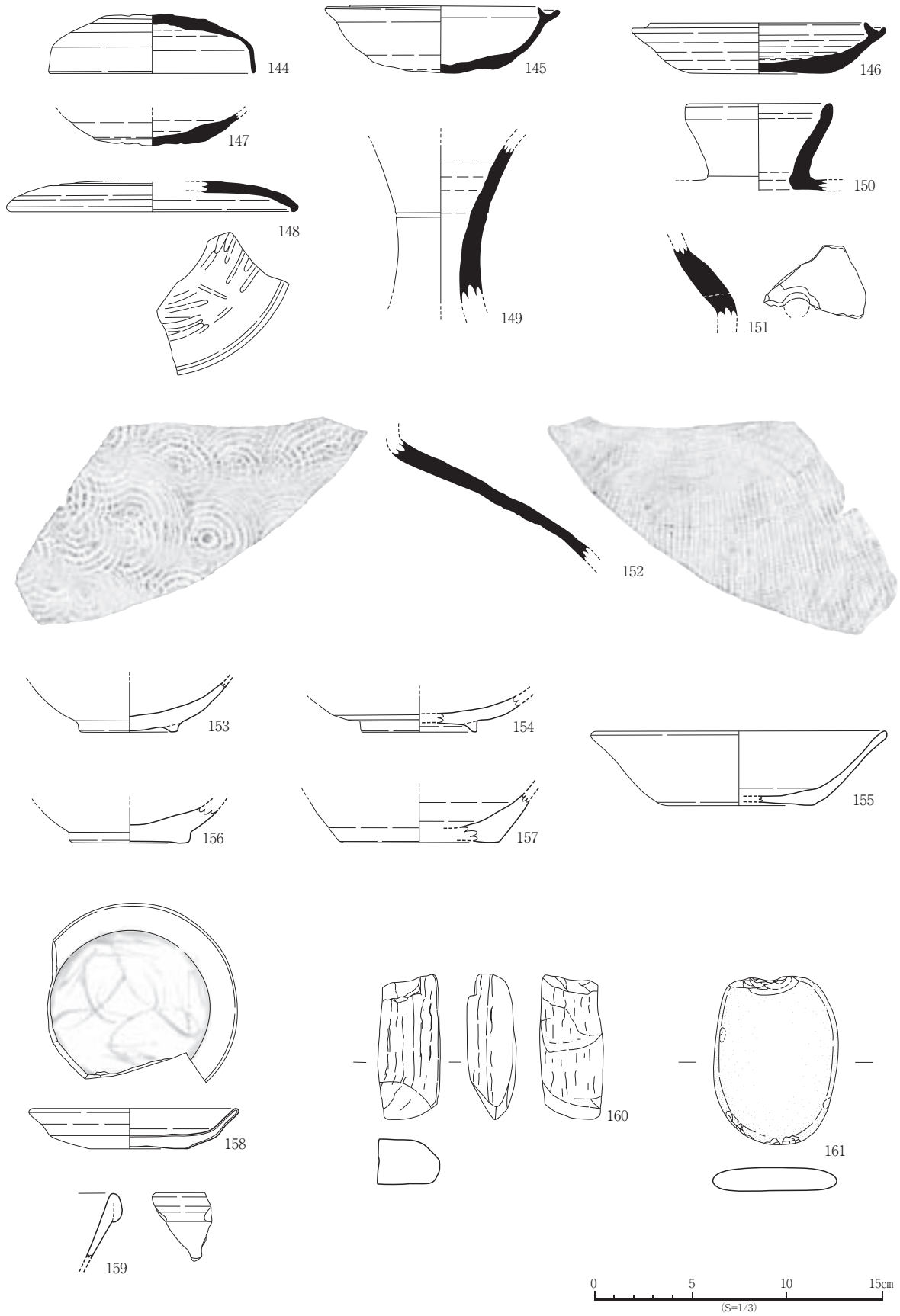


図2-15 第X層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器・青磁ほか)

3. 遺構と遺物

149は長頸壺の頸部とみられる破片で、内外面とも回転ナデを施し、中程に1条の沈線を配する。胎土には細粒砂を含む。

150は瓶とみられる口縁部破片で、内外面とも回転ナデを施す。胎土には極細粒砂を含む。

151は甕とみられる肩部破片で、内外面とも回転ナデを施す。下端には孔を穿ち、胎土には極細粒砂を含む。

152は甕の肩部とみられる破片である。外面下半にはタタキを施し、その後全面に回転カキ目が認められる。内面には同心円文のタタキを施した後、一部ナデ調整がみられる。胎土には極細粒砂を含む。

土師質土器(図2-15 153~157)

153・154は椀である。いずれも底部破片で、底部には断面三角形の高台が付く。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、154は外面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残り、胎土には極細粒砂を含む。

155~157は杯である。155は体部が直線的に立ち上がり、内外面とも磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、一部に回転ナデ調整の痕跡が残る。底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土には極細粒砂を含む。156・157は底部破片で、磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、157は内面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残る。いずれも底部切り離しは回転糸切りとみられ、胎土には極細粒砂を含む。

青磁(図2-15 158)

皿で、内面にはヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を施す。器面には灰オリーブ色の釉を施し、胎土は精良である。

白磁(図2-15 159)

碗の口縁部破片で、口縁端部は玉縁状を呈する。器面には灰白色の釉を施し、胎土には黒色を呈する斑文がみられる。

石製品(図2-15 160・161)

160は磨製石斧で、片側と基部を欠損する。刃部に使用痕は認められず、石材は砂質片岩と考えられる。

161は叩石で、側面に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代

谷状地形の底で検出された不整形の遺構を溜池状遺構として報告する。

溜池状遺構

SX-1(図2-16)

調査区中央部で検出した不整形の溜池状遺構で、

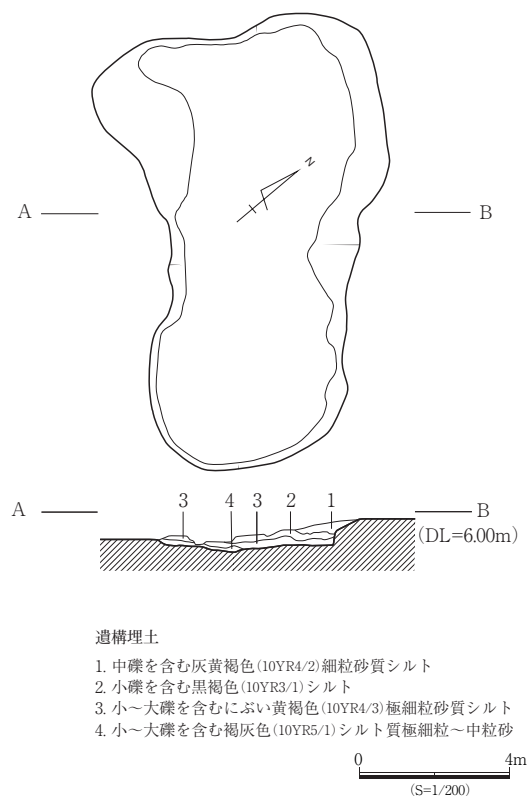


図2-16 SX-1

長辺 12.12 ~ 12.96m, 短辺 5.19 ~ 7.62m, 深さ 54 cmを測り, 長軸方向はN - 49° - Eを示す。埋土は1層が中礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト, 2層が小礫を含む黒褐色(10YR3/1)シルト, 3層が小~大礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂質シルト, 4層が小~大礫を含む褐灰色(10YR5/1)シルト質極細粒~中粒砂であった。断面は不整形の舟底状を呈し, 出土遺物には弥生土器395点, 石製品2点がみられ, 弥生土器3点(162~164)が図示できた。

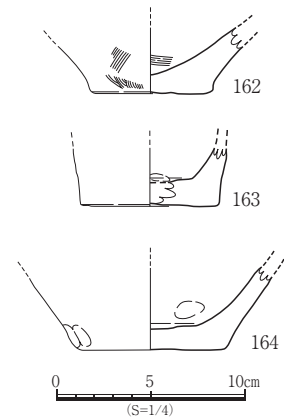


図2-17 SX-1出土遺物実測図

出土遺物

弥生土器(図2-17 162~164)

162~164は甕の底部破片である。162は磨耗が著しく調整は不明瞭であるが, 部分的にハケ調整の痕跡が残り, 胎土には粗粒砂~小礫を含む。163・164は磨耗が著しく調整は不明で, 胎土には粗粒砂~小礫を含む。

(2) 古代

隅丸方形の柱穴で構成された掘立柱建物跡3棟, 土坑4基, 溝跡3条などを検出した。

掘立柱建物跡

調査区中央部から東部にかけて隅丸方形の柱穴で構成された建物跡3棟を復元できた。後世の地形改変によって一部削平されているものもあり, 遺存状態は不良である。重複するものがみられ, 時期の違いが想定される。

SB-1(図2-18)

調査区中央部で確認した桁行2間(3.75~3.90m), 梁行2間(2.90~3.30m)と歪みのある掘立柱建物跡である。棟方向はN-35°-Eで, 柱間寸法は桁行1.20m(4尺)と1.35m(4.5尺), 梁行1.50m(5尺)と1.65m(5.5尺)である。柱穴は径0.53~1.04mの隅丸方形及び楕円形で, 埋土は小礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器33点, 土師器7点, 須恵器3点がみられ, 土師器1点(165)が図示できた。

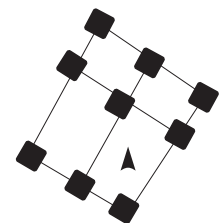


図2-18 SB-1

出土遺物

土師器(図2-21 165)

甕の口縁部破片で, 肩部からくの字状をなし, 口縁端部を外傾させ細く仕上げる。調整は磨耗が著しく不明で, 胎土には極細粒砂を含む。

SB-2(図2-19)

調査区東部で確認した桁行3間(7.20m), 梁行2間(3.90m)の掘立柱建物跡である。棟方向はN-32°-Eで, 柱間寸法は桁行1.80m(6尺), 梁行1.95m(6.5尺)である。柱穴は径0.78~0.98mの隅丸方形で, 埋土は小礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)極細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器13点, 土師器90点, 須恵器9点がみられ, 土師器2点(166・

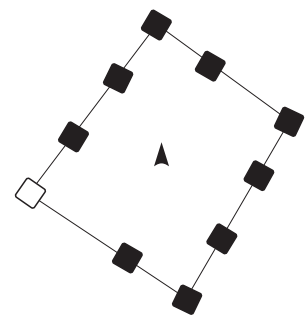


図2-19 SB-2

3. 遺構と遺物

167), 須恵器1点(168)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-21 166・167)

166は皿で, 調整は磨耗が著しく不明瞭であるが, 口縁部内外面に回転ナデ調整の痕跡が残り, 底部切り離しはヘラ切りとみられる。胎土には極細粒~細粒砂を含む。167は甕で, 口縁部外面にはヨコナデ調整, 体部外面にはハケ調整が認められる。胎土には細粒~粗粒砂を含む。

須恵器(図2-21 168)

杯で, 内外面とも回転ナデを施す。外面には自然釉がかかり, 胎土には極細粒砂を含む。

SB-3(図2-20)

調査区東部で確認した桁行2間以上, 梁行2間(3.60m)と考えられる掘立柱建物跡である。棟方向はN-28°-Wで, 柱間寸法は梁行1.80m(6尺)である。柱穴は長辺0.87~0.96m, 短辺0.71~0.84mの隅丸長方形で, 埋土は小礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)極細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器9点, 土師器27点, 須恵器2点がみられ, 須恵器1点(169)が図示できた。

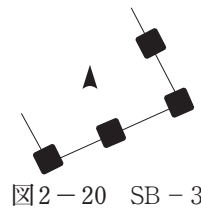


図2-20 SB-3

出土遺物

須恵器(図2-21 169)

杯で, 内外面とも回転ナデを施し, 胎土には極細粒砂を含む。

土坑

4基を土坑として報告しているが, 後世の削平を受けており全般に遺存状態は良くない。

SK-1

調査区北西部で検出した不整形の土坑で, 長辺1.24m, 短辺0.98m, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-14°-Eを示す。床面で柱穴3個を検出した。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小~中礫を含む黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトで, 出土遺物は皆無であった。

SK-2

調査区北西部で検出した不整形の土坑で, 長辺1.78m, 短辺1.14m, 深さ3cmを測り, 長軸方向はN-58°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し, 埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルトで,

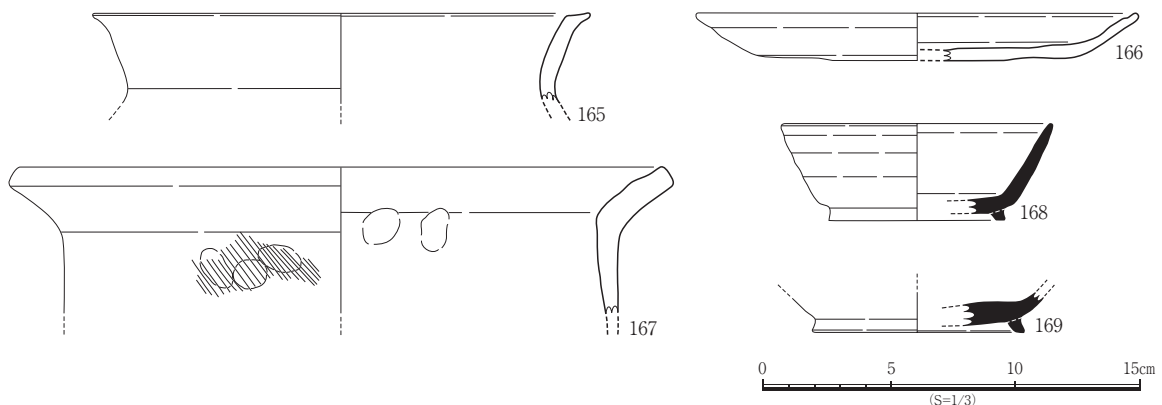


図2-21 SB-1~3出土遺物実測図

出土遺物は皆無であった。

SK-3

調査区北西部で検出した不整形の土坑で、長辺 1.69m、短辺 1.12m、深さ 2cm を測り、長軸方向は N-27°-W を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 中粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器 29 点、土師器 2 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-4

調査区北西部で検出した不整形の土坑で、長辺 1.79m、短辺 1.68m、深さ 3cm を測り、長軸方向は N-25°-E を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む炭化物混じりの黒褐色 (10YR3/1) 細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

溝跡

3 条を溝跡として報告しているが、後世の削平を受けており全般に遺存状態は良くない。

SD-1

調査区北西部で検出した南北溝跡 (N-40°-W) で、幅 0.25～0.32m、深さ 5～6cm を測り、基底面は南 (4.111m) から北 (3.997m) に傾斜し、2.60m を検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 中粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器 2 点、土師器 2 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-2

調査区北西部で検出した東西溝跡 (N-53°-W) で、幅 0.34～0.41m、深さ 8～14cm を測り、基底面は東 (4.143m) から西 (3.973m) に傾斜し、1.90m を検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器 1 点、土師器 1 点、須恵器 1 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-3

調査区北西部で検出した南北溝跡 (N-41°-W) で、幅 0.34～0.51m、深さ 6～8cm を測り、基底面は南 (4.353m) から北 (3.998m) に傾斜し、4.60m を検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む黒褐色 (10YR3/1) 細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 2 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

(3) 中世

調査区中央部から北部を中心に掘立柱建物跡 15 棟、塀・柵列跡 3 列、土坑 21 基、溝跡 19 条などを検出した。

掘立柱建物跡

15 棟を復元した。SB-4・7・8・9・11 は完掘しているが、他の掘立柱建物跡は後世の削平を受けているものや調査区外に続くもので、全体像は推測の域ででない。

SB-4 (図 2-22)

調査区北部で確認した桁行 3 間 (3.90m)、梁行 2 間 (3.40～3.60m) の総柱建物に下屋が付く、東西 3 間 (3.90m)、南北 3 間 (4.40m) の南北棟建物で、棟方向は N-37°

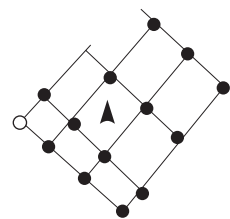


図 2-22 SB-4

3. 遺構と遺物

-Eである。SB-5と重なる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20～1.65m, 梁行(東西)が1.65～1.80m, 下屋の出が0.8～0.95mで、柱穴は径25～45cmの円形、埋土は炭化物混じりののび黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器3点, 瓦質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-5 (図2-23)

調査区北部で確認した桁行1間以上, 梁行2間(3.60m)の南北棟建物と考えられるもので、大部分は調査区外へ続く。棟方向はN-41°-Eで、SB-4と重なる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.65～1.80m, 梁行(東西)が1.80mを測る。柱穴は径20～40cmの円形、埋土は炭化物混じりののび黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

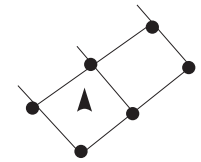


図2-23 SB-5

SB-6 (図2-24)

調査区北部で確認した桁行1間以上, 梁行2間(3.90m)の南北棟建物と考えられるもので、大部分は調査区外へ続く。棟方向はN-37°-Eである。柱間寸法は、梁行(東西)が1.95mであった。柱穴は径25～40cmの円形、埋土は炭化物混じりののび黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

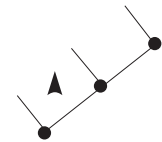


図2-24 SB-6

SB-7 (図2-25)

調査区北部で確認した桁行2間(3.90m), 梁行2間(2.70m)の南北棟建物で、棟方向はN-38°-Eである。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80～2.10m, 梁行(東西)が1.20～1.50mであった。柱穴は径25～50cmの円形、埋土は炭化物混じりののび黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器4点, 手づくね土器1点がみられ、手づくね土器(170)が図示できた。

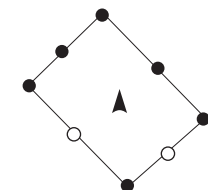


図2-25 SB-7

出土遺物

手づくね土器(図2-26 170)

小皿で、ほぼ完存する。器壁は薄く、体部は口縁部に向かって内湾して立ち上がる。調整は磨耗が著しく不明であるが、部分的に指頭圧痕が残る。胎土には極細粒砂を含む。

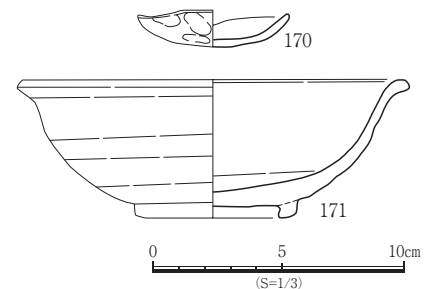


図2-26 SB-7・9出土遺物実測図

SB-8 (図2-27)

調査区北部で確認した桁行4間(6.90～7.45m), 梁行3間(4.25～4.70m)の南北棟建物で、棟方向はN-4°-Wである。SB-9と重なる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35～2.10m, 梁行(東西)が1.20～1.95mであった。柱穴は径30～65cmの円形、埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器60点, 瓦器8点, 瓦質土器4点, 備前焼2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

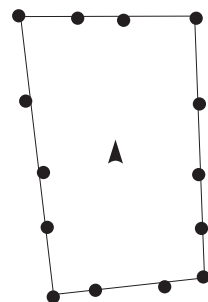


図2-27 SB-8

SB-9 (図2-28)

調査区北部で確認した桁行3間(7.60～7.75m), 梁行3間(5.65～5.80m)の東西棟

建物で、棟方向はN-54°-Wである。SB-8と重なる。柱間寸法は、桁行(東西)が1.95~2.25m, 梁行(南北)が1.95~2.10mであった。柱穴は径25~50cmの円形, 埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)細粒~中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器3点, 土師質土器39点, 瓦器6点, 白磁1点, 備前焼1点がみられ, 土師質土器1点(171)が図示できた。

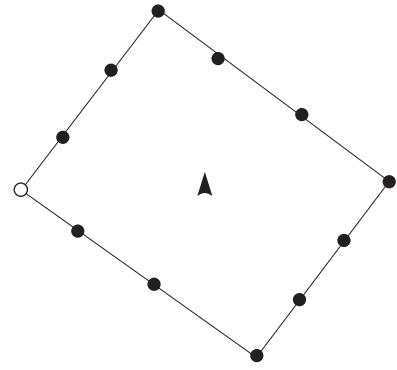


図2-28 SB-9

出土遺物

土師質土器(図2-26 171)

椀で、口縁部の一部が欠損するが、ほぼ完存する。体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ端部を丸く仕上げる。調整は内外面とも回転ナデとみられ、外面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残る。胎土には極細粒砂を含む。

SB-10(図2-29)

調査区北部で確認した桁行2間以上, 梁行2間(4.80m)の東西棟建物と考えられるもので、棟方向はN-86°-Wである。柱間寸法は、桁行(東西)が2.25m, 梁行(南北)が2.40mであった。柱穴は径20~40cmの円形, 埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器17点, 瓦質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

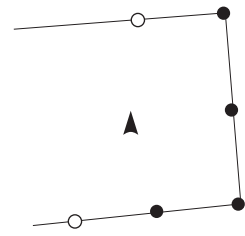


図2-29 SB-10

SB-11(図2-30)

調査区東部で確認した桁行3間(5.65~6.05m), 梁行2間(4.80m)の南北棟建物で、棟方向はN-37°-Eである。SB-12・13と重なる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.85~2.10m, 梁行(東西)が2.10~2.70mであった。柱穴は径30~60cmの円形, 埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒~粗粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点, 土師器4点, 須恵器1点, 土師質土器28点, 土製品1点がみられ, 土製品(172)が図示できた。

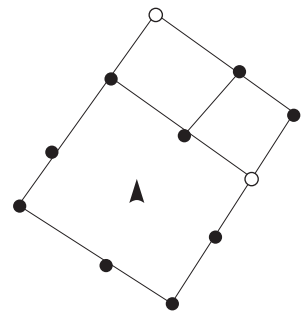


図2-30 SB-11

出土遺物

土製品(図2-32 172)

土錘で、ほぼ完存する。紡錘形を呈し、調整は磨耗が著しく不明である。胎土には極細粒砂を含む。

SB-12(図2-31)

調査区東部で確認した桁行2間以上, 梁行2間以上と考えられる建物で、後世の削平によって西側が残存していない。SB-11・13と重なる。柱間寸法は、東西が1.65m, 南北が2.10mであった。柱穴は径25~55cmの円形, 埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒~粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器11点, 須恵器2点, 土師質土器57点, 瓦器1点, 瓦質土器2点, 土製品1点がみられ, 土製品(173)が図示できた。

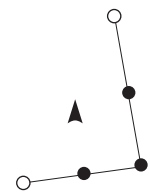


図2-31 SB-12

3. 遺構と遺物

出土遺物

土製品(図2-32 173)

土錘で、片側が欠損する。紡錘形を呈し、調整は磨耗が著しく不明である。胎土には極細粒～細粒砂を含む。

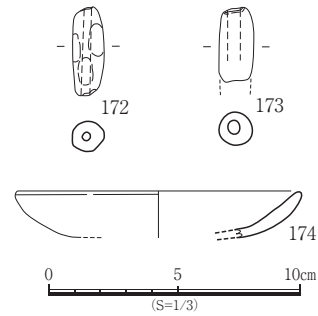


図2-32 SB-11・12・14出土遺物実測図

SB-13(図2-33)

調査区東部で確認した桁行2間以上、梁行2間以上と考えられる建物で、後世の削平によって西側が残存していない。SB-12と重なる。柱間寸法は、東西が2.35m、南北が1.65～2.25mであった。柱穴は径30～55cmの円形、埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

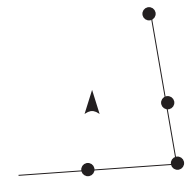


図2-33 SB-13

SB-14(図2-34)

調査区東部で確認した桁行3間以上、梁行2間以上の東西棟と考えられる建物で、東側は調査区外に続く。棟方向はN-54°-Eで、SB-15・16と重なる。柱間寸法は桁行(東西)が2.10～2.40m、梁行(南北)が1.65～1.80mであった。柱穴は径25～50cmの円形、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられ、土師質土器1点(174)が図示できた。

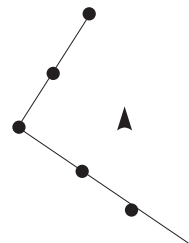


図2-34 SB-14

出土遺物

土師質土器(図2-32 174)

小皿で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は細く仕上げる。磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。

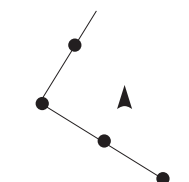


図2-35 SB-15

SB-15(図2-35)

調査区東部で確認した桁行2間以上、梁行2間以上と考えられる建物で、東側は調査区外に続き、SB-14・16と重なる。柱間寸法は南北が1.95m、東西が1.80～1.95mであった。柱穴は径30～55cmの円形、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

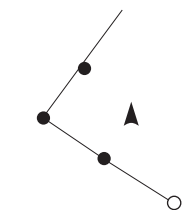


図2-36 SB-16

SB-16(図2-36)

調査区東部で確認した桁行2間以上、梁行2間以上と考えられる建物で、東側は調査区外に続き、SB-14・15と重なる。柱間寸法は南北が1.80m、東西が2.10mであった。柱穴は径30～60cmの円形、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

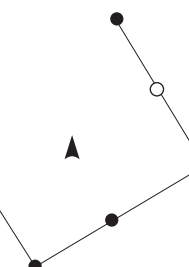


図2-37 SB-17

SB-17(図2-37)

調査区中央部で確認した桁行2間以上、梁行2間の南北棟と考えられる建物で、北側は後世の削平により残存していない。棟方向はN-32°-Wである。

柱間寸法は桁行(南北)が2.40～2.70m, 梁行(東西)が2.25mであった。柱穴は径25～50cmの円形, 埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒砂であった。出土遺物には土師質土器6点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SB-18 (図2-38)

調査区北西部で確認した桁行2間以上, 梁行2間以上と考えられる建物で, 西側は後世の削平により残存していない。柱間寸法は南北が1.95～2.10m, 東西が2.10mであった。柱穴は径25～60cmの円形, 埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

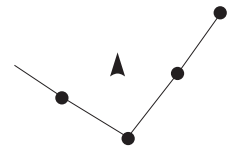


図2-38 SB-18

堀・柵列跡

3列を復元した。SA-3は位置関係からSB-17に関連するものと考えられる。

SA-1 (図2-39)

調査区東部で確認した南北堀(N-36°-W)で, SB-12・13の南西側に位置する。3間分(3.40m)を検出し, 柱間は0.90～1.50mである。柱穴は径20～40cmの円形, 埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には石製品1点がみられ, 石製品(175)が図示できた。

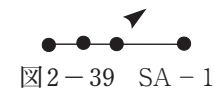


図2-39 SA-1

出土遺物

石製品(図2-40 175)

砥石で, ほぼ完存する。3面に使用痕がみられ, 石材は砂岩である。

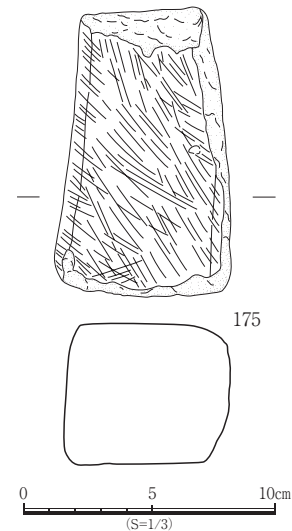


図2-40 SA-1出土遺物実測図

SA-2 (図2-41)

調査区東部で確認した南北堀(N-37°-W)で, SB-12・13の南西側に位置する。3間分(3.30m)を検出し, 柱間は0.90～1.05mである。柱穴は径20～30cmの円形, 埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトで, 出土遺物は皆無であった。



図2-41 SA-2

SA-3 (図2-42)

調査区中央部で確認した東西堀(N-60°-W)で, SB-14の南側に位置する。3間分(7.10m)を検出し, 柱間は2.10～2.85mである。柱穴は径30～55cmの円形, 埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒砂であった。出土遺物には土師質土器4点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。



図2-42 SA-3

土坑

21基を土坑として報告しているが, 後世の削平を受けているものが多く, 全般に遺存状態は良くない。

SK-5

調査区北部で検出した不整形の土坑で, SK-26に切られ, 西側は調査区外に続く。長辺1.34m,

3. 遺構と遺物

短辺 0.89m, 深さ 14 cmを測り, 長軸方向はN-52°-Eを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒~中粒砂質シルトで, 出土遺物は皆無であった。

SK-6

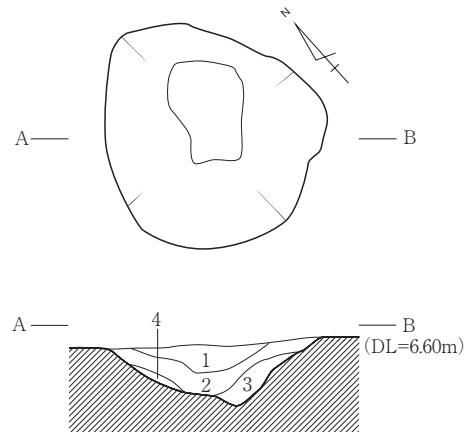
調査区北東部で検出した不整形の土坑で, 長辺 1.28m, 短辺 0.94m, 深さ 29cmを測り, 長軸方向はN-70°-Eを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土はにぶい灰黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで, 出土遺物は皆無であった。

SK-7

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で, 長径 1.41m, 短径 1.18m, 深さ 40 cmを測り, 長軸方向はN-76°-Eを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで, 出土遺物は皆無であった。

SK-8 (図2-43)

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で, 長辺 2.06m, 短辺 1.82m, 深さ 77cmを測り, 長軸方向はN-3°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は 1層が明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質細粒砂, 2層が黒褐色(10YR3/1)シルト質極細粒~中粒砂, 3層が小礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)シルト質極細粒~中粒砂, 4層が小礫を含む褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂で, 出土遺物は皆無であった。



- 遺構埋土
1. 明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質細粒砂
 2. 黒褐色(10YR3/1)シルト質極細粒~中粒砂
 3. 小礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)シルト質極細粒~中粒砂
 4. 小礫を含む褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂

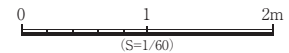


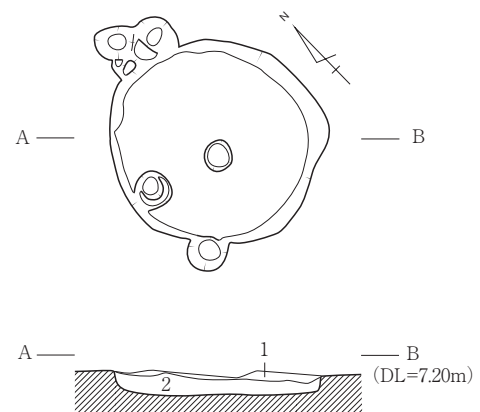
図2-43 SK-8

SK-9 (図2-44)

調査区北東部で検出した円形の土坑で, 多数の柱穴に切られる。長径 1.84m, 短径 1.63m, 深さ 19cmを測り, 長軸方向はN-6°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は 1層が炭化物混じりの灰黄褐色(10YR6/2)シルト質細粒砂, 2層が炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒~粗粒砂で, 出土遺物には土師器2点, 須恵器9点, 土師質土器17点, 瓦質土器2点, 青磁1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-10

調査区中央部で検出した円形の土坑で, 多数の柱穴に切られ, 後世の削平により東部分は残存していない。長径 2.11m, 深さ 5cmを測り, 短径は不明である。長軸方向はN-10°-Wを示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂質シルトで, 出土遺物には須恵器2点, 土師質土器22点, 瓦質土器3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 炭化物混じりの灰黄褐色(10YR6/2)シルト質細粒砂
 2. 炭化物混じりの黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒~粗粒砂

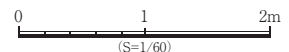


図2-44 SK-9

SK-11

調査区東部で検出した隅丸方形の土坑で、柱穴に切られる。長辺0.89m、短辺0.77m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-31°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が小礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト、2層が小礫を多く含む灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-12

調査区東部で検出した楕円形の土坑で、多数の柱穴に切られる。長径1.24m、短径1.08m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-66°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が小礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト、2層が小礫を含む褐色(10YR4/4)中粒~粗粒砂質シルト、3層がマンガン粒を多く含む暗灰黄色(10YR6/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器8点、土師質土器62点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-13

調査区東部で検出した隅丸長方形の土坑で、長辺1.73m、短辺0.89m、深さ35cmを測り、長軸方向はN-46°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は褐色(10YR4/4)細粒~中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器1点、須恵器1点、土師質土器6点がみられ、土師質土器2点(176・177)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-45 176・177)

176は椀で、体部下半にはヘラ削りとみられる痕跡が残る。胎土には極細粒砂を含む。177は杯で、外底面はやや窪み、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられるが、調整は磨耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りと考えられ、胎土には極細粒砂を含む。

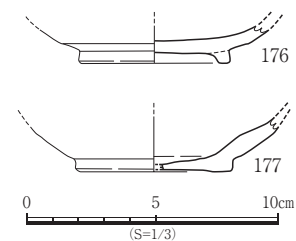


図2-45 SK-13出土遺物実測図

SK-14

調査区東部で検出した楕円形の土坑で、多くの柱穴に切られる。長径1.92m、短径0.73m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-32°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR6/2)細粒~中粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-15 (図2-46)

調査区東部で検出した円形の土坑で、多くの柱穴に切られる。長径1.26m、短径1.19m、深さ36cmを測り、長軸方向はN-69°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む炭化物混じりの黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-16

調査区東部で検出した不整楕円形の土坑で、柱穴に切られる。長

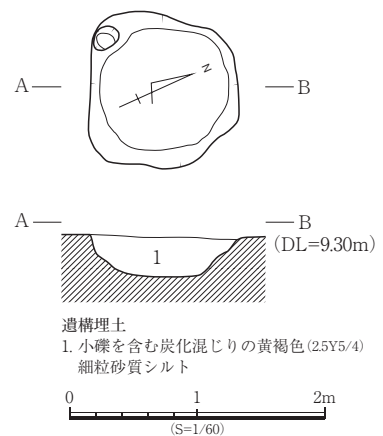


図2-46 SK-15

3. 遺構と遺物

径 1.17m, 短径 0.84m, 深さ 11cm を測り, 長軸方向は N-73°-W を示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒~粗粒砂質シルトで, 出土遺物には須恵器 1 点, 土師質土器 13 点, 瓦質土器 1 点, 石製品 1 点が

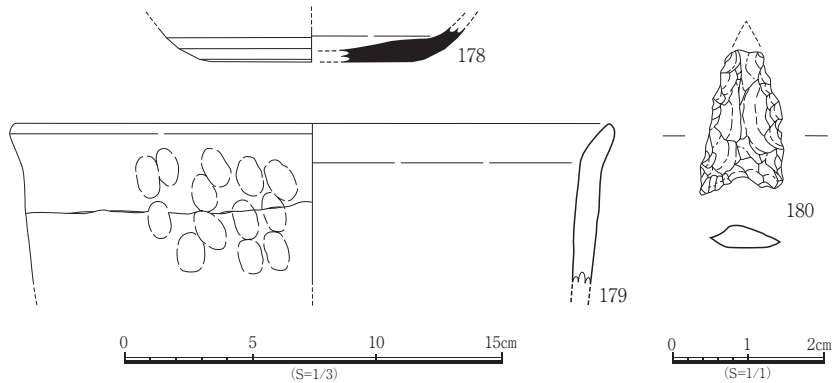


図2-47 SK-16 出土遺物実測図

みられ, 須恵器(178), 瓦質土器(179), 石製品(180)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-47 178)

杯で, 体部は殆ど残存しない。体部内面に回転ナデ, 外面に回転ヘラ削りを施す。底部切り離しはヘラ切りとみられ, 板状圧痕が残る。胎土には極細粒砂を含む。

瓦質土器(図2-47 179)

鍋で, 調整は磨耗が著しく不明である。胎土には極細粒~細粒砂を多く含む。

石製品(図2-47 180)

鏃で, 先端部を欠損する。石材はサヌカイトとみられる。

SK-17

調査区東部で検出した楕円形の土坑で, 多数の柱穴に切られる。長径 1.13m, 短径 0.88m, 深さ 13cm を測り, 長軸方向は N-2°-E を示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで, 出土遺物には土師器 1 点, 須恵器 1 点, 土師質土器 14 点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-18

調査区東部で検出した隅丸長方形の土坑で, SK-19・20 や多数の柱穴に切られる。残存長辺 1.74m, 短辺 1.67m, 深さ 9cm を測り, 長軸方向は N-50°-W を示す。断面は舟底状を呈し, 埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトで, 出土遺物は皆無であった。

SK-19

調査区東部で検出した楕円形の土坑で, SK-18・20 や多数の柱穴に切られる。長径 1.57m, 短径 0.91m, 深さ 5cm を測り, 長軸方向は N-43°-W を示す。断面は舟底状を呈し, 埋土は褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで, 出土遺物には土師器 1 点, 須恵器 1 点がみられ, 須恵器(181)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-48 181)

杯で, 内外面とも回転ナデを施し, 底部内面は回転ナデ調整の後不定方向のナデを施す。底部切り離しはヘラ切りとみられるが, 切り離し痕をナデ消す。胎土には極細粒砂を含む。

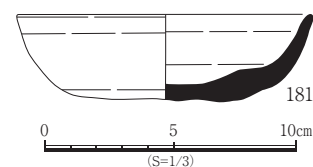
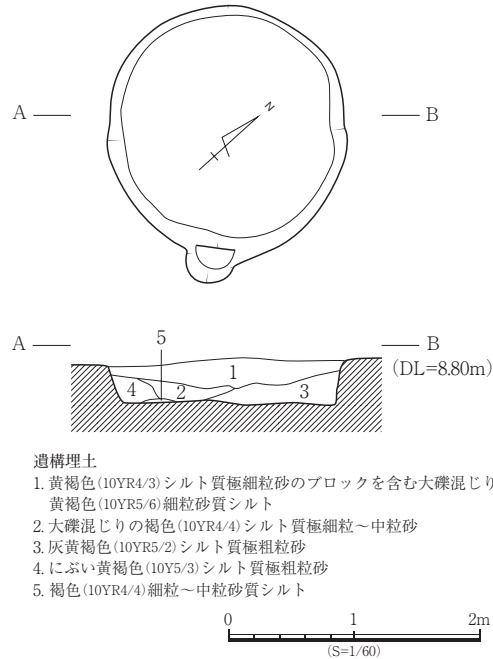


図2-48 SK-19 出土遺物実測図

SK-20 (図2-49)

調査区東部で検出した円形の土坑で、SK-18・19や多数の柱穴に切られる。長径2.03m、短径1.86m、深さ27cmを測り、長軸方向はN-41°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂のブロックを含む大礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/6)細粒砂質シルト、2層が大礫混じりの褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～中粒砂、3層が灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極粗粒砂、4層がにぶい黄褐色(10Y5/3)シルト質極粗粒砂、5層が褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物には土師器6点、須恵器3点、土師質土器139点、瓦器5点、瓦質土器2点、備前焼1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

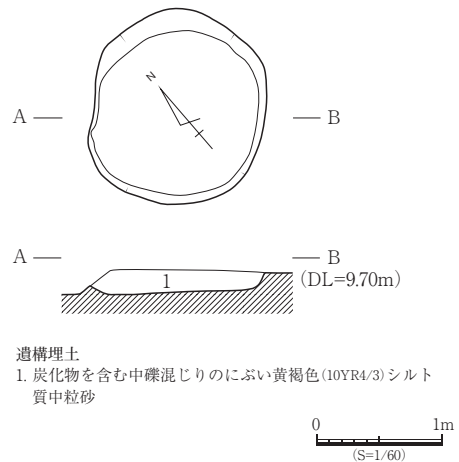


- 遺構埋土
1. 黄褐色(10YR4/3)シルト質極細粒砂のブロックを含む大礫混じりのにぶい黄褐色(10YR5/6)細粒砂質シルト
 2. 大礫混じりの褐色(10YR4/4)シルト質極細粒～中粒砂
 3. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極粗粒砂
 4. にぶい黄褐色(10Y5/3)シルト質極粗粒砂
 5. 褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂質シルト

図2-49 SK-20

SK-21 (図2-50)

調査区東部で検出した円形の土坑で、後世の地形改変により北側が切られる。残存長径1.59m、短径1.54m、深さ18cmを測り、長軸方向はN-52°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は中礫を含む炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂で、出土遺物は皆無であった。



- 遺構埋土
1. 炭化物を含む中礫混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂

図2-50 SK-21

SK-22

調査区北西部で検出した隅丸方形の土坑で、後世の地形改変により北側が切られ、北東側は調査区外へ続く。残存長辺1.94m、残存短辺1.58m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-52°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-23

調査区北西部で検出した隅丸長方形の土坑で、北東側は調査区外へ続く。残存長辺3.03m、短辺1.09m、深さ18cmを測り、長軸方向はN-57°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が小～中礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルト、2層が灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルト、3層がにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-24

調査区中央部で検出した不整楕円形の土坑で、SD-48に切られる。長径1.69m、短径1.24m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-43°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

3. 遺構と遺物

SK-25

調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、長辺0.81m、短辺0.62m、深さ5cmを測り、長軸方向はN-52°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

溝跡

19条の溝跡を検出したが、後世の削平により全般に遺存状態は良くない。SB-18を囲むように検出されたSD-21は区画溝と考えられ、当該期の遺物が多く出土している。

SD-4

調査区北部で検出した東西溝跡(N-70°-E)で、SK-27・28に切られる。幅0.41～0.45m、深さ3～10cmを測り、基底面は東(5.200m)から西(5.197m)に傾斜し、5.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-5

調査区北部で検出した東西溝跡(N-68°-E)で、西側は調査区外へ続く。幅0.18～0.24m、深さ3～4cmを測り、基底面は西(5.220m)から東(5.196m)に傾斜し、2.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-6

調査区北部で検出した南北溝跡(N-35°-W)で、北側は調査区外へ続く。幅0.43～0.64m、深さ8～17cmを測り、基底面は南(5.213m)から北(5.106m)に傾斜し、3.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-7

調査区北部で検出した南北溝跡(N-4°-E)で、幅0.43～0.80m、深さ1～20cmを測り、基底面は南(5.226m)から北(5.127m)に傾斜し、7.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器10点、瓦質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-8

調査区北部で検出した南北溝跡(N-4°-E)で、区画溝とみられる。幅0.17～0.73m、深さ2～15cmを測り、基底面は北(5.371m)から南(5.361m)に傾斜し、11.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器7点、白磁1点がみられ、白磁(182)が図示できた。

出土遺物

白磁(図2-51 182)

碗で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈する。器面には灰白色の釉を薄く施す。胎土には黒色を呈する斑文がみられる。

SD-9

調査区北部で検出した東西溝跡(N-47°-E)で、幅0.48～0.62m、深さ5～16cmを測り、基底面は

西(6.434m)から東(6.351m)に傾斜し、8.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器1点、須恵器2点、土師質土器80点、瓦質土器5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-10

調査区東部で検出した南北溝跡(N-12°-W)で、SD-30に切られる。幅0.20~0.39m、深さ6~17cmを測り、基底面は南(7.523m)から北(7.414m)に傾斜し、2.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)細粒~中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-11

調査区東部で検出した南北溝跡(N-27°-E)で、区画溝とみられる。幅0.30~0.38m、深さ7~9cmを測り、基底面は南(9.089m)から北(9.053m)に傾斜し、8.90mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-12

調査区東部で検出した東西溝跡(N-58°-E)で、東側は調査区外へ続く。幅0.20~0.39m、深さ2~5cmを測り、基底面は西(9.126m)から東(9.119m)に傾斜し、3.20mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点、瓦質土器1点、石製品1点がみられ、石製品(183)が図示できた。

出土遺物

石製品(図2-51 183)

砥石で、一部が欠損する。1面に使用痕がみられ、石材は砂岩である。

SD-13

調査区北部で検出した南北溝跡(N-34°-E)で、SD-35・36に切られる。幅0.34~0.56m、深さ2~8cmを測り、基底面は南(5.432m)から北(5.309m)に傾斜し、3.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒~粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-14

調査区東部で検出した東西溝跡(N-47°-E)で、SD-32に切られる。幅0.25~0.51m、深さ2~8cmを測り、基底面は東(9.135m)から西(9.068m)に傾斜し、3.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒~粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-15

調査区東部で検出した南北溝跡(N-32°-E)で、SD-11に切られる。幅0.42~0.49m、深さ6~7cmを測り、基底面は



図2-51 SD-8・12出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

南(9.127m)から北(9.115m)に傾斜し、4.40mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-16

調査区東部で検出した東西溝跡(N-46°-E)で、西側は調査区外へ続く。幅0.42~0.82m、深さ8~32cmを測り、基底面は東(9.072m)から西(8.505m)に傾斜し、14.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒~中粒砂であった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器1点、瓦質土器1点、備前焼1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-17 (図2-52)

調査区東部で検出した南北溝跡(N-37°-E)で、SD-16に切られる。幅0.33~0.46m、深さ2~6cmを測り、基底面は北(9.054m)から南(8.851m)に傾斜し、9.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒砂、2層が小礫を含むにぶい黄褐色(10YR6/4)シルト質極細粒砂、3層が小礫を含む炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂であった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器17点、瓦質土器3点、備前焼2点、天目茶碗1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

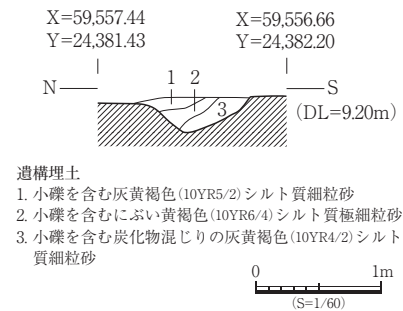


図2-52 SD-17

SD-18

調査区東部で検出した東西溝跡(N-48°-E)で、SD-19に切られる。幅0.28~0.44m、深さ6~11cmを測り、基底面は東(8.925m)から西(8.836m)に傾斜し、7.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SD-19 (図2-53)

調査区東部で検出した東西溝跡(N-65°-E)で、幅0.42~1.08m、深さ24~31cmを測り、基底面は東(8.925m)から西(8.766m)に傾斜し、10.10mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が小礫を含む炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂、2層が小礫を含む黄褐色(10YR5/6)シルト質極細粒~中粒砂、3層が灰黄褐色(10YR6/2)細粒~中粒砂であった。出土遺物には土師質土器2点、青磁1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

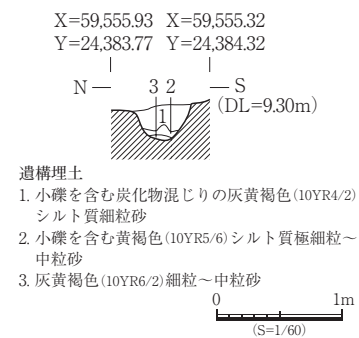


図2-53 SD-19

SD-20

調査区北西部で検出した南北溝跡(N-31°-W)で、北側は後世の削平により残存しない。幅0.61~0.74m、深さ1~13cmを測り、基底面は南(4.943m)から北(4.650m)に傾斜し、4.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小~中礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10Y3/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、土師器1点、須恵器4点、土師質土器107点、瓦器1点、瓦質土器10点がみられ、土師器(184)、瓦器(185)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-54 184)

甑とみられるもので、底部中央に孔を穿ち、体部は残存しない。胎土には極細粒砂を含む。

瓦器(図2-54 185)

碗で、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部内面には1条の沈線が巡る。体部外面にはナデ、内面及び口縁部内外面には横方向のヘラ磨きを施す。色調は内外面とも黒褐色を呈し、胎土には極細粒砂を含む。

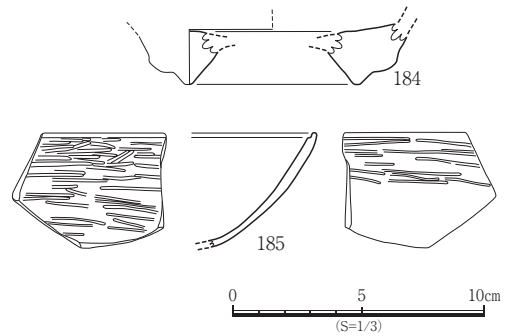


図2-54 SD-20出土遺物実測図

SD-21

調査区北西部で検出した南北溝跡(N-38°-E)で、区画溝とみられ、北側は後世の削平により残存しない。幅0.23~1.39m、深さ2~27cmを測り、基底面は南(4.924m)から北(4.626m)に傾斜し、13.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小~中礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10Y3/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点、土師器11点、須恵器14点、土師質土器829点、瓦器65点、瓦質土器7点、青磁1点がみられ、土師質土器20点(186~205)、瓦器8点(206~213)が図示できた。

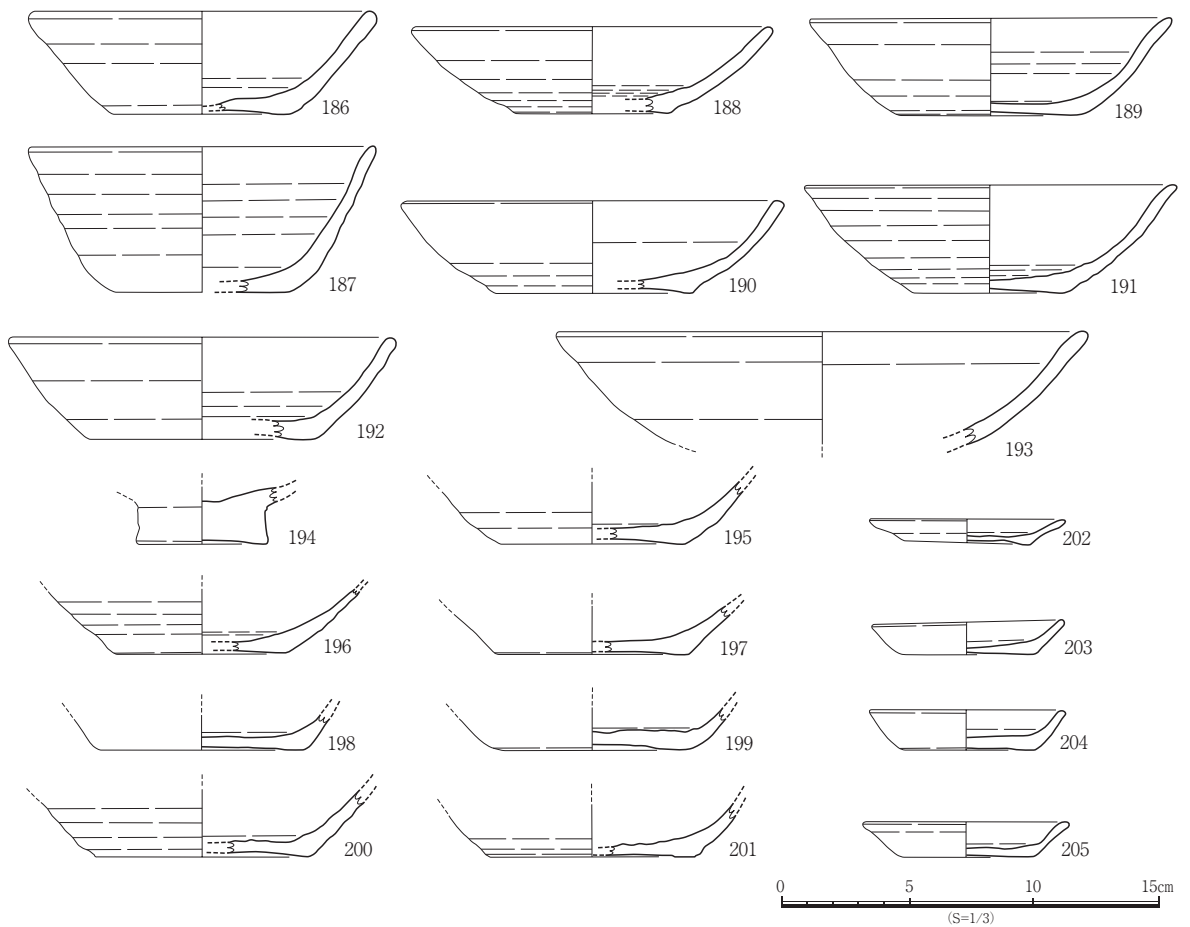


図2-55 SD-21出土遺物実測図1

出土遺物

土師質土器(図2-55 186~205)

186~201は杯である。186・187は体部が直線的に立ち上がるもので、186は口縁端部を丸く仕上げる。内外面とも回転ナデを施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には極細粒砂を含む。187は口縁端部がやや外傾する。磨耗が著しく調整不明で、胎土には細粒砂を多く含む。188~192は体部がやや内湾して立ち上がるもので、188は口縁端部を丸く仕上げる。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒砂を含む。189は口縁部が外反する。調整は磨耗が著しく不明であるが、底部外面には回転糸切り痕が残る。胎土には極細粒砂を多く含む。190は口縁端部が断面方形で、全体的に歪みが大きい。調整は磨耗が著しく不明瞭であるが、外面に回転ナデ調整の痕跡が残り、底部切り離しは回転糸切りである。胎土には極細粒砂を含む。191は口縁部が外反する。調整は磨耗が著しく不明瞭であるが、内外面に回転ナデ調整の痕跡が残る。胎土には極細粒砂を多く含む。192は口縁端部を丸く仕上げる。調整は磨耗が著しく不明瞭であるが、内面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残る。胎土には極細粒砂を含む。193は口縁部破片である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には細粒砂を多く含む。194~201は底部破片である。194は柱状高台の杯で、調整は磨耗が著しく不明である。底部切り離しは回転糸切りで、胎土には細粒砂を含む。195~197の調整・底部切り離しは磨耗が著しく不明で、胎土に極細粒砂を含む。198~200の調整も磨耗が著しく不明であるが、底部切り離しは回転糸切りである。198の胎土は中粒~粗粒砂を含み、他は極細粒砂を含む。201は内外面とも回転ナデ調整を施し、底部切り離しは回転糸切りである。胎土には極細粒砂を含む。

202~205は小皿で、205の外面に回転ナデ調整の痕跡が残るが、他は磨耗が著しく調整不明である。底部切り離しは204・205が回転糸切りで、他は磨耗が著しく不明である。203のみ胎土に細粒砂を含み、他は極細粒砂を含む。205は外面の一部にタールが付着する。

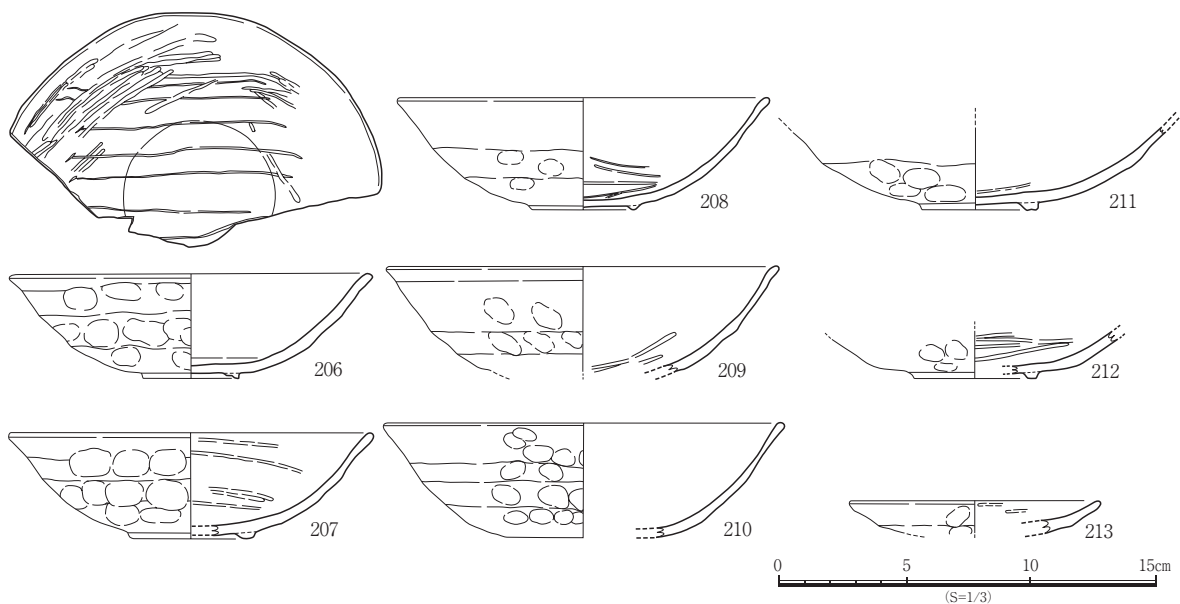


図2-56 SD-21出土遺物実測図2

瓦器(図2-56 206~213)

206~212は椀である。206は体部内面にナデとヘラ磨き、口縁部内外面にヨコナデを施し、体部外面下半には指頭圧痕が残る。底部内面には並行線状の暗文を施し、底部外面に断面三角形の高台が付く。胎土には極細粒~細粒砂を含む。207は口縁部外面にヨコナデ調整、体部外面には指頭圧痕が残る、内面には横方向のヘラ磨きを施す。底部外面には断面逆台形状の高台が付く、胎土には極細粒砂を含む。208は磨耗が著しく調整不明であるが、体部外面に指頭圧痕が残る。底部内面には暗文の一部が残る、底部外面には断面三角形状の高台が付く。胎土には極細粒砂を含む。209・210は口縁部破片である。209は体部内面にナデ、口縁部内外面にはヨコナデを施し、体部外面には指頭圧痕が残る。体部内面下端には暗文が残る、胎土には極細粒砂を含む。210は在地の模倣瓦器椀と考えられるもので、磨耗が著しく調整不明であるが、体部外面に指頭圧痕が残る。胎土には中粒~粗粒砂を含む。211・212は底部破片である。211の調整は内外面とも磨耗が著しく不明である。底部内面には暗文、外面には指頭圧痕が残る。底部外面には断面逆台形状の高台が付く、胎土には極細粒砂を含む。212は内面がナデ調整、外面には指頭圧痕が残る。底部内面には暗文が残る、底部外面には断面逆台形状の指頭圧痕が付く。胎土には極細粒~細粒砂を含む。

213は小皿の口縁部破片で、口縁部内外面がヨコナデ、口縁端部内面には横方向のヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂を含む。

SD-22(図2-57)

調査区中央部で検出した東西溝跡(N-52°-E)で、東の肩部は調査区外へ続く。幅0.64~1.31m、深さ12~81cmを測り、基底面は東(8.986m)から西(8.190m)に傾斜し、20.70mを検出した。断面は不整形の舟底状を呈し、埋土は1層がにぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂質シルト、2層が炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト、3層が小礫混じりの黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細粒砂であった。出土遺物には弥生土器5点、土師器7点、須恵器7点、土師質土器85点、瓦器1点、瓦質土器2点、白磁1点がみられ、土師質土器3点(214~216)、瓦器(217)、白磁(218)が図示できた。

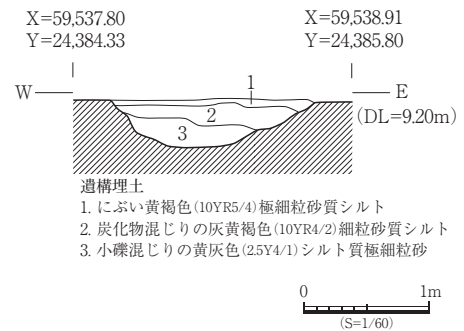


図2-57 SD-22

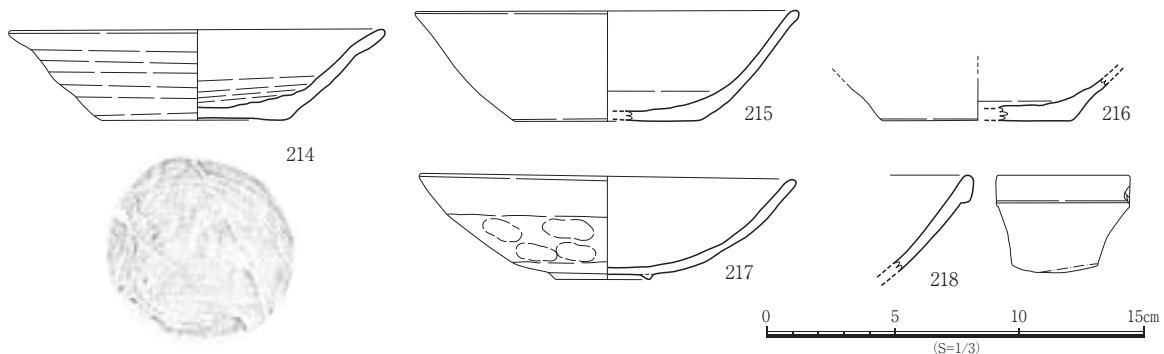


図2-58 SD-22出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

出土遺物

土師質土器(図2-58 214~216)

214~216は杯である。214は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。調整は内外面とも回転ナデ調整で、底部切り離しは回転糸切りである。胎土には極細粒~細粒砂を含む。215は体部が内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒砂を含む。216は底部破片で、調整は磨耗が著しく不明である。胎土には極細粒砂を含む。

瓦器(図2-58 217)

在地の模倣瓦器碗と考えられるもので、磨耗が著しく調整不明であるが、外面に指頭圧痕が残る。底部外面には断面三角形の高台が付き、胎土には粗粒砂を含む。

白磁(図2-58 218)

碗の口縁部破片で、口縁部が玉縁状を呈する。胎土には黒色を呈する斑文がみられる。

柱穴

本調査区では建物跡等に復元できなかったが、多数の柱穴が確認されている。ここでは、復元図示できた遺物が出土している柱穴27個を報告する。

P-1

調査区北西部で検出された柱穴である。径28cmの円形で、深さ27cmを測る。埋土は小~中礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器16点、瓦器2点がみられ、土師質土器1点(219)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-59 219)

小皿で、磨耗が著しく調整不明である。胎土には極細粒砂を含む。

P-2

調査区北西部で検出された柱穴である。径30cmの円形で、深さ30cmを測る。埋土は小~中礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師器1点、土師質土器1点、瓦器1点がみられ、土師器(220)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-59 220)

甌と考えられる口縁部破片で、磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、内面の一部にハケ調整が残る。胎土には極細粒砂を含む。

P-3

調査区北西部で検出された柱穴である。径48cmの円形で、深さ47cmを測る。埋土は小~中礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器11点がみられ、土師質土器2点(221・222)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-59 221・222)

221・222は杯である。221の調整は内外面とも回転ナデ調整、底部切り離しは回転糸切りで、底

部内面にタールが付着し、胎土には極細粒砂を含む。222は底部破片で、磨耗が著しく調整不明である。胎土には極細粒砂を含む。

P-4

調査区北西部で検出された柱穴である。径31cmの円形で、深さ7cmを測る。埋土は小～中礫を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトで、出土遺物には木製品1点がみられ、木製品(223)が図示できた。

出土遺物

木製品(図2-59 223)

柱と考えられるもので、腐食が著しく加工痕は残存しない。

P-5

調査区中央部で検出された柱穴である。径35cmの円形で、深さ12cmを測る。埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質極細粒砂で、出土遺物には土師質土器2点がみられ、土師質土器1点(224)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-60 224)

杯で、全体的に磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、底部内面に回転ナデ調整の痕跡が残る。底部切り離しは回転糸切りで、胎土には極細粒砂を含む。

P-6

調査区東部で検出された柱穴である。径24cmの円形で、深さ21cmを測る。埋土は小礫を含む炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器2点がみられ、土師質土器1点(225)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-60 225)

杯の口縁部破片で、磨耗が著しく調整不明である。胎土には極細粒砂を含む。

P-7

調査区東部で検出された柱穴である。径26cmの円形で、深さ24cmを測る。埋土は小礫を含む炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器2点がみられ、土師質土器

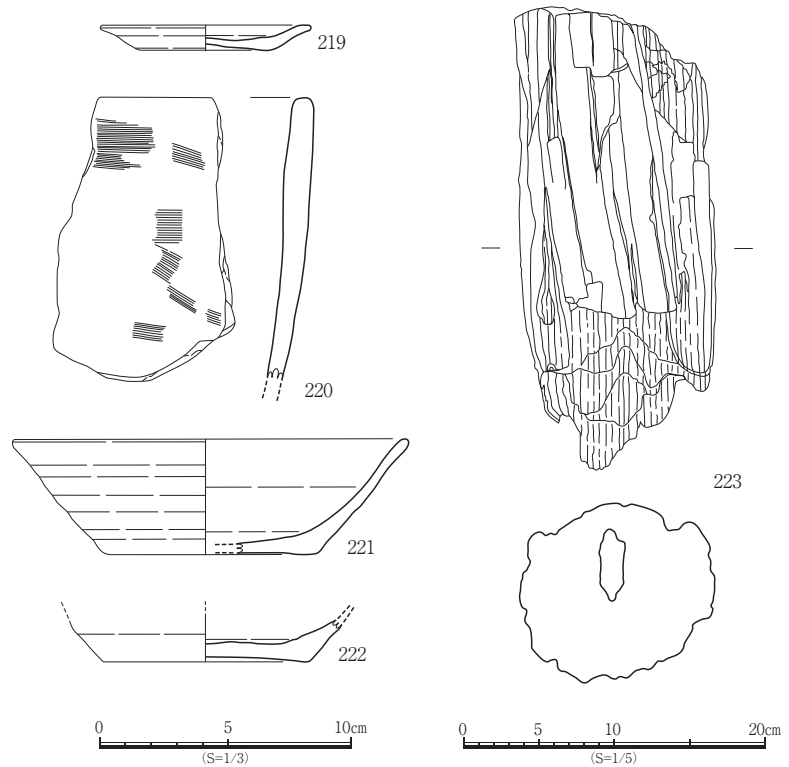


図2-59 P-1~4出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

1点(226)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-60 226)

杯の口縁部破片で、磨耗が著しく調整不明である。胎土には極細粒～細粒砂を含む。

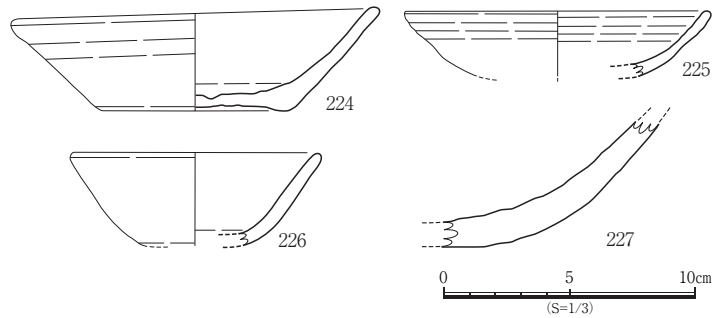


図2-60 P-5～8出土遺物実測図

P-8

調査区北部で検出された柱穴である。径41cmの円形で、深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで、出土遺物には土師器1点、土師質土器7点がみられ、土師器(227)が図示できた。

出土遺物

土師器(図2-60 227)

甕の破片で、磨耗が著しく調整不明である。胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

P-9

調査区北部で検出された柱穴である。径40cmの円形で、深さ43cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師質土器23点がみられ、土師質土器2点(228・229)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-61 228・229)

228・229は椀である。228は体部が内湾して立ち上がり、口縁端部は細く仕上げる。調整は磨耗が著しく不明で、底部外面には断面三角形の高台が付く。埋土には極細粒砂を含む。229は底部破片で、磨耗が著しく調整は不明である。底部外面には断面逆台形状の高台が付く、胎土には極細粒砂を含む。

P-10

調査区北部で検出された柱穴で、多くの柱穴に切られる。径24cmの円形で、深さ35cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器8点、青磁1点がみられ、青磁(230)が図示できた。

出土遺物

青磁(図2-61 230)

碗の口縁部破片である。龍泉窯系青磁で、外面に鎬蓮弁文を施し、胎土には黒色を呈する斑文がみられる。

P-11

調査区北部で検出された柱穴である。径32cmの円形で、深さ34cmを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで、出土遺物には土師器2点、土師質土器1点、瓦質土器1点がみられ、瓦質土器(231)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器(図2-61 231)

三足鍋の脚部破片で、外面に指頭圧痕が残る。胎土には極細粒～細粒砂を含む。

P-12

調査区北部で検出された柱穴である。径 36 cm の円形で、深さ 8 cm を測る。埋土はにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器 5 点、瓦質土器 2 点、石製品 1 点がみられ、石製品 (232) が図示できた。

出土遺物

石製品 (図2-61 232)

鎌で、先端部を欠損する。挟りは浅く、石材はサヌカイトとみられる。

P-13

調査区北部で検出された柱穴である。径 42 cm の円形で、深さ 20 cm を測る。埋土はにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器 4 点、瓦質土器 1 点がみられ、瓦質土器 (233) が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (図2-61 233)

鍋の口縁部破片で、口縁部下端に鋸が巡る。調整は磨耗が著しく不明で、胎土には極細粒～細粒砂

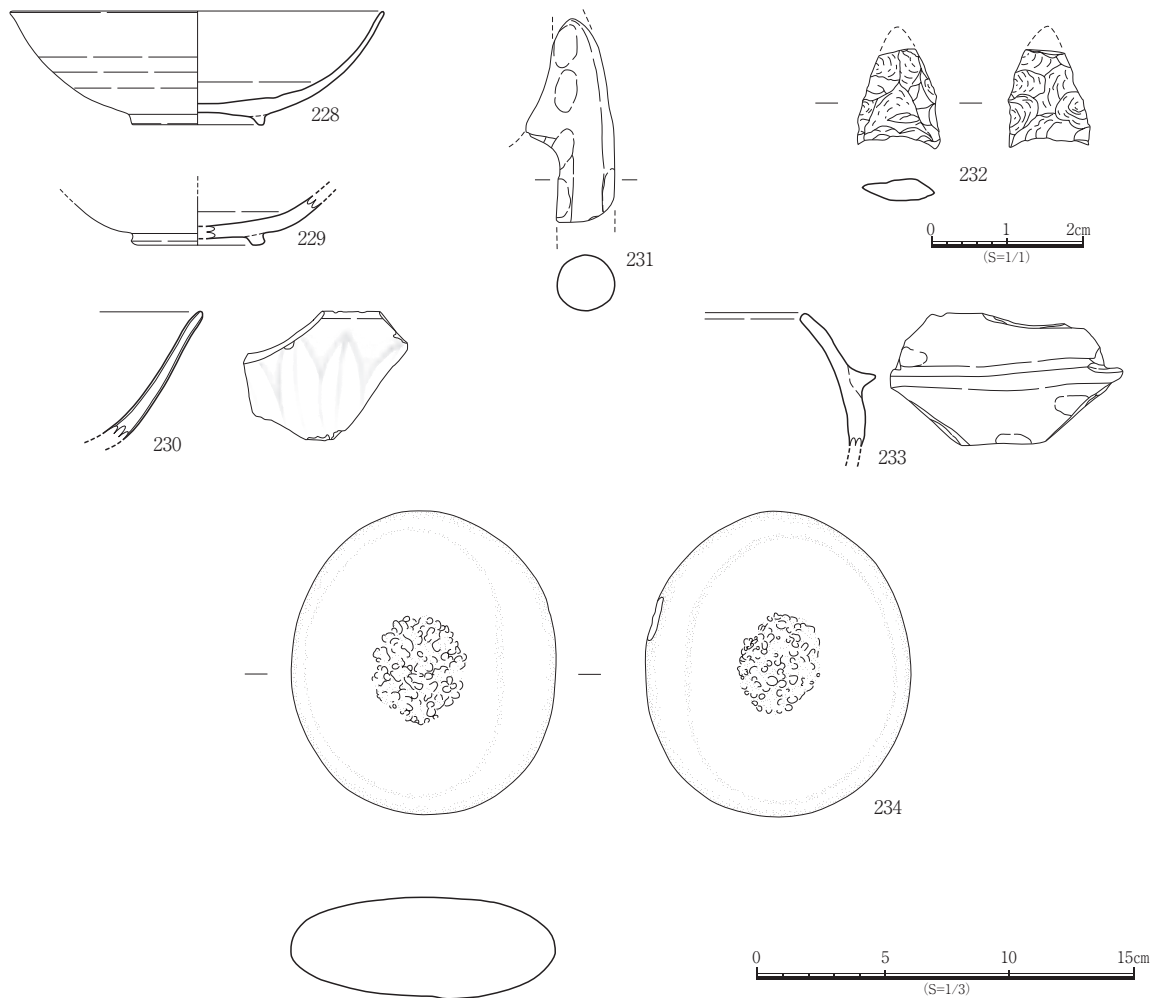


図2-61 P-9～14出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

を含む。

P-14

調査区東部で検出された柱穴である。径46cmの円形で、深さ6cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器5点、土師質土器13点、石製品1点がみられ、石製品(234)が図示できた。

出土遺物

石製品(図2-61 234)

叩石で、両平坦面に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

P-15

調査区東部で検出された柱穴である。径30cmの円形で、深さ48cmを測る。埋土は炭化物混じりの

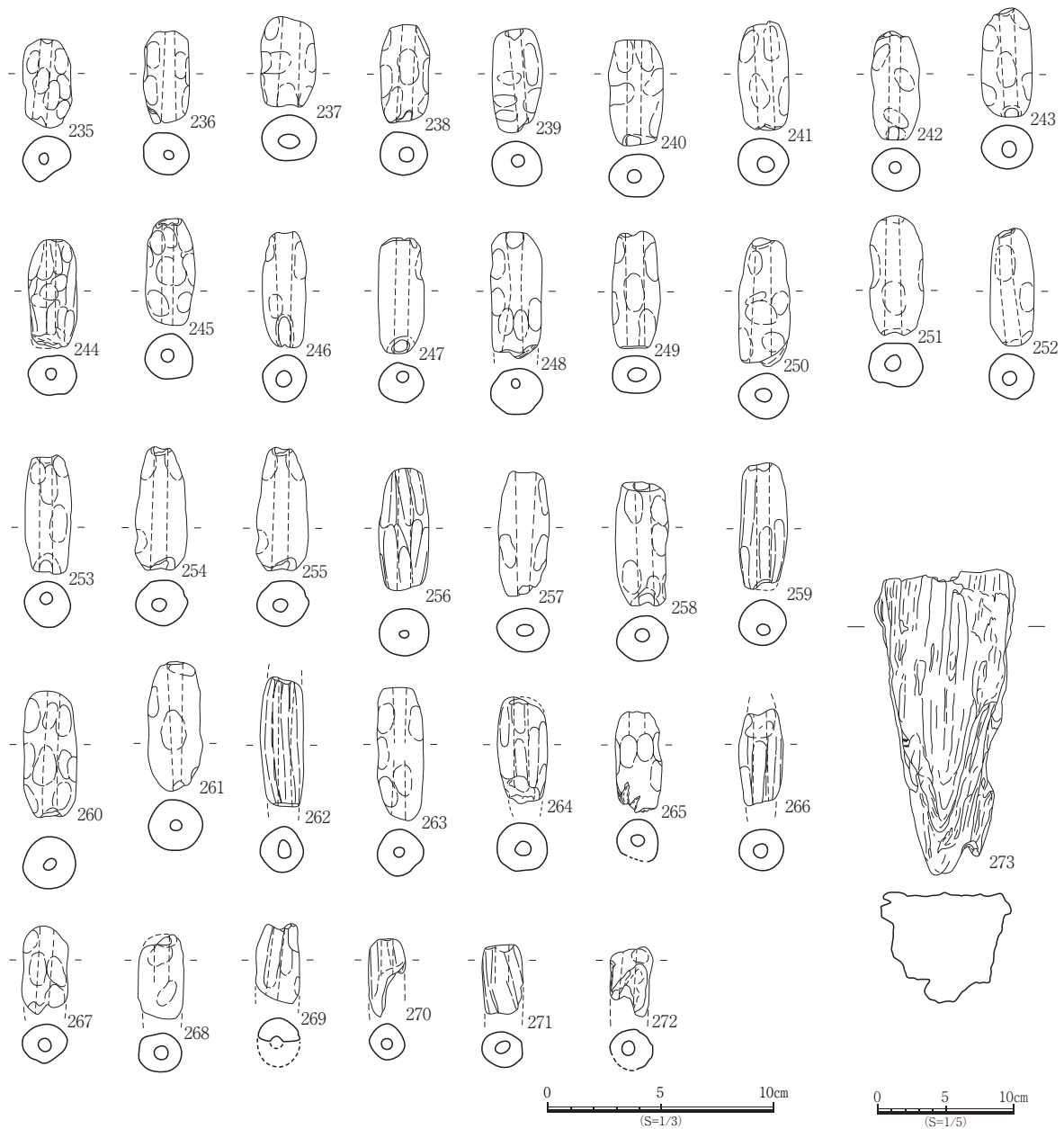


図2-62 P-15出土遺物実測図

灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器10点、瓦質土器2点、土製品38点、木製品1点がみられ、土製品38点(235～272)、木製品(273)が図示できた。

出土遺物

土製品(図2-62 235～272)

235～272は土錘で、紡錘形を呈す。235～263は完存し、調整は磨耗が著しく不明瞭であるが、表面には指頭圧痕が残る。胎土には極細粒～細粒砂を含む。264～272は一部を欠損するものである。調整は磨耗が著しく不明瞭であるが、表面には指頭圧痕が残る。胎土には極細粒～細粒砂を含む。

木製品(図2-62 273)

柱と考えられるもので、大部分を欠損する。腐食が著しく加工痕は認められない。

P-16

調査区東部で検出された柱穴で、SB-2の柱穴を切る。径30cmの円形で、深さ19cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には須恵器1点、土師質土器19点がみられ、須恵器(274)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-63 274)

蓋の天井部破片である。外面には回転ナデ、内面にはナデを施し、胎土には極細粒砂を含む。

P-17

調査区東部で検出された柱穴である。径42cmの円形で、深さ33cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師器3点、土師質土器10点、土製品1点がみられ、土製品(275)が図示できた。

出土遺物

土製品(図2-63 275)

土錘で片側を欠損する。紡錘形を呈し、磨耗が著しく調整不明瞭であるが、表面には指頭圧痕が残る。胎土には極細粒砂を含む。

P-18

調査区東部で検出された柱穴である。径32cmの円形で、深さ24cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師質土器10点、瓦器1点、瓦質土器1点がみられ、瓦質土器(276)が図示できた。

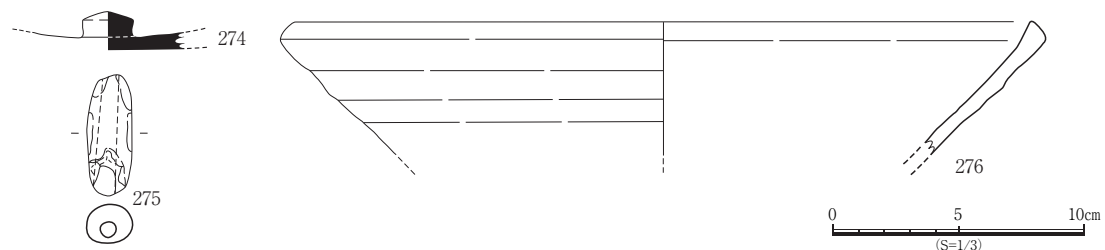


図2-63 P-16～18出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

出土遺物

瓦質土器(図2-63 276)

鉢の口縁部破片で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚する。磨耗が著しく調整不明で、胎土には細粒～粗粒砂を含む。

P-19

調査区東部で検出された柱穴である。径30cmの円形で、深さ36cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器2点がみられ、土師質土器1点(277)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-64 277)

杯で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。磨耗が著しく調整は不明であるが、底部外面には回転糸切り痕が残る。胎土には極細粒砂を含む。

P-20

調査区東部で検出された柱穴である。径38cmの円形で、深さ51cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器7点がみられ、土師質土器1点(278)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-64 278)

杯とみられるもので、大きく歪む。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。

P-21

調査区東部で検出された柱穴である。径32cmの円形で、深さ29cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器14点、瓦質土器2点がみられ、土師質土器1点(279)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-64 279)

杯とみられるもので、大きく歪む。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。

P-22

調査区東部で検出された柱穴である。径34cmの円形で、深さ26cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師器1点、土師質土器26点、瓦質土器2点、東播系須恵器1点がみられ、東播系須恵器(280)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器(図2-64 280)

捏鉢で、体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部を内側へ屈曲させる。内面にはナデ、外面には回転ナデを施し、胎土には細粒～中粒砂を含む。

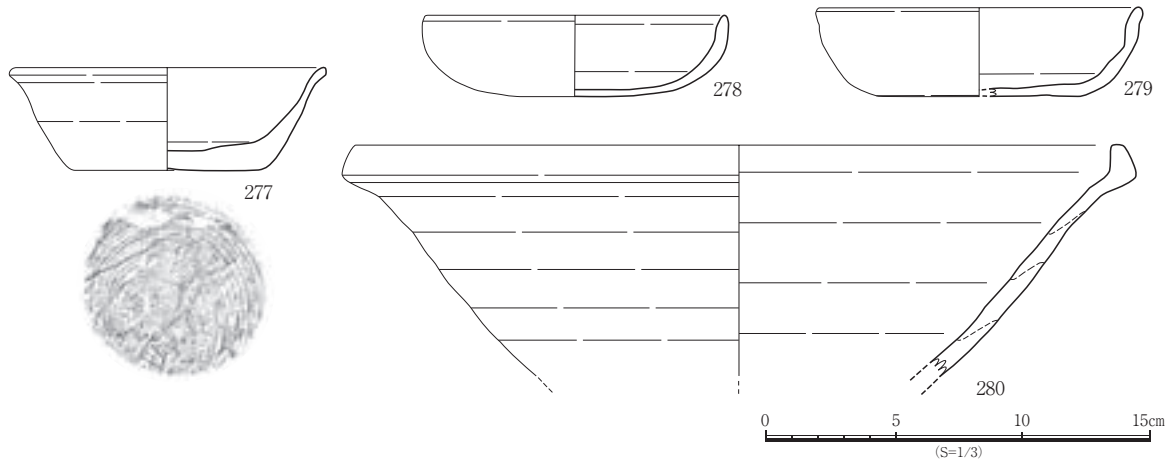


図2-64 P-19～22出土遺物実測図

P-23

調査区東部で検出された柱穴である。径26cmの円形で、深さ10cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には須恵器1点、土師質土器32点、瓦質土器2点がみられ、土師質土器2点(281・282)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-65 281・282)

281・282とも手づくねの小皿である。281は磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、底部内面にナデ調整が残り、胎土には極細粒砂を含む。282は口縁部破片で、磨耗が著しく調整は不明である。胎土には極細粒砂を含む。

P-24

調査区東部で検出された柱穴である。径38cmの円形で、深さ18cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器1点、瓦器1点、土製品1点がみられ、土製品(283)が図示できた。

出土遺物

土製品(図2-65 283)

土錘で、片側を欠損する。紡錘形を呈し、磨耗が著しく調整は不明で、胎土には極細粒砂を含む。

P-25

調査区東部で検出された柱穴である。径38cmの円形で、深さ24cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器6点、瓦質土器6点がみられ、瓦質土器1点(284)が図示できた。

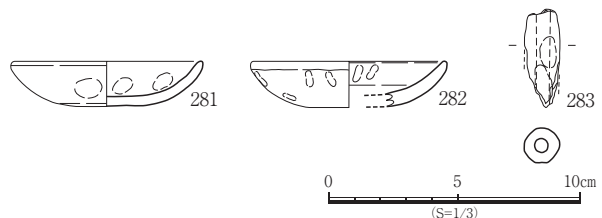


図2-65 P-23・24出土遺物実測図

出土遺物

瓦質土器(図2-66 284)

鍋の口縁部破片である。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面に指頭圧痕が残り、胎土には極

3. 遺構と遺物

細粒砂を含む。

P-26

調査区東部で検出された柱穴である。径40cmの円形で、深さ16cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には土師質土器12点、瓦器7点がみられ、土師質土器1点(285)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-66 285)

小皿で、磨耗が著しく調整は不明である。胎土には極細粒～細粒砂を含む。

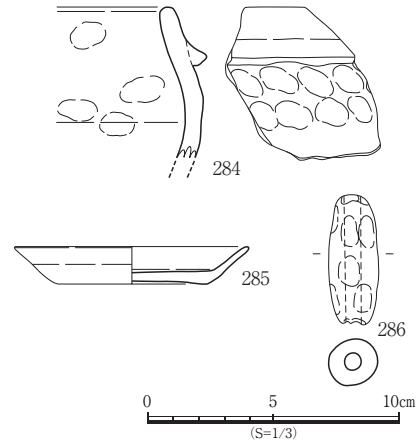


図2-66 P-25～27出土遺物実測図

P-27

調査区東部で検出された柱穴である。径42cmの円形で、深さ14cmを測る。埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器10点、土師器5点、須恵器4点、土師質土器21点、土製品1点がみられ、土製品(286)が図示できた。

出土遺物

土製品(図2-66 286)

土錘で、ほぼ完存する。紡錘形を呈し、表面には指頭圧痕が残り、胎土には極細粒砂を含む。

(4) 近世

調査区全体で掘立柱建物跡7棟、土坑36基、溝跡40条、畝状遺構7箇所などを検出した。

掘立柱建物跡

7棟を復元した。調査区全域で確認されており、当該期に集落が形成されていたことを窺わせる。

SB-19(図2-67)

調査区北部で確認した桁行2間(3.70～3.85m)、梁行2間(3.45～3.60m)と考えられる南北棟建物で、SB-6と重なる。棟方向はN-35°-Wである。柱間寸法は、桁行(南北)が1.65～1.80m、梁行(東西)が1.65～1.80mであった。柱穴は径25～40cmの円形、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

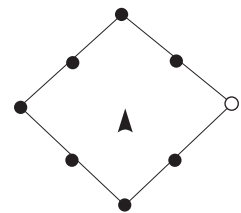


図2-67 SB-19

SB-20(図2-68)

調査区東部で確認した桁行4間(8.30～8.45m)、梁行2間(3.70～3.85m)の身舎の南側に下屋が付く、南北3間(4.60～4.75m)、東西4間(8.30～8.45m)の東西棟建物と考えられるもので、棟方向はN-50°-Wである。柱間寸法は、桁行(東西)が1.80～2.25m、梁行(南北)が1.65～1.80m、下屋の出が0.90～1.05mで、柱穴は

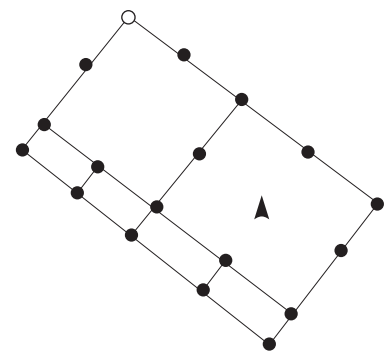


図2-68 SB-20

SB-21(図2-69)

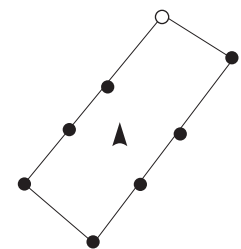


図2-69 SB-21

径 25 ～ 55 cmの円形, 埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器6点, 須恵器1点, 土師質土器46点, 瓦器2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SB-21 (図2-69)

調査区東部で確認した桁行3間 (5.95～6.10m), 梁行1間 (2.30～2.45m) と考えられる南北棟建物で, 棟方向はN-33°-Eである。柱間寸法は, 桁行 (南北) が1.35～1.80m, 梁行 (東西) が2.25～2.40mであった。柱穴は径20～35 cmの円形, 埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器7点, 土師質土器17点, 瓦質土器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

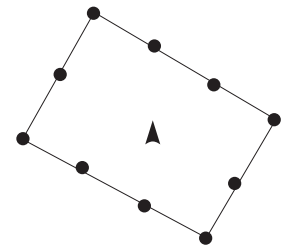


図2-70 SB-22

SB-22 (図2-70)

調査区中央部で確認した桁行3間 (5.55～5.70m), 梁行2間 (3.65～3.80m) と考えられる東西棟建物で, 棟方向はN-62°-Wである。柱間寸法は, 桁行 (東西) が1.80～2.10m, 梁行 (南北) が1.65～1.95mであった。柱穴は径25～40cmの円形, 埋土は炭化物混じりの褐灰色 (10YR4/4) 細粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点, 須恵器1点, 土師質土器7点, 白磁1点, 瓦器1点, 瓦質土器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

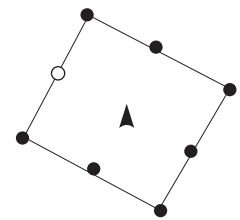


図2-71 SB-23

SB-23 (図2-71)

調査区中央部で確認した桁行2間 (4.05～4.20m), 梁行2間 (3.65～3.75m) と考えられる東西棟建物で, 棟方向はN-61°-Wである。柱間寸法は, 桁行 (東西) が2.10～2.25m, 梁行 (南北) が1.80～1.95mであった。柱穴は径30～45cmの円形, 埋土は黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点, 近世陶磁器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

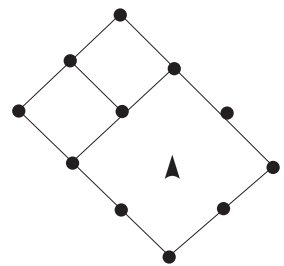


図2-72 SB-24

SB-24 (図2-72)

調査区南部で確認した桁行3間 (5.65～5.80m), 梁行2間 (3.55～3.70m) と考えられる南北棟建物で, 棟方向はN-44°-Wである。柱間寸法は, 桁行 (南北) が1.80～2.10m, 梁行 (東西) が1.65～1.80mであった。柱穴は径30～55 cmの円形, 埋土は褐灰色 (10YR4/4) 中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器1点, 土師質土器1点, 近世陶器1点がみられ, 近世陶器 (287) が図示できた。

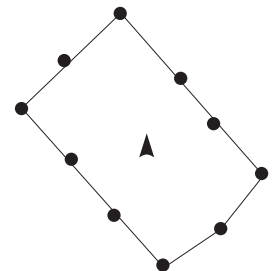


図2-73 SB-25

出土遺物

近世陶器 (図2-75 287)

皿で, 高台は削り出しである。畳付及び高台内には砂目積みの痕跡が残る。内面全体及び口縁部外面に灰オリーブ色の釉を施し, 胎土は精良である。

SB-25 (図2-73)

調査区南部で確認した桁行3間 (5.60～5.75m), 梁行2間 (3.60～3.75m) と考えら

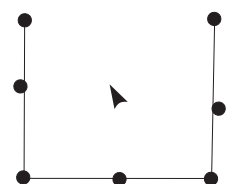


図2-74 SA-4

3. 遺構と遺物

れる南北棟建物で、棟方向はN-40°-Wである。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50～2.25m、梁行(東西)が1.65～1.80mであった。柱穴は径25～35cmの円形、埋土は褐灰色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点、木製品2点がみられ、木製品(288・289)が図示できた。

出土遺物

木製品(図2-74 288・289)

柱である。288・289とも柱根部分が残存し、底面に加工痕が残る。樹種は288がスダジイ、289がエノキ属である。

堀・柵列跡

1列を復元した。位置関係からSB-23に関連するものと考えられる。

SA-4(図2-75)

調査区東部で確認したコの字を呈する堀で、SB-23を取り囲むように位置する。6間分(13.40m)を検出し、柱間は1.80～2.70mである。柱穴は径20～35cmの円形、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)細粒～粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

土坑

36基を土坑として報告しているが、後世の削平を受けているものが多く、全般に遺存状態は良くない。

SK-26(図2-76)

調査区北部で検出した楕円

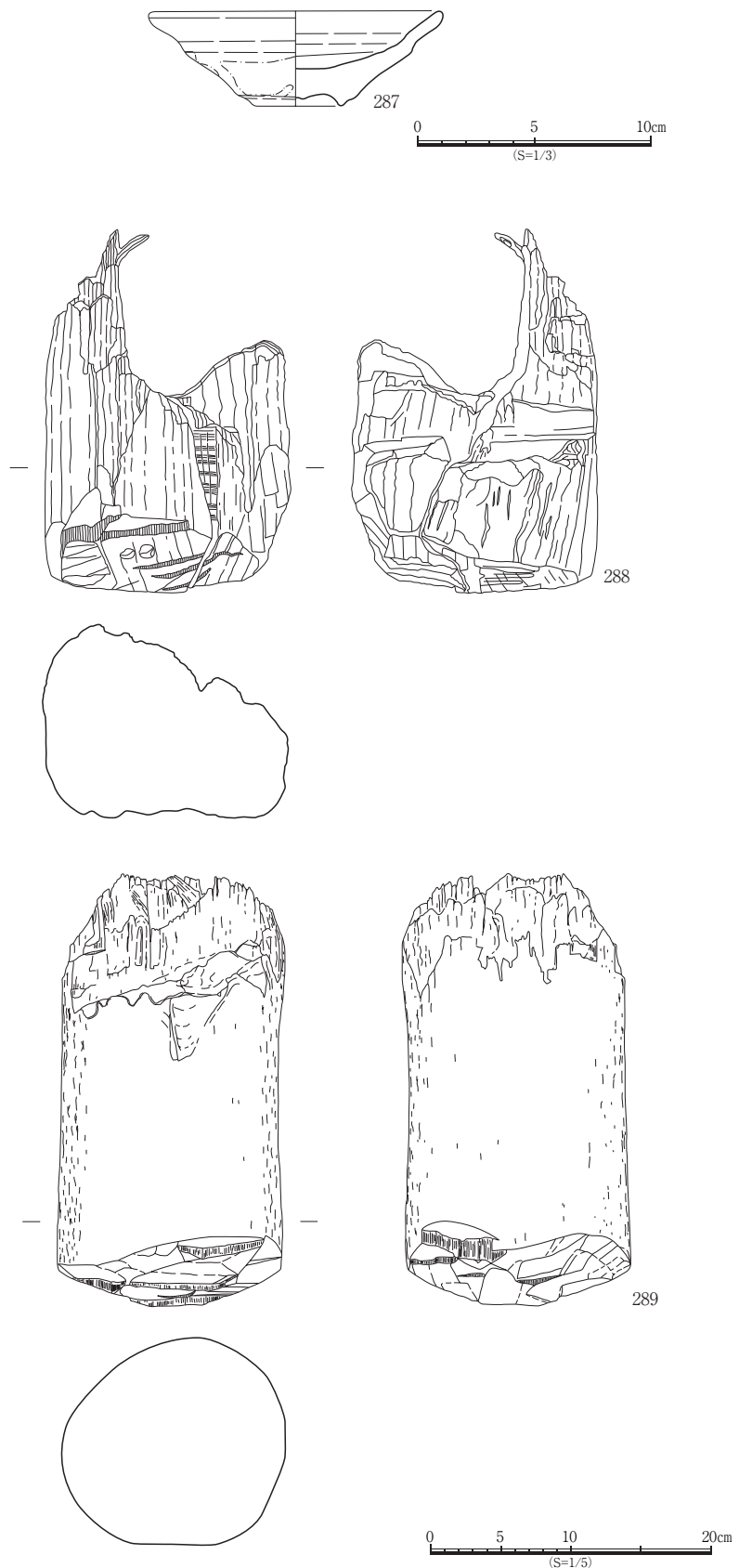


図2-75 SB-24・25出土遺物実測図

形の土坑で、長径 2.06m、短径 1.92m、深さ 36 cmを測り、長軸方向はN-40°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～中粒砂、2層が炭化物を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂、3層が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂、4層が小礫混じりの黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒砂、5層が黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂、6層が黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂、7層が黄褐色(2.5Y5/6)極細粒～中粒砂であった。出土遺物には近世陶磁器 10点のみられ、近世陶器 1点(290)が図示できた。

出土遺物

近世陶器(図2-77 290)

碗の口縁部破片で、口縁部は直立気味に立ち上がる。器面には灰白色の釉を施し、胎土は精良である。

SK-27

調査区北部で検出した楕円形の土坑で、短径1.08m、深さ17cmを測り、長径はSD-4に切られており不明である。長軸方向はN-35°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂であった。出土遺物には土師質土器4点、瓦質土器1点、近世陶磁器3点のみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-28

調査区北部で検出した不整形の土坑で、長辺2.07m、深さ24cmを測り、短辺はSK-29に切られており不明である。長軸方向はN-56°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SK-29

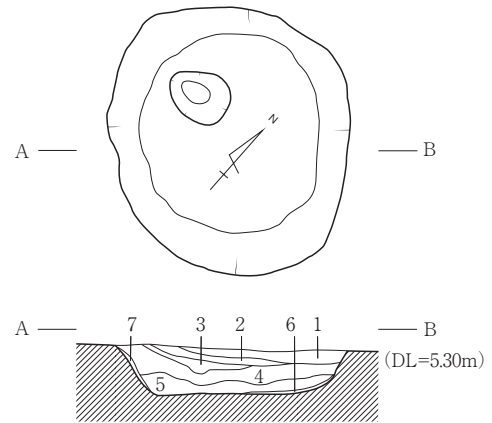
調査区北部で検出した隅丸方形の土坑で、短辺0.92m、深さ22cmを測り、長辺はSK-28に切られており不明である。長軸方向はN-48°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂であった。出土遺物には土師質土器6点のみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-30

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑で、長辺1.31m、短辺1.03m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-42°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂であった。出土遺物には土師質土器13点のみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-31

調査区北部で検出した不整形の土坑で、長辺0.98m、短辺0.71m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-



- 遺構埋土
1. 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～中粒砂
 2. 炭化物を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂
 3. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂
 4. 小礫混じりの黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒砂
 5. 黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒～粗粒砂
 6. 黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂
 7. 黄褐色(2.5Y5/6)極細粒～中粒砂

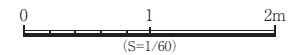


図2-76 SK-26

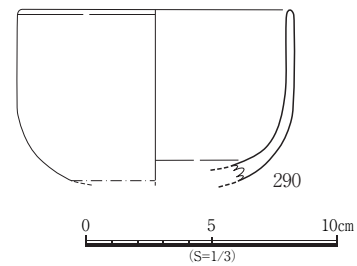


図2-77 SK-26出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

37°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SK-32

調査区北部で検出した楕円形の土坑で、残存短径0.72m、深さ20cmを測り、大部分を現代の攪乱に切られる。長軸方向はN-32°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂であった。出土遺物には近世陶磁器6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-33

調査区北部で検出した楕円形の土坑で、長径1.43m、短径1.15m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-49°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂であった。出土遺物には瓦質土器1点、近世陶磁器3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-34

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-36に切られる。長辺0.82m、短辺0.69m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-47°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂で、出土遺物は皆無であった。

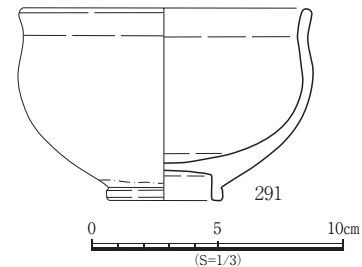
SK-35

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-36に切られる。長辺1.23m、短辺1.11m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂であった。出土遺物には近世陶磁器2点がみられ、近世磁器1点(291)が図示できた。

出土遺物

近世磁器(図2-78 291)

碗で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。器面には灰オリーブ色の釉を施し、胎土は精良である。



SK-36

調査区北部で検出した長方形の土坑で、SK-34・35を切る。長辺7.88m、短辺1.23m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-46°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂で、出土遺物には須恵器3点、近世陶磁器4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

図2-78 SK-35出土遺物実測図

SK-37

調査区北部で検出した長楕円形の土坑で、柱穴に切られる。長径1.74m、短径0.71m、深さ3cmを測り、長軸方向はN-36°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SK-38

調査区北部で検出した不整形の土坑で、長辺1.29m、短辺1.24m、深さ2cmを測り、長軸方向はN-33°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質極細粒～中粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SK-39

調査区東部で検出した隅丸方形の土坑で、長辺2.86m、短辺2.19m、深さ26cmを測り、長軸方向はN-53°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小～中礫を含む炭化物混じりののび黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器16点、瓦質土器7点、近世陶磁器32点、備前焼5点がみられ、土師質土器1点(292)、近世陶磁器5点(293～296・300)、備前焼1点(297)、

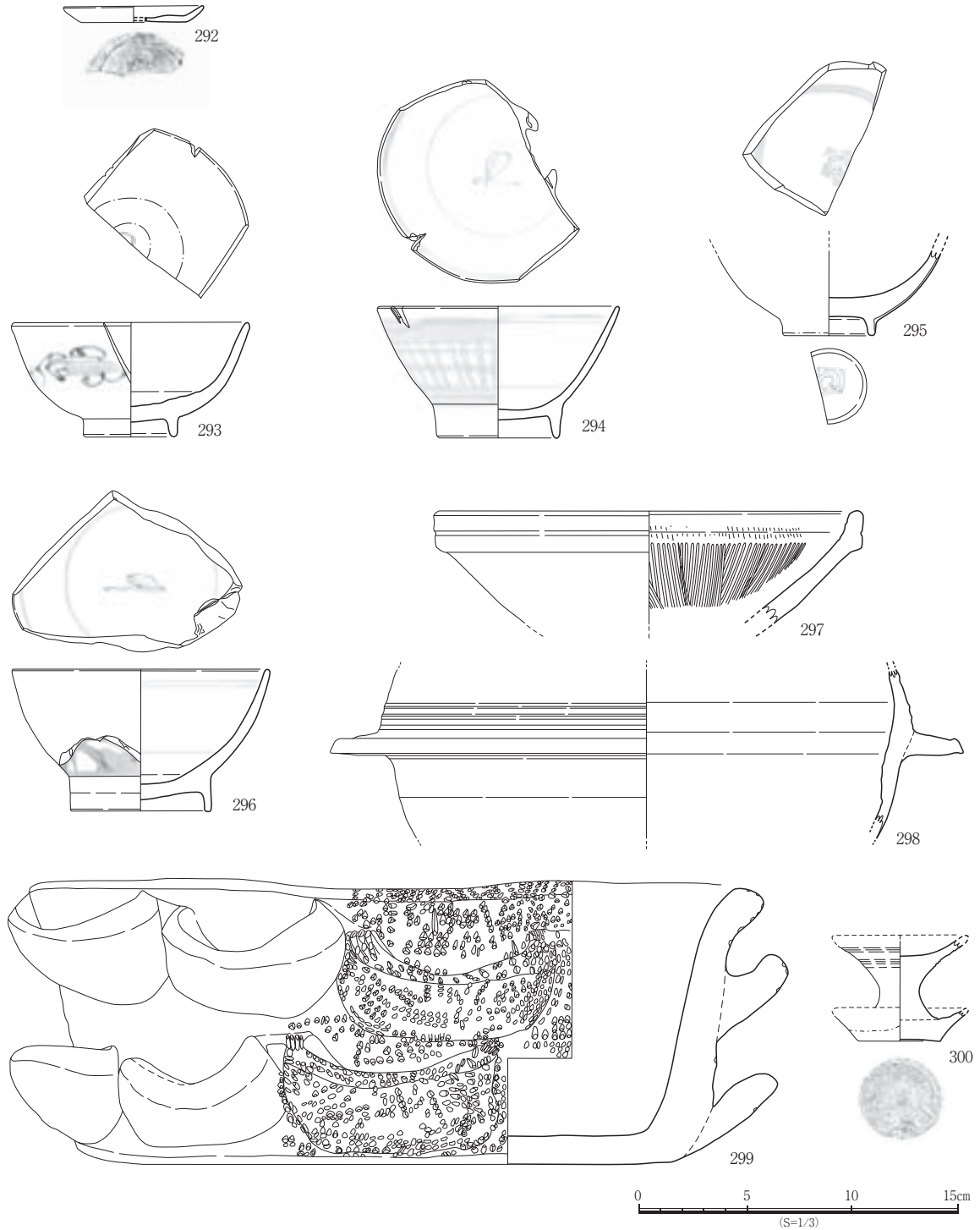


図2-79 SK-39出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

瓦質土器2点(298・299)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-79 292)

小皿である。調整は内外面とも回転ナデ調整で、底部切り離しは回転糸切りである。口縁部内外面に煤が付着し、胎土には極細粒砂を含む。

近世磁器(図2-79 293~296)

293~296は碗である。293は見込みに蛇ノ目釉剥ぎがみられ、中央には文様を施すが、大部分が欠損しており、詳細は不明である。畳付は露胎で、胎土は精良である。294は口縁部内面に2条、見込みに1条の圏線を施し、見込み中央にも施文する。外面には太い圏線を巡らし、その中に格子文を配する。畳付は露胎で、胎土は精良である。295は底部破片で、見込みには圏線を2条巡らし、中央に手描きの五弁文とみられる文様を施す。高台内には二重方形枠に渦福の銘がみられる。畳付には砂目積みの痕跡が残り、胎土は精良である。296は口縁部内面に2条の圏線を巡らし、見込みと体部の境にも1条の圏線を施す。また、見込み中央と外面に施文し、胎土は精良である。

備前焼(図2-79 297)

播鉢の口縁部破片で、内外面とも回転ナデ調整を施す。内面には10条を単位とした条痕を隙間なく施し、胎土には細粒~粗粒砂を含む。

瓦質土器(図2-79 298・299)

298は羽釜の体部破片である。口縁部内外面は回転ナデ調整、体部内外面はナデ調整で、口縁部外面の一部に文様が残るが、詳細は不明である。外面の一部に煤が付着し、胎土には極細粒砂を含む。

299は鉢と考えられるもので、器面全体にナデを施す。外面全体に受け口状の装飾を上下2段に巡らし、外面全体に刺突文を施す。底部内面には煤が付着し、胎土には極細粒砂を含む。

近世陶器(図2-79 300)

灯明皿で、外面には回転ナデ調整、内面にはナデを施す。底部切り離しは回転糸切りである。底部外面は露胎で、他の器面には鉄釉を施す。胎土は精良である。

SK-40

調査区東部で検出した円形の土坑で、径1.50m前後、深さ9cmを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒~粗粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SK-41(図2-80)

調査区東部で検出した長楕円形の土坑で、長径2.83m、短径1.69m、深さ28cmを測り、長軸方向はN-42°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒~粗粒砂であった。出土遺物には近世陶磁器2点がみられ、近世陶器1点(301)が図示できた。

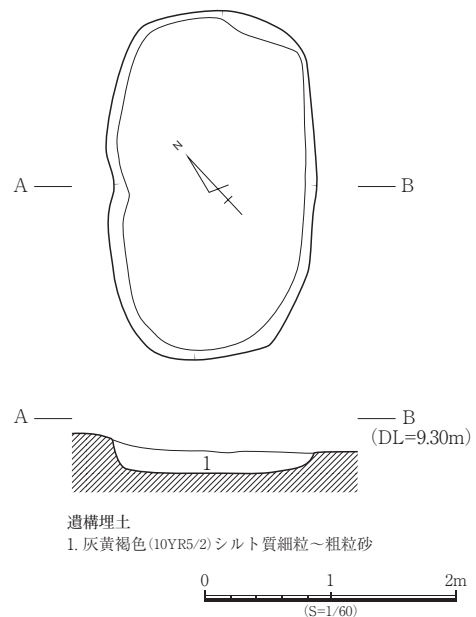


図2-80 SK-41

出土遺物

近世陶器(図2-81 301)

皿とみられる底部破片で、高台は削り出しである。見込みには砂目積みの痕跡が残り、器面には灰オリーブ色の釉を施す。胎土は精良である。

SK-42

調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、長辺1.08m、短辺0.92m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-41°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-43

調査区中央部で検出した楕円形の土坑で、長径0.78m、短径0.65m、深さ4cmを測り、長軸方向はN-33°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-44

調査区中央部で検出した不整形の土坑で、長辺1.42m、短辺1.27m、深さ39cmを測り、長軸方向はN-23°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂質シルト、2層が暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器5点、瓦器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-45

調査区中央部で検出した楕円形の土坑で、SK-46に接する。長径1.59m、短径1.32m、深さ28cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器16点、瓦質土器3点、青磁1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-46

調査区中央部で検出した不整形の土坑で、SK-45に接する。長辺1.47m、短辺1.36m、深さ5cmを測り、長軸方向はN-38°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器3点、土師質土器13点、瓦質土器2点、白磁1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-47

調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、長辺1.58m、短辺1.40m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-34°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトであった。出土遺物には瓦質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-48

調査区中央部で検出した長方形の土坑で、長辺1.73m、短辺0.58m、深さ3cmを測り、長軸方向はN-31°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-49

調査区中央部で検出した隅丸長方形の土坑で、多くの柱穴に切られる。長辺2.52m、短辺1.47m、

3. 遺構と遺物

深さ 17 cm を測り、長軸方向は $N-34^{\circ}-E$ を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器 10 点、瓦質土器 2 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-50

調査区中央部で検出した不整楕円形の土坑で、長径 2.03m、短径 1.86m、深さ 59cm を測り、長軸方向は $N-62^{\circ}-W$ を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は 1 層がにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂質シルト、2 層が 1 層をブロック状に含む褐灰色 (10YR4/1) 中粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器 28 点、瓦質土器 1 点、近世陶磁器 1 点がみられ、土師質土器 1 点 (302) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (図 2-81 302)

小皿で、磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、底部切り離しは回転糸切りとみられる。胎土には極細粒砂を含む。

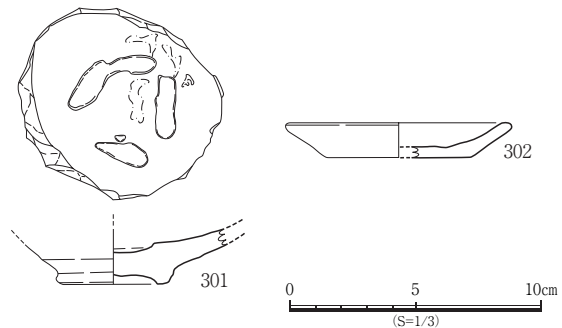


図 2-81 SK-41・50 出土遺物実測図

SK-51

調査区中央部で検出した不整隅丸方形の土坑で、長辺 1.05m、短辺 0.98m、深さ 26cm を測り、長軸方向は $N-36^{\circ}-E$ を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-52

調査区中央部で検出した不整隅丸方形の土坑で、長辺 1.13m、短辺 1.01m、深さ 7cm を測り、長軸方向は $N-46^{\circ}-E$ を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-53

調査区中央部で検出した円形の土坑で、径約 3.3m、深さ 26cm を測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は小～大礫を含む黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粗粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SK-54

調査区中央部で検出した不整隅丸方形の土坑で、長辺 1.42m、短辺 1.38m、深さ 14cm を測り、長軸方向は $N-52^{\circ}-W$ を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 1 点、須恵器 1 点、土師質土器 2 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-55

調査区中央部で検出した不整円形の土坑で、長径 1.65m、短径 1.57m、深さ 8cm を測り、長軸方向は $N-39^{\circ}-E$ を示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含むにぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器 6 点、須恵器 4 点、土師質土器 10 点がみられ、須恵器 1 点

(303)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図2-82 303)

長頸壺と考えられる胴部破片である。胴部外面下半には回転ヘラ削りがみられ、他の器面には回転ナデを施す。屈曲部下方には波状文を施し、胎土には細粒～粗粒砂を含む。

SK-56

調査区南部で検出した長楕円形の土坑で、長径0.92m、短径0.65m、深さ5cmを測り、長軸方向はN-50°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-57

調査区南部で検出した隅丸長方形の土坑で、長辺1.43m、短辺0.71m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-34°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-58

調査区南部で検出した楕円形の土坑で、SK-59に切られ、短径は不明である。長径1.03m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-27°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色(10YR4/1)細粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点、近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-59

調査区南部で検出した長楕円形の土坑で、SK-58に切られ、長径は不明である。短径1.07m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-56°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-60

調査区南部で検出した不整長方形の土坑で、長辺2.71m、短辺0.69m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-19°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-61

調査区西部で検出した楕円形の土坑で、西側は調査区外へ続き、短径は不明である。長径1.71m、深さ39cmを測り、長軸方向はN-13°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器12点、近世磁器1点がみられ、近世磁器(304)が図示できた。

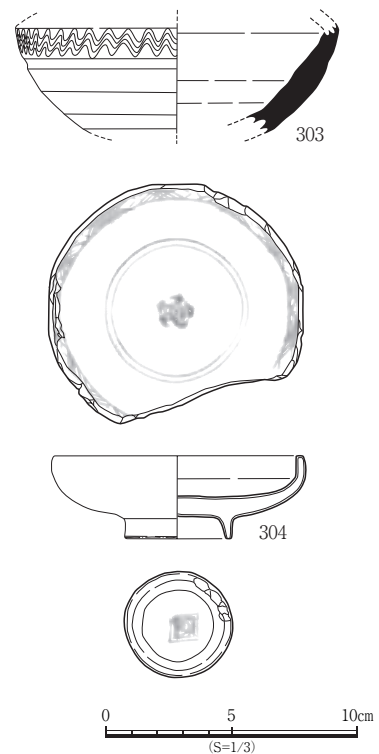


図2-82 SK-55・61出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

出土遺物

近世磁器(図2-82 304)

肥前系の皿と考えられる。底部内面に2条の圏線を巡らし、口縁部内面及び見込みには文様を配す。高台内には渦福文を施し、胎土は精良である。

溝跡

40条の溝跡を検出したが、後世の削平により全般に遺存状態は良くない。SD-40はSB-22に伴う区画溝と考えられる。

SD-23

調査区北部で検出した南北溝跡(N-32°-W)で、SD-25・26を切る。幅0.28~0.71m、深さ2~13cmを測り、基底面は南(5.349m)から北(5.248m)に傾斜し、10.90mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒~中粒砂であった。出土遺物には土師質土器7点、近世陶磁器5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-24

調査区北部で検出した南北溝跡(N-38°-W)で、SD-25を切る。幅0.27~0.69m、深さ2~7cmを測り、基底面は南(5.410m)から北(5.399m)に傾斜し、6.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒~中粒砂であった。出土遺物には土師質土器9点、近世陶磁器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-25(図2-83)

調査区北部で検出した東西溝跡(N-53°-E)で、SD-26に切られる。幅0.33~0.95m、深さ7~9cmを測り、基底面は東(5.499m)から西(5.368m)に傾斜し、33.80mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒砂であった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器15点、青磁1点、近世陶磁器13点、備前焼1点がみられ、青磁(305)が図示できた。

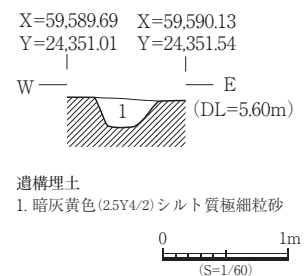


図2-83 SD-25

出土遺物

青磁(図2-84 305)

碗の体部破片で、内面にヘラ描き、櫛描きの文様がみられる。器面には灰オリーブ色の釉を施し、胎土は精良である。

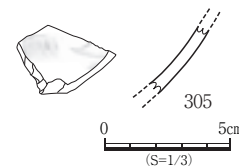


図2-84 SD-25出土遺物実測図

SD-26

調査区北部で検出した東西溝跡(N-59°-E)で、SD-25を切る。幅0.43~0.78m、深さ7~12cmを測り、基底面は東(5.446m)から西(5.383m)に傾斜し、35.40mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒砂であった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器1点、近世陶磁器7点、備前焼1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-27

調査区北部で検出した南北溝跡(N-40°-E)で、北側は調査区外へ続く。幅0.42~0.53m、深さ11

～24cmを測り、基底面は北(5.941m)から南(5.924m)に傾斜し、2.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-28

調査区北部で検出した南北溝跡(N-31°-E)で、北側は調査区外へ続く。幅0.31～0.68m、深さ10～15cmを測り、基底面は北(6.996m)から南(6.968m)に傾斜し、3.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には青磁1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-29(図2-85)

調査区北部で検出した南北溝跡(N-30°-E)で、北側は調査区外へ続く。幅0.55～0.71m、深さ11～27cmを測り、基底面は北(7.150m)から南(7.100m)に傾斜し、4.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器2点、天目茶碗1点、近世陶磁器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

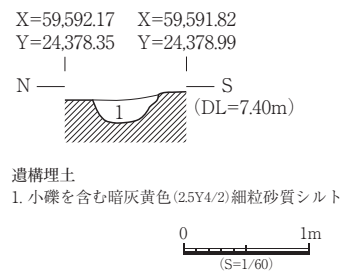


図2-85 SD-29

SD-30

調査区北部で検出した南北溝跡(N-30°-E)で、北側は調査区外へ続く。幅0.33～0.51m、深さ12～26cmを測り、基底面は北(7.419m)から南(7.336m)に傾斜し、4.70mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器4点、近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-31

調査区東部で検出した南北溝跡(N-34°-E)で、幅0.17～0.43m、深さ4～11cmを測り、基底面は北(7.509m)から南(7.058m)に傾斜し、18.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂であった。出土遺物には土師質土器1点、近世陶磁器6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-32

調査区東部で検出した南北溝跡(N-29°-E)で、SD-14を切り、北側は調査区外へ続く。幅0.21～0.29m、深さ5～13cmを測り、基底面は北(9.096m)から南(9.047m)に傾斜し、3.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-33

調査区東部で検出した南北溝跡(N-25°-W)で、SD-18を切り、南側は調査区外へ続く。幅0.29～0.33m、深さ5～15cmを測り、基底面は南(8.980m)から北(8.899m)に傾斜し、1.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

3. 遺構と遺物

SD - 34

調査区東部で検出した東西溝跡(N-51°-W)で、SK-41・SD-18を切る。幅0.30～0.32m、深さ6～8cmを測り、基底面は西(8.905m)から東(8.899m)に傾斜し、1.80mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD - 35

調査区東部で検出した南北溝跡(N-35°-E)で、両側とも調査区外へ続く。幅0.13～0.21m、深さ4～12cmを測り、基底面は北(9.639m)から南(9.556m)に傾斜し、6.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 36

調査区東部で検出した南北溝跡(N-34°-E)で、南側は調査区外へ続く。幅0.15～0.23m、深さ5～11cmを測り、基底面は南(9.759m)から北(9.756m)に傾斜し、2.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD - 37

調査区東部で検出した南北溝跡(N-37°-E)で、SD-38に切られる。幅0.21～0.29m、深さ3～8cmを測り、基底面は北(9.802m)から南(9.765m)に傾斜し、3.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD - 38

調査区東部で検出した東西溝跡(N-79°-E)で、SD-37を切り、西側は調査区外へ続く。幅0.27～0.34m、深さ7～10cmを測り、基底面は東(9.741m)から西(9.702m)に傾斜し、1.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD - 39

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-33°-E)で、SD-40に切られる。幅0.29～0.58m、深さ4～6cmを測り、基底面は北(7.279m)から南(7.240m)に傾斜し、3.20mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 40

調査区中央部で検出したSB-22に伴う区画溝と考えられるもので、幅0.28～0.40m、深さ4～21cmを測り、17.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には須恵器3点、土師質土器18点、瓦質土器4点、近世陶磁器5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 41

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-25°-E)で、幅0.25～0.41m、深さ6～8cmを測り、基底面は南(7.345m)から北(7.216m)に傾斜し、3.00mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じり

の褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-42

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-28°-E)で、幅0.12~0.36m、深さ3~5cmを測り、基底面は南(7.385m)から北(7.371m)に傾斜し、6.60mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物に土師質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-43

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-9°-W)で、SD-46を切る。幅0.18~0.24m、深さ4~6cmを測り、基底面は北(7.765m)から南(7.749m)に傾斜し、3.60mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-44

調査区中央部で検出した東西溝跡(N-64°-W)で、幅0.11~0.19m、深さ2~4cmを測り、基底面は東(7.857m)から西(7.828m)に傾斜し、6.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-45

調査区中央部で検出した東西溝跡(N-68°-W)で、SD-46に切られる。幅0.19~0.32m、深さ4~13cmを測り、基底面は東(7.867m)から西(7.724m)に傾斜し、8.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器3点、青磁1点、白磁1点、近世陶磁器3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-46

調査区中央部で検出した区画溝と考えられるもので、SD-45を切る。幅0.14~0.25m、深さ4~7cmを測り、18.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点、須恵器1点、土師質土器13点、近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-47

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-26°-E)で、SD-48を切る。幅0.31~0.51m、深さ2~6cmを測り、基底面は北(8.996m)から南(8.898m)に傾斜し、6.40mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-48

調査区中央部で検出した東西溝跡(N-59°-W)で、SK-24を切り、SD-47に切られる。幅0.19~0.32m、深さ3~8cmを測り、基底面は西(9.008m)から東(8.852m)に傾斜し、1.70mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-49

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-33°-E)で、SD-50に切られる。幅0.20~0.29m、深さ3~6cmを測り、基底面は南(9.060m)から北(9.003m)に傾斜し、7.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒~粗粒砂であった。出土遺物には瓦質土器1点、近世陶磁器

3. 遺構と遺物

2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-50

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-30°-E)で、SD-49を切り、北側は調査区外へ続く。幅0.59～0.82m、深さ8～30cmを測り、基底面は南(9.015m)から北(8.943m)に傾斜し、12.10mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒～粗粒砂であった。出土遺物には土師質土器2点、近世陶磁器4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-51

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-27°-W)で、SD-50に切られる。幅0.22～0.26m、深さ3～4cmを測り、基底面は南(9.101m)から北(9.094m)に傾斜し、3.20mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒～粗粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SD-52

調査区西部で検出した南北溝跡(N-17°-E)で、幅0.12～0.39m、深さ2～5cmを測り、基底面は北(6.960m)から南(6.918m)に傾斜し、6.90mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粗粒砂であった。出土遺物には土師質土器5点、瓦質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-53

調査区西部で検出した南北溝跡(N-32°-E)で、幅0.29～0.68m、深さ10～13cmを測り、基底面は北(7.647m)から南(7.589m)に傾斜し、12.60mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂であった。出土遺物には土師質土器1点、瓦質土器1点、近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-54

調査区西部で検出した南北溝跡(N-31°-E)で、幅0.49～0.60m、深さ8～12cmを測り、基底面は北(7.739m)から南(7.642m)に傾斜し、8.50mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂で、出土遺物は皆無であった。

SD-55

調査区西部で検出した南北溝跡(N-38°-E)で、幅0.10～0.27m、深さ3～6cmを測り、基底面は北(7.841m)から南(7.594m)に傾斜し、10.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂であった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-56

調査区西部で検出した東西溝跡(N-64°-W)で、幅0.16～0.39m、深さ2～5cmを測り、基底面は東(8.326m)から西(8.286m)に傾斜し、5.80mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒砂であった。出土遺物には須恵器1点、近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-57

調査区南部で検出した南北溝跡(N-42°-W)で、幅0.19～0.28m、深さ5～8cmを測り、基底面は

南(11.025m)から北(10.947m)に傾斜し、7.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-58

調査区南部で検出した南北溝跡(N-38°-W)で、幅0.11~0.34m、深さ4~6cmを測り、基底面は南(11.809m)から北(11.454m)に傾斜し、5.30mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器7点、青磁1点、近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-59

調査区南部で検出した南北溝跡(N-39°-W)で、幅0.20~0.41m、深さ6~7cmを測り、基底面は南(11.940m)から北(11.879m)に傾斜し、3.60mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には近世陶磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-60

調査区南部で検出した南北溝跡(N-40°-E)で、幅0.37~0.42m、深さ5~6cmを測り、基底面は南(11.882m)から北(11.873m)に傾斜し、2.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物混じりの黄灰色(2.5Y4/1)中粒~粗粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-61

調査区南部で検出した東西溝跡(N-47°-E)で、SK-60を切り、東側は調査区外へ続く。幅0.32~0.47m、深さ5~8cmを測り、基底面は東(13.067m)から西(13.010m)に傾斜し、4.20mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が褐灰色(10YR5/1)シルト質粗粒砂、2層が褐色(10YR4/4)中粒~粗粒砂質シルト、3層が褐灰色(10YR5/1)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には近世陶磁器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-62

調査区南部で検出した南北溝跡(N-37°-E)で、北側は調査区外へ続く。幅0.37~0.42m、深さ5~6cmを測り、基底面は北(13.243m)から南(13.166m)に傾斜し、2.10mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色(10YR5/1)シルト質粗粒砂であった。出土遺物には土師質土器2点、近世陶磁器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

畝状遺構

調査区南部から西部で7箇所 of 畝状遺構を確認したが、後世の削平によって遺存状態は良くない。これら畝状遺構が検出された箇所では掘立柱建物跡は確認されておらず、居住域と生産域が分けられていたことを窺わせる。

SU-1

調査区北西部で畝間の痕跡を3条検出した。検出長3.10~7.90m、幅0.20~0.42m、深さ7~10cmを測る。主軸方向はN-48~52°-Eを示す。畝間は0.80~2.10m間隔で平行にのび、畝幅は0.40~1.80mを測る。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

3. 遺構と遺物

SU-2

調査区北西部で畝間の痕跡を5条検出した。検出長1.30～8.30m, 幅0.13～0.35m, 深さ1～4cmを測る。主軸方向はN-34～44°-Eを示す。畝間は0.50～1.30m間隔で平行にのび、畝幅は0.20～0.90mを測る。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点, 須恵器1点, 土師質土器6点, 瓦質土器2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SU-3

調査区西部で畝間の痕跡を7条検出した。検出長2.90～30.10m, 幅0.11～0.39m, 深さ2～8cmを測る。主軸方向はN-33～37°-Eを示す。畝間は0.20～0.40m間隔で平行にのび、畝幅は0.10～0.20mを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器10点, 須恵器4点, 土師質土器37点, 瓦質土器4点, 瓦器2点, 備前焼2点, 白磁1点, 近世陶磁器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SU-4

調査区西部で畝間の痕跡を5条検出した。検出長2.40～11.90m, 幅0.21～0.45m, 深さ5～28cmを測る。主軸方向はN-24～32°-Eを示す。畝間は0.30～0.70m間隔で平行にのび、畝幅は0.10～0.40mを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には須恵器2点, 土師質土器11点, 瓦質土器1点, 近世陶磁器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SU-5

調査区南部で畝間の痕跡を2条検出した。検出長8.30～10.50m, 幅0.23～0.52m, 深さ4～8cmを測る。主軸方向はN-27°-Eを示す。畝間は0.40～0.60m間隔で平行にのび、畝幅は0.10～0.30mを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)細粒～中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器3点, 近世陶磁器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SU-6

調査区南部で畝間の痕跡を3条検出した。検出長2.30～10.10m, 幅0.15～0.39m, 深さ1～4cmを測る。主軸方向はN-49～51°-Eを示す。畝間は0.60～0.70m間隔で平行にのび、畝幅は0.40～0.50mを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師器2点, 土師質土器22点, 瓦質土器1点, 天目茶碗2点, 近世陶磁器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SU-7

調査区南部で畝間の痕跡を2条検出した。検出長9.40～11.40m, 幅0.31～0.37m, 深さ4～7cmを測る。主軸方向はN-31～33°-Wを示す。畝間は0.80～0.90m間隔で平行にのび、畝幅は0.50～0.60mを測る。埋土は炭化物混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器5点, 白磁2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

性格不明遺構

調査区東部で検出された不整形の遺構を性格不明遺構として報告する。

SX-2

調査区東部で検出した不整形の遺構で, 短辺2.32～2.78m, 深さ25cmを測り, 長軸方向はN-55°

-Eを示す。埋土は1層が小礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルト, 2層が小~大礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルト, 3層が炭化物混じりの褐色(10YR4/4)極細粒シルト質細粒砂であった。断面は不整形の舟底状を呈し, 出土遺物には須恵器2点, 土師質土器9点, 青磁1点, 白磁1点, 備前焼6点, 天目茶碗2点, 近世陶磁器34点, 石製品2点, 木製品1点がみられ, 近世磁器1点(306), 備前焼2点(307・308), 石製品2点(309・310), 木製品(311)が図示できた。

出土遺物

近世磁器(図2-86 306)

皿の底部破片で, 外面にはヘラ掘りで縦筋を施す。器面にはオリーブ灰色の釉を施し, 胎土は精良である。

備前焼(図2-86 307・308)

307は播鉢の口縁部破片で, 内外面とも回転ナデを施す。口縁部外面には焼成時の痕跡とみられる色調の違いがみられ, 胎土には極細粒砂を含む。308は甕の口縁部破片で, 端部のみ残存する。内外

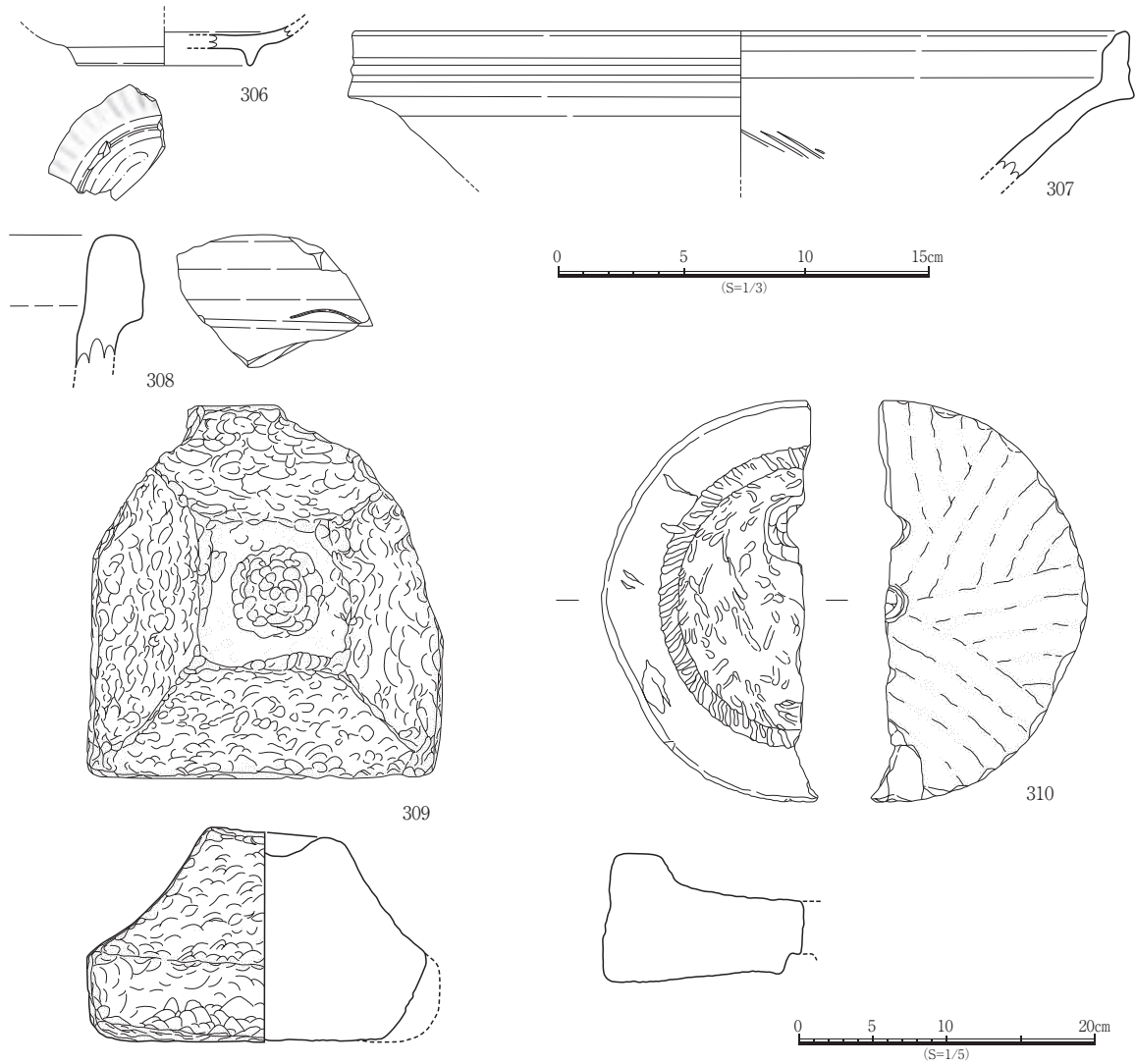


図2-86 SX-2出土遺物実測図1

3. 遺構と遺物

面とも回転ナデを施し、胎土には極細粒～小礫を含む。

石製品(図2-86 309・310)

309は火輪で、一部欠損する。上部に空輪を固定するための窪みがあり、石材は砂岩と考えられる。

310は上臼で、上部に約4.5cm、下部に約2.6センチの孔が貫通する。下面には磨耗する5本単位の斜行する播り目がみられる。石材は砂岩である。

木製品(図2-87 311)

板状木製品である。板目材で樹心側のみ加工痕が残る。石垣の礎板とみられ、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

柱穴

本調査区では建物跡等に復元できなかったが、多数の柱穴が確認されている。ここでは復元図示できた遺物が出土している柱穴5個を報告する。

P-28

調査区中央部で検出された柱穴である。径28cmの円形で、深さ14cmを測る。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒～粗粒砂で、出土遺物には土師質土器1点、瓦質土器1点、近世陶器1点がみられ、近世陶器(312)が図示できた。

出土遺物

近世陶器(図2-88 312)

壺の口縁部破片で、外面及び口縁部内面のみオリーブ黄色の釉を施す。胎土は精良である。

P-29

調査区中央部で検出された柱穴である。径21cmの円形で、深さ16cmを測る。埋土は黄灰色

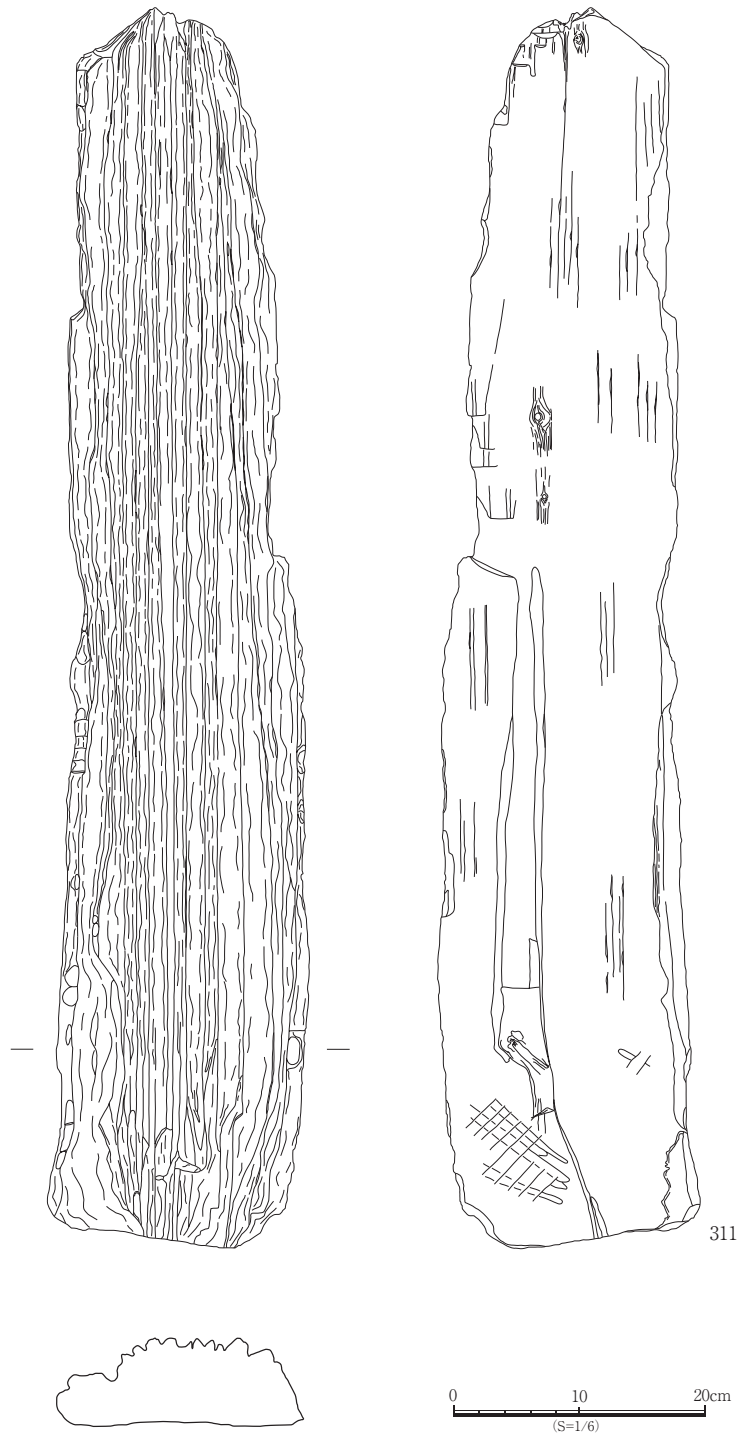


図2-87 SX-2出土遺物実測図2

(2.5Y4/1)シルト質中粒～粗粒砂で、出土遺物には土師質土器10点がみられ、土師質土器1点(313)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図2-88 313)

杯で、磨耗が著しく調整不明瞭であるが、口縁部外面の一部に回転ナデ調整の痕跡が残り、底部切り離しは回転糸切りとみられる。胎土には極細粒砂を含む。

P-30

調査区東部で検出された柱穴である。径32cmの円形で、深さ24cmを測る。埋土は炭化物混じりにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粗粒砂で、出土遺物には土師質土器7点、石製品1点がみられ石製品(314)が図示できた。

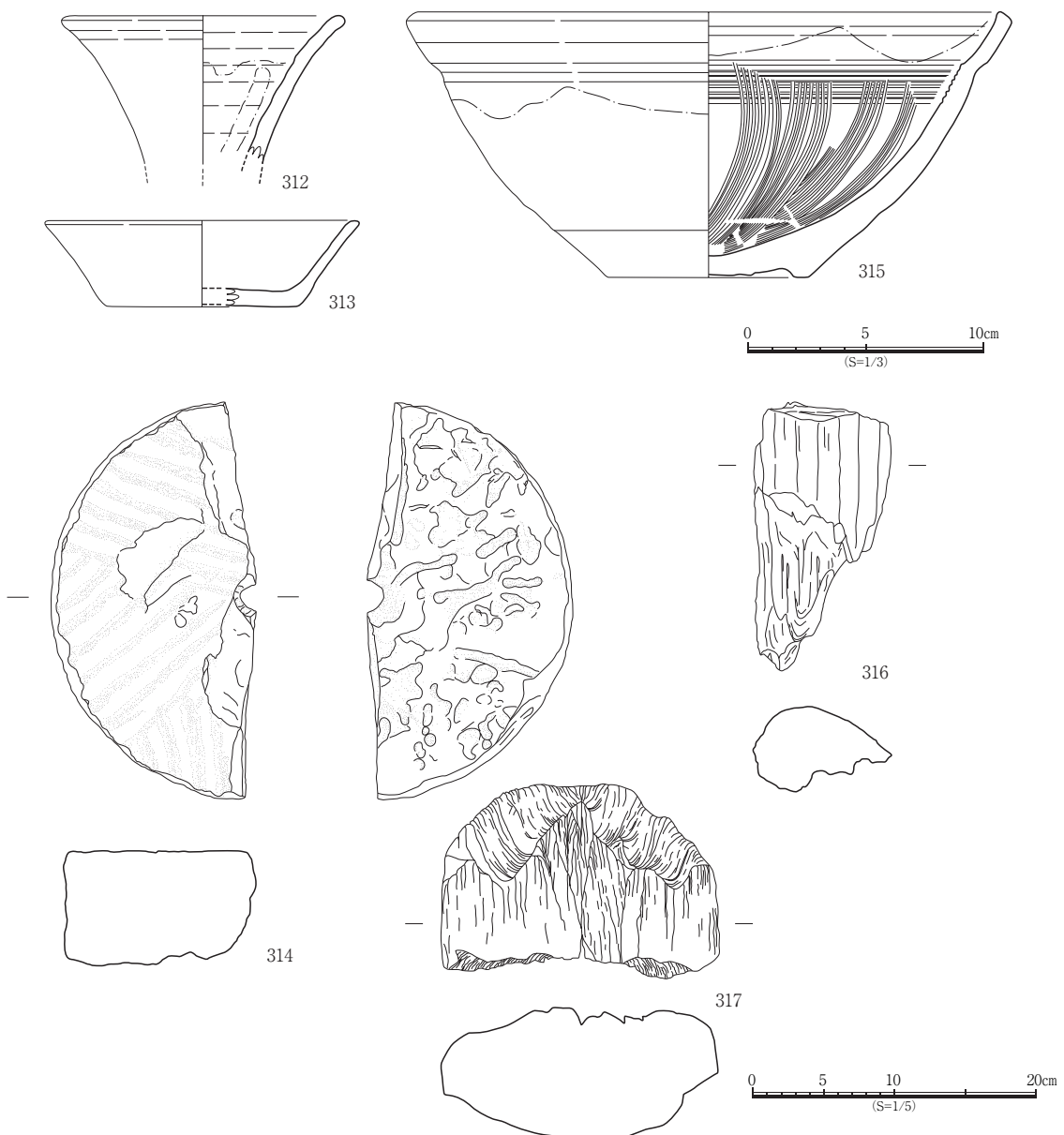


図2-88 P-28～32出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

出土遺物

石製品(図2-88 314)

下臼で、斜行する8本単位の播り目がみられる。石材は砂岩である。

P-31

調査区東部で検出された柱穴である。径41cmの円形で、深さ55cmを測る。埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粗粒砂で、出土遺物には土師質土器7点、瓦質土器2点、近世陶器1点がみられ近世陶器(315)が図示できた。

出土遺物

近世陶器(図2-88 315)

播鉢で、内外面とも回転ナデ、体部下端には回転ヘラ削りを施す。削り出し高台で、5~7条単位の条線を断続的に配する。胎土には極細粒砂を含む。

P-32

調査区東部で検出された柱穴である。径28cmの円形で、深さ11cmを測る。埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粗粒砂で、出土遺物には土師質土器3点、木製品1点がみられ木製品(316)が図示できた。

出土遺物

木製品(図2-88 316)

柱根と考えられるものである。腐食が著しく、加工痕は残存しない。

P-33

調査区南部で検出された柱穴である。径26cmの円形で、深さ23cmを測る。埋土は炭化物混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粗粒砂で、出土遺物には木製品1点がみられ木製品(317)が図示できた。

出土遺物

木製品(図2-88 317)

柱根と考えられるものである。腐食が著しく、加工痕は残存しない。

第Ⅲ章 口槇ヶ谷遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻 康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文・馬場健司・斉藤紀行

1. はじめに

(1) 分析目的

今回報告する自然科学分析では、調査区やその周辺の環境変遷と人間活動の関わりについて検討するための基礎的な古環境情報の獲得と、発掘調査で検出された土器胎土に関する岩石学データの採取が目的である。前者の目的に対しては、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定、粒度分析、不攪乱堆積物サンプルの軟X線写真撮影、テフラ分析を実施する。後者の目的については、土器の胎土についての薄片観察と蛍光X線分析を適用した。なお、今回の発掘調査に伴う自然科学分析では、現地調査に基づく調査区内の堆積層記載が目的の一つとして設定されていた。そのため、本分析に係わる委託業務では、発掘調査の進捗に併せて、延べ9日間の現地調査を実施し、調査区内に累重する堆積層や遺構埋土の記載と試料採取に努めるようにした。

(2) 試料

試料採取層準およびその位置について図3-1・2に示す。

E地区5地点では、4点の試料が採取されている。ここでは、粒度分析2点、植物珪酸体分析2点を実施する。B区では弥生時代以前とされる3地点と、A区SX-1から試料が採取されている。ここでは、年代測定3点、軟X線写真撮影観察2点、粒度分析6点、花粉分析4点、珪藻分析3点、植物珪酸体分析4点を実施する。

D区では、1地点、2地点とSK-13埋土の分析を行う。粒度分析は4点、花粉分析は2点、珪藻分析は1点、植物珪酸体は4点の分析を実施する。樹種同定用試料は、SB-25の3点、D区SX-2の3点、SK-28の1点の合計7点である。このうち、SK-28の1点が炭化材であった。

F区では、谷部下部の堆積層の記載とテフラ分析を行う。テフラ分析については、試料番号1・2・3・4について実施した。

胎土薄片作成鑑定と胎土蛍光X線分析は、口槇ヶ谷遺跡から出土した中世の土器から7点を選択し分析を実施する。

2. 口槇ヶ谷遺跡の古環境変遷

(1) はじめに

本節では、現地調査結果および放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定、粒度分析、不攪乱堆積物サンプルの軟X線写真撮影、テフラ分析結果について述べる。

2. 口横ヶ谷遺跡の古環境変遷

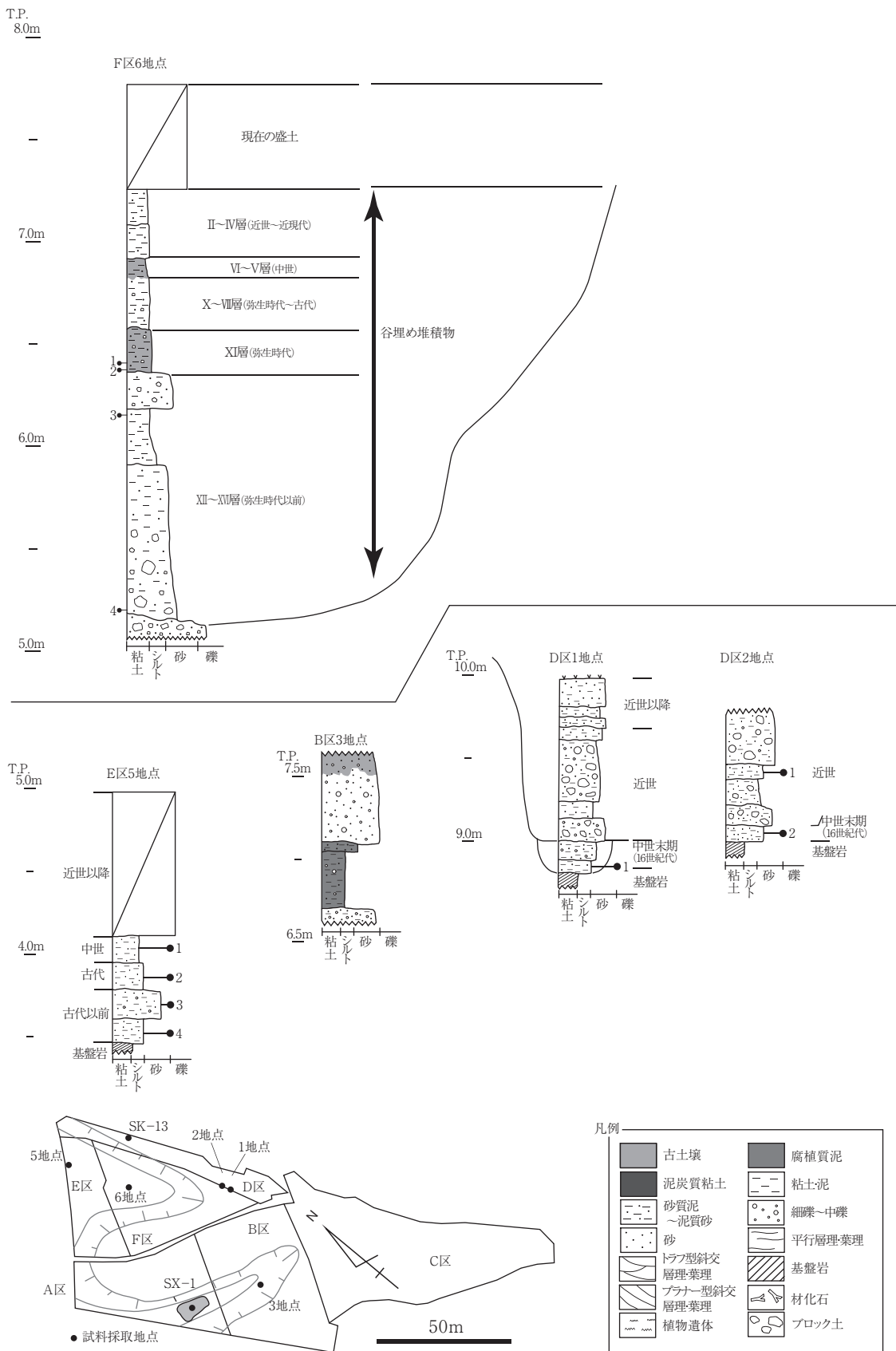


図3-1 試料採取地点の層序

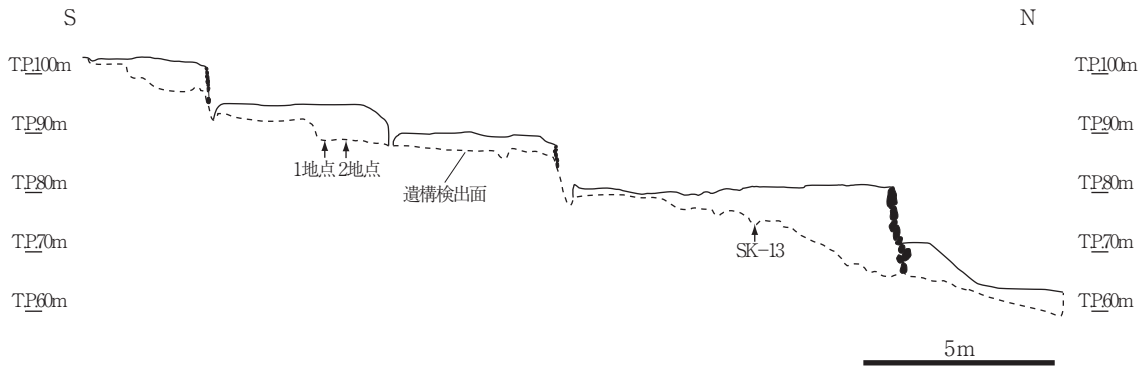


図3-2 D区試料採取地点西壁断面図

(2) 分析方法

① 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法で実施する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986 - 2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One SigmaとTwo Sigma)を用いる。

② 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange - Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性は、Asai & Watanabe (1995)の環境指標種を参考とする。

③ 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9、濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての

種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表, および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を, 草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として, 百分率で出現率を算出し図示する。

④ 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理, 沈定法, 重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い, 植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後, プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し, その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下, 短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下, 機動細胞珪酸体と呼ぶ)を, 近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には, 分析試料の乾燥重量, プレパラート作成に用いた分析残渣量, 検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し, 堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。結果は, 植物珪酸体含量の一覧表で示す。また, 各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために, 植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

⑤ 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し, ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し, プレパラートを作製する。作製したプレパラートは, 生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は, 3断面の割断面を作製し, 実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し, 種類を同定する。

⑥ 粒度分析

公文・立石(1998)の方法を参考に礫・砂粒子画分は篩別法, シルト・粘土粒子画分はピペット法で行った。また, 粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方, 2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し, 蒸留水と30%過酸化水素水を加え, 熱板上で有機物分解を行う。分解終了後, 蒸留水と分散剤(4%カルゴン)を加え, 攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し, 往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後, 水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り, 直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>), 粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し, 105℃で24時間乾燥させた後, 重量を測定し加積通過率(質量%)を求める。ピペット法終了後, 懸濁液を63μm篩で水洗いする。63μm篩残留物を105℃で24時間熱乾後, 1.0, 0.5, 0.25, 0.125mmφ篩でふるい分け, 各篩毎に篩上残留物の質量を測定し, 加積通過率(質量%)を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率(質量%)から粒径加積曲線を描き, Wentworth(1922)の粒径区分毎の質量を算出する。

⑦ 堆積微細構造軟X線分析

地層断面より採取したブロック状の不攪乱堆積物を厚さ1cmの板状に整形し、それをアクリル板上に設置し、周囲を幅1cmの棒状のアクリル樹脂で固定し、軟X線写真撮影を実施した。撮影したフィルムについては、肉眼とルーペによる観察およびスキナーでコンピューター上に取り込んだ画像の補整などから、堆積・土壌構造の特徴把握を行う。試料調整および撮影については、碎屑性堆積物研究会(1983)、斉藤(1993)を参考とした。また、軟X線写真の記載については、久馬ら(1998)の「土壌薄片記載ハンドブック」のほか、堆積物について宮田ほか(1990)など、土壌について佐藤(1990a・b)、森ほか(1992)、成岡(1993)などを参考とした。

⑧ テフラ分析

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) 結果

① 放射性炭素年代測定

同位体分別を考慮した測定結果を表3-1、暦年較正を行った結果を表3-2に示す。

同位体補正を行った測定結果は、3地点試料4は $2,410 \pm 60$ yrs BP、3地点試料6は $2,540 \pm 50$ yrs BP、SX-1埋土は $2,820 \pm 60$ yrs BPである。暦年較正結果(2 σ)をみると、3地点試料4はcalBC756-392、3地点試料6はcalBC804-521、SX-1埋土はcalBC1190-830である。暦年較正值は、10年単位で表すのが慣例だが、今後想定される較正曲線や暦年較正プログラムの改訂をふまえ、再計算ならびに比較検討を行えるよう、1年単位で表している。

② 珪藻分析

結果を表3-3、図3-3に示す。D区1地点-1を除いて珪藻化石の産出が少ない。とくに、A区SX-1は無化石である。化石が産出したD区1地点-1試料の完形殻の出現率は、約55%である。産出分類群数は、合計で15属49分類群である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

D区1地点-1からは、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性の

2.口楨ヶ谷遺跡の古環境変遷

ある陸生珪藻が全体の約70%と優占する。その主なものは、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群のHantzschia amphioxysが約30%検出され、同じく陸生珪藻A群のNavicula mutica, Amphora montana等を伴う。これに対して水生珪藻は、流水にも止水にも生育する流水不定性のGomphonema parvulum, Nitzschia amphibia, 流水不定性で沼沢湿地付着生種群のNavicula elginensis, Pinnularia gibba等が検出されるが、多産する種類は認められない。

B区3地点では、珪藻化石が少なかった。試料番号4は、Hantzschia amphioxys, Navicula contenta, Navicula contenta fo. biceps, Navicula mutica等の陸生珪藻A群に産出が限定される。これに対して試料番号6は、水生珪藻のSynedra ulna等が産出する。

③ 花粉分析

結果を表3-4, 図3-4に示す。花粉化石はいずれの試料も保存状態が悪く、検出数が極端に少ない。比較的多くみられたのは、D区1地点-1のみであり、シダ類孢子の割合が非常に高いのが特徴であ

表3-1 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
3地点-4	腐植質土壌	2,410 ± 60	- 22.67 ± 0.59	2,370 ± 60	IAAA - 42056
3地点-6	腐植質土壌	2,540 ± 50	- 20.14 ± 0.72	2,460 ± 50	IAAA - 42057
SX-1埋土	腐植質土壌	2,820 ± 60	- 22.44 ± 0.78	2,780 ± 60	IAAA - 42058

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表3-2 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)						相対比	Code No.
		σ	2σ	cal BC	cal BC	cal BP	cal BP		
B区3地点 試料4	2405 ± 61	σ	cal BC 730 - cal BC 692	cal BC 659 - cal BC 652	cal BP 2,680 - 2,642	cal BP 2,609 - 2,602	0.166	IAAA - 42056	
			cal BC 543 - cal BC 399	cal BC 756 - cal BC 684	cal BP 2,493 - 2,349	cal BP 2,706 - 2,634	0.032		
		2σ	cal BC 669 - cal BC 392	cal BC 669 - cal BC 392	cal BP 2,619 - 2,342	cal BP 2,619 - 2,342	0.801		
			cal BC 795 - cal BC 748	cal BC 687 - cal BC 665	cal BP 2,745 - 2,698	cal BP 2,637 - 2,615	0.187		
B区3地点 試料6	2542 ± 46	σ	cal BC 643 - cal BC 590	cal BC 579 - cal BC 559	cal BP 2,593 - 2,540	cal BP 2,529 - 2,509	0.172	IAAA - 42057	
			cal BC 804 - cal BC 536	cal BC 804 - cal BC 536	cal BP 2,754 - 2,486	cal BP 2,754 - 2,486	0.337		
		2σ	cal BC 533 - cal BC 521	cal BC 533 - cal BC 521	cal BP 2,483 - 2,471	cal BP 2,483 - 2,471	0.101		
			cal BC 1,108 - cal BC 1,105	cal BC 1,056 - cal BC 899	cal BP 3,058 - 3,055	cal BP 3,006 - 2,849	0.989		
A区SX-1 埋土	2821 ± 60	σ	cal BC 1,190 - cal BC 1,179	cal BC 1,158 - cal BC 1,145	cal BP 3,140 - 3,129	cal BP 3,108 - 3,095	0.010	IAAA - 42058	
			cal BC 1,131 - cal BC 830	cal BC 1,131 - cal BC 830	cal BP 3,081 - 2,780	cal BP 3,081 - 2,780	0.990		
		2σ	cal BC 1,190 - cal BC 1,179	cal BC 1,158 - cal BC 1,145	cal BP 3,140 - 3,129	cal BP 3,108 - 3,095	0.009		
			cal BC 1,131 - cal BC 830	cal BC 1,131 - cal BC 830	cal BP 3,081 - 2,780	cal BP 3,081 - 2,780	0.010		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986 - 2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

表3-3 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	D区			B区			A区
	塩分	pH	流水		1地点	3地点		SX-1			
					1	4	6				
Nitzschia plana W.Smith	Meh				1	-	-	-	-	-	-
Nitzschia vitrea var. salinarum Grunow	Meh				2	-	-	-	-	-	-
Navicula veneta Kuetzing	Ogh - Meh	al - il	ind	S	2	-	-	-	-	-	-
Nitzschia inconspicua Grunow	Ogh - Meh	al - il	ind		7	-	-	-	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh - Meh	ind	ind	S	1	-	-	-	-	-	-
Amphora montana Krasske	Ogh - ind	ind	ind	RA,U	11	-	-	-	-	-	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh - ind	al - il	ind	RA	3	-	-	-	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange - Bertalot	Ogh - ind	ind	l - ph	RB	2	-	-	-	-	-	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh - ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh - ind	al - il	r - ph	T	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh - hob	ac - il	l - ph		1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh - ind	al - bi	r - ph	T	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	l - ph	O,U	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh - ind	ind	ind	U	5	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh - ind	al - il	r - ph		1	-	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh - ind	al - il	ind	RA,U	54	-	-	-	-	-	1
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh - ind	al - bi	ind	RBS	1	-	-	-	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh - ind	al - il	ind	RA,T	4	-	-	-	-	-	1
Navicula contenta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh - ind	al - il	ind	RA,T	4	-	-	-	-	-	1
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh - ind	al - il	ind	O,U	5	-	-	-	-	-	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh - ind	al - il	r - ph	U	1	-	-	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	RA,S	18	-	-	-	-	-	1
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.) Cleve	Ogh - ind	al - il	ind	RI	1	-	-	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh - ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh - ind	al - il	r - ph	K,U	2	-	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh - unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh - ind	ind	l - ph		1	-	-	-	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh - ind	al - bi	ind	U	7	-	-	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh - ind	al - il	ind	RB,U	3	-	-	-	-	-	-
Nitzschia perminuta (Grun.) Peragallo	Ogh - ind	ind	ind	RI	2	-	-	-	-	-	-
Orthoseira roeseana (Rabh.) O' Meara	Ogh - ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh - ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh - ind	ac - il	ind		1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia carminata Berber & Carter	Ogh - unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh - ind	ac - il	ind	O,U	6	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh - hob	ac - il	ind		5	-	-	-	-	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh - ind	ind	ind	S	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia obscura Krasske	Ogh - ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh - ind	ind	ind	RI	10	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh - ind	ind	ind	RI	2	-	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh - ind	ac - il	ind	RBS	6	-	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata var. paucistriata (Grun.) Cleve	Ogh - ind	ac - il	ind	O,U,RB	3	-	-	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh - unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis borrichii (Pet.) Lund	Ogh - ind	ind	ind	RI	3	-	-	-	-	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh - ind	ind	ind	RB	7	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh - ind	ind	l - ph	O	5	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh - ind	ind	ind		2	-	-	-	-	-	-
Stauroneis thermicola (Petersen) Lund	Ogh - unk	unk	unk	RI	1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	1
Surirella angusta Kuetzing	Ogh - ind	al - il	r - bi	U	1	-	-	-	-	-	-
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith) Hustedt	Ogh - ind	al - il	r - ph	U	3	-	-	-	-	-	-
Synedra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	1	-	-	-	-	-
Synedra spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0
海水-汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					3	0	0	0	0	0	0
淡水-汽水生種					10	0	0	0	0	0	0
淡水生種					193	2	0	0	5	5	5
珪藻化石総数					206	2	0	0	5	5	5

環境指標種群

K: 中～下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻(RA: A群, RB: B群, RI: 未区分、伊藤・堀内, 1991)

凡例

H.R: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R: 流水に対する適応性

Meh : 汽水生種 al - bi : 真アルカリ性種 l - bi : 真止水性種

Ogh - Meh : 淡水-汽水生種 al - il : 好アルカリ性種 l - ph : 好止水性種

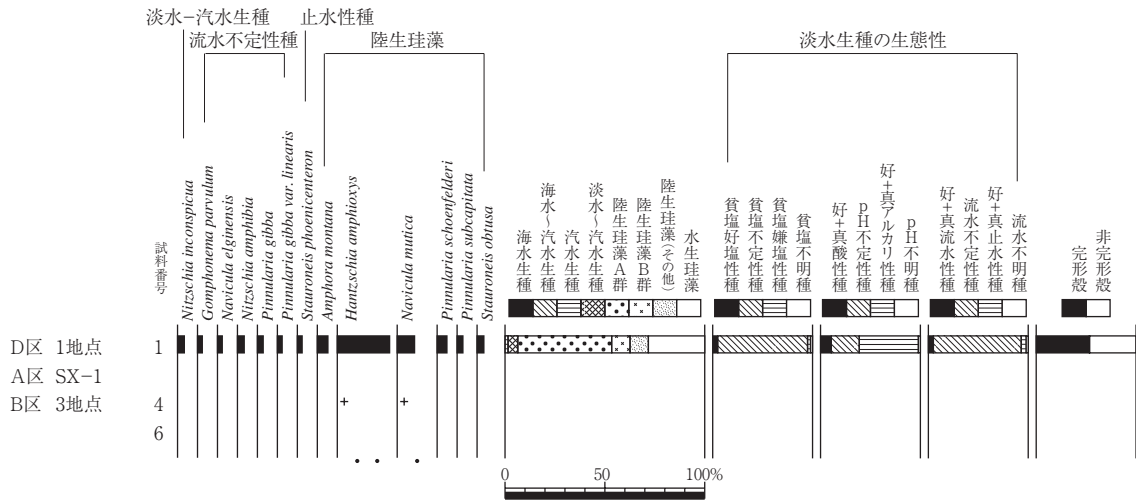
Ogh - hil : 貧塩好塩性種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種

Ogh - ind : 貧塩不定性種 ac - il : 好酸性種 r - ph : 好流水性種

Ogh - hob : 貧塩嫌塩性種 ac - bi : 真酸性種 r - bi : 真流水性種

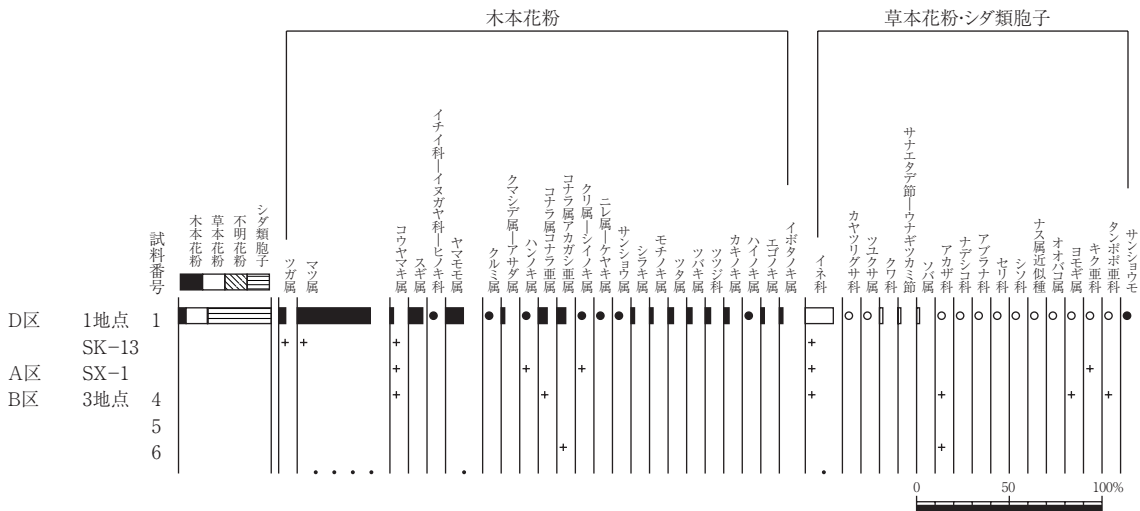
Ogh - unk : 貧塩不明種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種

2. 口楨ヶ谷遺跡の古環境変遷



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図3-3 分析試料の主要珪藻化石群集の層位分布



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料において検出された種類を示す。

図3-4 分析試料の花粉化石群集の層位分布

る。そのため、図中の草本花粉の割合が相対的に低くなる。草本花粉と木本花粉の比率は、草本花粉の方が高い。木本花粉化石をみると、マツ属の割合が高いのが特徴で、ツガ属、スギ属、ヤマモモ属、アカガシ垂属等が検出される。草本花粉では、イネ科、クワ科、ソバ属などが検出される。

④ 植物珪酸体分析

結果を表3-5、図3-5に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

D区1地点-1では、植物珪酸体含量が約1.3万個/gである。栽培植物のイネ属の産出が目立ち、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の含量がそれぞれ3,000個/gを超える。また、ネザサ節を含むタケ亜科の含量も多く、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科などが検出される。2地点の植物珪酸体含量は、中世とされる試料2が約2.3万個/gであり、近世とされる試料1よりも多い。両試料からはイネ属が認

表3-4 花粉分析結果

種 類	試料番号・調査区・遺構・分析地点						
	D区		B区			A区	
	1地点	SK-13	3地点			SX-1	
	1		4	5	6		
木本花粉	ツガ属	4	1	-	-	-	-
	マツ属複維管束亜属	14	-	-	-	-	-
	マツ属(亜属不明)	27	1	-	-	-	-
	コウヤマキ属	2	1	3	-	-	2
	スギ属	8	-	-	-	-	-
	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	-	-	-	-	-
	ヤマモモ属	10	-	-	-	-	-
	クルミ属	1	-	-	-	-	-
	クマシデ属-アサダ属	2	-	-	-	-	-
	ハンノキ属	1	-	-	-	-	1
	コナラ属コナラ亜属	5	-	1	-	-	-
	コナラ属アカガシ亜属	5	-	-	-	1	-
	クリ属-シイノキ属	1	-	1	-	-	1
	ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	-	-	-
	エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	1
	サンショウ属	1	-	-	-	-	-
	シラキ属	2	-	-	-	-	-
	モチノキ属	2	-	-	-	-	-
	ツタ属	3	-	-	-	-	-
	ツバキ属	3	-	-	-	-	-
	ウコギ科	-	-	-	-	-	1
	ツツジ科	3	-	-	-	-	-
	カキノキ属	3	-	-	-	-	-
ハイノキ属	1	-	-	-	-	-	
エゴノキ属	2	-	-	-	-	-	
イボタノキ属	2	-	-	-	-	-	
草本花粉	イネ科	191	2	4	-	-	11
	カヤツリグサ科	12	-	-	-	-	-
	ツユクサ属	1	-	-	-	-	-
	クワ科	23	-	-	-	-	-
	サナエタデ節-ウナギツカミ節	19	-	-	-	-	-
	ソバ属	20	-	-	-	-	-
	アカザ科	2	-	1	-	1	-
	ナデシコ科	10	-	-	-	-	-
	キンポウゲ科	-	-	-	-	-	1
	アブラナ科	2	-	-	-	-	-
	セリ科	1	-	-	-	-	-
	シソ科	1	-	-	-	-	-
	ナス属近似種	1	-	-	-	-	-
	オオバコ属	1	-	-	-	-	-
	ヨモギ属	3	-	1	-	-	-
	キク亜科	3	-	-	-	-	1
	タンポポ亜科	3	-	1	-	-	-
不明花粉	5	-	-	-	-	1	
シダ類孢子	ヒカゲノカズラ属	5	-	-	-	-	-
	ゼンマイ属	3	1	2	-	-	-
	イノモトソウ属	41	-	2	23	3	-
	サンショウモ	1	-	-	-	-	-
	他のシダ類孢子	820	24	41	37	9	4
合 計	木本花粉	104	3	5	0	1	6
	草本花粉	293	2	7	0	1	13
	不明花粉	5	0	0	0	0	1
	シダ類孢子	870	25	45	60	12	4
	総計(不明を除く)	1267	30	57	60	14	23

表3-5 植物珪酸体含量

種 類	試料番号・調査区・遺構・分析地点										
	D区				A区		B区			E区	
	2地点		1地点	SK-13	SX-1	3地点			5地点		
	1	2	1			4	5	6	1	2	
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	1,848	4,949	3,342	982	0	272	0	0	450	437	
タケ亜科ネザサ節	394	2,099	539	2,767	8,261	0	84	217	2,175	2,098	
タケ亜科	714	1,050	1,455	8,479	25,430	883	1,012	578	10,198	12,590	
ヨシ属	0	100	0	0	0	0	0	0	0	0	
ウシクサ族コブナグサ属	74	100	54	89	0	0	0	0	150	87	
ウシクサ族ススキ属	49	300	0	89	0	0	0	0	75	437	
イチゴツナギ亜科	148	750	485	446	0	68	0	0	675	525	
不明キビ型	296	900	216	536	810	136	84	217	525	874	
不明ヒゲシバ型	123	200	54	714	1,620	0	0	72	600	350	
不明ダンチク型	222	300	431	1,160	2,268	0	253	72	525	437	
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	1,848	5,699	3,450	714	0	136	0	0	150	350	
タケ亜科ネザサ節	985	1,350	755	5,712	15,063	68	0	289	825	8,393	
タケ亜科	468	900	431	5,801	18,951	815	422	72	1,725	35,497	
ヨシ属	0	50	0	0	0	0	0	0	0	175	
ウシクサ族	148	250	108	1,428	0	204	0	0	150	1,137	
シバ属	0	0	0	0	324	0	0	0	150	437	
不明	714	650	862	1,785	1,134	475	0	144	750	787	
珪化組織片											
イネ属穎珪酸体	1,355	3,149	862	179	0	136	0	0	225	699	
合 計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,868	10,748	6,576	15,262	38,389	1,359	1,433	1,156	15,373	17,835	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,163	8,899	5,606	15,440	35,472	1,698	422	505	3,750	46,776	
珪化組織片	1,355	3,149	862	179	0	136	0	0	225	699	
総 計	9,386	22,796	13,044	30,881	73,861	3,193	1,855	1,661	19,348	65,310	

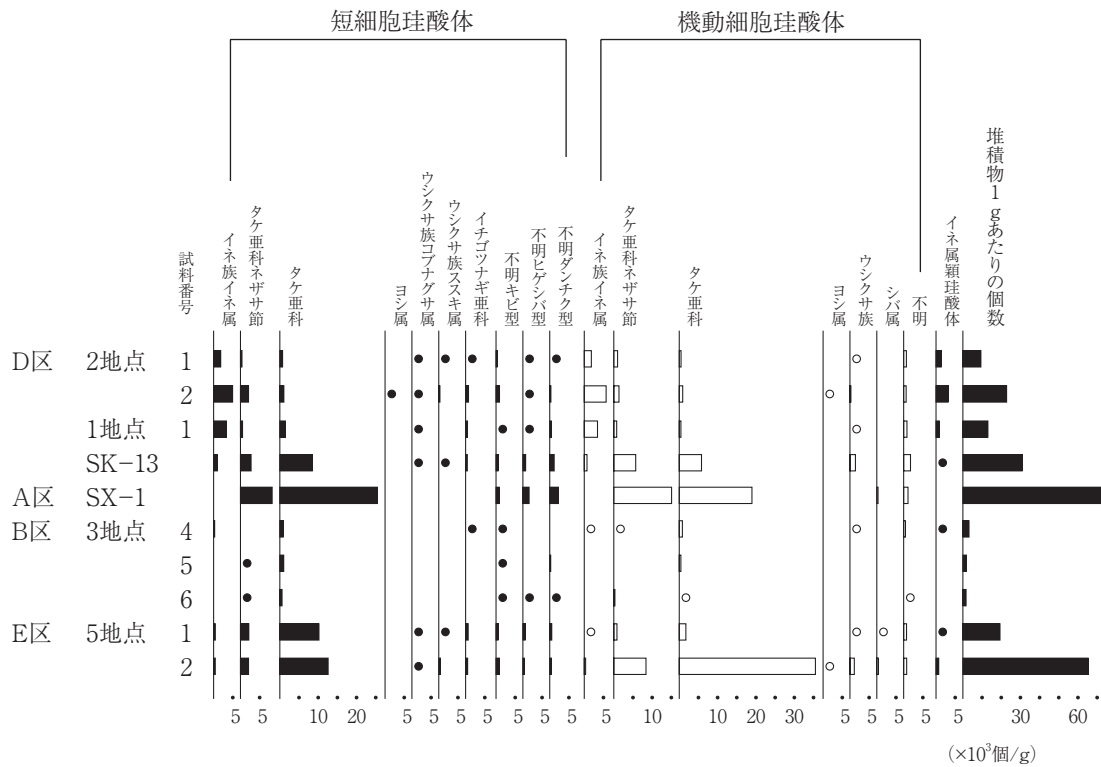
められ、試料2が短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体それぞれ5,000個/g程度、試料1がそれぞれ2,000個/g弱である。また、いずれもイネ属とともにネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。SK-13試料の植物珪酸体含量は約3万個/gであり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。また、イネ属も認められるが、含量は少なく、1,000個/g未満である。

B区3地点の試料番号4-6での植物珪酸体含量は1,700-3,200個/g程度であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。また試料番号4でイネ属も認められるが、含量は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体それぞれ200個/g程度である。SX-1の埋土試料では、植物珪酸体含量が約7.3万個/gであり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が顕著に目立つ。

E区5地点の試料番号1と2の植物珪酸体含量は、試料番号2が約6.5万個/g、試料番号1が約1.9万個/gであり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。またイネ属も認められるが、含量は1,000個/g未満である。

⑤ 樹種同定

樹種同定結果を表3-6に示す。生木試料は、いずれも広葉樹で3種類(コナラ属アカガシ亜属・スタジイ・エノキ属またはヤマグワ)に同定された。一方、炭化材は針葉樹のマツ属複雑管束亜属に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。



堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は250個/g未満の種類を示す。

図3-5 分析試料の植物珪酸体含量

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

複維管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツとアカマツ・クロマツの雑種(アイグロマツ・アカクロマツ)がある。このうち、高知県ではアカマツが二次林や土地的極相、クロマツが沿海地に生育し、アカマツとクロマツが混生する場所で稀に雑種のアイグロマツやアカクロマツが生育する。

・コナラ属アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔

表3-6 樹種同定結果

調査区	遺構名	試料名	樹種
C区	SB-25	P-2	エノキ属
		P-3	スダジイ
		P-4	樹皮
D区	SX-2	材1	コナラ属アカガシ亜属
		材2	コナラ属アカガシ亜属
		材3	コナラ属アカガシ亜属
E区	SK-28		マツ属複維管束亜属

2.口横ヶ谷遺跡の古環境変遷

を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 - 15細胞高のものと複合放射組織とがある。

アカガシ亜属には、イチイガシ、アカガシ、ハナガガシ、ツクバネガシ、アラカシ、ウラジロガシ、シラカシ、オキナワウラジロガシの8種といくつかの亜種・雑種がある。いずれも常緑高木である。高知県では、オキナワウラジロガシを除く7種が確認されている(山中, 1978)。木材組織は類似しており、組織の特徴から種を分類することは困難である。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1 - 2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3 - 4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有するが、小道管に希に階段穿孔が認められる。道管内壁の壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 - 20細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は2 - 3列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 - 15細胞幅、1 - 50細胞高で鞘細胞が認められる。

エノキ属には、落葉大高木となるエゾエノキ、エノキ、落葉高木となるクワノハエノキ、落葉小高木となるコバノチョウセンエノキの4種がある。高知県内では、エゾエノキが溪谷林や石灰岩地帯の広葉樹林内、エノキが平地、川沿い等に生育している。

⑥ 粒度分析

粒度分析結果を表3 - 7, 図3 - 6 ~ 9, Folk & Ward (1957)による評価を総合して結果を表3 -

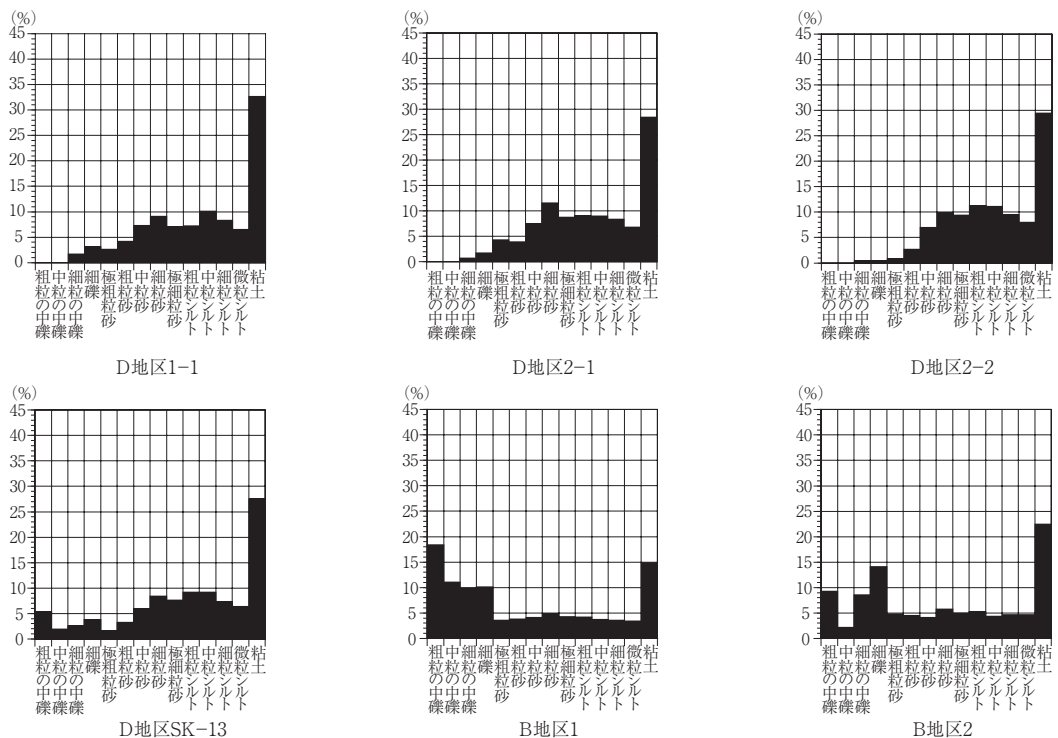


図3 - 6 粒度分析結果(1)

表3-7 粒度分析結果(礫含む)

粒径 区分	礫					砂					シルト				粘土
	中礫				細礫	極粗 粒砂	粗粒 砂	中粒 砂	細粒 砂	極細 粒砂	粗粒 シルト	中粒 シルト	細粒 シルト	微粒 シルト	
	64 ~ 32 mm	32 ~ 16 mm	16 ~ 8 mm	8 ~ 4 mm	4 ~ 2 mm	2.00 ~ 1.00 mm	1.00 ~ 0.50 mm	0.50 ~ 0.25 mm	0.25 ~ 0.125 mm	0.125 ~ 0.063 mm	0.063 ~ 0.031 mm	0.031 ~ 0.016 mm	0.016 ~ 0.008 mm	0.008 ~ 0.0039 mm	
D区 1地点 試料1	0.0	0.0	0.0	1.7	3.2	2.6	4.2	7.3	9.1	7.1	7.2	10.1	8.3	6.5	32.7
D区 2地点 試料2	0.0	0.0	0.0	0.7	1.7	4.3	3.9	7.5	11.6	8.8	9.1	9.0	8.4	6.8	28.4
D区 2地点 試料1	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.8	2.7	7.0	9.9	9.4	11.3	11.1	9.5	8.0	29.5
D区 SK-13	0.0	5.4	1.9	2.6	3.8	1.6	3.3	5.9	8.4	7.6	9.2	9.2	7.3	6.4	27.5
B区 3地点2	0.0	9.3	2.2	8.6	14.1	4.8	4.5	4.1	5.8	5.0	5.3	4.4	4.7	4.7	22.5
B区 3地点3	0.0	26.1	14.9	12.1	7.5	2.0	2.5	2.8	3.5	3.1	2.7	2.7	3.1	3.1	14.1
B区 3地点4	0.0	0.0	0.0	0.2	0.4	0.2	0.6	4.3	14.4	12.4	10.3	7.2	8.0	7.7	34.2
B区 3地点5	0.0	0.0	0.0	0.3	1.0	2.3	2.5	3.6	7.5	8.4	9.1	9.6	7.5	7.3	40.8
B区 3地点6	0.0	0.0	0.0	0.7	4.4	4.5	4.6	5.2	7.8	7.1	8.6	8.3	6.9	6.6	35.4
B区 3地点7	0.0	18.4	11.1	9.9	10.1	3.6	3.8	4.1	4.9	4.3	4.2	3.7	3.6	3.4	14.9
A区 SX-1	0.0	0.0	0.8	1.2	2.5	1.2	1.9	2.7	6.0	6.7	8.5	9.8	7.3	6.9	44.6
E区 5地点1	0.0	0.0	1.7	3.9	5.9	5.6	4.7	6.2	7.3	6.3	7.8	7.3	6.2	5.3	31.7
E区 5地点2	0.0	0.0	4.0	5.4	9.2	5.3	4.4	5.4	7.3	6.5	7.8	6.7	5.7	5.1	27.2
E区 5地点3	0.0	23.9	2.0	6.1	8.3	4.4	3.4	3.3	4.7	4.8	5.5	6.2	4.7	4.4	18.3
E区 5地点4	0.0	0.0	0.6	2.8	5.5	3.9	4.0	4.8	7.7	7.8	9.3	9.3	7.0	6.4	31.1

2.口横ヶ谷遺跡の古環境変遷

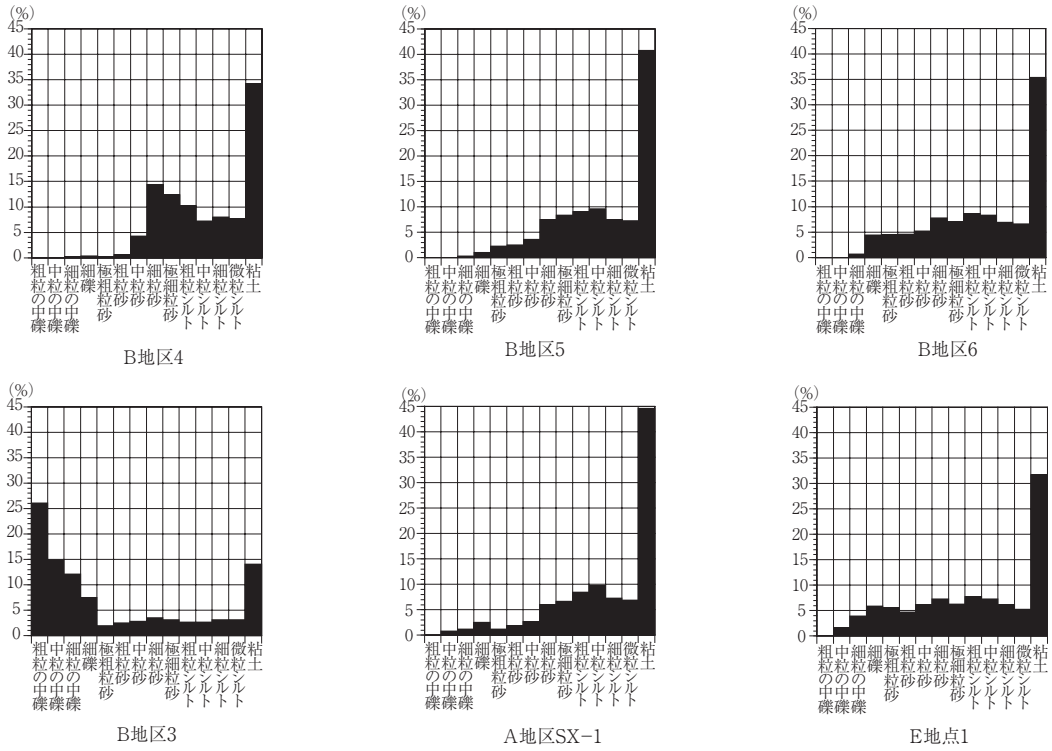


図3-7 粒度分析結果(2)

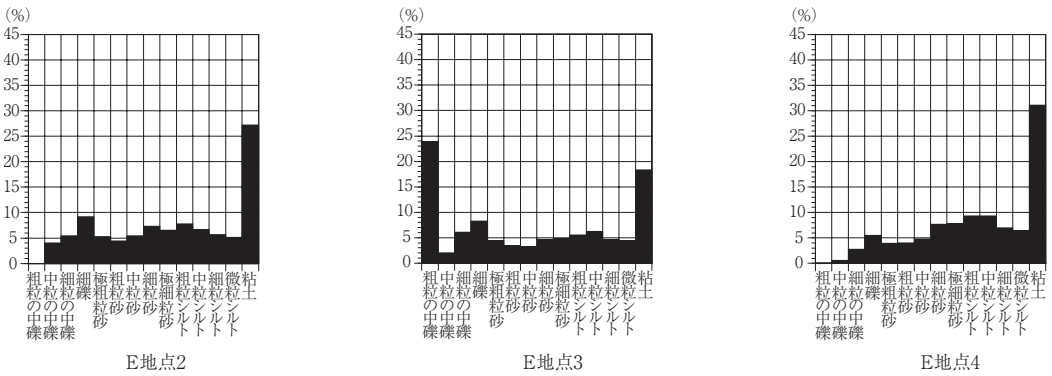


図3-8 粒度分析結果(3)

8に示す。

⑦ 軟X線写真撮影観察

軟X線写真を図3-10に示す。軟X線写真の記載については、久馬ら(1998)の「土壤薄片記載ハンドブック」のほか、堆積物について宮田ほか(1990)など、土壌について佐藤(1990a・b)、森ほか(1992)、成岡(1993)などを参考とした。軟X線の記載は、堆積物について宮田ほか(1990)など、土壌について佐藤(1990a・b)、森ほか(1992)、成岡(1993)などを参考とした。観察結果については、考察において述べる。

⑧ テフラ分析

結果を表3-9, 図3-11・12に示す。重鉱物組成では、試料番号1~3までは斜方輝石, 角閃石, 不透明鉱物の3者を主体とする組成である。その中で、試料番号1は「その他」とした風化粒(鏡下の特徴

表3-8 粒度組成解析結果

試料名	M d (中央値)	M z (平均値)	M o (最頻値)	S k (歪度)	σ (分級度)	K g (尖度)
D区1地点 試料1	7.46 ϕ (0.006mm)	6.45 ϕ (0.011mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.33 著しい負	3.82 非常に悪い	0.93 中間的
D区2地点 試料2	7.16 ϕ (0.007mm)	6.28 ϕ (0.013mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.30 負の歪み	3.53 非常に悪い	0.91 中間的
D区2地点 試料1	7.48 ϕ (0.006mm)	6.62 ϕ (0.010mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.27 負の歪み	3.15 非常に悪い	1.12 突出
D区 SK-13	7.01 ϕ (0.008mm)	5.71 ϕ (0.019mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.36 著しい負	4.00 極めて悪い	0.90 偏平
B区 3地点2	2.92 ϕ (0.132mm)	3.68 ϕ (0.078mm)	細粒砂 -0.66 ϕ (1.585mm)	0.30 著しい正	4.25 極めて悪い	0.58 非常に偏平
B区 3地点3	-0.60 ϕ (1.513mm)	2.13 ϕ (0.229mm)	細粒砂 -0.66 ϕ (1.585mm)	0.94 著しい正	3.90 非常に悪い	0.67 非常に偏平
B区 3地点4	7.52 ϕ (0.005mm)	6.86 ϕ (0.009mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.16 負の歪み	3.16 非常に悪い	0.92 中間的
B区 3地点5	7.72 ϕ (0.005mm)	7.10 ϕ (0.007mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.19 負の歪み	3.53 非常に悪い	1.40 突出
B区 3地点6	7.53 ϕ (0.005mm)	6.47 ϕ (0.011mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.32 著しい負	3.98 非常に悪い	0.93 中間的
B区 3地点7	-0.48 ϕ (1.392mm)	2.21 ϕ (0.217mm)	細粒砂 -0.66 ϕ (1.585mm)	0.92 著しい正	3.93 非常に悪い	0.60 非常に偏平
A区 SX-1	7.83 ϕ (0.004mm)	7.25 ϕ (0.007mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.21 負の歪み	3.81 非常に悪い	1.72 非常に突出
E区 5地点1	7.07 ϕ (0.007mm)	5.66 ϕ (0.020mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.34 著しい負	4.32 極めて悪い	0.79 偏平
E区 5地点2	6.36 ϕ (0.012mm)	5.04 ϕ (0.030mm)	シルト -0.66 ϕ (1.585mm)	-0.28 負の歪み	4.37 極めて悪い	0.68 偏平
E区 5地点3	2.12 ϕ (0.231mm)	3.22 ϕ (0.107mm)	細粒砂 -0.66 ϕ (1.585mm)	0.42 著しい正	4.07 極めて悪い	0.58 非常に偏平
E区 5地点4	7.33 ϕ (0.006mm)	6.10 ϕ (0.015mm)	シルト 7.64 ϕ (0.005mm)	-0.36 著しい負	3.98 非常に悪い	0.93 中間的

注) 評価はFolk & Ward (1957)による

からおそらく酸化鉄粒)が多く、また、主体となる3鉱物間では不透明鉱物がやや多い。試料番号2も同様に「その他」が多いが、3鉱物間では斜方輝石と不透明鉱物がほぼ同量程度で角閃石よりも多い。試料番号3では「その他」は少量であり、3鉱物はほぼ同量程度である。試料番号4については、角閃石が多く、少量の不透明鉱物を伴う組成であり、「その他」も角閃石と同量程度含まれる。

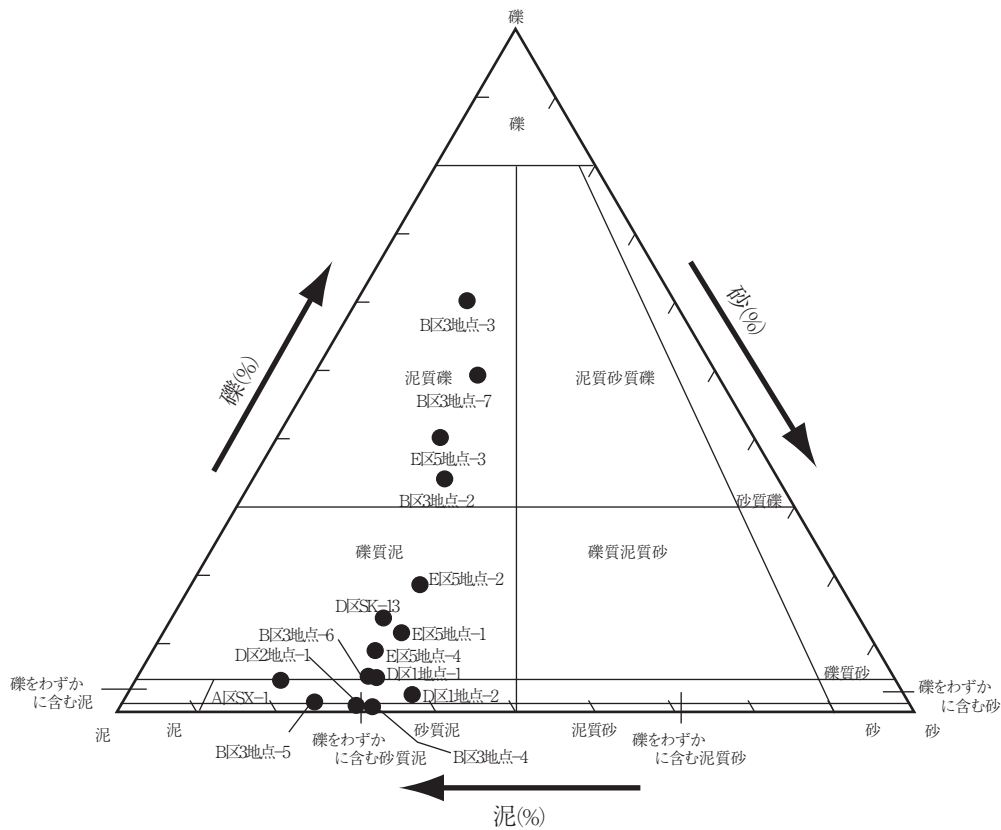
火山ガラス比では、試料番号3~1に少量のバブル型火山ガラスが含まれる。3点の中では、試料番号3に最も多く、上位ほど少ない。試料番号4には火山ガラスはほとんど含まれない。

試料番号3のバブル型火山ガラスの屈折率を測定したところ、n_{1.499} - 1.501の狭いレンジに集中する結果が得られた(図3-12)。火山ガラスの形態と屈折率から、試料番号3の火山ガラスは、始良Tn火山灰(AT:町田・新井, 1976)に同定される。

(4) 考察

① 珪藻分析

全般的に珪藻化石の産出が少なく、堆積環境を検討するのに有意な量の化石が産出したのはD区



公文・立石編(1998)から作成

図3-9 粒度分析結果三角ダイアグラム

1地点の試料1だけであった。16世紀代とされる本試料は、石垣直下の水路状の遺構から採取された。分析試料からは、耐乾性の高い陸生珪藻A群が優占し、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種を伴うことで特徴付けられた。陸生珪藻が多産することから、石垣直下の水路状の遺構では、地下水位は低く、遺構内は乾燥していた(雨水により涵養されている程度)ことが示唆される。なお、他の試料に関しても珪藻化石の産出は少ないが、陸生珪藻A群の産出がめだつ事から、やはり好気的環境に置かれていたと思われる。

② 花粉分析

いずれの試料においても、花粉化石の保存が悪い。いずれの試料も針葉樹花粉やシダ類胞子の産出が目立つが、これらの化石は広葉樹花粉に比べ風化に強い(徳永・山内, 1971)である。ダイアグラムで表現されたD区1地点の試料1でもシダ類胞子の割合が非常に高いが、これは保存状態が悪いことに由来するものであり、周辺にシダ類群落が卓越する植生が存在していることを示しているとは考えにくい。

今回の分析で唯一花粉分析結果が得られた16世紀代の層準では、木本花粉について見てみると、マツ属花粉が多産していることが読みとれる。分析試料の時代をふまえると、このマツ属の増加は、人為的な植生改変が進んでマツ林が増加したことに由来するものと推測される。しかし、化石の保存状態が悪いことから、風化に強い針葉樹花粉が相対的に増加した可能性も否定できない。この点

は、本地域の花粉分析結果の蓄積を待って、さらに検証していくことが必要である。

一方、草本類をみると、木本花粉に比べて多く検出されており、特に、イネ科、クワ科等の割合が高い。このことから、遺跡周辺には開けた草地が存在したと思われる。栽培植物では、ソバ属が検出されている。調査区やその周辺において、16世紀代にソバの栽培が行われていたことを示唆するものであろう。

③ 植物珪酸体分析

B区3地点では、植物珪酸体の含量が少ない。植物珪酸体は、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所では、風化が進みやすいと考えられている(江口, 1994・1996)。現地での堆積層観察結果や珪藻化石の産状等から考えると、B区3地点は好気的な土壤環境であった可能性が示唆され、これが風化の要因になっていると思われる。植物珪酸体ではネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。A区 SX-1でも、同様にネザサ節を含むタケ亜科が多産する。ネザサ節は、比較的乾燥し開けた場所に生育することの多い種類である。B区3地点とA区 SX-1の分析層準は、年代測定および発掘調査結果から、縄文時代晩期頃から弥生時代に形成されたと考えられる。上記の検討結果および今回実施した調査・分析結果をふまえると、当該期に分析地点およびその周辺では、ネザサ節を含むタケ亜科が多く分布するような乾燥した土壤環境が形成されており、そのような領域において比較的開けた植生景観が広がっていたことが推定される。

E区5地点の16世紀代とされる試料番号1と古代とされる試料番号2の植物珪酸体も、下位同様にネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、これらが周辺に生育していたと思われる。また、栽培植物であるイネ属も認められる。周辺での栽培に由来する可能性もあるが、微量であることから明確ではない。

D区1地点-1および2地点ではイネ属が認められた。2地点の試料2(16世紀代)で5,000個/g程度、試料2(近世)で2,000個/g弱であった。これらの地点では、他の分析地点よりも高いイネ属珪酸体含量を示す。試料採取地点は、16世紀代から近世の棚田を構成する耕作土や水路状遺構から採取されている。このことから、1地点・2地点で比較的多く検出されたイネ属珪酸体は、棚田での稲作に由来するものと判断される。また、イネ属以外の珪酸体をみると、下位と同様にネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、これらが周辺に生育していたと思われる。

④ 樹種同定

C区SB-25の柱穴から出土した柱材には、エノキ属とスダジイが認められたが、P-4は樹皮の

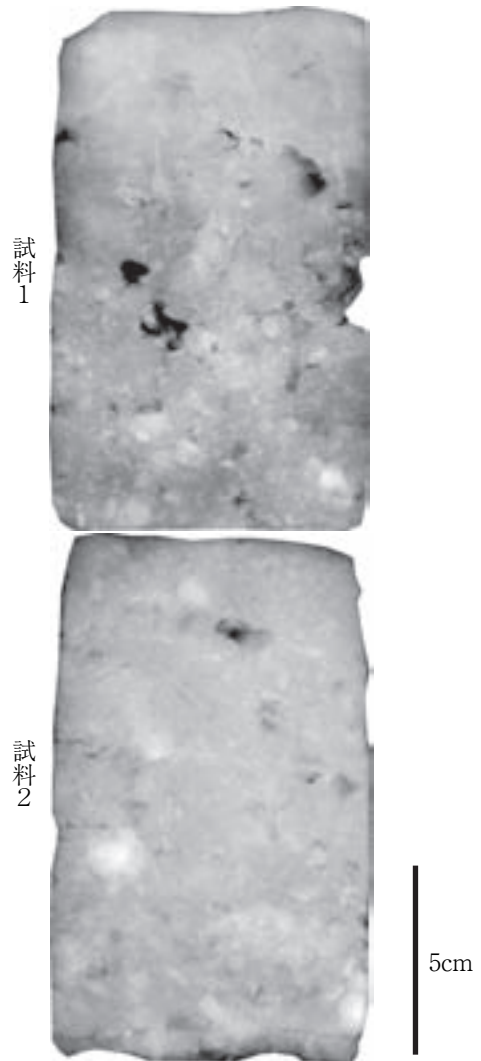


図3-10 B区3地点下部の軟X線写真

2.口槇ヶ谷遺跡の古環境変遷

表3-9 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	30	3	35	0	2	0	77	103	250	10	0	0	240	250
2	55	1	40	1	2	2	66	83	250	22	0	4	224	250
3	66	3	62	3	0	0	91	25	250	57	0	11	182	250
4	0	0	109	0	0	3	35	103	250	1	0	0	249	250

T.P.
8.0m

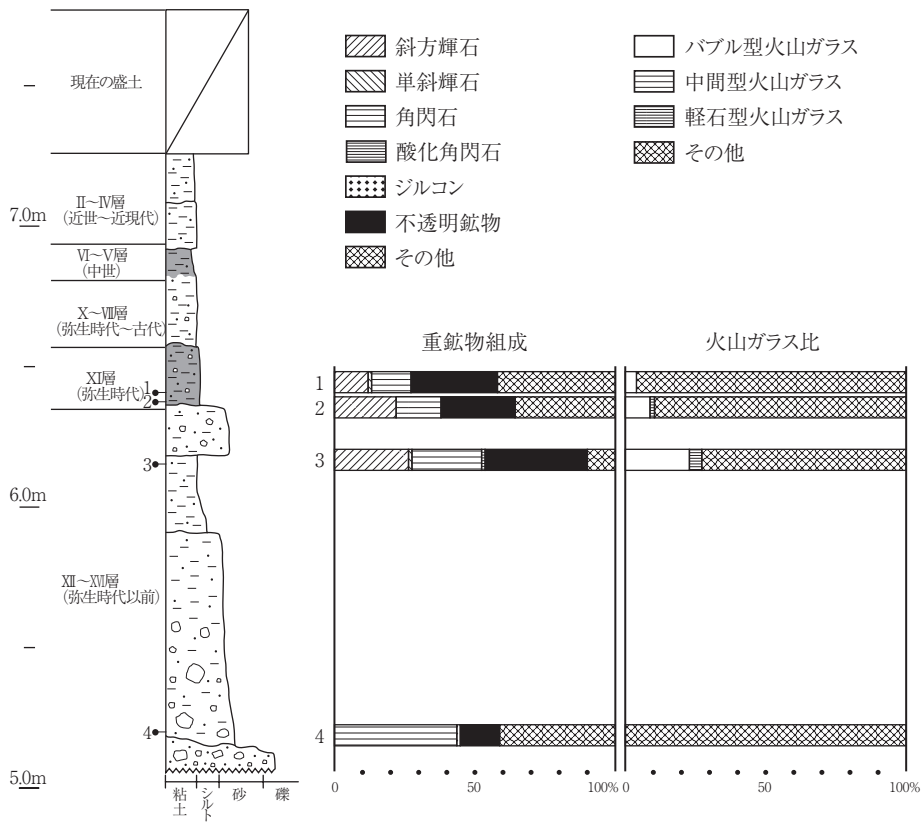


図3-11 重鉱物組成および火山ガラス比

みで種類は不明である。この結果から、柱材として少なくとも2種類が利用されていたことが推定される。スダジイは、重硬で強度が高いが、加工はやや困難で耐朽性が低い。一方、エノキ属は、重さ・強度共に日本産広葉樹の中では中庸の部類に入る。スダジイは暖温帯常緑広葉樹林の主構成種であり、エノキ属には扇状地や自然堤防上等に生育する種類(エノキ)が含まれる。

SX-1から出土した木材は、用途等の詳細は不明であるが、全てアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属は重硬で強度が高い材質を有する。アカガシ亜属は暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成種であり、現在の遺跡周辺に分布し、上記した花粉分析結果でも確認されている。

SK-28 から出土した炭化材はマツ属複維管束亜属に同定された。何らかの理由により火を受けたことが推定されるが、用途の詳細は不明である。マツ属複維管束亜属の材質は、針葉樹としては比較的強度が高い部類に入り、松脂を多く含むために保存性・燃焼性がある。マツ属複維管束亜属にはアカマツ・クロマツの2種があるが、いずれも陽樹であり、アカマツは暖温帯域における二次林の代表的な樹種である。

以上の各遺構から出土した木材の樹種は、現在の本地域の植生および上記した花粉分析から、いずれの樹種も本遺跡周辺で入手可能な木材であったことが考えられる。

⑤ F区谷埋め堆積物のテフラ分析

D・E・F区の谷埋め堆積物の試料番号3(Ⅷ層)に挟在するテフラの火山ガラスは、その形態と屈折率の特徴から、始良Tn火山灰(AT:町田・新井, 1976)に由来すると考えられる。

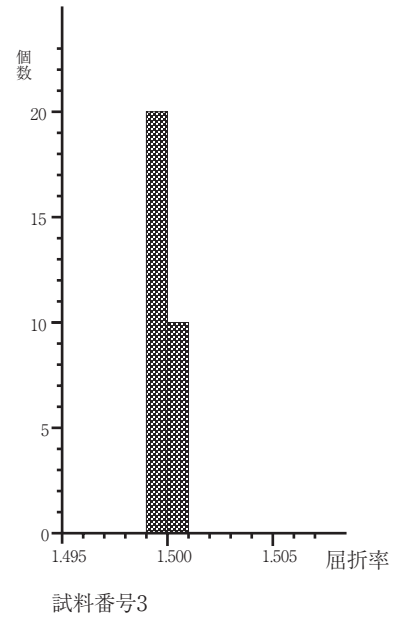


図3-12 火山ガラスの屈折率測定結果

ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定(例えば、松本ほか, 1987;村山ほか, 1993;池田ほか, 1995;宮入ほか, 2001など)から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぼとされている(町田・新井, 2003)。町田・新井(2003)は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。

上記のようなAT火山灰の噴出年代から、米倉ほか編(2001)に示されているテフラと海洋酸素同位体ステージ(MIS)との関係に従えば、Ⅷ層は、後期更新世後半の最終氷期最寒冷期へと向かう時期(ステージ3の終わり頃)に形成されたと判断される。この直上の古土壌をなすⅪ層では、弥生時代の遺物が検出されている。このことから、更新統と完新統の境界は、分析地点においてⅧ層とⅪ層の間に存在すると考えられる。

⑥ 発掘調査区の遺跡形成過程

i 口槇ヶ谷遺跡の立地

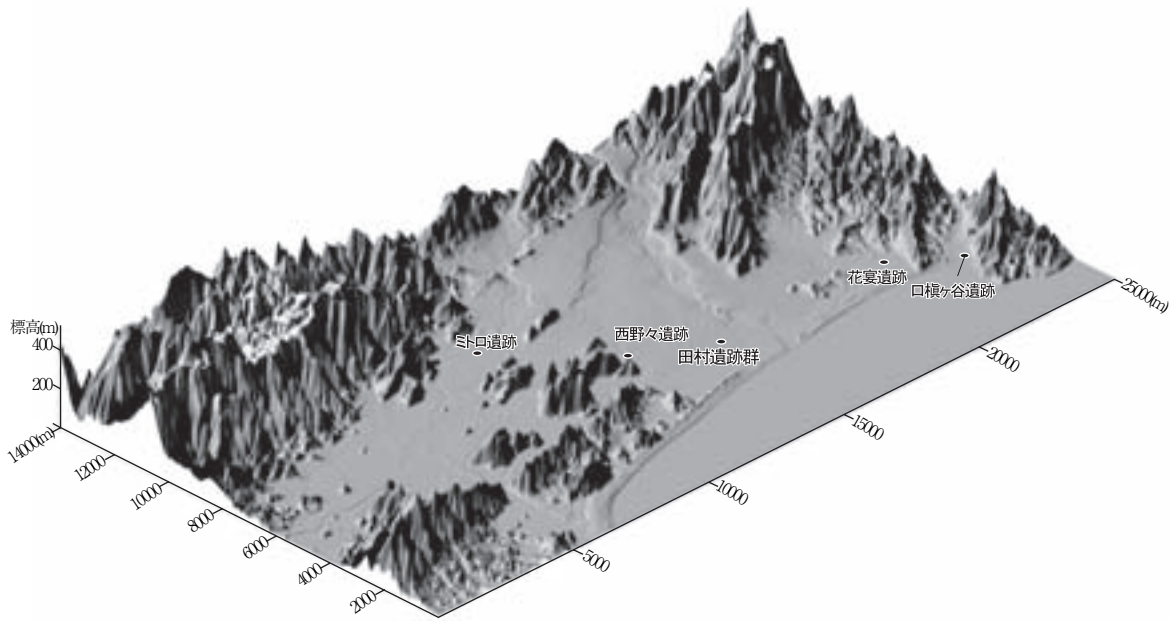
本節では前節の分析もふまえ、発掘調査区の環境変遷と人間活動について述べていく。

口槇ヶ谷遺跡は、夜須川が形成した河谷内に位置する(図3-13・14)。調査地点は、夜須川下流の左岸の山地斜面麓部に存在する(図3-14)。調査区は、山地斜面の形成された開析谷の谷口部に立地しており、調査前には棚田として利用されていた(図3-15・16)。

ii A・B区の堆積状況

発掘調査の結果、今回の調査区では2条の谷地形が検出された(図3-1)。これらの谷は、A・B区とD・E・F区の境界部付近に延びる尾根状地形を挟んで存在する。A・B区とD・E・F区の谷では、それぞれ異なった層相を持つ堆積物によって埋積される。

2.口横ヶ谷遺跡の古環境変遷



国土地理院数値地図50mメッシュ(標高)を使用して作成

図3-13 調査地点位置図

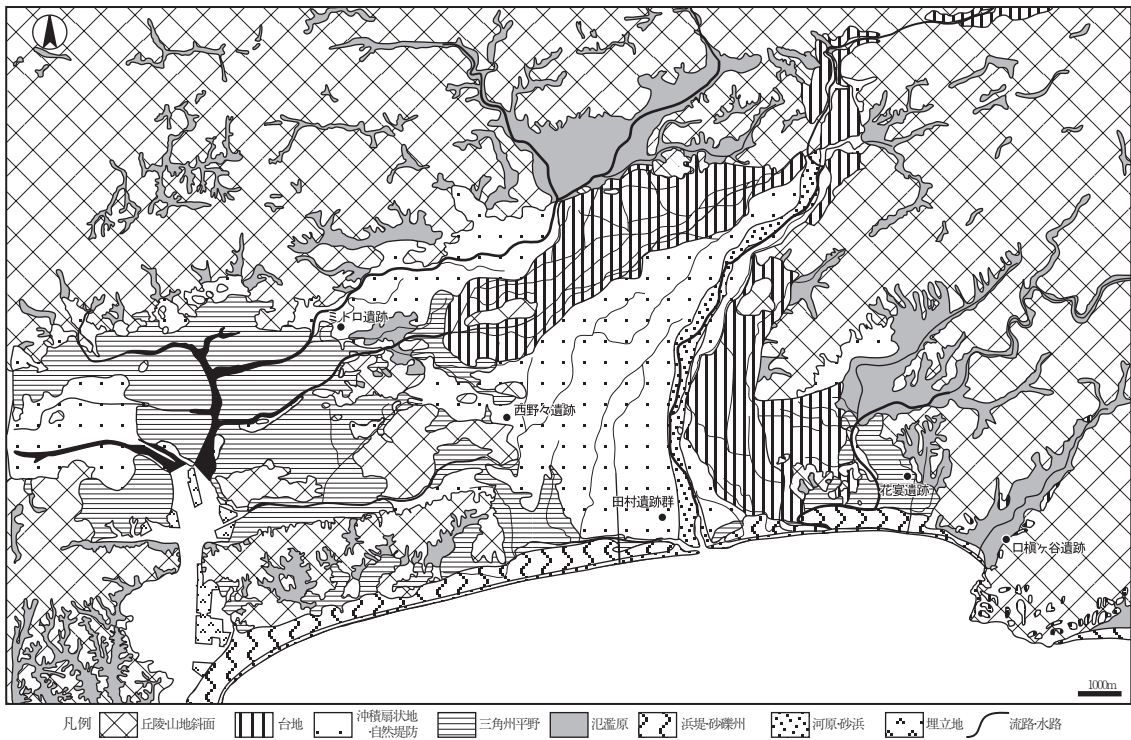


図3-14 口横ヶ谷周辺の地形分類図(高知県, 1966をもとに一部を改変して作成)

A・B区で検出された谷は、背後の山地斜面を侵食する開析谷へと連続していく(図3-1・3-15・3-16)。この谷内(B区3地点)では、粒度分析結果からともに分級度が非常に悪い、細礫～中礫を主体とし粘土を多量に含む泥質礫層と、礫混じり砂質泥層の累重が認められる。B区3地点では、最下部に泥質礫層、下部の腐植質に富む礫をわずかに含む砂質泥層、その直上に砂質泥層の薄層、上部に泥

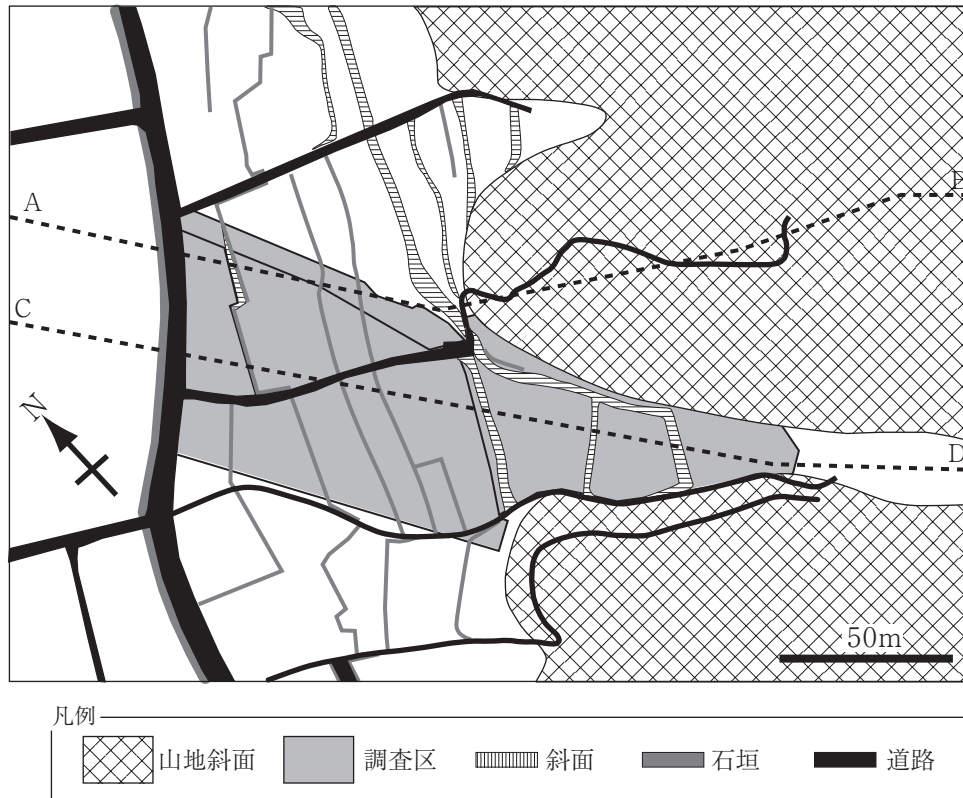


図3-15 調査区位置図

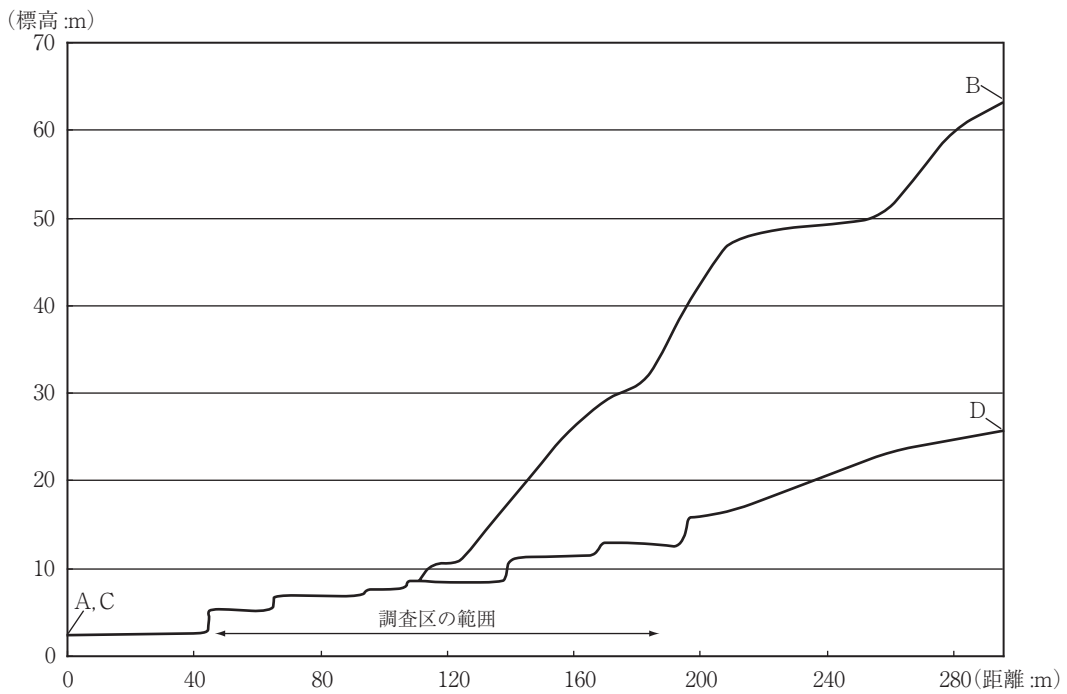


図3-16 調査区地形断面図

質礫層が累重する。最上部に累重する泥質礫層については、葉理が認められず塊状無層理をなしていることが、現地調査において観察された。このような特徴から、この泥質礫層は背後の開析谷から流出してきた土石流堆積物と判断される。一方、礫混じりの砂質泥層は、黒褐色を呈し非常に多くの

表3-10 胎土分析試料一覧

番号	遺跡名	地区名	図版番号	器種	器形	時代
1	夜須東地区(口横ヶ谷遺跡)	B区	217	瓦器(SD-22)	椀	13C
2	夜須東地区(口横ヶ谷遺跡)	A区	185	瓦器(SD-20)	椀	12C後半
3	夜須東地区(口横ヶ谷遺跡)	A区	116	瓦器(VII層)	椀	13C
4	夜須東地区(口横ヶ谷遺跡)	A区	131	瓦器(IX層)	椀	13C
5	夜須東地区(口横ヶ谷遺跡)	A区	209	瓦器(SD-21)	椀	13C
6	夜須東地区(口横ヶ谷遺跡)	B区	215	土師質土器(SD-22)	杯	12C後半
7	夜須東地区(口横ヶ谷遺跡)	B区	224	土師質土器(P-5)	杯	12C後半

腐植を含む。本層は、軟X線写真による層相観察の結果、非常に激しい生物擾乱を受けていることが確認される(図3-10)。このような特徴から、礫混じりの腐植質砂質泥層は、開析谷からの出水時におもに泥分が供給されるような場所において、好気的な環境下で累積的に形成された土壌と考えられる。

上記した堆積層のうち、土壌化が顕著な礫混じりの砂質泥層から採取した腐植からは、 2820 ± 60 、 2540 ± 50 、 2410 ± 60 yrs BP (2σ : Cal BC 1190 - 390)の年代値を示す。また、A区 SX-1埋土からは、弥生時代中期の可能性のある土器片が検出されている。これらの堆積層を覆う塊状無層理の泥質礫層では、包含される土器から古代に累重したことが推定される。このような泥質礫層と土壌化が顕著な礫混じりの砂質泥層の年代値からは、A・B区では、背後の開析谷からの間欠的な土石流による土砂流出によって埋積が進行したことがうかがえる。

顕著な土壌化を受けた礫混じりの腐植質砂質泥層では、湿潤な場所を好むヨシ属がまったく検出されず、明るく開けかつ乾いた場所を好むネザサ節を含むタケ亜科が多産する植物珪酸体分析結果が得られている。これらの分析結果および年代値から、A・B区では、縄文時代晩期から弥生時代前期頃に、土石流などの影響がない非常に安定し土壌が発達するような場所に、タケ亜科などの植物が分布する明るく開けた空間が展開していたことが推定される。

iii D・E・F区の堆積状況

一方、D・E・F区の谷は、背後に開析谷を持たず、その谷頭は調査区背後の斜面に存在する(図3-1・3-15・3-16)。この谷では、A・B区の谷と異なり、特に中部～上部の層準において砂礫層の累重がほとんど認められない(図3-1)。この谷埋め堆積物の中部～上部(XII～XIV層)では、古土壌を挟在する礫混じりの泥質砂～砂質泥層が堆積していた。但し、谷埋め堆積物の基盤層や基底部では、土石流の堆積物と考えられる塊状をなし基質支持の礫層や細礫～中礫混じりの泥質砂層(XI～XV層)が累重していた。これらの堆積物では、古土壌を挟在しない礫を多く含む土石流性の堆積物を主体となす層準(XII～XIV層)から、古土壌を挟在するより細粒な層準(XI～XV層)へと上方細粒化を示す。

古土壌を挟在する細粒な層準(XI～XV層)では、出土遺物から弥生時代頃から中世に形成されたと

表3-11 薄片観察結果(1)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計										
		鉱物片										岩石片							その他									
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	アクチノ閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩		流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ひん岩	結晶片岩	緑色片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体
1	細礫																		1									1
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂															1												1
	中粒砂	1		1													1			1								4
	細粒砂	2	3	1								1	1															8
	極細粒砂	13	6	5			1					1	3							1							1	31
	粗粒シルト	15	3	11			1						3													1		34
	中粒シルト	10	4	8							1	1	1														1	26
	基質																										185	
	孔隙																										13	
2	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂																											0
	中粒砂	1														1												2
	細粒砂	1														1				1								3
	極細粒砂	2	2	1												1												6
	粗粒シルト	6	1	3			1			1	1		2															15
	中粒シルト	23	3	3						1	1	1															1	33
	基質																										232	
	孔隙																										13	
3	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂																											0
	中粒砂															2												2
	細粒砂	1										1					1											3
	極細粒砂	2	1	2								4																9
	粗粒シルト	10	5	5								4								1						1		26
	中粒シルト	12	5	11							1	1															1	31
	基質																										219	
	孔隙																										5	
4	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂	1	1																	1								3
	中粒砂	1					1					1			1													4
	細粒砂	5	4	1								1			1	1				2						1		16
	極細粒砂	8	2	3								1	1							1								16
	粗粒シルト	21	3	15																1						1	1	42
	中粒シルト	22		11																1							1	35
	基質																										222	
	孔隙																										14	

表3-13 土器胎土の蛍光X線分析結果(科学組成)

試料番号	主要元素												微量元素			
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Igloss	合計	Rb	Sr	Zr	Ba
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)
No.1	65.23	0.90	18.91	4.76	0.01	0.39	0.19	0.41	1.54	0.56	7.10	100.00	65	44	434	332
No.2	54.40	1.01	23.66	3.20	0.03	0.63	0.43	0.50	1.70	1.02	13.42	100.00	89	91	178	507
No.3	58.39	1.03	22.51	8.21	0.01	0.93	0.12	0.35	1.50	0.42	6.53	100.00	70	44	212	261
No.4	67.34	0.91	18.89	4.95	0.01	0.71	0.17	0.52	1.52	0.19	4.79	100.00	86	50	246	301
No.5	61.21	1.01	22.79	5.47	0.01	0.71	0.12	0.28	1.59	0.84	5.97	100.00	97	46	223	384
No.6	69.57	0.77	14.45	2.41	0.00	0.17	0.29	0.88	1.56	0.66	9.24	100.00	59	119	280	533
No.7	66.39	0.87	16.29	2.08	0.01	0.58	0.29	0.97	1.72	0.85	9.95	100.00	77	125	263	651

以上のようなA・B区とD・E・F区の谷における谷埋め堆積物の検討から、これらの谷で認められた堆積層サクセッションの違いは、後背に山地へ連続する開析谷の存在の有無によるものと判断される。

なお、D・E・F区では、開析谷以外の場所では、基盤岩が比較的浅い深度で検出される。特に、山地斜面に近い部分では、表土直下で基盤岩が確認される。この部分に存在する堆積層に含まれる礫は、垂角礫や角礫が多く含まれる。粒度分析を実施したD・E地区を構成する堆積層のほとんどは、淘汰が非常に悪い礫質泥で構成される。これらの堆積層では、粘土に明瞭なピークが認められる。調査区およびその周辺に存在する基盤岩は、非常に風化が進行していることから、D・E地区の堆積層の粒度分析結果で認められる粘土のピークは、基盤岩の風化物質に由来するものと考えられる。これらの調査区では、中世以降の棚田形成に伴う削平・盛土により、初生的な堆積物がほとんど認められない状況となっている。そのため、D・E地区で実施した粒度分析実施層準のほとんどが人為層に相当している。E地区の古代以前の層準は、初生的堆積層の可能性はあるが、この部分でも人為層と同様の粒度組成を示す。このような粒度組成から、谷口滯筋付近周辺では、山地斜面から重力性の地形営力によって碎屑物が運搬されるような崖錐からなる堆積場であったことが推定される。

iv 発掘調査区における古代以降の堆積過程

上述したように、A・B区の谷内を埋積した土石流堆積物である泥質礫層は、包含される考古遺物から古代頃に累重したことが推定される。当該期にD・E・F区の谷では、埋積がかなり進んだ状態にあったことが発掘調査結果で確認されている。その後、古代以降には、調査区内の全域で堆積物累重が顕著でなくなることが、発掘調査および現地での堆積物観察から確認される。

口槇ヶ谷遺跡で実施された古代以降の層準の微化石分析結果について着目してみると、古代から

2.口楨ヶ谷遺跡の古環境変遷

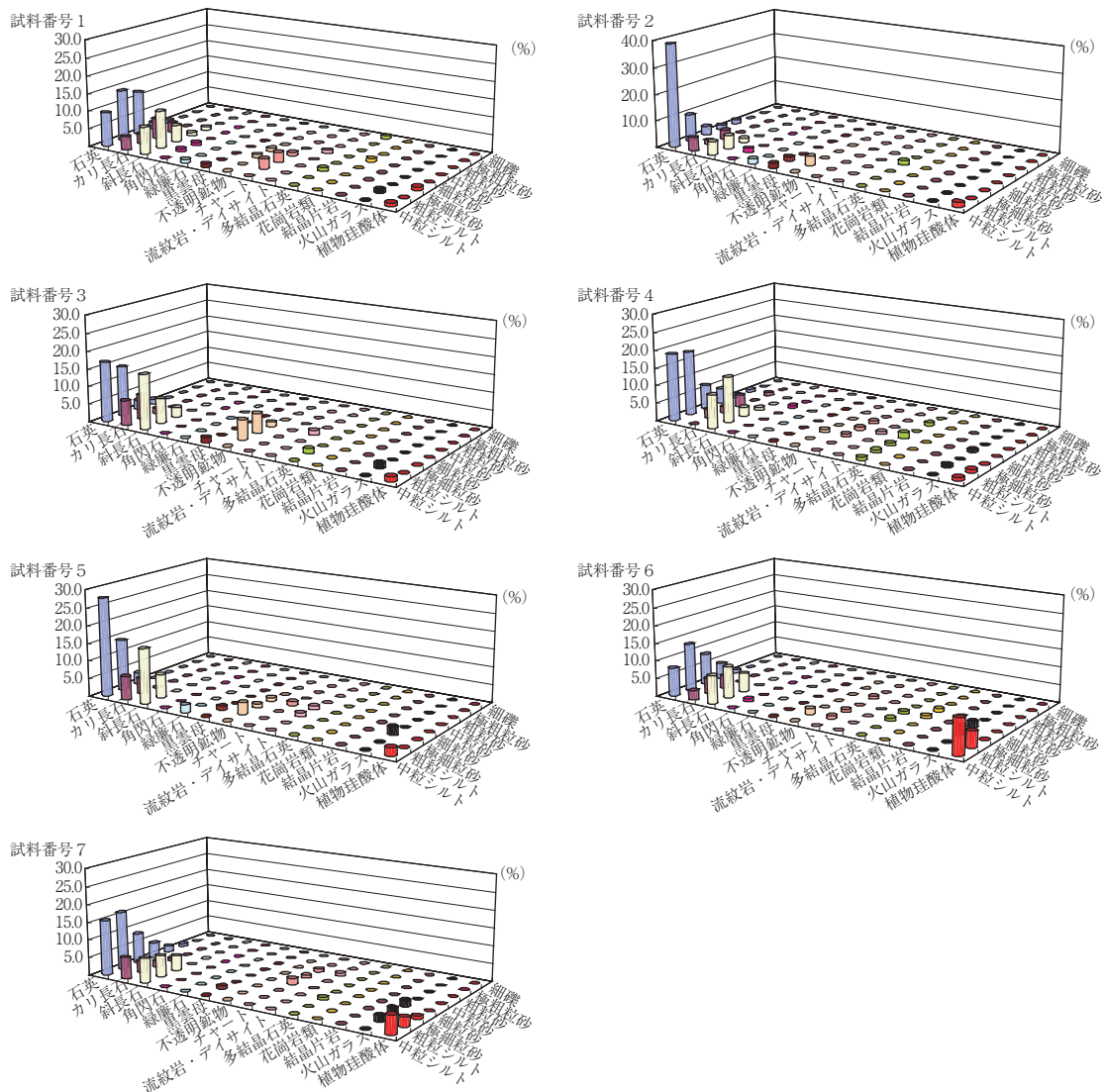


図3-17 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

近世の層準の植物珪酸体分析では、それ以前の層準と同様にネザサ節を含むタケ亜科が多産することが判る。このような植物珪酸体分析結果から、今回の発掘調査区が当該期に明るく開けかつ乾いた場所が多く広がっていたことが推定される。

珪藻分析では、化石の保存状態がほとんどの試料で極めて不良であった。珪藻化石を構成するシリカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている(千木良, 1995)。また、珪藻殻と類似した化学組成を持つ植物珪酸体は、土壌の風化によって溶解する可能性が指摘されているほか(近藤, 1988), pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所において風化が進みやすいと考えられている(江口, 1994, 1996)。その他、湿原の乾燥化によって珪藻殻数が急減し保存が悪くなる現象もみられる(小杉, 1987)。考古遺跡においても、安定した地表面となり土壌発達が認められる遺構検出面で、珪藻化石の産出が極めて不良となることが指摘されている(井上, 2003)。このような珪藻化石の風化に関する事例のうち、今回の分析では、調査区が長期間にわたって好氣的な土壌環境下にあったことが、その要因であると

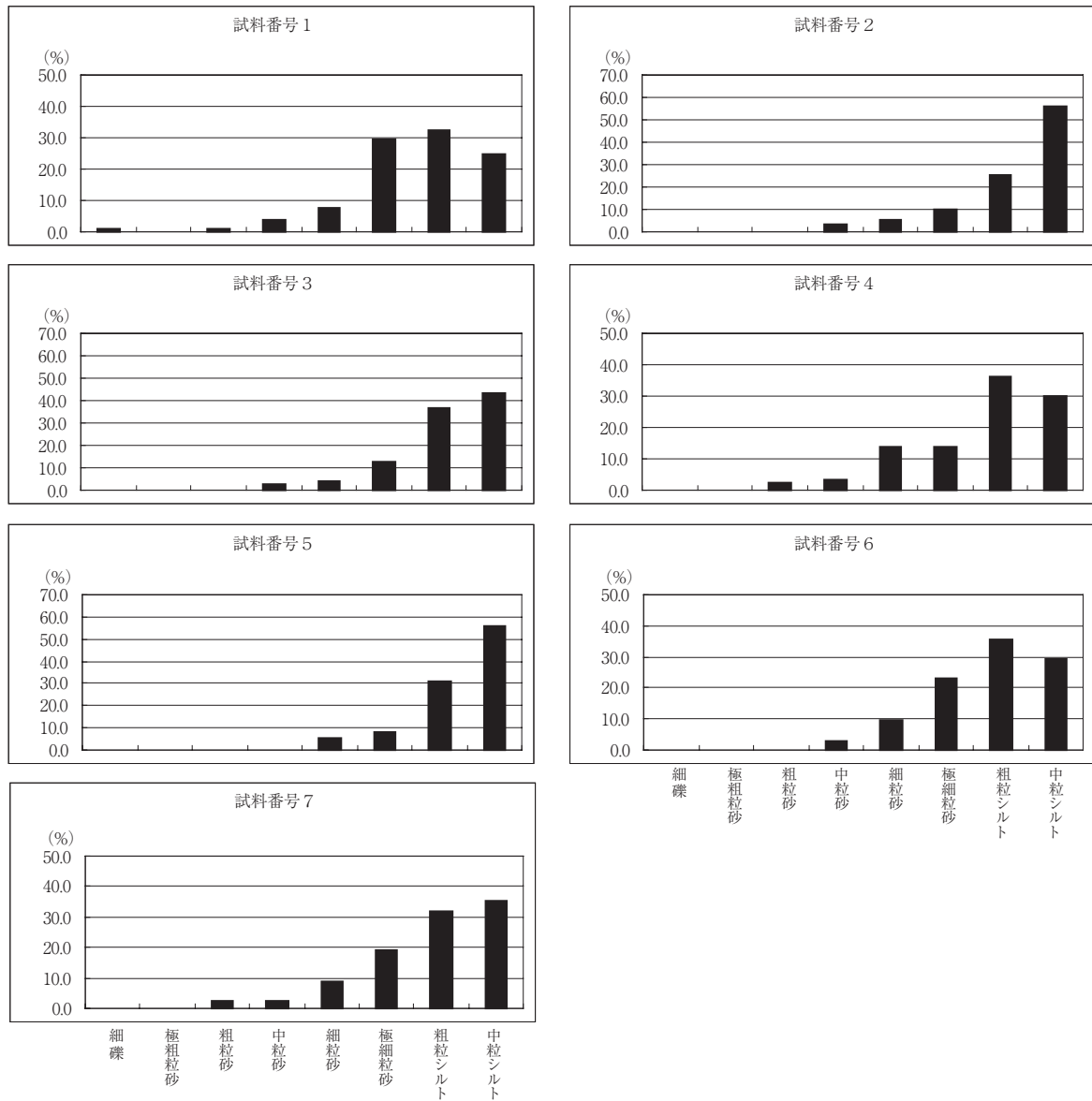


図3-18 胎土中の砂の粒径組成

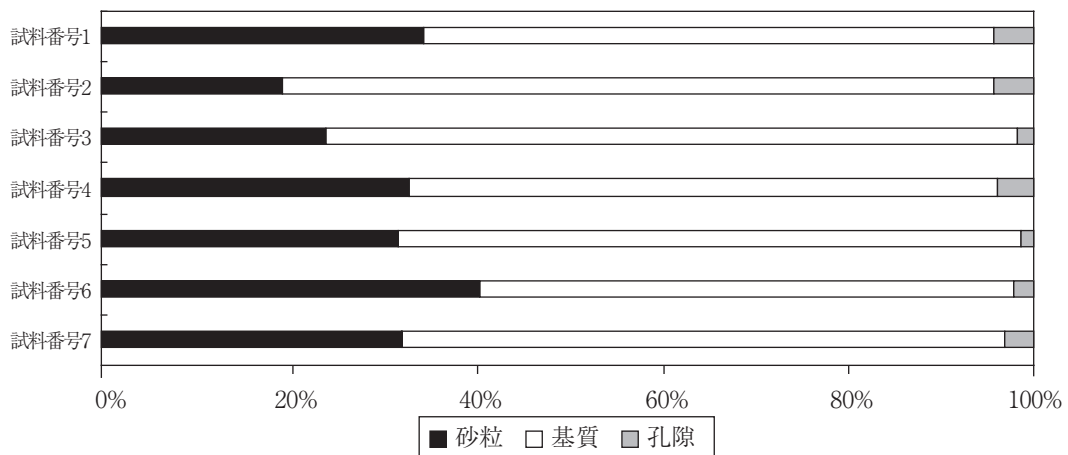


図3-19 胎土の砂粒・基質・孔隙の割合

堆積層観察と植物珪酸体分析結果から推測される。

その他、古代以降の層準の微化石分析において注目される点は、それ以前の時期の堆積物に含まれていなかった栽培種であるイネ属珪酸体が検出されたことにある。古代の堆積層や遺構埋土では、300～700個/gとその含量が非常に少ない。植物珪酸体分析結果のみの判断からは、古代には調査区内において稲作を示唆することが難しい。しかしながらこの時期には、調査区内へなんらかの人間活動によって稲が持ち込まれていたことや、分析地点やその周辺で稲作地が存在していた可能性について指摘できる。中世末期以降の層準では、イネ属珪酸体の含量がほとんどの試料で3000個/gを超えるようになる。これらの試料は、粒度分析結果から礫質泥や礫をわずかに含む砂質泥層に区分される耕作土から採取されている。

よって、中世末期から近世には、調査区内において稲作が行われるような耕作地が存在していたと判断される。発掘調査成果をふまえると、本調査区では中世末期以降に棚田の造成および維持・管理およびそこの稲作を主とする人間活動が行われていたと判断される。さらに花粉分析では、中世末期の試料からソバ属が検出されており、当該期に調査区やその近辺でソバが栽培されていたことも示唆される。さらに花粉分析では、棚田石垣直下の中世末期の水路状遺構埋土において、マツ属が優占する分析結果を得ることであった。この分析結果から、中世末期に口横ヶ谷遺跡周辺の森林では、人間による強い植生干渉を受けたマツ属などからなる二次林が分布していたことがうかがえる。このような二次林化は、今回の調査区で認められたような中世以降の耕作地拡大やそれに伴う森林資源の過剰利用によって進行した可能性が考えられる。

⑦ 小結

- ・ 上述した現地調査と分析結果から、口横ヶ谷遺跡は、山地斜面基部の崖錐上および、更新世末期頃までに形成され、その後段丘化したと考えられる沖積錐と、その沖積錐を再侵食して形成された開析谷からなる地形上に立地すると判断された。
- ・ Ⅷ層からは、噴出年代が2.5～3.2万年前におよぼとされる始良Tn火山灰の挟在が認められた。この分析と発掘結果から、更新統と完新統の境界は、分析地点においてⅧ層とⅨ層の間に存在すると

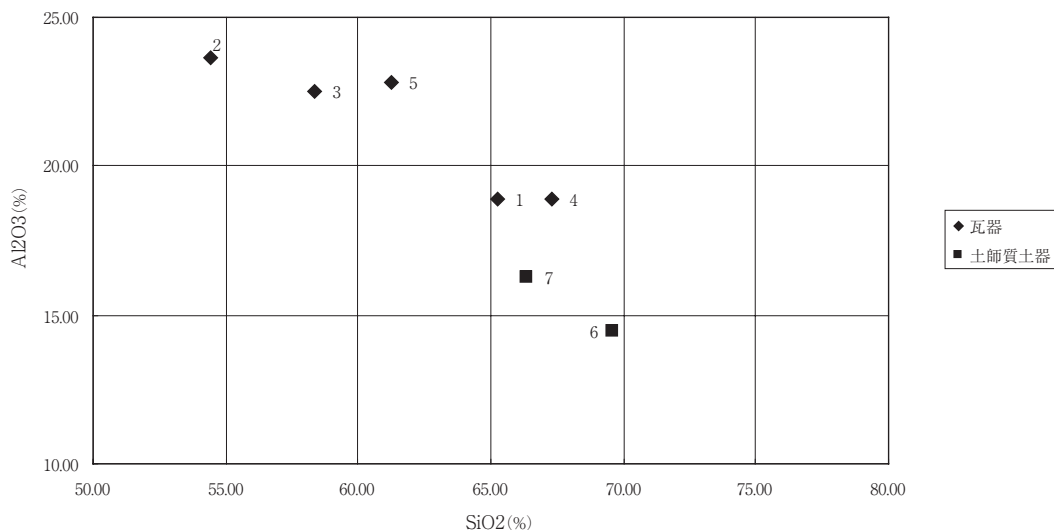


図3-20 口横ヶ谷遺跡出土試料のSiO₂ - Al₂O₃散布図

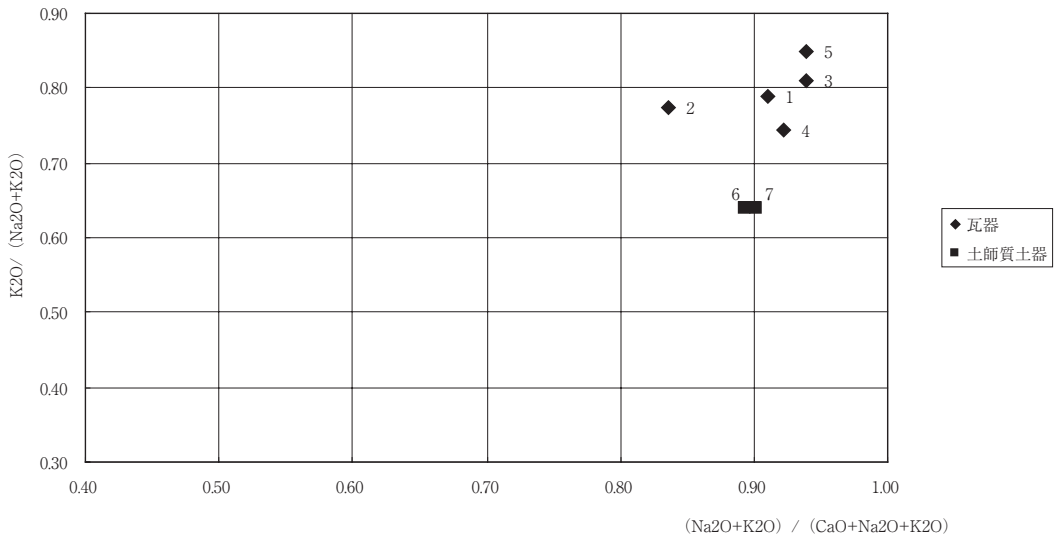


図3-21 口横ヶ谷遺跡出土試料の長石類主要元素の散布図

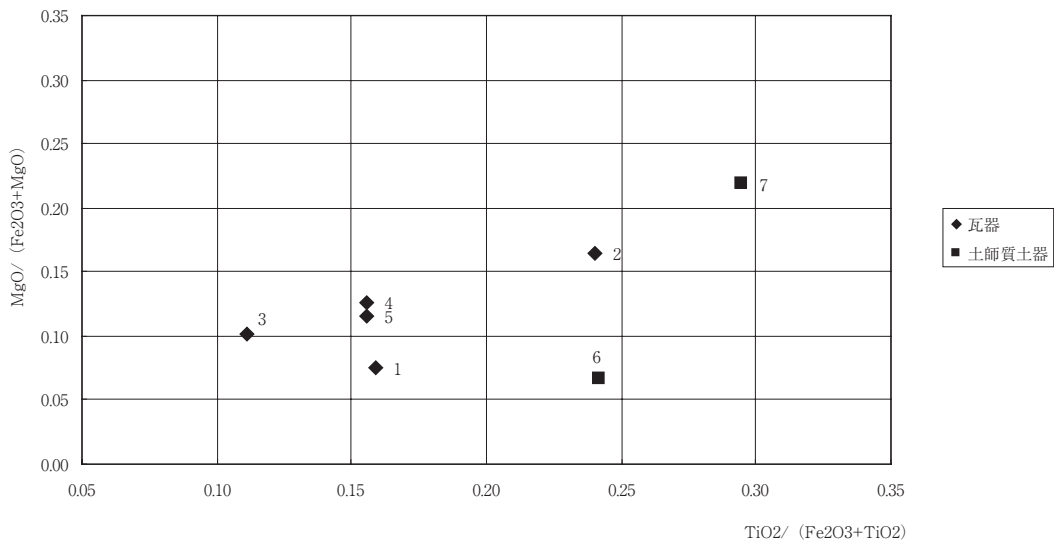


図3-22 口横ヶ谷遺跡出土試料の有色鉱物主要元素の散布図

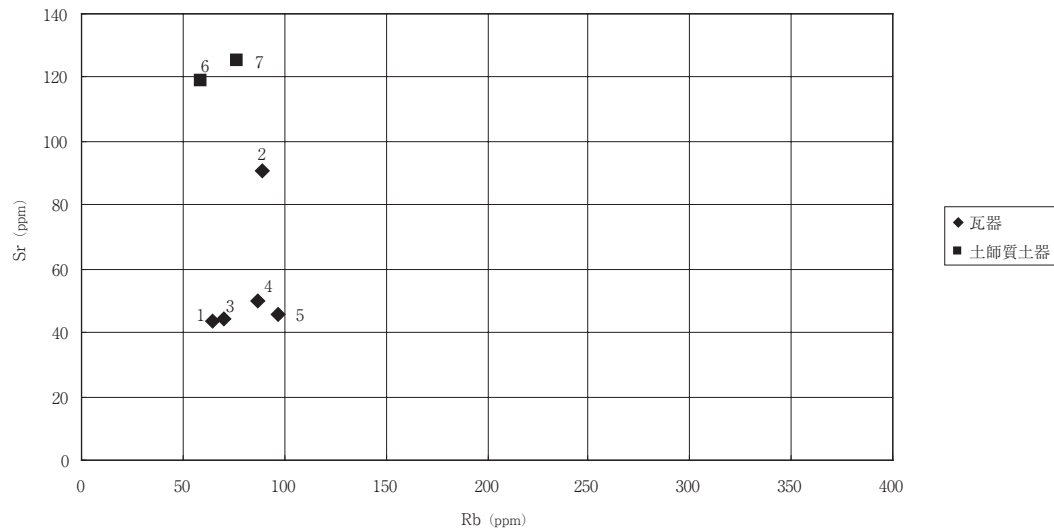


図3-23 口横ヶ谷遺跡出土試料のRb - Sr 散布図

2. 口槇ヶ谷遺跡の古環境変遷

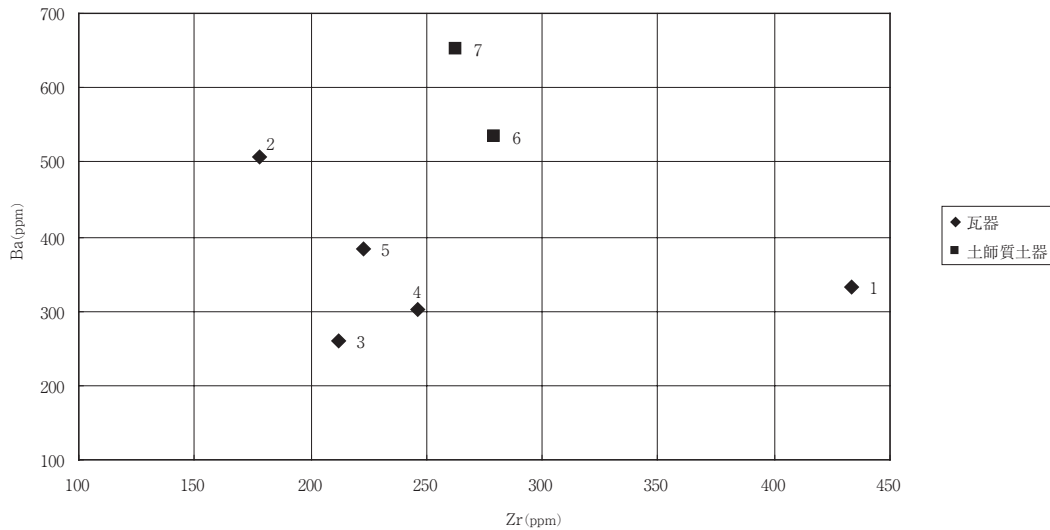


図3-24 口槇ヶ谷遺跡出土試料のZr - Ba 散布図

考えられた。

- ・ A・B区で検出された谷は、背後の開析谷からの間欠的な土石流による土砂流出によって埋積が進行したことが推定された。
- ・ A・B区の谷では、縄文時代晩期から弥生時代前期頃に、土石流などの影響がない非常に安定し、土壌が発達するような場所に、タケ亜科などの植物が分布する明るく開けた空間が展開していたことが推定された。
- ・ D・E・F区で検出された谷は、更新世末期の最終氷期後半から完新世の中世頃にかけて埋積された。
- ・ この谷では、更新世には土石流性の堆積物による埋積も認められた。しかしながら、完新世に入ってから、谷内の堆積環境が安定し、土壌発達する時期を挟在しながら、周囲の風化物質や斜面堆積物などの砂・泥による谷内の埋積が進行したと考えられた。
- ・ D・E・F区では、A・B区の谷埋め堆積物でみられるような、土石流堆積物である淘汰の非常に悪い細礫～中礫を主体とし粘土を多量に含む泥質礫層が認められず、全体的に泥がちな細粒の堆積物によって埋積されている。このような谷埋め堆積物の層相の違いは、後背に山地へ連続する開析谷の存在の有無によるものと判断された。
- ・ 古代から近世の層準の植物珪酸体分析では、ネザサ節を含むタケ亜科が多産し、今回の発掘調査区が当該期に明るく開けかつ乾いた場所が多く広がっていたことが推定された。
- ・ この時期に調査区では、珪藻化石の保存に適しない好氣的な土壌環境が広く形成されていたと考えられた。
- ・ 古代の堆積層や遺構埋土では、非常に少量であるが栽培種のイネ属珪酸体が確認された。この植物珪酸体分析結果から、当該期には、調査区内へなんらかの人間活動によって稲が持ち込まれていたことや、分析地点やその周辺で稲作地が存在していた可能性が示唆された。
- ・ 中世末期以降の層準では、多くのイネ属珪酸体が確認され、層相観察をふまえると、調査区内で稲作地が存在していたと考えられた。
- ・ 中世末期に口槇ヶ谷遺跡周辺の森林では、人間による強い植生干渉を受けたマツ属などからなる

二次林が分布していた。

3. 口槇ヶ谷遺跡から出土した土器の胎土分析

(1) はじめに

本節では、胎土薄片作製観察と胎土蛍光X線分析からみた口槇ヶ谷遺跡出土の土器胎土分析結果について述べる。分析試料の器種、相対年代などについては、表3-10に示した。

(2) 分析方法

① はじめに

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。一方、蛍光X線分析は、胎土中の砂粒だけではなく、素地を作っている粘土も含めた特性を表しており、また、機器分析による数値データで表されることから、客観性、再現性がよいということがある。したがって、ここでは薄片観察法および蛍光X線分析を併用して胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

② 胎土薄片作製鑑定

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

③ 胎土蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析を行う。

i 測定元素

測定元素はSiO₂、TiO₂、Al₂O₃、Fe₂O₃、MnO、MgO、CaO、Na₂O、K₂O、P₂O₅の10元素およびLOIとRb、Sr、Zr、Baの微量4元素である。

ii 装置

理学電機工業社製RIX1000(FP法のグループ定量プログラム)

iii 試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製TI100;10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉碎し、105℃で4時間

3. 口横ヶ谷遺跡から出土した土器の胎土分析

乾燥させた。この微粉碎試料についてガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）

溶剤及び希釈率；融剤（ホウ酸リチウム）5.000g；試料0.500g

剥離剤；LiI（溶融中1回投入）

溶融温度；1200℃ 約7分

iv 測定条件

X線管；Cr（50Kv - 50mA）

スペクトル；全元素 K α

分光結晶；LiF， PET， TAP， Ge

検出器；F - PC， SC

計数時間；PeaK40sec， Back20sec

(3) 分析結果

① 胎土薄片作成鑑定

観察結果を表3 - 11・12，図3 - 17～19に示す。7点の試料全体を通じて，石英および斜長石の鉍物片を多く含む。それ以外の砂粒では，鉍物片はカリ長石，緑レン石，黒雲母，不透明鉍物などが少量～微量認められ，岩石片はチャート，流紋岩・デイサイト，多結晶石英，花崗岩類などが少量～微量認められる。また，試料によっては，少量～微量の火山ガラスや植物珪酸体なども含まれる。これらの砂粒の粒径組成をみると，中粒シルト～極細砂の範囲にほとんどが集中するという組成の試料が多い。

なお，上述したように薄片下の特徴では，瓦器と土師質土器との差異は，ほとんど認められない。

② 蛍光X線分析

結果を表3 - 13に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として，以下に示す元素を選択し，それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した（図3 - 20～24）。

・化学組成中で最も主要な元素（SiO₂， Al₂O₃）

・粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石，斜長石）の種類構成は重要である。このことから，指標として長石類の主要元素であるCaO， Na₂O， K₂Oの3者を選択し，長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には，長石類全体におけるアルカリ長石の割合 $(Na_2O + K_2O) / (CaO + Na_2O + K_2O)$ を横軸とし，アルカリ長石におけるカリ長石の割合 $K_2O / (Na_2O + K_2O)$ を縦軸とする。

・輝石類や黒雲母，角閃石など有色鉍物における主要な元素。この場合，指標としてこれらの有色鉍物の主要な元素のうち，TiO₂， Fe₂O₃， MgOを選択し，Fe₂O₃を分母としたTiO₂， MgOの割合を見る。

・各微量元素を選択する。組み合わせは，Rb - SrとZr - Baとする。

作成した5つの散布図全てにおいて，試料番号1～5の瓦器と試料番号6，7の土師質土器との分布範囲が比較的明瞭に分離している。また，瓦器の中では，試料番号2の組成が，他の4点からやや離れた位置にある。試料番号2は，発掘調査所見により12世紀後半とされており，13世紀とされている他

の4点との時期の違いが指摘されている。なお、Zr - Baの散布図では試料番号1も他の瓦器試料から離れた位置にあるが、他の4つの散布図においては、試料番号3, 4の瓦器試料と近い位置にあることから、胎土の特性としては試料番号3, 4とほぼ同様としてよい。

(4) 考察

① 胎土と地質との関係

口槿ヶ谷遺跡の位置する夜須川流域の地質については、甲藤ほか(1968)や日本の地質「四国地方」編集委員会編(1991)などにより概観することができる。夜須川の両岸に広がる山地は、四万十帯と呼ばれる白亜紀に形成された主に堆積岩類からなる地質により構成されている。詳細には、四万十帯の北帯と呼ばれる地質に相当し、砂岩および泥岩を主体とするが、その成因は大陸棚斜面で発生した大規模な混濁流堆積物(タービダイト)であるとされており、礫岩、チャート、酸性凝灰岩、緑色岩類、塩基性凝灰岩を伴う。また、礫岩中の礫種には、流紋岩質凝灰岩、同溶岩が多く、花崗岩類や石英脈なども少量混在するとされている。

このような四万十帯北帯の地質は、今回の口槿ヶ谷遺跡出土土器胎土から検出された岩石の種類構成とよく整合するといえる。すなわち、今回の口槿ヶ谷遺跡出土土器試料は、全て夜須川流域の堆積物(粘土や砂)を材料としている可能性がある。なお、胎土中に認められた火山ガラスは、形状が比較的新鮮であることから、おそらく更新世または完新世に噴出した広域テフラの降下堆積物に由来すると考えられる。したがって、特に地域的な指標とはならない。

② 胎土と器種・器形との関係

前述したように、薄片観察では、7点の試料はいずれも類似した鉱物片・岩石片組成を示し、また、砂粒の粒径組成も類似しており、試料番号1～5の瓦器碗と試料番号6・7の土師質土器杯との差異は明瞭には捉えられない。ただし、土師質土器の2点には、火山ガラスおよび植物珪酸体が多く含まれる傾向がある。一方、胎土の化学組成では、瓦器碗と土師質土器杯との違いが比較的明瞭に捉えることができた。また、瓦器碗の中でも時期の古い試料番号2の胎土が他の瓦器碗と若干異なる可能性のあることも指摘できる。

薄片観察により計数した砂粒が全体的に少ないことと、それらの粒径が極細砂以下特に粗粒シルトと中粒シルトを主体とすることなどから、口槿ヶ谷遺跡出土の瓦器碗も土師質土器も、製作者が「砂」と認識して素地土中に混和することがあまり行われていない可能性がある。しかし、化学組成には、明らかに両者の違いが認められたことから、「粘土」として認識していた材料については、瓦器と土師質土器とで異なる材質のものを使用していた可能性がある。また、瓦器碗の中でも時代によって、材質に若干の違いがあったことも推定される。

③ 西野々遺跡で実施された胎土分析結果との比較

西野々遺跡出土試料の胎土と比べて指摘できることは、1) 岩石片の種類構成が類似している、2) 砂の粒径組成において極細砂以下特にシルトを主体とする組成のものが多い、の2点である。岩石片の種類構成が類似するということは、材料の採取地が同じ地質学的背景を有する地域であることを示唆する。口槿ヶ谷遺跡の胎土の背景は、遺跡の背景と同じ四万十帯北帯であるとした。一方、西野々遺跡出土土器胎土の背景は、高知平野西部の背景と同じ秩父帯であることが分析から読みとること

3. 口槇ヶ谷遺跡から出土した土器の胎土分析

ができた。四万十帯と秩父帯は、地質としては区別されるが、この場合、その構成する岩石の種類が非常によく類似していることから、このような結果になったと考えられる。岩石の種類が類似することには、地質学的な理由があり、四万十帯は秩父帯の岩石により構成されていると考えられているのである(日本の地質「四国地方」編集委員会編, 1991)。口槇ヶ谷遺跡の報告でも述べたことであるが、四万十帯は混濁流堆積物であるタービダイトにより構成されている。この混濁流は、おそらく、大陸棚斜面を構成していた秩父帯の岩石が崩壊して発生したものであり、いわば秩父帯の岩石が再堆積した地質が四万十帯であると言える。

ここで、口槇ヶ谷遺跡出土試料と西野々遺跡出土試料とでは、岩石片の種類構成も砂の粒径組成も共通する試料が多いことから、薄片観察のみでは、両者の土器を区別できない場合が多く生じる。したがって、両遺跡の関係を土器胎土から見た場合に、互いに土器が移動していたのかどうかは識別が難しい。そのため、化学組成による比較も必要であると考えられる。今回の場合、両者の化学組成を5つの散布図で比較してみると、口槇ヶ谷遺跡出土の瓦器碗および土師質土器杯を合わせた分布は、西野々遺跡の土師質土器全体の分布範囲に近いと判断される。しかし、口槇ヶ谷遺跡出土の瓦器碗と土師質土器杯の各分布位置と、西野々遺跡の中で細分した土師質土器の各器種の分布位置とでは、5つの散布図全てにおいて一致するものはない。このような違いから、両者の胎土が全く同一ではないことが指摘できる。

今後は、自然堆積物を含めた、より多くの事例について分析結果を蓄積し、それらを比較、整理することにより、高知平野における土器胎土の地域的な傾向を把握していきたいと考える。

引用文献

- 安藤一男 1990『淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用』東北地理, 42, 73 - 88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35 - 47.
- 千木良雅弘 1995『風化と崩壊. 近未来社』204p.
- 江口誠一 1994『沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして』『植生誌研究2』19 - 27.
- 江口誠一 1996『沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペトロジスト』, 40, 81 - 84.
- 原口和夫・三友清史・小林弘 1998『埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会, 527 - 600.
- 古澤明 1995「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』, 101, 123 - 133.
- 池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 1995「南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代」『第四紀研究』, 34, 377 - 379.
- 井上智博 2003「目的と概要」『尺度遺跡Ⅱ - 国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書 -』(財)大阪府文化財センター, 153.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』, 6, 23 - 45.
- 甲藤次郎・小島丈児・須鎗和己・沢村武雄・鈴木堯士 1968『高知県地質産図(20万分の1)』高知県商工課.
- 小杉正人 1987「北江古田遺跡の珪藻化石群集と古環境」『北江古田遺跡発掘調査報告書(2)』中野区北江古田遺跡調査会, 419 - 433.
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』, 27, 1 - 20.

- 古環境研究所 1999「プラント・オパール分析から見た静岡バイパス関連諸遺跡. 静岡・清水平野の埋没古環境情報」『考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相』『一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984～1993』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 83 - 86.
- 近藤鍊三 1988『植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代. ペトロジスト』, 32, 189 - 202.
- 近藤鍊三 2004『植物ケイ酸体研究. ペトロジスト』, 48, 46 - 64.
- 近藤鍊三・ピアスン友子 1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告』, 12, 217 - 229.
- 近藤鍊三・佐瀬隆 1986「植物珪酸体分析, その特性と応用」『第四紀研究』, 25, 31 - 64.
- 高知県 1966『土地分類基本調査 高知 5万分の1 国土調査』, 経済企画庁.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 公文富士夫・立石雅昭編 1998『砕屑物の研究法』地学団体研究会, 399p.
- 久馬一剛・八木久義訳監修 1989『土壌薄片記載ハンドブック』博友社, 176p.
- 町田洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰 - 始良 Tn 火山灰の発見とその意義 -」『科学』, 46, 339 - 347.
- 町田洋・新井房夫 1978「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ - アカホヤ火山灰」『第四紀研究』, 17, 143 - 163.
- 町田洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会, 336p.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 1999「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察 - 岩石学的・堆積学的による -」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』, 120 - 121.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 1987「始良 T n 火山灰の 14 C 年代」『第四紀研究』, 26, 79 - 83.
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎 2001「始良 T n 火山灰の C - 14 年代のクロスチェック (演旨)」『地球惑星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM), 2001』, Qm - 010.
- 三宅尚・石川慎吾 2004「高知県中村市具同低湿地周辺における完新世の植生変遷」『日本花粉学会誌』, 50, 83 - 94.
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一 1990「淡水生デルタの形成過程 - 琵琶湖愛知川河口部を例として - 2」『地質構成と堆積相. 地質学雑誌』, 96, 839 - 858.
- 森也寸志・滋賀撰子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992「土地利用による土壌間隙構造の差異 - 軟 X 線による観察を中心として -」『土壌の物理性』, No. 66, 19 - 27.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安田尚登・平朝彦 1993「四国沖ピストンコア試料を用いた A T 火山灰噴出年代の再検討 - タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14 C 年代 -」『地質学雑誌』, 99, 787 - 798.

3.口槇ヶ谷遺跡から出土した土器の胎土分析

- 中村純 1965「高知県低地部における晩氷期以降の植生変遷」『第四紀研究』, 4, 200 - 207.
- 成岡市 1993「土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線.」『本土壌肥料科学雑誌』, 64 - 1, 90 - 97.
- 成岡市・岩田幸良・駒村正治 2000「関東ローム層土における粗孔隙の透水, 通気および排水機能」『農業土木学会論文集』, No.208, 63 - 71.
- 日本の地質「四国地方」編集委員会 1991『日本の地質8 四国地方』共立出版.266p.
- 齊藤文紀 1993「軟X線写真観察法.第四紀試料分析法2 研究対象分析法日本第四紀学会編」, 東京大学出版会, 103 - 108.
- 佐藤幸一 1990a「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』, 60, 25 - 30.
- 佐藤幸一 1990b「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』, 60, 287 - 292.
- Stuiver, M., and Reimer, P. J., 1993, Extended 14C database and revised CALIB radiocarbon calibration program, Radiocarbon 35:215 - 230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M., 1998. INTCAL98 Radiocarbon age calibration 24,000 - 0 cal BP. Radiocarbon 40:1041 - 1083.
- 杉山真二 2000「植物珪酸体(プラント・オパール).辻誠一郎編著」『考古学と自然科学3 考古学と植物学』, 同成社, 189 - 213.
- 徳永重元・山内輝子 1971『花粉・孢子・化石の研究法』共立出版株式会社, 50 - 73.
- 山中二男 1978「高知県の植生と植物相」林野弘済会高地支部, 461p.
- 山中三男・伊藤由美子・石川真吾 1992「高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析」『本生態学会誌』, 42, 21 - 30.
- 米倉伸之・貝塚爽平・野上道男・鎮西清高(編) 2001『日本の地形1 総説』東京大学出版会, 349p.
- YOSHIZAWA, H., NAKAJIMA, W., and ISHIZAKA, K., 1965, The Ryoike metamorphic zone of the Kinki district, southwest Japan: Accomplishment of a regional geological map. Mem.Coll.Sci., Univ.Kyoto, Ser.B, vol.32, 437 - 454.

第Ⅳ章 考 察

1. 弥生時代

今回口槇ヶ谷遺跡で確認された最も古い時期で、A～C区にかけて存在した谷状地形の底部分で検出された溜池状遺構が本遺跡で検出された当該期唯一の遺構である。本調査区の地勢をみると、東側D～F区には本遺跡の南側に存在する山地から派生した尾根状地形が存在しており、この尾根状地形の西側に位置するA～C区は土石流堆積物で埋まった谷状地形の上に立地している。この谷状地形は背後の開析谷からの土石流による土砂流出によって堆積が進行し、古代にはほぼ埋まってしまったと考えられている。

この谷状地形の底で検出された溜池状遺構は長辺約13m、短辺約6mを測り、平面形は不整楕円形を呈する。埋土からは約400点の弥生時代中期と考えられる弥生土器が出土しており、谷水を一時的に溜め稲作等に利用していたと考えられる。

岩手県江刺市反町遺跡(江刺市2000)では水田に近接した箇所に長辺約3m、短辺約2mを測る溜池を掘削し、渇水時に利用していたと考えられている。本遺跡で確認された溜池状遺構では板または杭列などの痕跡は確認されておらず、反町遺跡にみられるような人工的なものではなく自然地形を利用し、一部に手を加え溜池として利用していたと考えられる。また、溜池として利用されたとすれば水田が存在していたと考えられるが、本遺構の下方で水田等は検出されていない。

この溜池状遺構の北東側には本遺跡南側に所在する山地から派生した尾根状の高まりが存在しており、集落が存在していた可能性が高いと考えられるが、この部分は中世から近代にかけての地形改変によって大部分が削平されており、当該期の遺構は全て消滅したとみられる。

2. 古代

当時期の遺構は調査区中央部から北部にかけて確認されており、検出された遺構は尾根状地形の頂部を中心に立地している。明確な当該期の遺物包含層は確認されておらず、中世の遺物包含層直下で掘立柱建物跡3棟や土坑などが確認されている。確認された建物跡SB-1～3のうち全体が検出されたものはSB-3のみであり、他の建物跡は後世の地形改変によって削平されていた。これら3棟の建物跡は立地している場所の違いによって時期差が存在するとみられる。SB-1が検出された箇所は尾根状地形の南東側緩斜面上で、標高約6m前後を測る。建物を構成する柱穴からは弥生土器33点、土師器7点、須恵器3点が出土しているが、細片が多く図示できた遺物は古墳時代と考えられる土師器甕のみであり、遺物から明確な時期を判断することはできない。また、柱穴の配置をみると全体的に歪んでおり、古代にみられる典型的な掘立柱建物跡のような規則性は認められない。つぎにSB-2・3は尾根状地形の頂部で検出されており、標高9m前後を測る。SB-2・3からは8世紀後半から9世紀前半と考えられる須恵器杯や土師器皿を含む遺物が出土しており、建物は同時期に存在していたことを示している。また、建物はSB-1に比べ規則性が認められ、建物を構成する柱穴も一辺0.8m前後を測る隅丸方形で、柱穴の規模もほぼ一定である。これらのことから考えると

3. 中世

前述したようにSB-1とSB-2・3の間には一定の時期差が存在するとみられる。SB-2・3は建物を構成する柱穴やその配置からいわゆる官衙に関連する典型的な建物跡と考えられるが、SB-1は建物本体に規則性はみられず、いわゆる律令制が崩壊してきた9世紀後半以降の建物跡と推測される。

本遺跡が所在する香南市夜須町は古代には香我美郡安湊郷に含まれており、郷域は現在の町域とほぼ同じと考えられている(夜須町史1987)。本遺跡で確認された官衙関連施設は安湊郷に関わる建物跡の可能性も考慮されるが、近世から近代にかけて居住地などを造成するため大規模な地形改変が行われており、当該期の遺構は殆どが削平されたとみられる。他にも建物が存在した可能性が考えられるが、官衙関連遺跡で出土する緑釉陶器などは遺物包含層出土遺物も含めてみても1点も確認されておらず、建物の規模等も含めて考えると官衙と呼ぶにはあまり相応しくない。本遺跡の西側、夜須川からみて右岸に所在する坪井遺跡でも平成18年度に発掘調査が実施されているが、ここでも当該期の建物跡が確認されている。坪井遺跡で確認された建物群は本遺跡で検出された建物跡に比べ規則性が取られる。また、遺物包含層から出土した遺物には古代瓦などが含まれており、本遺跡に比べ官衙関連施設に相応しいものである。

本遺跡と坪井遺跡の存在は古代の香我美郡安湊郷を考えるうえで欠かせないものと考えられる。両遺跡を比較検討することで、本地域における古代の様相がより明確になるとみられ、坪井遺跡の報告書作成時に再度両遺跡の位置付けを考える必要がある。

3. 中世

今回の調査で中心となる時期である。C区を除くほぼ全域で遺物包含層並びに遺構が確認されており、検出された遺構はD～F区に存在する尾根状地形の頂部を中心に立地している。この尾根状地形の南西部にかけて当該期の遺構が多く検出されており、集落を形成していたと考えられる。調査区全体で掘立柱建物跡15棟、塀・柵列跡3列が確認されている。確認された建物跡SB-4～18のうち比較的大きな建物はSB-4・8であり、その中でもSB-4は身舎の南側に下屋が付く建物跡である。また、塀・柵列跡SA-1～3の中でSA-3は位置関係からSB-17に付随するものとみられる。これらの建物跡には当然時期差が存在すると考えられるが、本遺跡は地形が平坦な遺跡とは異なり尾根状地形の頂部から続く緩斜面上に立地しており、地形に合わせて建物を造った可能性が考えられる。このことから、一般の遺跡のように棟方向の違いによって生じる時期差は本遺跡に限っては明確に判断できないが、遺構内の出土遺物から判断して13世紀から15世紀にかけて存在した集落跡と考えられる。

これらの掘立柱建物跡や塀・柵列跡に関連する区画溝はSB-18を囲むように検出されたSD-21のみであり、他の建物跡では同様の溝跡は検出されていない。岩井口遺跡(廣田1995)の例では溝に囲まれた館を中心にそのまわりに家来(従者、家人)、さらに外側に下人という形で建物が配置されていたと考えられており、柱穴の規模や柱間寸法の違いからも溝によって区画された館内と館外の建物跡の違いが指摘されている。このことから本遺跡で確認された建物跡をみると、柱穴の規模や柱間寸法に極端な違いはみられず、時期差は存在するとしても建物の規模等から岩井口遺跡のよ

うに建物跡を区別することはできない。また、SB-18を囲むように検出されたSD-21も岩井口遺跡で確認された区画溝ほどの規模は有しておらず、単なる排水用の溝跡と考えられる。

また、当該期の建物跡は立地する箇所が標高によって明確に区別され、SB-4～7・17・18は標高5m前後、SB-8～10は標高7m前後、SB-11～16は標高9m前後に立地している。これは近世以降に標高6m前後と標高8m前後を屋敷地とするために緩斜面を段状に削っているため、このことが時期差を表すものではないが、それぞれの建物群周辺で検出されている遺構から出土した遺物からみれば、標高が高いほど時期が新しい傾向がみられる。まず、標高5m前後の建物群ではSB-18を囲むように検出されたSD-21から13世紀前半と考えられる瓦器碗が出土しており、この建物群は13世紀代と推測され、標高9m前後の建物群を構成する柱穴と同じ埋土を有する周辺の遺構からは手づくねの小皿などが出土しており、これらの建物群は15世紀代と推測されるが、それぞれの時期に推定される遺構のみ各建物群周辺に存在しているわけではなく、あくまでも推測の域をでない。

なお、夜須町には夜須庄と呼ばれる荘園が12世紀代に存在し、夜須氏が地頭として荘園の管理を行っていたと考えられている。この夜須氏の居城と考えられている下夜須城跡が本遺跡の北東約500mに所在しており、この城跡周辺には当該期の集落が展開していたとみられる。本遺跡で確認された集落も下夜須城跡周辺の集落に付随するものと推測される。

4. 近世

当該期は中世と若干異なり調査区全体で遺構が検出されており、遺跡全域に集落が展開していたと考えられる。本遺跡における集落の本体は中世と同じく尾根状地形の頂部から南西方向の緩斜面上に立地しており、調査区全体で掘立柱建物跡7棟、塀・柵列跡1列が確認されている。確認された建物跡SB-19～25のうち比較的大きな建物は身舎の南側に下屋が付くSB-20であり、この建物跡に付随するとみられる建物跡SB-21も検出されている。この建物群は本遺跡の中でも最大であり、集落の中心的な建物の可能性が考えられる。また、当該期は集落を広げるために大規模な地形の改変を行っている点の中世と大きく異なる。中世にも屋敷地を平らにするために一部地形の改変を行ったと考えられるが、当該期にはSB-20・21が立地する箇所のように緩斜面を大きく削り込んでいる。SB-20・21が立地する平坦面と一段上部の平坦面との比高差は2m前後を測り、このとき造成された屋敷地は現代まで利用されていた。なお、時期の判明するものはSB-24を構成する柱穴から出土した近世中期～後期と考えられる陶器のみであり、時期差は明確に判断できない。

また、当該期には居住域と耕作域が区別されていたようで、調査区西側では柱穴は殆ど検出されず、確認された遺構の多くは小さな畝間をもつ畝状遺構であった。この畝状遺構は7箇所確認されたがいずれも調査区西側に存在しており、調査区西側一帯は畑などとして利用されていたことが窺える。前述したように調査区西側には土石流堆積物で埋まった谷が存在しているが、この谷を埋めている堆積物は粘土を含む礫であり地盤が緩く居住域としては不向きであったため、耕作域として利用していたのではなかろうか。

5. まとめ

5. まとめ

今回の調査で確認された遺構は弥生時代から近世にいたるものであった。以下、時代ごとに本遺跡の変遷をまとめてみたい。

本調査区に初めて人の痕跡が認められるのは、弥生時代中期である。谷状地形の底部分で溜池状の遺構が確認されているが、集落は後世の地形改変もあり確認されていない。その後、奈良～平安時代にかけての時期において官衙に関連する施設が造られていたことが窺える。この官衙関連施設が廃絶したあと数百年の空白期間を経て、室町時代には本遺跡を中心として屋敷が造られ、中国を始めとして各地から搬入品が持ち込まれており、最も本遺跡が盛行した時期を迎える。

その後、近世中期まで人の痕跡は途絶えてしまう。近世中期以降には再び集落が営まれており、数軒の屋敷で構成される集落が本遺跡に展開している。近世以降、本調査区は屋敷地と耕作地に姿を変え、現在は南国安芸道路の手結山トンネル西側出口部分として道路建設が進み、遺跡周辺の環境も大きく変化しようとしている。

参考文献

江刺市教育委員会 2000『江刺市反町遺跡現地説明会資料』

廣田佳久 1995「第V章考察」『岩井口遺跡, 二ノ部遺跡・城跡』佐川町教育委員会

『夜須町史』上・下巻 夜須町史編纂委員会 1987年

遺物觀察表

凡例

1. 法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品・石製品・鍋の脚部の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、胴径が全厚(cm)、底径が重量(1kgを超えるものはkg、それ以下はg)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。なお、かっこ付きの数値は残存値を示している。
2. 遺存状態については、遺存部が1/6に満たないものについては「破片」と表現している。

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1	第I層	須恵器 杯蓋	-	(1.9)	-	-	灰白色 〃	良好	天井部の破片でつまみは欠損, 天井部外面下端に1条の沈線
2	〃	〃	9.4	(1.9)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 外面には焼成以前に付着したとみられる粘土塊がみられる
3	〃	〃 杯	-	(2.4)	-	8.4	灰黄色 〃	〃	底部の破片, 高台内に爪形状圧痕
4	〃	〃 高杯	-	(6.7)	-	-	灰白色 〃	〃	脚部の破片, 部分的に自然釉
5	〃	土師質土器 小杯	-	3.9	-	3.8	浅黄橙色 〃	〃	全体の約1/4残存, 成形はロクロ水挽き成形とみられる
6	〃	〃 杯	9.8	(3.2)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部から体部にかけて約1/3残存, 成形はロクロ水挽き成形とみられる
7	〃	備前焼 播鉢	-	(5.8)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 内外面とも回転ナデ調整
8	〃	〃 〃	-	(8.7)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部の破片, 8条単位の条線を内面全体に施す
9	〃	近世陶磁器 碗	-	(3.1)	-	4.9	オリーブ灰色 灰白色	〃	底部の破片, 削り出し高台で高台内は無釉
10	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	2.8	灰白色 〃	〃	底部から体部にかけての破片, 体部外面及び高台は無釉
11	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	4.7	オリーブ黄色 〃	〃	底部から体部にかけての破片, 見込みと畳付には砂目積みの痕跡
12	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	4.7	にぶい黄色 〃	〃	底部から体部にかけての破片, 畳付には砂目積みの痕跡
13	〃	〃 〃	-	(5.0)	-	4.8	にぶい黄褐色 〃	〃	底部から体部にかけての破片, 畳付には砂目積みの痕跡
14	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	4.9	〃 〃	〃	底部から体部にかけての破片, 畳付は無釉
15	〃	〃 蓋	8.8	2.6	-	3.4	灰白色 〃	〃	全体の約1/2残存, つまみ内に銘
16	〃	〃 皿	13.0	(3.2)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から体部にかけて約1/4残存, 見込みに圏線2条
17	〃	近代磁器 〃	-	(3.1)	-	7.2	〃 〃	〃	底部から体部にかけての破片, 高台内に蛇ノ目釉剥ぎがみられる
18	〃	土製品 土錘	(2.5)	(0.9)	1.3	(2.5)	明赤褐色	やや不良	孔径0.3cm, 約1/2が残存する
19	〃	〃 〃	(3.0)	1.1	1.1	(2.9)	橙色	良好	孔径0.4cm, 両端が欠損する
20	〃	〃 〃	(3.8)	1.3	1.1	(4.2)	〃	〃	孔径0.4cm, 一部が欠損する
21	〃	〃 〃	4.0	1.0	1.1	3.4	にぶい褐色	〃	孔径0.4cm, 完存する
22	〃	〃 〃	4.4	1.4	1.2	6.8	〃	〃	孔径0.4cm, 完存する
23	〃	〃 〃	5.7	2.2	1.9	19.6	明赤褐色	良	孔径0.6cm, 完存する
24	〃	〃 〃	6.9	3.8	3.5	69.5	橙色	やや不良	孔径1.3cm, ほぼ完存する
25	〃	石製品 石鏃	(3.5)	1.9	0.5	(2.5)	-	-	先端部が欠損, 石材はサヌカイト

遺物観察表2

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
26	第Ⅰ層	石製品 石臼	(21.3)	-	8.5	(5.3)	-	-	上白で約2/3残存, 石材は砂岩
27	〃	〃 〃	29.5	-	9.8	(7.8)	-	-	上白で約1/2残存, 石材は砂岩
28	〃	〃 〃	(28.8)	-	9.7	(5.7)	-	-	上白で約1/2残存, 石材は砂岩
29	〃	〃 〃	(23.1)	-	5.7	(1.9)	-	-	上白で約1/3残存, 石材は砂岩
30	〃	〃 〃	(27.2)	-	5.5	(2.7)	-	-	下白で約1/3残存, 石材は砂岩
31	第Ⅱ層	近世陶器 碗	-	(3.8)	-	5.1	淡黄色 〃	良好	底部から体部にかけての破片, 胎土中に黒い砂粒を含み, 畳付は無釉
32	〃	石製品 五輪塔	(16.5)	(17.3)	(9.8)	(3.3)	-	-	火輪で四隅が欠損, 石材は砂岩
33	〃	〃 石臼	(14.0)	-	9.3	(3.6)	-	-	下白で約1/2残存, 石材は砂岩
34	〃	〃 〃	(25.0)	-	8.4	(3.4)	-	-	上白で約1/3残存, 石材は砂岩
35	第Ⅲ層	須恵器 杯	-	(1.2)	-	8.8	灰白色 灰色	良好	底部の破片で約1/4残存, 底部切り離し痕をナデ消す
36	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	10.0	灰黄褐色 灰白色	〃	底部の破片, 高台は断面方形
37	〃	瓦質土器 鍋	-	(3.2)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 大きく歪む
38	〃	〃 〃	(5.8)	2.0	2.2	-	灰白色	やや不良	三足鍋の脚部破片, 磨耗が著しく調整不明
39	〃	東播系須恵器 捏鉢	25.0	(4.7)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部の破片, 口縁部は肥厚
40	〃	〃 〃	26.0	(6.6)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 口縁端部を斜め下方へ摘み出す
41	〃	備前焼 播鉢	39.2	16.0	-	20.8	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部から体部にかけての破片, 条線は10本単位で密に施す
42	〃	土製品 土錘	4.0	1.4	1.5	5.8	灰色	〃	孔径0.6cm, 両端を欠損する
43	〃	〃 〃	5.3	1.8	1.6	10.7	にぶい黄褐色	やや不良	孔径0.4cm, 片側の一部を欠損する
44	〃	石製品 石臼	(17.9)	-	6.5	(2.1)	-	-	上白で約1/4が残存, 石材は砂岩
45	第Ⅳ層	弥生土器 甕	-	(3.2)	-	6.2	にぶい橙色 浅黄褐色	良好	甕と考えられる底部破片, 底部内面にヘラ状原体によるナデもしくは削りが認められる
46	〃	土師器 〃	20.9	(3.7)	-	-	明赤褐色 〃	やや不良	口縁部の破片, 内外面とも磨耗が著しい
47	〃	須恵器 蓋	-	1.6	-	-	灰白色 〃	良好	擬宝珠形のつまみのみ残存, つまみ径30cm, つまみ高0.9cm
48	〃	〃 〃	19.0	(1.4)	-	-	灰色 灰白色	〃	口縁部から天井部にかけての破片, 口縁端部を下方に屈曲させる
49	〃	〃 杯	-	(1.3)	-	11.4	灰白色 灰色	〃	底部の破片, 底部内面にヘラ記号らしき痕跡
50	〃	〃 高杯	26.8	(3.7)	-	-	灰白色 〃	〃	杯部の破片, 口縁端部は浅い凹面

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
51	第IV層	須恵器 甕	23.7	(44)	-	-	灰白色 灰色	やや不良	口縁部の破片で約1/4残存, 口縁端部は浅い凹面
52	〃	土師質土器 杯	14.5	4.4	-	5.9	褐灰色 灰色	〃	全体の約1/4残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる
53	〃	〃 〃	14.0	4.5	-	6.2	赤色 〃	〃	全体の約4/5残存, 底部切り離しは回転糸切りとみられ, 成形はロクロ水挽き成形と考えられる
54	〃	〃 〃	12.4	4.0	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	全体の約1/4残存, 成形は手づくねとみられる
55	〃	〃 〃	14.2	(3.2)	-	-	橙色 〃	不良	口縁部から体部にかけての破片で約1/4残存, 成形は手づくねとみられる
56	〃	〃 〃	15.8	(4.9)	-	-	浅黄橙色 〃	やや不良	口縁部から体部にかけての破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる
57	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	6.2	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 底部切り離しは回転糸切りとみられ, 成形はロクロ水挽きと考えられる
58	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.9	浅黄橙色 〃	良好	底部の破片, 底部切り離しは回転糸切りとみられ, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形と考えられる
59	〃	〃 小皿	7.9	1.3	-	5.0	にぶい黄橙色 にぶい褐色	やや不良	口縁部の破片, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
60	〃	〃 〃	8.4	1.2	-	6.0	灰白色 〃	〃	ほぼ完存, 底部切り離しは回転糸切り
61	〃	〃 鍋	16.4	(3.3)	-	-	にぶい橙色 〃	良好	口縁部の破片, 外面に煤が付着
62	〃	瓦質土器 〃	(5.0)	3.4	2.2	-	黒色	やや不良	三足鍋の脚部破片, 磨耗が著しく調整は不明瞭
63	〃	青磁 碗	-	(2.5)	-	-	オリーブ黄色 〃	良好	体部の破片, 胎土中に黒い砂粒を含む
64	〃	土製品 土錘	3.8	1.7	1.6	(8.0)	橙色	〃	孔径0.6cm, 片側を一部欠損する
65	〃	〃 〃	4.1	1.5	1.5	(7.0)	にぶい黄橙色	〃	孔径0.7cm, 片側を一部欠損する
66	〃	〃 〃	4.2	1.8	1.5	9.9	橙色	〃	孔径0.6cm, ほぼ完存する
67	〃	〃 〃	(4.4)	1.6	1.5	(7.2)	にぶい黄橙色	〃	孔径0.5cm, 片側の一部を欠損する
68	〃	〃 〃	(4.9)	(1.7)	1.7	(14.1)	淡黄色	〃	孔径0.6cm, 片側と側面の一部を欠損する
69	〃	〃 〃	(2.3)	1.2	1.1	(2.5)	にぶい黄橙色	やや不良	孔径0.4cm, 両端を欠損する
70	〃	〃 〃	(3.7)	2.9	(2.1)	(18.3)	〃	良好	孔径0.7cm, 全体の約1/4残存
71	〃	〃 〃	(3.7)	1.5	1.5	(4.8)	橙色	やや不良	孔径0.6cm, 両端を欠損する
72	〃	〃 〃	(4.3)	2.9	(2.4)	(24.3)	〃	良好	孔径0.9cm, 全体の約3/4残存
73	〃	〃 羽口	4.0	4.7	4.7	-	橙色 〃	〃	孔径2.6cm, 羽口と考えられるもので一部が残存
74	〃	〃 〃	7.2	(9.8)	(8.7)	-	橙色 〃	〃	孔径(2.6cm), 先端部は融解しており, 黒く焼け爛れる
75	〃	石製品 砥石	(12.7)	(4.4)	2.5	(2036)	-	-	一部欠損, 石材は泥岩とみられる

遺物観察表4

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
76	第IV層	石製品 叩石	12.3	11.1	4.0	855.8	-	-	側面に敲打痕が認められる
77	第V層	土師器 杯	-	(3.5)	-	-	灰色 灰白色	良好	口縁部の破片, 口縁端部内面に1条の沈線を施す
78	〃	〃 甕	-	5.7	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
79	〃	須恵器 杯	15.4	(4.5)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から体部にかけての破片, 体部下半に回転ヘラ 削り
80	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	8.0	灰白色 灰色	〃	底部の破片, 高台内にはヘラ切りの痕跡が明瞭に残る
81	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	8.9	灰色 〃	〃	底部の破片, 高台端部に浅い凹面
82	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	9.0	〃 〃	〃	底部の破片, 高台内に爪形状圧痕
83	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	9.2	灰白色 〃	やや不良	底部の破片, 底部切り離し痕はナデ消す
84	〃	土師質土器 椀	-	(1.9)	-	5.2	淡赤橙色 灰白色	良好	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみら れ, 高台は断面逆台形状を呈する
85	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	5.5	灰黄褐色 黒褐色	〃	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみら れる
86	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	5.5	浅黄橙色 〃	やや不良	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみら れ, 高台は断面逆台形
87	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	5.6	浅黄色 灰白色	〃	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみら れ, 高台は断面逆台形
88	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.0	灰白色 にぶい黄褐色	良好	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみら れ, 高台は断面逆三角形
89	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.0	浅黄褐色 〃	やや不良	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみら れ, 高台は断面逆三角形
90	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	6.6	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 磨耗が著しく調整は不明である
91	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.6	淡黄色 〃	〃	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみら れる
92	〃	〃 杯	10.0	2.5	-	5.6	橙色 〃	〃	全体の約1/4残存, 成形はロクロ水挽き成形とみられる
93	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	5.6	淡黄色 灰白色	良好	柱状高台の高台部約1/3残存, 底部の切り離しは回転糸 切りとみられる
94	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	5.8	橙色 〃	やや不良	底部の破片, 成形はロクロ水挽き成形とみられ, 底部切 り離しは回転糸切り
95	〃	〃 小皿	9.7	(2.0)	-	-	灰白色 淡黄色	良好	高台付小皿の皿部約1/3残存, 調整は磨耗が著しく不明
96	〃	備前焼 播鉢	-	(5.1)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 7本単位の条線を施す
97	〃	近世陶磁器 碗	-	(3.1)	-	3.1	灰白色 〃	〃	底部のみ残存, 胎土中に赤褐色の砂粒を含み, 畳付に砂 目痕
98	〃	近世磁器 〃	-	(3.4)	-	6.0	明緑灰色 灰白色	〃	底部のみ残存, 胎土中に黒い砂粒を含む
99	〃	〃 皿	14.0	3.0	-	7.4	灰白色 〃	〃	全体の約1/3残存, 見込みには蛇の目状の釉剥ぎがみ られる
100	〃	土製品 土錘	3.3	1.9	1.7	8.2	橙色	〃	孔径0.5cm, 完存する

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
101	第V層	土製品 土錘	(4.0)	1.8	1.7	(9.2)	灰白色	やや不良	孔径0.5cm, 一部欠損する
102	〃	石製品 石鏃	(1.5)	(1.2)	0.2	(0.3)	-	-	基部を欠損, 石材は結晶片岩とみられる
103	第VI層	須恵器 杯	14.4	(4.4)	-	-	灰白色 〃	やや不良	口縁部の破片, 内外面に火襷痕
104	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	10.0	灰白色 灰色	〃	底部の破片, 調整は磨耗が著しく不明瞭
105	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	11.0	灰白色 〃	〃	底部の破片, 高台端部に浅い凹面
106	〃	〃 壺	-	(2.9)	-	6.0	黄橙色 灰黄色	不良	壺と考えられる底部の破片, 体部下半に回転ヘラ削り
107	〃	土師質土器 椀	-	(2.0)	-	5.2	灰白色 〃	やや不良	底部の破片, 調整は磨耗が著しく不明
108	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.2	灰白色 淡黄色	〃	底部の破片, 調整は磨耗が著しく不明
109	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.5	浅黄橙色 〃	〃	底部の破片で約1/3残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる
110	〃	〃 杯	-	(1.5)	-	6.4	灰白色 〃	良好	底部の破片で約1/2残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
111	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	6.9	にぶい黄橙色 〃	〃	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
112	第VII層	弥生土器 鉢	26.8	(8.3)	-	-	にぶい橙色 にぶい赤褐色	〃	口縁部の破片, 外面全体に煤が付着
113	〃	須恵器 杯身	-	(1.6)	-	7.0	灰色 〃	〃	底部の破片, 底部外面にヘラ削り
114	〃	〃 高杯	-	(3.4)	-	12.4	灰白色 〃	〃	高杯の脚部とみられる破片, 脚端部に浅い凹面
115	〃	〃 杯	15.2	3.7	-	9.9	〃 〃	〃	全体の約1/3残存, 底部切り離しはヘラ切りで切り離し痕をナデ消す
116	〃	瓦器 椀	15.4	4.2	-	4.6	にぶい黄橙色 〃	やや不良	在地の模倣瓦器椀とみられるもので, 胎土等は土師質土器に近似
117	〃	〃 〃	16.8	(3.5)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部から体部にかけての破片, 和泉型瓦器椀とみられる
118	〃	石製品 叩石	14.5	13.3	6.1	1.8	-	-	側面及び両平坦面に敲打痕, 石材は砂岩
119	第VIII層	弥生土器 甕	-	(3.6)	-	5.0	にぶい黄橙色 〃	良好	甕とみられる底部の破片, 調整は磨耗が著しく不明
120	〃	土師質土器 杯	9.8	3.1	-	4.0	橙色 〃	〃	全体の約1/2残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 内面にタールが付着する
121	〃	〃 〃	12.3	3.9	-	6.9	淡橙色 浅黄橙色	〃	全体の約1/3残存, 成形はロクロ水挽き成形とみられる
122	〃	東播系須恵器 捏鉢	-	(3.8)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 調整は内外面とも回転ナデ調整
123	〃	土製品 土錘	4.0	1.1	1.1	4.1	灰黄色	〃	孔径0.4cm, ほぼ完存する
124	第IX層	弥生土器 高杯	-	(5.5)	-	-	橙色 〃	やや不良	高杯の脚部とみられる破片, 杯部・脚端部とも欠損する
125	〃	土師器 長胴甕	-	(2.7)	-	-	橙色 にぶい褐色	良好	口縁部の破片, 外面の一部に煤が付着する

遺物観察表6

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
126	第Ⅸ層	須恵器 杯	12.7	4.1	-	8.2	灰色 〃	良好	全体の約1/3残存, 底部外面に爪形状圧痕
127	〃	土師質土器 〃	14.6	3.6	-	7.7	浅黄橙色 橙色	やや不良	成形はロクロ水挽き成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
128	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	7.1	にぶい橙色 浅黄橙色	〃	柱状高台の底部破片, 底部切り離しは回転糸切りと考えられる
129	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	7.6	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 成形はロクロ水挽き成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
130	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃	不良	底部の破片, 成形はロクロ水挽き成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
131	〃	瓦器 椀	14.8	4.2	-	4.2	灰黄色 〃	〃	在地の模倣瓦器椀とみられるもので, 胎土等は土師質土器に近似
132	〃	〃 〃	15.6	(3.8)	-	-	黒色 〃	良好	口縁部の破片, 楠葉型瓦器椀とみられ, 胎土がやや黄色を帯びる
133	〃	〃 小皿	10.0	(1.3)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, 底部内面に緻密なヘラ磨き
134	〃	白磁 碗	-	(3.2)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 胎土に黒い砂粒を含む
135	〃	瓦質土器 鍋	19.7	(4.6)	-	-	灰色 灰白色	やや不良	口縁部の破片, 体部外面に煤が付着する
136	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部の破片, 調整は外面が回転ナデ調整, 内面がナデ調整
137	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	-	暗灰色 褐色	〃	口縁部の破片, 外面の一部に被熱痕
138	〃	〃 〃	-	(6.8)	-	-	灰黄色 〃	〃	体部の破片, 外面には煤が付着
139	〃	〃 三足鍋	-	(7.6)	-	-	灰白色 〃	〃	脚部の破片, 器面には煤が付着
140	〃	〃 鍋	(10.2)	2.3	2.4	-	灰色	〃	脚部の破片, 器面には煤が付着
141	〃	東播系須恵器 片口鉢	-	(3.6)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部の破片, 外面に3条の沈線を施す
142	〃	土製品 土錘	(2.6)	1.3	1.5	(3.0)	にぶい褐色	〃	孔径0.5cm, 両端を欠損する
143	〃	〃 〃	4.8	1.6	1.6	11.3	橙色	〃	孔径0.6cm, ほぼ完存する
144	第Ⅹ層	須恵器 杯蓋	10.6	3.0	-	-	灰白色 〃	〃	全体の約1/3残存, 天井部外面にはヘラ切り痕が残り, 調整は回転ナデ調整
145	〃	〃 杯身	9.8	3.5	-	7.1	〃 〃	〃	全体の約2/3残存, 底部内面には回転ナデ調整の後, ナデ調整を施す
146	〃	〃 〃	11.2	2.6	-	7.2	〃 〃	やや不良	全体の約1/4残存, 底部切り離した後, 切り離し痕をナデ消す
147	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	5.4	灰白色 灰色	良好	底部の破片, 底部の切り離しはヘラ切り
148	〃	〃 蓋	14.9	(1.6)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 天井部内面にはヘラ磨きを施す
149	〃	〃 長頸壺	-	(8.3)	-	-	黄灰色 〃	〃	頸部とみられる破片, 頸部中ほどに1条の沈線を施す
150	〃	〃 瓶	7.4	(4.6)	-	-	灰色 〃	〃	瓶と考えられる口縁部破片, 調整は回転ナデ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
151	第Ⅴ層	須恵器 甔	-	(3.6)	-	-	灰色 〃	良好	甔と考えられる肩部破片, 調整は回転ナデ調整
152	〃	〃 甔	-	(6.4)	-	-	〃 〃	〃	体部の破片, 内外面とも調整後, ナデ調整
153	〃	土師質土器 椀	-	(2.6)	-	5.0	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 底部切り離しはヘラ切り
154	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.0	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	底部の破片, 体部外面下端に回転ヘラ削りの痕跡
155	〃	〃 杯	15.4	3.9	-	8.0	灰白色 〃	〃	成形はロクロ水挽き成形とみられ, 底部切り離しは回転 糸切り
156	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	5.9	灰黄色 〃	〃	底部の破片, 成形はロクロ水挽き成形とみられる
157	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	8.4	にぶい橙色 〃	やや不良	底部の破片, 成形はロクロ水挽き成形とみられ, 底部切 り離しは回転糸切り
158	〃	青磁 皿	10.5	2.1	-	4.4	灰オリーブ色 〃	良好	同安窯系青磁皿, 口縁部下端に回転ヘラ削り
159	〃	白磁 碗	-	(3.4)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 胎土中に黒い砂粒
160	〃	石製品 磨製石斧	(7.1)	(3.3)	2.4	(99.9)	-	-	片側と基部を欠損, 刃部に使用痕は認められない。石材 は砂質片岩とみられる
161	〃	〃 叩石	8.8	6.5	1.2	122.0	-	-	完存する。石材は砂岩
162	SX-1	弥生土器 甔	-	(3.5)	-	6.4	灰黄褐色 にぶい赤褐色	良好	底部の破片, 部分的にハケ調整の痕跡
163	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	7.3	灰黄褐色 にぶい褐色	やや不良	底部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
164	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	7.6	にぶい褐色 にぶい橙色	良好	底部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
165	SB-1	土師器 〃	19.6	(3.6)	-	-	黄灰色 灰色	〃	口縁部の破片, 外傾する口縁部内面は浅い凹面
166	SB-2	〃 皿	17.4	1.9	-	13.0	橙色 〃	やや不良	全体の約1/3残存, 磨耗が著しく調整は不明瞭であるが, 底部切り離しは回転ヘラ切りとみられる
167	〃	〃 甔	25.6	(6.2)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の破片, 全体的に磨耗が著しく調整は不明瞭
168	〃	須恵器 杯	10.6	3.9	-	7.0	灰白色 黄褐色	良好	口縁部から体部にかけての破片, 外面全体に自然釉
169	SB-3	〃 〃	-	(1.6)	-	8.4	青灰色 灰色	〃	底部の破片, 調整は回転ナデ調整
170	SB-7	土師質土器 小皿	5.8	1.5	-	1.6	橙色 浅黄褐色	〃	手づくねの小皿で, ほぼ完存する。部分的に指頭圧痕
171	SB-9	〃 椀	15.2	5.5	-	6.4	灰白色 浅黄褐色	〃	口縁部の一部が欠損する。成形は粘土紐巻き上げロクロ 成形とみられる
172	SB-11	土製品 土錘	3.5	1.3	1.2	3.8	赤褐色	〃	孔径0.3cm, ほぼ完存する
173	SB-12	〃 〃	(3.0)	1.4	1.3	(4.5)	褐灰色	〃	孔径0.5cm, 片側の一部を欠損する
174	SB-14	土師質土器 小皿	11.3	(1.8)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部の破片, 調整は磨耗が著しく不明
175	SA-1	石製品 砥石	(11.5)	(7.0)	5.6	(765.2)	-	-	断面正方形で, 3面に使用痕が残る。石材は砂岩

遺物観察表8

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
176	SK-13	土師質土器 椀	-	(1.5)	-	6.0	灰白色 〃	良好	底部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
177	〃	〃 杯	-	(2.2)	-	6.2	橙色 〃	やや不良	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
178	SK-16	須恵器 〃	-	(1.4)	-	8.0	にぶい黄橙色 黄灰色	良好	底部の破片, 底部外面に板状圧痕
179	〃	瓦質土器 鍋	23.6	(6.4)	-	-	灰色 〃	やや不良	鍋とみられる口縁部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
180	〃	石製品 石鏃	(1.9)	1.1	0.3	(0.6)	-	-	先端部が欠損, 石材はサヌカイトとみられる
181	SK-19	須恵器 杯	11.8	3.5	-	5.0	灰色 灰白色	良好	全体の約1/2残存, 底部の切り離し痕はナデ消される
182	SD-8	白磁 碗	16.0	(4.4)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 胎土中に黒い砂粒がみられる
183	SD-12	石製品 砥石	(17.4)	(10.0)	4.2	(1.2)	-	-	断面正方形で, 1面に使用痕が残る。石材は砂岩
184	SD-20	土師器 甑	-	(2.4)	-	6.7	にぶい橙色 にぶい黄橙色	やや不良	甑と考えられる底部破片, 磨耗が著しく調整は不明
185	〃	瓦器 椀	-	(4.6)	-	-	黒褐色 〃	良好	口縁部の破片, 口縁端部内面に1条の沈線を施す。楠葉型とみられる
186	SD-21	土師質土器 杯	13.4	4.1	-	7.3	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	全体の約1/2残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる
187	〃	〃 〃	13.6	5.8	-	7.0	橙色 〃	やや不良	全体の約1/4残存, 成形はロクロ水挽き成形, 底部切り離しは回転糸切りと考えられる
188	〃	〃 〃	14.0	3.5	-	6.4	灰白色 にぶい黄橙色	良好	全体の約1/4残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部切り離しは回転糸切りと考えられる
189	〃	〃 〃	14.2	3.9	-	7.5	にぶい黄橙色 〃	〃	全体の約1/3残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
190	〃	〃 〃	14.6	3.7	-	7.6	灰白色 〃	〃	全体の約1/2残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる。歪みが大きい
191	〃	〃 〃	14.8	4.3	-	6.0	浅黄橙色 〃	〃	全体の約1/3残存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部切り離しは回転糸切りと考えられる
192	〃	〃 〃	15.0	4.0	-	9.2	〃 〃	やや不良	成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部の切り離しは回転糸切りとみられる
193	〃	〃 〃	21.0	(4.5)	-	-	橙色 淡橙色	〃	口縁部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる
194	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	5.1	浅黄橙色 〃	良好	柱状高台の高台部破片, 底部切り離しは回転糸切り
195	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	7.2	〃 〃	〃	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
196	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	7.0	灰白色 にぶい黄橙色	やや不良	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
197	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	7.5	橙色 にぶい黄橙色	良好	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
198	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	8.0	にぶい黄橙色 〃	やや不良	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
199	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	8.0	橙色 灰黄色	良	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
200	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	8.4	浅黄橙色 〃	良好	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
201	SD-21	土師質土器 杯	-	(2.1)	-	8.0	浅黄橙色 〃	良好	底部の破片, 成形はロクロ水挽き成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
202	〃	〃 小皿	7.6	1.0	-	5.0	〃 〃	やや不良	ほぼ完存, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
203	〃	〃 〃	7.4	1.4	-	5.1	にぶい橙色 〃	〃	全体の約3/4残存, 底部の切り離しは回転糸切りとみられる
204	〃	〃 〃	7.8	1.6	-	5.3	淡黄色 浅黄橙色	良好	全体の約1/2残存, 底部の切り離しは回転糸切り
205	〃	〃 〃	8.0	1.4	-	5.4	灰白色 浅黄橙色	〃	全体の約1/3残存, 底部の切り離しは回転糸切り, 外面の一部にタールが付着する
206	〃	瓦器 椀	14.4	4.2	-	3.8	灰白色 浅黄色	〃	全体の約1/2残存, 底部外面には比較的しっかりとした高台が付く
207	〃	〃 〃	14.3	4.2	-	5.0	灰色 〃	〃	全体の約1/4残存, 和泉型とみられ, 底部外面には断面逆台形状の高台が付く
208	〃	〃 〃	15.5	4.5	-	4.2	灰白色 〃	やや不良	和泉型と考えられるもので, 磨耗が著しいが底部内面の一部に暗文
209	〃	〃 〃	15.4	(4.2)	-	-	暗灰色 灰色	良好	口縁部の破片, 和泉型とみられ, 体部内面下端に暗文
210	〃	〃 〃	15.8	(4.5)	-	-	灰白色 〃	やや不良	口縁部から体部にかけての破片, 胎土等から在地の模倣瓦器椀と考えられる
211	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	4.6	〃 〃	良	底部の破片, 底部外面には断面逆台形状の高台
212	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	4.8	灰色 〃	良好	底部の破片, 底部外面には断面逆台形状のしっかりとした高台が付き, 内面には暗文
213	〃	〃 小皿	10.0	(1.3)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片, ヘラ磨きが一部に残る
214	SD-22	土師質土器 杯	14.7	3.6	-	7.3	橙色 浅黄橙色	やや不良	ほぼ完存, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
215	〃	〃 〃	15.1	4.4	-	7.2	浅黄橙色 〃	〃	全体の約3/4残存, 成形はロクロ水挽き成形とみられる
216	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	7.6	灰白色 〃	〃	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
217	〃	瓦器 椀	14.7	4.1	-	3.8	黒褐色 橙色	不良	ほぼ完存, 胎土等が土師質土器に近く在地の模倣瓦器椀と考えられる
218	〃	白磁 碗	-	(3.9)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部の破片, 胎土中に黒い砂粒が入り, 体部下半は無釉
219	P-1	土師質土器 小皿	8.2	1.0	-	5.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	全体の約1/2残存, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
220	P-2	土師器 甌	-	(11.3)	-	-	灰褐色 浅黄橙色	〃	甌と考えられる口縁部の破片, 内面には横方向のハケ調整が残る
221	P-3	土師質土器 杯	15.6	4.6	-	8.0	灰黄褐色 〃	〃	全体の約1/3残存, 成形はロクロ水挽き成形とみられ, 底部内面の一部にタールが付着する
222	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	8.0	灰黄褐色 にぶい橙色	やや不良	底部の破片, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
223	P-4	木製品 柱根	(30.6)	(13.3)	(11.9)	-	-	-	腐食が著しく, 加工痕は確認できない
224	P-5	土師質土器 杯	14.2	4.1	-	7.4	にぶい黄橙色 〃	良好	全体の約4/5が残存, 成形はロクロ水挽き成形, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
225	P-6	〃 〃	12.0	(2.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の破片, 成形はロクロ水挽き成形とみられる

遺物観察表10

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
226	P-7	土師質土器 杯	9.8	(3.7)	-	-	褐灰色 灰黄褐色	良好	口縁部の破片, 成形はロクロ水挽き成形とみられる
227	P-8	土師器 甕	-	(5.0)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	底部とみられる破片, 磨耗が著しく調整不明
228	P-9	土師質土器 碗	14.3	4.6	-	5.1	浅黄橙色 〃	不良	口縁部の大部分を欠損, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる
229	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	4.6	黄灰色 灰黄色	良好	底部の破片, 成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられる
230	P-10	青磁 碗	-	(5.1)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の破片, 龍泉窯系で, 胎土中に黒い砂粒がみられる
231	P-11	瓦質土器 鍋	(8.2)	3.5	2.3	-	黒色	やや不良	脚部の破片, 磨耗が著しい
232	P-12	石製品 石鏃	(1.3)	1.1	0.3	(0.3)	-	-	先端部を欠損, 石材はサヌカイトとみられる
233	P-13	瓦質土器 鍋	-	(5.3)	-	-	黄灰色 黒色	不良	口縁部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
234	P-14	石製品 叩石	12.1	10.5	4.9	703.7	-	-	敲打痕が両平坦面に認められ, 石材は砂岩
235	P-15	土製品 土錘	3.9	2.1	2.0	15.8	暗灰黄色	良好	孔径0.5cm, 完存する
236	〃	〃 〃	4.0	2.0	1.8	16.0	にぶい黄橙色	〃	孔径0.4cm, 完存する
237	〃	〃 〃	4.0	2.4	2.0	20.7	暗灰黄色	〃	孔径0.9cm, 完存する
238	〃	〃 〃	4.4	2.2	2.0	20.9	褐灰色	〃	孔径0.6cm, 完存する
239	〃	〃 〃	4.6	2.2	2.0	18.9	灰黄褐色	〃	孔径0.6cm, ほぼ完存する
240	〃	〃 〃	4.7	2.4	1.9	22.6	褐灰色	〃	孔径0.6cm, 完存する
241	〃	〃 〃	4.8	2.2	2.1	21.8	灰黄褐色	〃	孔径0.7cm, ほぼ完存する
242	〃	〃 〃	4.8	2.1	1.9	20.9	にぶい黄橙色	〃	孔径0.5cm, ほぼ完存する
243	〃	〃 〃	4.8	2.2	1.9	22.4	暗灰黄色	〃	孔径0.7cm, 完存する
244	〃	〃 〃	4.8	2.1	1.7	19.3	黄灰色	〃	孔径0.5cm, 完存する
245	〃	〃 〃	4.8	2.1	2.0	20.4	灰黄褐色	〃	孔径0.6cm, 完存する
246	〃	〃 〃	(5.1)	1.9	2.1	(18.3)	〃	〃	孔径0.7cm, 一部を欠損する
247	〃	〃 〃	5.1	2.0	1.7	20.1	〃	〃	孔径0.6cm, ほぼ完存する
248	〃	〃 〃	5.1	2.3	2.0	26.3	にぶい黄橙色	〃	孔径0.4cm, ほぼ完存する
249	〃	〃 〃	5.2	2.1	1.7	19.9	黒褐色	〃	孔径0.8cm, ほぼ完存する
250	〃	〃 〃	5.2	2.3	2.0	22.0	灰黄褐色	〃	孔径0.7cm, ほぼ完存する

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
251	P-15	土製品 土錘	5.2	2.4	1.9	28.9	灰黄褐色	良好	孔径0.7cm, ほぼ完存する
252	〃	〃	5.2	2.0	2.0	19.0	〃	〃	孔径0.6cm, 完存する
253	〃	〃	5.3	2.1	2.0	21.9	〃	〃	孔径0.6cm, 完存する
254	〃	〃	5.4	2.3	2.0	26.4	〃	〃	孔径0.7cm, 完存する
255	〃	〃	5.4	2.2	2.1	27.6	灰白色	〃	孔径0.7cm, ほぼ完存する
256	〃	〃	5.4	2.2	2.1	25.9	灰黄褐色	〃	孔径0.4cm, 完存する
257	〃	〃	5.5	2.3	1.9	22.7	褐灰色	〃	孔径0.7cm, ほぼ完存する
258	〃	〃	5.5	2.3	2.0	26.5	灰黄褐色	〃	孔径0.6cm, 完存する
259	〃	〃	5.6	2.1	2.0	22.8	にぶい黄橙色	〃	孔径0.6cm, ほぼ完存する
260	〃	〃	5.6	2.3	2.3	33.2	黄灰色	〃	孔径0.6cm, 完存する
261	〃	〃	5.7	2.4	2.2	31.2	灰黄褐色	〃	孔径0.5cm, ほぼ完存する
262	〃	〃	5.7	1.9	2.0	21.5	黄灰色	〃	孔径0.8cm, 完存する
263	〃	〃	5.9	2.0	2.0	25.5	〃	〃	孔径0.4cm, 完存する
264	〃	〃	(4.7)	2.2	2.1	(18.5)	にぶい黄橙色	〃	孔径0.7cm, 片側の一部を欠損する
265	〃	〃	(4.5)	2.0	1.9	(10.3)	灰色	〃	孔径0.6cm, 片側を欠損する
266	〃	〃	(4.3)	2.0	1.8	(12.3)	灰黄褐色	〃	孔径0.7cm, 両端を欠損する
267	〃	〃	(3.9)	2.0	1.7	(11.3)	暗灰黄色	〃	孔径0.6cm, 片側を欠損する
268	〃	〃	(3.7)	1.9	1.7	(10.4)	灰黄褐色	〃	孔径0.6cm, 片側を欠損する
269	〃	〃	(3.5)	1.9	(1.1)	(6.4)	〃	〃	孔径0.5cm, 大部分を欠損する
270	〃	〃	(3.5)	1.5	1.6	(5.1)	〃	〃	孔径0.5cm, 大部分を欠損する
271	〃	〃	(3.1)	1.8	1.6	(7.2)	〃	〃	孔径0.5cm, 片側を欠損する
272	〃	〃	(3.1)	1.9	(1.8)	(7.6)	にぶい黄橙色	〃	孔径0.6cm, 大部分を欠損する
273	〃	木製品 柱根	(22.6)	(10.3)	(8.1)	-	-	-	腐食が著しく, 加工痕は確認できない
274	P-16	須恵器 蓋	-	(1.6)	-	-	灰色 〃	良好	つまみと天井部の一部残存, つまみ径20cm, つまみ高1.5cm
275	P-17	土製品 土錘	4.8	1.8	1.6	10.5	灰白色	〃	孔径0.7cm, 片側を一部欠損する

遺物観察表12

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
276	P-18	瓦質土器 捏鉢	29.2	(5.3)	-	-	灰色 〃	不良	口縁部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
277	P-19	土師質土器 杯	12.2	4.1	-	7.2	浅黄橙色 〃	やや不良	口縁部の大部分を欠損, 成形はロクロ水挽き成形とみられ, 底部切り離しは回転糸切り
278	P-20	〃 〃	11.6	3.2	-	7.0	橙色 にぶい橙色	不良	全体の約1/4残存, 磨耗が著しく, 歪みが大きい
279	P-21	〃 〃	12.4	3.5	-	8.2	にぶい橙色 〃	〃	全体の約1/3残存, 磨耗が著しく, 歪みが大きい
280	P-22	東播系須恵器 捏鉢	30.0	(9.2)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部の破片, 口縁端部はやや内傾する
281	P-23	土師質土器 小皿	7.6	1.8	-	2.6	灰黄褐色 〃	やや不良	ほぼ完存, 手づくねで, 底部内面にナデ調整を施す
282	〃	〃 〃	7.8	1.8	-	-	にぶい橙色 〃	不良	手づくねの小皿で, ほぼ完存する
283	P-24	土製品 土錘	(3.9)	1.4	1.4	(4.6)	灰白色	良好	孔径0.5cm, 片側を欠損する
284	P-25	瓦質土器 鍋	-	(6.0)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 磨耗が著しく調整は不明
285	P-26	土師質土器 小皿	9.2	1.5	-	5.8	橙色 赤橙色	不良	口縁部の一部を欠損, 底部切り離しは回転糸切りとみられる
286	P-27	土製品 土錘	5.2	2.0	1.9	13.7	にぶい黄橙色	良好	孔径0.7cm, ほぼ完存する
287	SB-24	近世陶器 皿	12.4	4.1	-	3.8	灰オリーブ色 〃	〃	ほぼ完存, 削り出し高台で, 畳付には砂目痕
288	SB-25	木製品 柱根	(25.9)	(17.4)	(13.8)	-	-	-	底面に加工痕がみられ, 樹種はスダジイ属
289	〃	〃 〃	(30.7)	16.0	14.8	-	-	-	底面に加工痕がみられ, 樹種はエノキ属
290	SK-26	近世陶器 碗	10.6	(6.8)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部の破片, 灰白色の釉を施す
291	SK-35	近世磁器 〃	11.3	7.6	-	4.5	オリーブ黄色 灰オリーブ色	〃	削り出し高台で, 器面には灰オリーブ色の釉
292	SK-39	土師質土器 小皿	6.5	0.8	-	5.0	にぶい黄橙色 〃	〃	全体の約1/3残存, 口縁部内外面に煤が付着
293	〃	近世磁器 碗	11.0	5.4	-	4.2	灰白色 〃	〃	全体の約1/3残存, 見込みには蛇の目状の釉剥ぎがみられ, 畳付は露胎
294	〃	〃 〃	11.2	6.2	-	5.5	〃 〃	〃	全体の約2/3残存, 畳付は露胎
295	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	4.4	明オリーブ灰色 緑灰色	〃	底部の破片, 畳付には砂目積みの痕跡
296	〃	〃 〃	12.0	6.7	-	6.4	灰白色 〃	〃	全体の約1/3残存, 見込み中央と外面に文様を施すが, 詳細は不明
297	〃	備前焼 播鉢	19.6	(5.3)	-	-	褐灰色 にぶい赤褐色	〃	口縁部の破片, 内面には10条を単位とした条線を密に施す
298	〃	瓦質土器 羽釜	-	(8.0)	-	-	灰白色 灰色	〃	頸部分が残存し, 口縁部は欠損する。外面の一部には煤が付着
299	〃	〃 鉢	32.2	13.4	-	27.4	灰黄色 暗灰色	〃	鉢とみられるもので, 約1/2残存。底部外面には煤が付着
300	〃	近世陶器 灯明皿	-	(4.7)	-	3.8	黒色 〃	〃	台付きで, ほぼ完存する。底部外面は露胎, 底部切り離しは回転糸切り

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
301	SK-41	近世陶器 皿	-	(2.2)	-	4.4	灰オリーブ色 にぶい黄橙色	良好	底部の破片、見込みには砂目積みの痕跡が残る。高台は 削り出し
302	SK-50	土師質土器 小皿	8.2	1.4	-	5.2	橙色 にぶい黄橙色	良	全体の約1/4残存、底部切り離しは回転糸切り
303	SK-55	須恵器 長頸壺	-	(4.4)	12.8	-	灰白色 〃	良好	長頸壺と考えられる体部の破片で、約1/3残存
304	SK-61	近世磁器 皿	9.9	3.4	-	4.0	灰白色 明緑灰色	〃	口縁部の一部を欠損、肥前系とみられる
305	SD-25	青磁 碗	-	(2.6)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	体部の破片、内面にヘラ描き、櫛描きがみられる
306	SX-2	近世磁器 皿	-	(1.6)	-	7.0	オリーブ灰色 〃	〃	底部の破片、外面には縦方向にヘラ彫り
307	〃	備前焼 播鉢	31.2	(6.0)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片、口縁部外面に焼成時にできた重ね焼きの 痕跡
308	〃	〃 甕	-	(5.4)	-	-	暗赤褐色 〃	〃	口縁部の破片、内外面とも回転ナデ調整
309	〃	石製品 五輪塔	25.3	24.0	14.5	(11.3)	-	-	火輪で一部欠損、石材は花崗岩とみられる
310	〃	〃 石臼	27.0	-	8.8	4.4	-	-	約1/2残存、上臼で5本単位の斜行する播り目がみられ、 石材は砂岩
311	〃	板状木製品	(98.8)	(20.9)	(7.0)	-	-	-	樹芯側のみ加工痕が認められ、樹皮側は不明
312	P-28	近世陶器 壺	11.8	(6.3)	-	-	オリーブ黄色 〃	良好	口縁部の破片、外面及び口縁部内面のみ施釉
313	P-29	土師質土器 杯	13.0	3.6	-	8.0	にぶい橙色 〃	〃	全体の約1/4残存、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形、 底部切り離しは回転糸切りとみられる
314	P-30	石製品 石臼	28.8	-	8.1	(5.3)	-	-	約1/2残存、上臼で8本単位の斜行する播り目がみられ、 石材は砂岩
315	P-31	近世陶器 播鉢	24.6	11.3	-	8.6	灰褐色 にぶい赤褐色	良好	全体の約1/4残存、削り出し高台で、5~7条単位の条線 を施す
316	P-32	木製品 柱根	(19.0)	(9.8)	(6.0)	-	-	-	腐食が著しく、加工痕は認められない
317	〃	〃 〃	(13.8)	(19.7)	(9.1)	-	-	-	腐食が著しく、加工痕は認められない

圖 版



調査前風景(南より)



調査前風景(北より)

図版 2



調査区西壁セクション(東より)



調査区南壁セクション(北東より)



D区遺構検出状態(南より)



D区遺構検出状態(西より)

図版 4



D区遺構完掘状態(東より)



D区遺構完掘状態(西より)



A区遺構検出状態(南より)



SB-22検出状態(南より)

図版 6



A区遺構完掘状態(南より)



SB-22完掘状態(南より)



A区遺構完掘状態(真上上空より)



B区遺構検出状態(北より)

図版 8



B区遺構完掘状態(南より)



B区遺構完掘状態(真上上空より)



E区遺構検出状態(東より)



E区遺構完掘状態(東より)



E区遺構完掘状態(真上上空より)



F区(北側)遺構検出状態(北より)



F区(北側)遺構検出状態(東より)



F区(北側)遺構完掘状態(北より)

図版 12



F区(北側)遺構完掘状態(東より)



F区(南側)遺構検出状態(南より)



SB-2 検出状態 (西より)



F区 (南側) 遺構完掘状態 (南より)



SB - 2完掘状態(西より)



F区(南側)遺構完掘状態(真上上空より)



第 I 層土製品 (24) 出土状態 (北東より)



第IV層土製品 (74) 出土状態 (南より)



SX - 1 (北より)



SX - 1バンクセクション (北西より)



SB - 1 (北より)



SB - 2土師器 (166) 出土状態 (東より)



SB - 9土師質土器 (171) 出土状態 (南西より)



SK - 5バンクセクション (北東より)



SK - 16バンクセクション (南東より)



SK - 16瓦質土器 (179) 出土状態 (西より)



SK - 17バンクセクション (南東より)



SD - 13バンクセクション (南東より)



SD - 16バンクセクション (南東より)



SD - 21 遺物出土状態 (南より)



SD - 21 土師質土器 (191) 出土状態 (東より)



SD - 22 (南より)



SD - 22バンクセクション (南東より)



SD - 22土師質土器 (214) 出土状態 (南西より)



SD - 22土師質土器 (215) 出土状態 (北西より)



SD - 22瓦器 (217) 出土状態 (南東より)



P - 5土師質土器 (224) 出土状態 (西より)



P - 14石製品 (234) 出土状態 (北西より)



P - 15土製品出土状態 (北より)



P - 21土師質土器 (279) 出土状態 (南東より)



P - 22 東播系須恵器 (280) 出土状態 (北より)



P - 26 土師質土器 (285) 出土状態 (西より)



SB - 24 (南より)



SK - 39 瓦質土器 (299) 出土状態 (北より)



SX - 2 石製品 (309) 出土状態 (西より)



P - 28 近世陶器 (312) 出土状態 (南より)



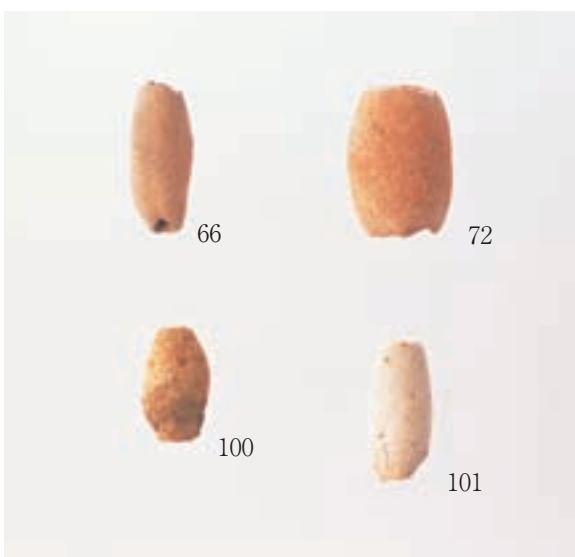
P - 30 石製品 (314) 出土状態 (南東より)



P - 31 近世陶器 (315) 出土状態 (西より)



石製品 (石臼)



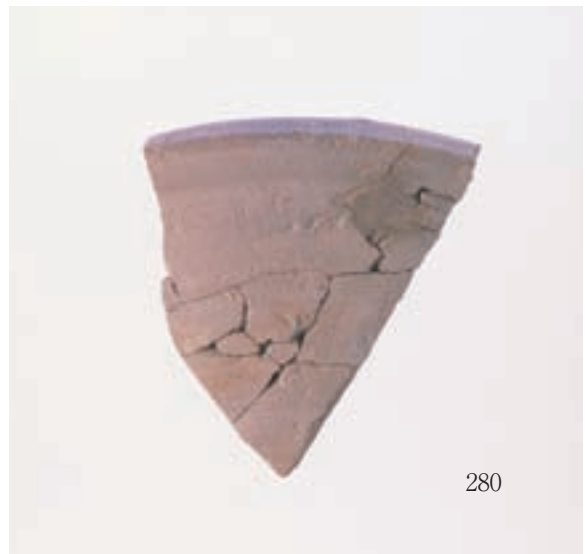
東播系須恵器(捏鉢), 須恵器(高杯), 土師質土器(鍋), 土製品(羽口・土錘), 瓦質土器(鍋)



瓦質土器(鍋), 石製品(砥石), 土師器(甕), 白磁(碗), 木製品(柱根)

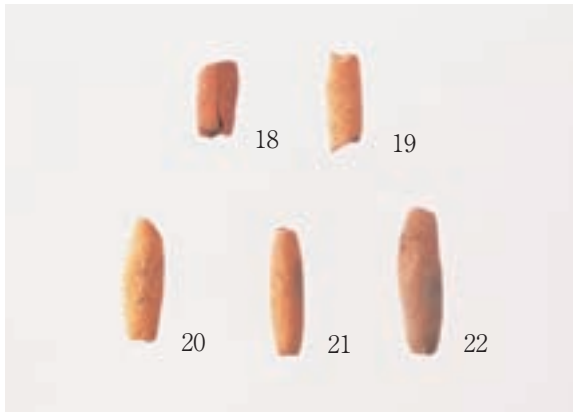


近世磁器(碗), 瓦質土器(鉢), 備前焼(搗鉢), 石製品(石臼)



青磁(碗), 瓦質土器(鍋), 石製品(叩石), 木製品(柱根), 東播系須恵器(捏鉢)

图版 24



土製品(土錘), 石製品(石鏃), 土師質土器(碗・杯), 近世磁器(皿), 須惠器(杯), 弥生土器(甕)



土師質土器(杯), 土製品(土錘), 弥生土器(高杯), 須恵器(杯), 瓦器(椀), 須恵器(杯蓋・杯身)

图版 26



須惠器(杯身·瓶), 土師質土器(杯·碗), 弥生土器(甕), 土師器(皿), 土製品(土錘), 石製品(石鏃)



須恵器(杯), 白磁(碗), 土師質土器(杯), 瓦器(椀)

图版 28



瓦器(碗), 土師質土器(杯·小皿), 土製品(土錘)



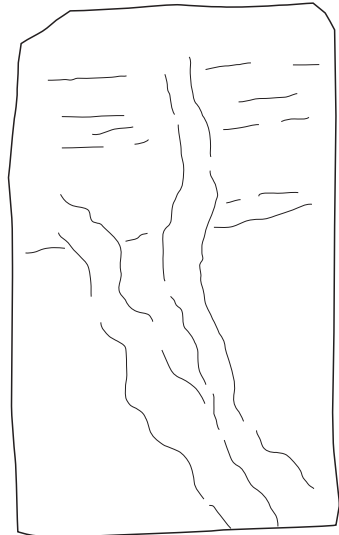
土製品(土錘), 土師質土器(杯・小皿), 近世陶器(皿), 近世磁器(皿)

图版 30

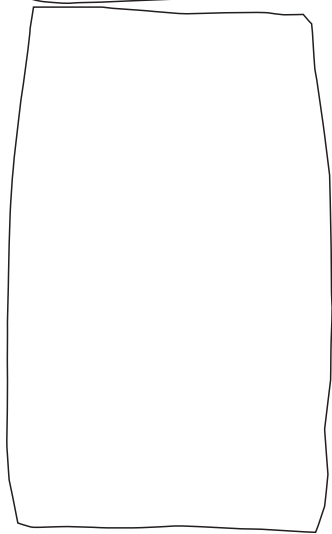


土師質土器(小皿), 青磁(皿), 近世磁器(皿), 石製品(石臼)

試料1

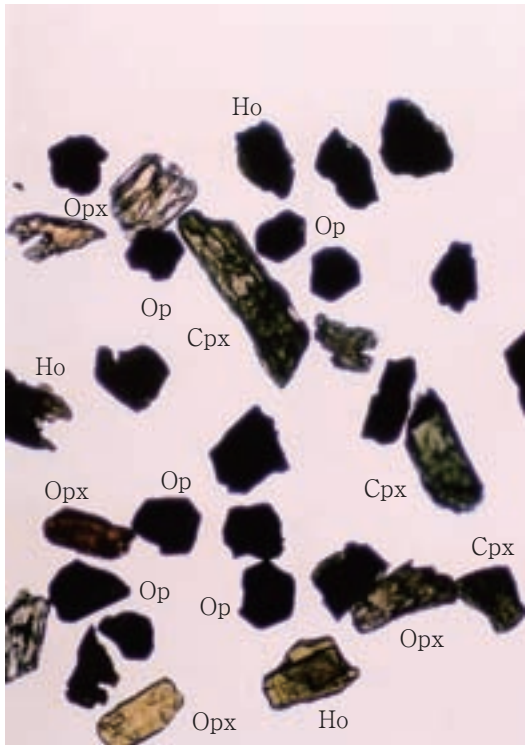


試料2

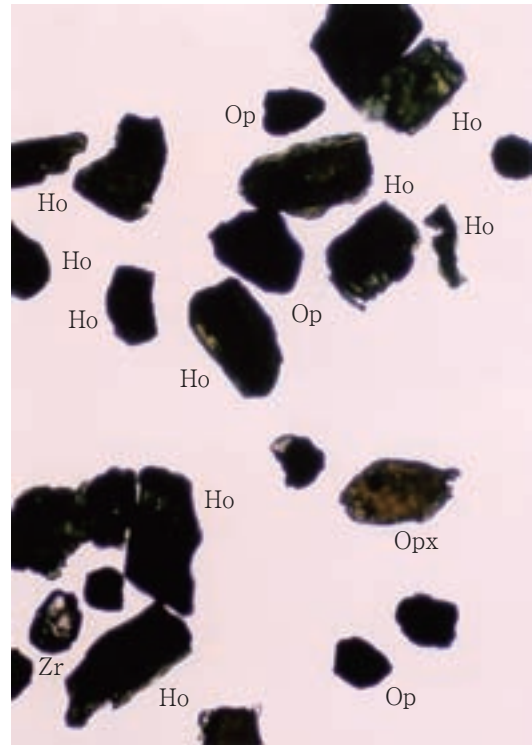


5cm

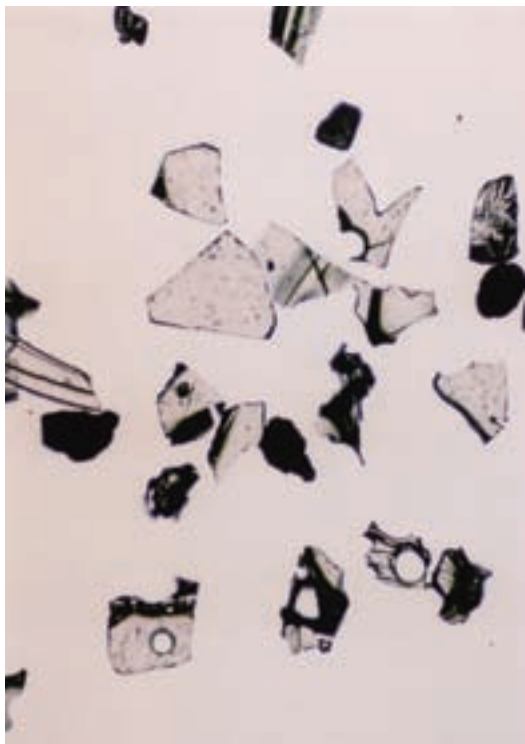
軟X線写真



1. 重鉱物 (テフラサンプル3)



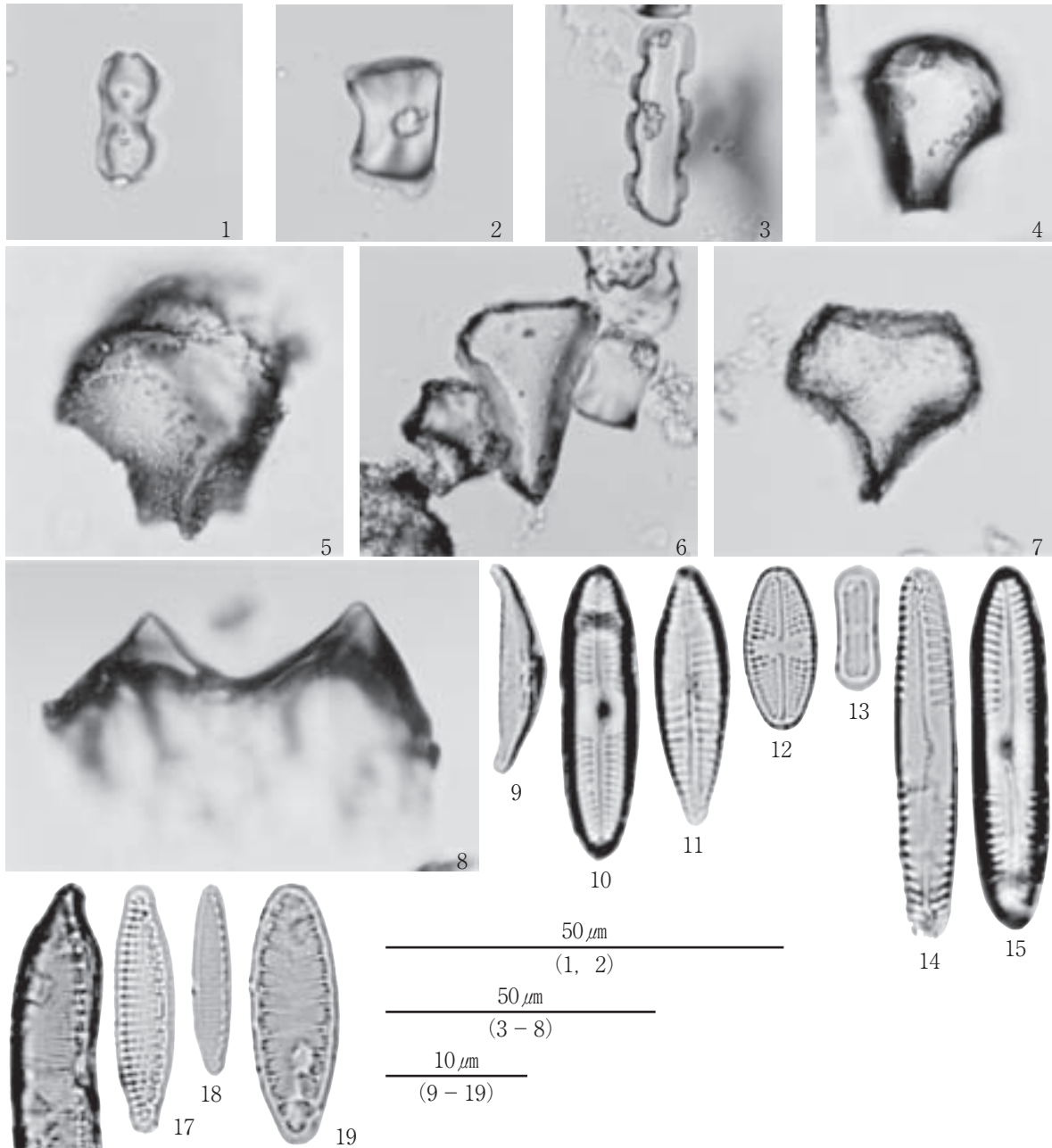
2. 重鉱物 (テフラサンプル4)



3. ATの火山ガラス (テフラサンプル3)

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Zr: ジルコン, Op: 不透明鉱物

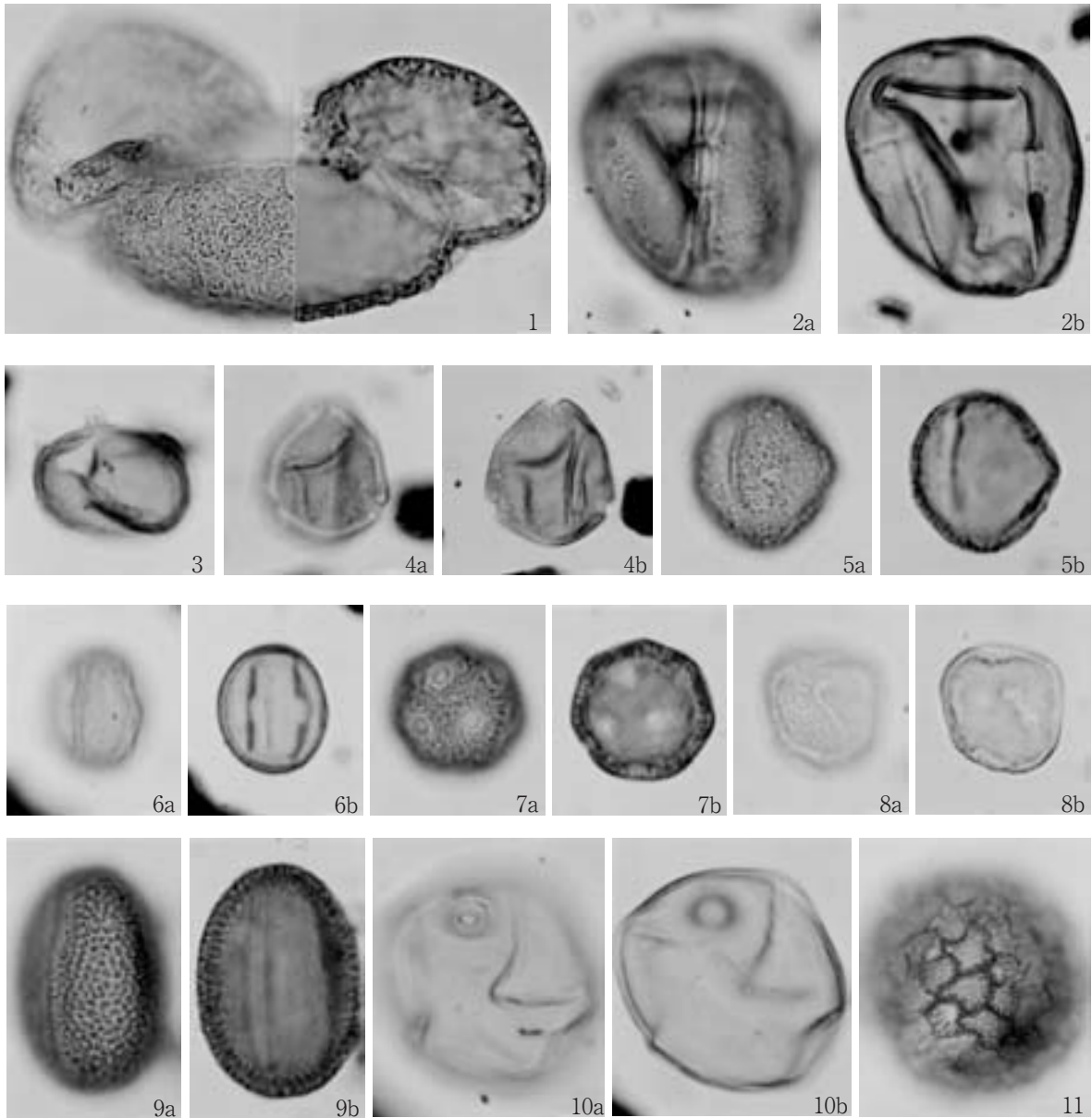
重鉱物・火山ガラス



- | | |
|--|---|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (D区; 2地点 最下層) | 11. <i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing (D区; 1地点) |
| 2. ネザサ節短細胞珪酸体 (A区; SX - 1埋土) | 12. <i>Navicula mutica</i> Kuetzing (D区; 1地点) |
| 3. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (D区; 2地点 最下層) | 13. <i>Navicula contenta</i> Grunow (D区; 1地点) |
| 4. イネ属機動細胞珪酸体 (D区; 2地点 最下層) | 14. <i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory (D区; 1地点) |
| 5. ネザサ節機動細胞珪酸体 (A区; SX - 1埋土) | 15. <i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.) Krammer (D区; 1地点) |
| 6. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (D区; 2地点 SK - 13) | 16. <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow (D区; 1地点) |
| 7. シバ属機動細胞珪酸体 (E区; 5地点 2) | 17. <i>Nitzschia amphibia</i> Grunow (D区; 1地点) |
| 8. イネ属穎珪酸体 (D区; 2地点 最下層) | 18. <i>Nitzschia inconspicua</i> Grunow (D区; 1地点) |
| 9. <i>Amphora montana</i> Krasske (D区; 1地点) | 19. <i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith) Hustedt |
| 10. <i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange - Bertalot (D区; 1地点) | (D区; 1地点) |

植物珪酸体

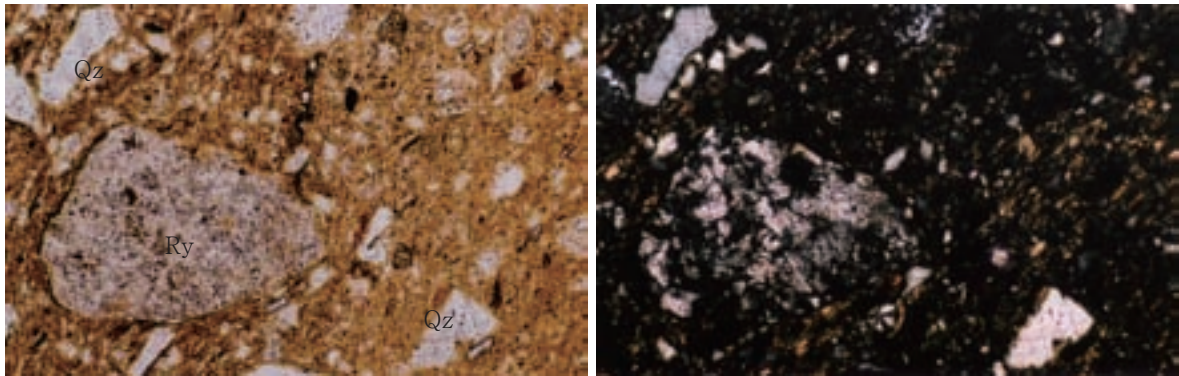
図版 34



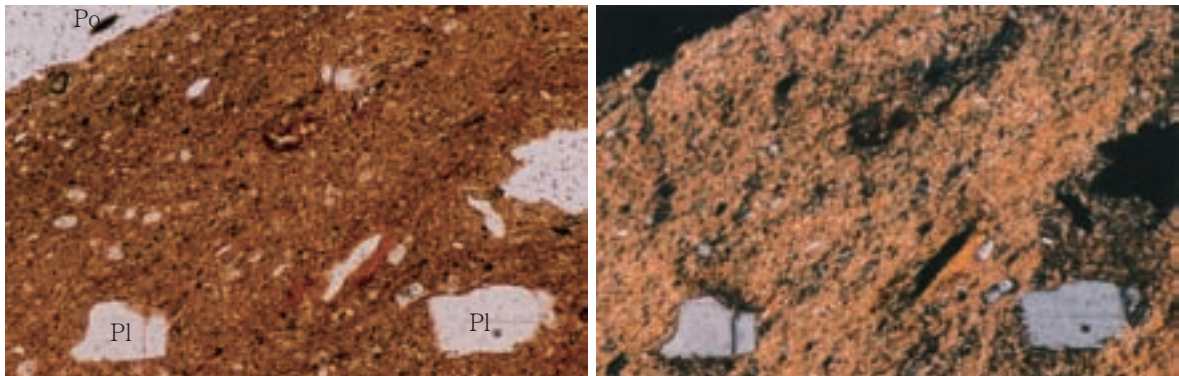
1. マツ属複維管束亜属 (D区:1地点)
2. カキノキ属 (D区:1地点)
3. スギ属 (D区:1地点)
4. ヤマモモ属 (D区:1地点)
5. コナラ亜属 (D区:1地点)
6. アカガシ亜属 (D区:1地点)
7. ナデシコ科 (D区:1地点)
8. カヤツリグサ科 (D区:1地点)
9. ソバ属 (D区:1地点)
10. イネ科 (D区:1地点)
11. サナエタデ節-ウナギツカミ節 (D区:1地点)

50 μ m

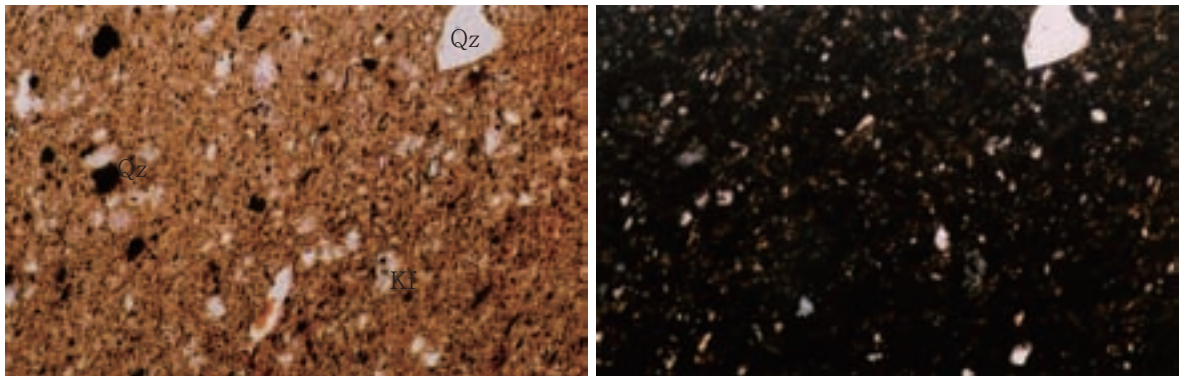
花粉化石



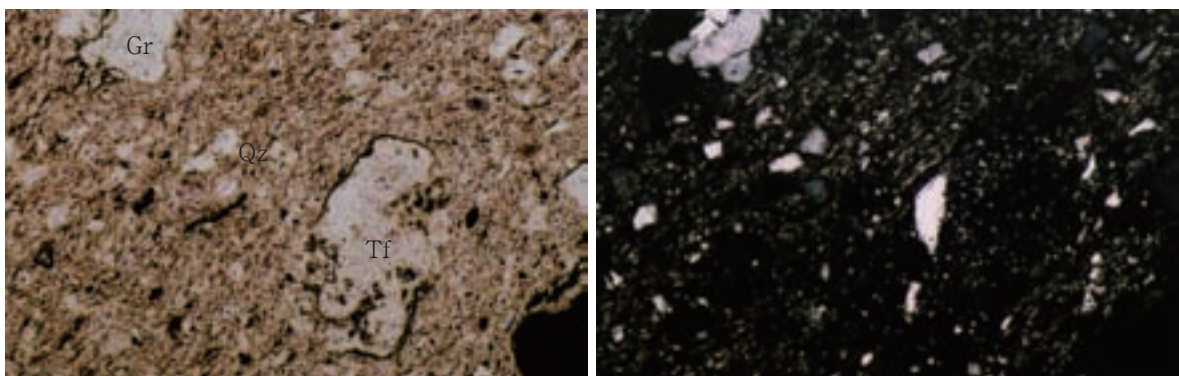
1. 試料番号1 (217)



2. 試料番号2 (185)



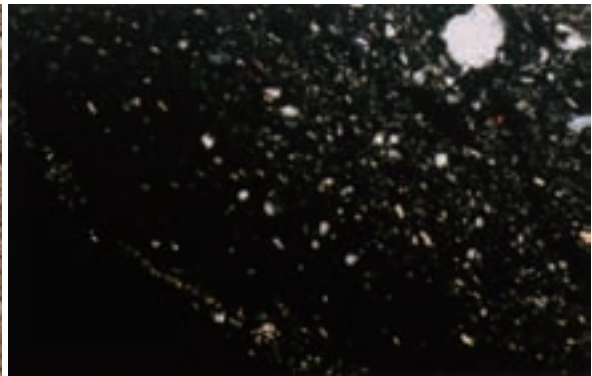
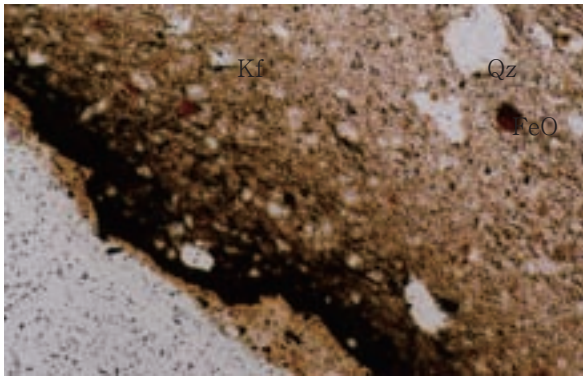
3. 試料番号3 (116)



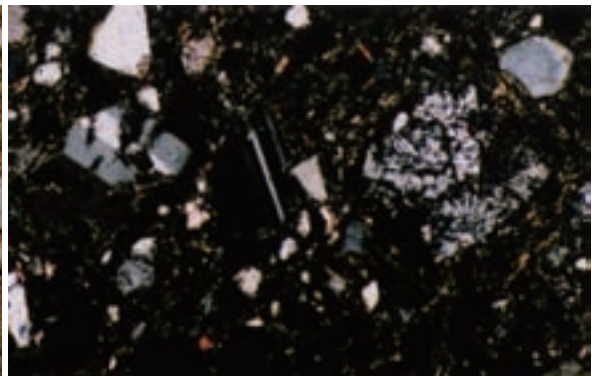
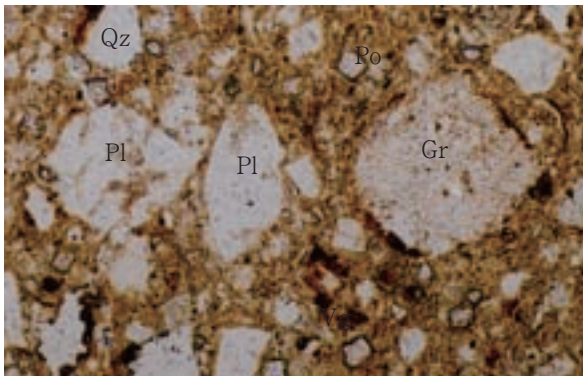
4. 試料番号4 (131)

Qz: 石英, Pl: 斜長石, Kf: カリ長石, Gr: 花崗岩, Ry: 流紋岩, Tf: 凝灰岩, Po: 植物珪酸体
写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下
胎土薄片1

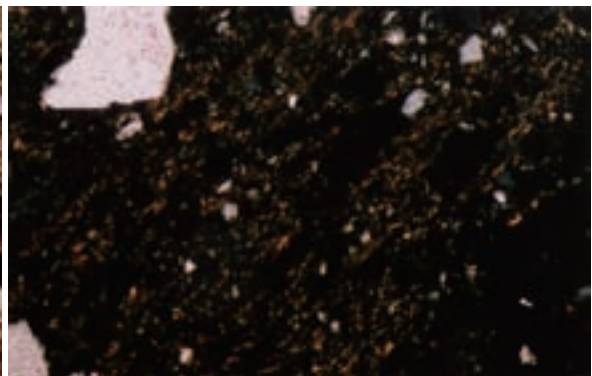
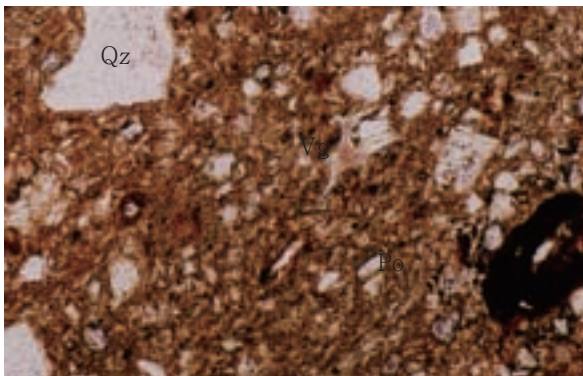
図版 36



5. 試料番号5 (209)



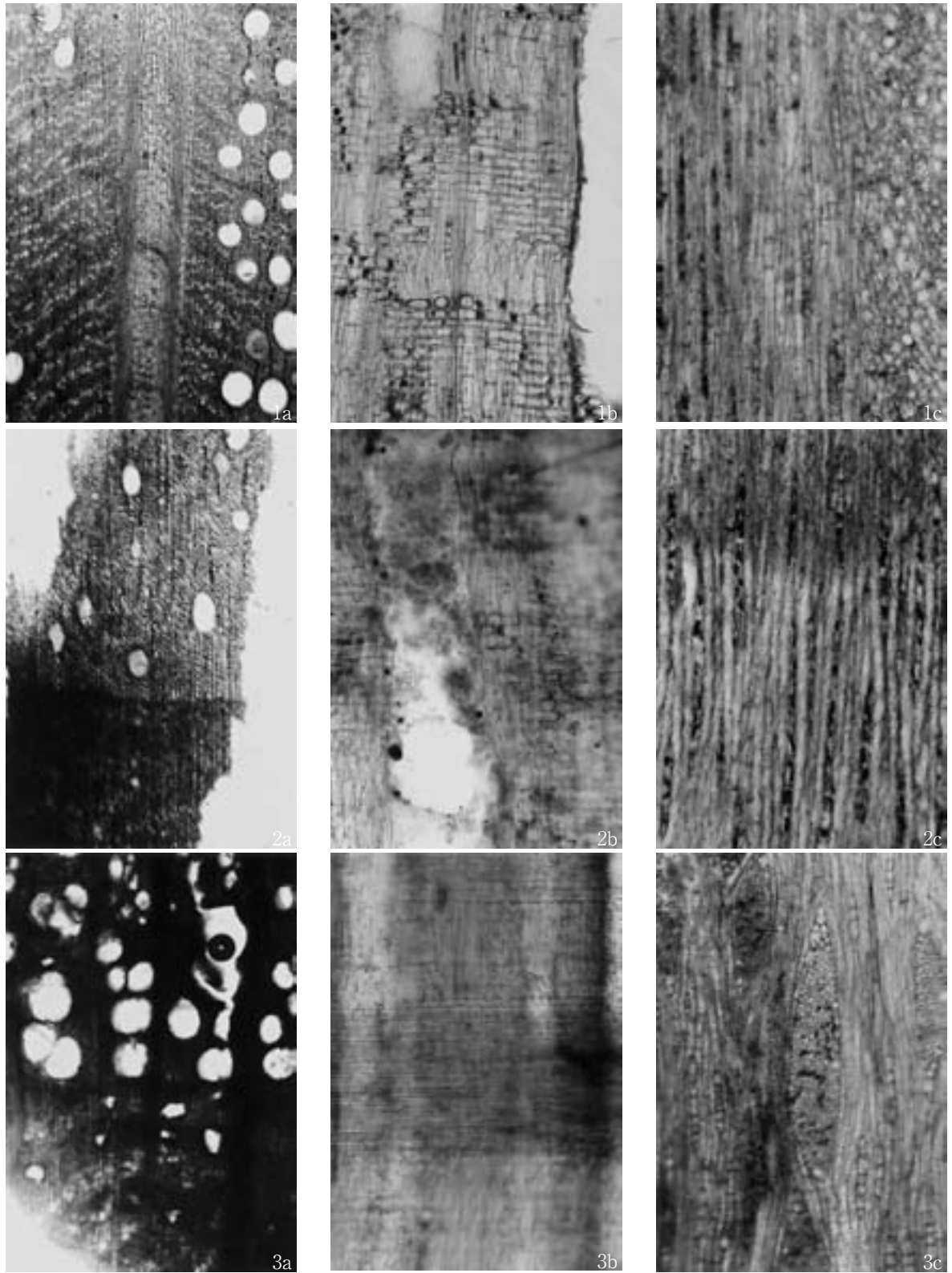
6. 試料番号6 (215)



7. 試料番号7 (224)

Qz: 石英, Pl: 斜長石, Kf: カリ長石, Ep: 緑レン石, Gr: 花崗岩, Vg: 火山ガラス, FeO: 酸化鉄
Po: 植物珪酸体

写真左列は下方ポーラー, 写真右列は直交ポーラー下

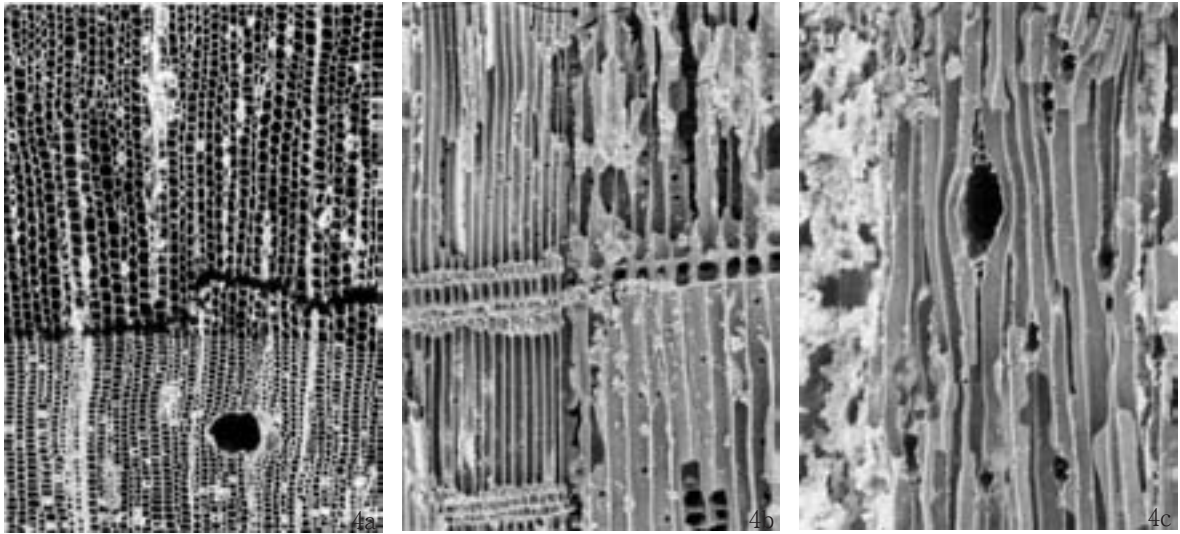


1. コナラ属アカガシ亜属 (SX-2:材1) 3. エノキ属 (SB-25:P-2)
 2. スダジイ (SB-25:P-3) a: 木口, b: 柃目, c: 板目

— 200 μm : a — 200 μm : b · c

木材

図版 38



4. マツ属複維管束亜属 (SK - 28)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

———— 200 μ m : a

———— 100 μ m : b · c

炭化材

報告書抄録

ふりがな		くちまきがたにいせき						
書名		口槇ヶ谷遺跡						
副書名		南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書						
巻次		I						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第104集						
編著者名		廣田佳久, 下村裕, パリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関		(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原南泉1437-1						
発行年月日		2008年3月19日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くちまきがたにいせき 口槇ヶ谷遺跡	〒783-0003 高知県香南市 夜須町字出口・千切	39211	210040	33° 32' 11"	133° 45' 42"	2004.5.12 ～ 2005.1.31 2005.4.25 ～ 2005.7.29	8,995㎡	一般国道 55号線自 動車専用道 路建設工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
口槇ヶ谷遺跡	集落跡	弥生時代 古代 中世 近世	溜池状遺構 掘立柱建物跡 堀・柵列跡 土坑 溝跡 畝状遺構	1基 25棟 4列 61基 62条 7群	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 瓦器 瓦質土器 青磁 備前焼 近世陶磁器 土製品 石製品	古代の掘立柱建物跡が3棟確認されており、官衙関連の施設が存在していた可能性が考えられる。		
要約	<p>口槇ヶ谷遺跡は夜須川左岸の低位河岸段丘上に立地しており、弥生時代では調査区中央部に谷水が流れ込む形になった溜池状遺構が検出されている。その他に当該期の遺構は検出されていないが、古代～近世の遺物包含層からは当該期の遺物が出土しており、集落が存在した可能性が考えられる。</p> <p>古代では隅丸方形の掘方を持つ柱穴で構成される掘立柱建物跡が確認されている。この掘立柱建物跡は計3棟確認されており、官衙に関連する建物跡と考えられる。また、当該期の遺構は尾根状の高まり部分から南西方向に下る緩斜面上で多く確認されているが、弥生時代と同じく後世の削平を受けており、遺存状態はあまり良くなかった。</p> <p>中世・近世では調査区全体で柱穴、土坑、溝状遺構などが検出されている。中世における集落の中心は調査区東側に所在する尾根状の高まり部分とみられ、この箇所を中心に当該期の遺構が多く確認されている。また、近世では調査区全体で遺構が検出されており、比較的広範囲に集落が展開していたものと考えられる。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第104集

口槇ヶ谷遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ
(東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ)

2008年3月19日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

Y=24300 X=59580

Y=24320

X=59600

Y=24340

X=59620 Y=24360

Y=24300

X=59560

X=59540

Y=24320

X=59520

Y=24340

X=59500

Y=24360

X=59480

X=59460

Y=24380



Y=24380m

X=59620m

X=59600

Y=24400

X=59580

Y=24420

X=59560

X=59540

Y=24440

X=59520

Y=24460

X=59500

Y=24400

X=59460

Y=24420

Y=24440

X=59480

Y=24460

付図1 口横ヶ谷遺跡弥生時代・古代遺構平面図(S=1/200)

Y=24300 X=59580

Y=24320

X=59600

Y=24340

X=59620 Y=24360

Y=24300

X=59560

X=59540

Y=24320

X=59520

Y=24340

X=59500

Y=24360

X=59480

X=59460

Y=24380



Y=24380m

X=59620m

X=59600

Y=24400

X=59580

Y=24420

X=59560

X=59540

Y=24440

X=59520

Y=24460

X=59500

Y=24400

X=59460

Y=24420

Y=24440

X=59480

Y=24460

付図2 口横ヶ谷遺跡中世遺構平面図(S=1/200)

Y=24300 X=59580

Y=24320

X=59600

Y=24340

X=59620 Y=24360

Y=24300

X=59560

X=59540

Y=24320

X=59520

Y=24340

X=59500

Y=24360

X=59480

X=59460

Y=24380



Y=24380m

X=59620m

X=59600

Y=24400

X=59580

Y=24420

X=59560

X=59540

Y=24440

X=59520

Y=24460

X=59500

Y=24400

X=59460

Y=24420

Y=24440

X=59480

Y=24460

付図3 口横ヶ谷遺跡近世遺構平面図(S=1/200)

Y=24300 X=59580

Y=24320

X=59600

Y=24340

X=59620 Y=24360

Y=24300

X=59560

X=59540

Y=24320

X=59520

Y=24340

X=59500

Y=24360

X=59480

X=59460

Y=24380



Y=24380m

X=59620m

X=59600

Y=24400

X=59580

Y=24420

X=59560

X=59540

Y=24440

X=59520

Y=24460

X=59500

Y=24400

X=59460

Y=24420

Y=24440

X=59480

Y=24460

付図4 口櫛ヶ谷遺跡遺構平面図(S=1/200)